

やはり幼馴染なんてものは、どこかまちがっている。

フリーゲル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友達もおらず、恋人もいない。フラグなんて立たないし、立ったと思つて、すぐに立ち消える。そんな残念な青春を現在進行形で送っている比企谷八幡であったが、ただ一人、親しい女子だけは存在した。

切花朱音——比企谷小町の親友にして、比企谷八幡の幼馴染とも言える少女。会えば話すし、メールもする。ただしフラグは立たない。

これは、比企谷八幡と奉仕部にもう一人を加えた、楽しくもはかない、そんな物語である。

※本編完結しました。

目次

プロローグ

プロローグ 封のされていない手紙 1

比企谷八幡

その1	く切花朱音は納得できないく	3
その2	く由比ヶ浜結衣は動揺するく	13
その3	く比企谷小町は歓喜するく	24
その4	く乙女たちのガールズトークく	34
その5	く比企谷八幡は赤面するく	41
その6	く二人の墓参りく	52
その7	く比企谷八幡は暇を持て余すく	61
その8	く川崎大志の出会いく	70
その9	く比企谷八幡は徘徊するく	81
その10	く井杖恵は愛想を振りまくく	91
その11	く井杖恵の名前は轟いているく	101
その12	く比企谷小町は狼狽えるく	106
その13	くラブコメチックな話は起こらないく	118
その14	く比企谷家のご近所さんく	129
その15	くコーヒートの苦みく	142
その16	く月明かりと太陽く	153
その17	く雨の日の月曜日く	163
その18	く比企谷八幡は不良になるく	173
その19	くそうして三人は始まるく	184
その20	くそうして二人はこの場所に帰ってくるく	194
その21	く二人分の重みく	205

切花朱音

幼少期	くモノクロフィルムの記憶く	212
幼少期Ⅱ	く太陽の光く	216
幼少期Ⅲ	くガラスの向こう側く	223
少女期Ⅰ	く将来の影く	232
少女期Ⅱ	く綴られたものく	243
少女期Ⅲ	く仄かな思いく	254
少女期Ⅳ	く冷たい曇り空く	264
少女期Ⅴ	く幼馴染く	272
少女期Ⅵ	く胸の中く	286
少女期Ⅶ	くいろんな涙く	295
少女期Ⅷ	く大きなてのひらく	310
少女期Ⅸ	くちよつとした嘘く＋エピローグ	322
番外編		
番外編その1	く正しい彼女の紹介のしかたく	339
番外編その2	くお雛様との出会いく	352
番外編その3	く闇夜に咲く花く	364

プロローグ
プロローグ　　く封のされていない手紙く

拝啓　梅花の候、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

まずはこの様な形でしか、謝罪できないことをお詫び申し上げます。本来ならば顔を合わせて、このような話をしなければいけないことは、承知をしております。しかし、私には面と向かってあなたと話をする勇気がないのです。あなたを前にしてしまえば、私の口は思うように動かず、いつもと変わりない他愛のない話を始めるでしょう。そのため、お手紙を書かせていただきました。それでも私はきつと、この手紙を届けることなく、筆筒の引出にしまつてしまおうのでしよう。

随分と迷惑をかけてしまったと思います。そもそもこの紙も、このインクもあなたが稼いできたお金で買ったものです。ただ、あなたもご存じの通りこんな性格ですので、感謝の気持ちを示すことなく、こんな歳まで来てしまいました。

そして、私は最後まであなたを愛することができませんでした。一緒になってから、あなたは不器用ですが好意を示してくれましたが、それでも私は心の中にあなただを置くことができませんでした。あなたの優しさも、温かさも、とても貴重で得難いものだと理解をしています。それでもその手を慈しむことだけは、どうしてもできないのです。

本来ならこんな仮面を被り、夫婦を演じるべきではなかったでしょう。あなたの好意を振り払い、一人で生きていくのが道理だったと思います。

それでも私は、不幸にはなりたくなかったのです。こんな私が結婚をしなければ、きつと相当苦勞し、貧しい生活を送ったことでしょう。そしてそのことを想像すると、いまでもおどろおどろしい恐怖が沸き上がってきます。

本当に申し訳はございません。私は、自分の心の安寧のために、あなたの優しきを利用しました。あなたから色々なものをいただいたのに、それを返すことができず、そしてお礼を言うことすらも出来ず、現在まで至ってしまいました。

そうして今、ようやく私はあなたを解放することができました。そのことについては嬉しいというよりも、心の重みが減ったと表現するのが適切かもしれませんが、それでも嬉しいのです。

こんな私から、あなたを解放できたことが、嬉しいのです。

こんな自分を、嫌悪することをしなくなることに、心が落ち着くのです。

どうか、残りの人生を自分のために、好きな生き方をしてください。私のことはどうか忘れて、他の誰かと素敵な余生を過ごし、穏やかな生活を送ってください。

それがあなたに返せる唯一の言葉です

敬具

比企谷八幡

その1 く切花朱音は納得できないく

人間とは流される生き物である。

周りに流され、雰囲気に流され、水に流され、時間に流される。

なんとなく雰囲気で万引きをして補導されたり、「あれ、これいけるんじゃない？」という雰囲気に流され告白をして玉砕する。いじめていた奴が成人式のときに、勝手に過去を水に流して親しげにしたりと、日々流され続けている。

その後に誰もが思うのだ。「ああ、あの時流されなければよかったな」と。つまり流されるということには後悔がつきまとい、ほろ苦い思い出となって残り、十年もすれば若さの過ちとして笑い話になる。

まあ、人間が社会を形成——Yetzirah——している以上、和を尊び、周りに合わせることは必要なかもしれない。だからと言って、何事にも流されていては、不利益を被るだけである。時には相手に『No』と突きつけることによって、自分の身を守ることも必要だ。

俺もそうだ。平塚先生に物理的に流されながら、奉仕部だがよくわからん部活へ連れていかれ、あまつさえ強制的に入部させられたのだ。総武高校の校風である『自由を謳歌する』という言葉は一体どこへいつてしまったのだろうか。それともあれだろうか、自由を得るためには、きちんと選択することが必要だと、平塚先生は暗に俺に言いたかったのだろうか。俺が『No』と言えたら、もしかしたら今とは違う世界線へ入れたかもしれない。

美少女と二人きりで部活動と言うと、なんだがどぎまぎしてしまう響きだが、実際はそんな良いものではない。時々会話程度はするが、隙を見つけられては罵倒され、その他はお互いに本を読んでいるだけである。胸が痛くなるような展開はなく、痛くなったのは胃だけだった。

まず明日の部活をサボることから、考えなくてはならない。まずは体調不良らしく振る舞うことから始めればいいのかだろうか。

そんな後ろ暗いことを考えているせいも、色々なものがネガティブに見えてくる。車を運転しているサラリーマンはこの後に山のような業務が待っているように見えるし、少し前にすれ違ったバンドマンの顔色が青くなって、口から泡を吹いていたように見えるし、洗濯物を取り込んでいる主婦の影に知らない男の影を幻視してしまう。

更に少し先のT字路の先から、「俺と付き合ってくれないかな」と必死に告白している声が聞こえるが、それはきつと振られてしまうのだろう。

というか、道端で告白するのは、はたしてどうなのだろうか。そんな所で告白したら誰かに聞かれちゃうだろうが。例えば俺とか。これが他の人間だったら、写真を撮られてソーシャルメディアに投稿されて、次に日にクラス中に知られているのが、大体だろう。

全く良かったな、たまたま通りがあったのが俺で。俺だからこそ、双方の顔を見て、不細工だったら何事もなく通り過ぎて、美人だったら「振られる」と呪詛を送るだけだ。まあ、女子に振られるのも、青春には付き物だからな。

そう心に言い訳しながら、ブロック塀に手を当てて、声の先をのぞ

き込む。ざらざらとした肌触りとともに、モルタル特有の鼻につく臭いが鼻腔を刺激する。

まず始めに知らない男の背中が目に入る。学ランを着ている上からで肩幅が広いのが分かる。おそらくスポーツでもやっているのだろう。

想像以上に体格が良いせいで、相手の女子の顔が全く見えない。ただ男足の隙間から、濃紺のスカートと瑞々しい、すらりと伸びた足が見える。遠目からしか見えないが、それでも足だけで美人という雰囲気伝わってくる。

もう少しだけ身を乗り出して、女子の全景を確認する。

思ったよりも腰の位置が高いな。身長は男の方が高いが、それよりも腰の位置が高い。スカート自体は少し長く履いているが、それでも足と合わせると、短く履いているように見えてしまう。

ゆっくりと上へ視線を向けると、服の上からだだが、形のいい胸が控えめに主張してくる。この感じだとCくらいはあるだろうか。Dというとかかなり大きいイメージがあるから、多分Cだろう。まあ想像だが。

そうしてようやく、首へとたどり着く。肩へ軽く掛かるぐらいの滑らかな黒髪が、太陽の光に照らされて輝いていた。

そして顔は……は。……よく知った顔だった。なんだ、こいつかよ……。わざわざ下半身から観察するんじゃないかった。

思わず惚けていたら、告白されていた女子——切花朱音きりばな あかねと目が合う。

そいつはにつこりと笑うと、体の前で組んでいた手で、四つ数字を作る。薬指と小指を折り曲げた『三』、親指だけを立てた『一』、小指だけを立てた『一』、小指だけを立てた『一』。

子供の時に作った暗号を読み解くと、『待て』の二文字が浮かび上がる。

……正直に言つて面倒くさい。ブレーキランプを五回点滅させたのなら喜んでやらんこともないが、こんなものはただ面倒なだけである。

そんなことを思わず表情に出してしまつて、すぐに後悔する。これじゃアサインが解読できたことがバレるじゃねえか。

その場に留まるかどうか考えてみるが、この後家で会うことかもしれないことを考えると、逃げてでも無駄だと考え、そのまま居座ることにする。

ただ、ふと自分の状況を俯瞰してみると、初々しい中学生男女を影から見つめる男子高校生。どう考えても、ストーカーにしか見えない……。

「できれば今、返事を聞きたいんだけど……」

「あ、うん、そだね。ごめん。ぼうつとしてた」

おお、告白されているのに上の空になっている時点で、もう答えがでている気がするが。

それでも切花は、男の方を上から下まで値踏みするような目で、うなずきながら見回していく。どうやら、それなりに真剣に考えてはい

るらしい。

「それで……、返事は？」

「……ごめん、深崎くんのは嫌いじゃないけど、付き合おうとは思えない」

案の定というか、さつきフラフラと歩きながら考えていたことが現実になってしまった。俺は全く関係なかったが、なぜか深崎くんに対して申し訳ない気持ちが出てくる。

「そうか……、どこか俺の悪い所があったのか？」

どうやら深崎くんは、なかなか勇敢かつ粘り強い性格らしい。ただ、どうしてだろうか、そんな深崎くんの姿を見ると、地雷原に必死な顔をして突入しようとしている光景を思い浮かべてしまう。

「特にないけど……、ただ深崎くんと付き合って、乙女みたいに恋をしている姿が、どうしても想像できないだけ」

「好きな人でもいんの？」

「そういう人はいないかなあ……」

そう言いながら切花は、指で下唇を挟む。形のいい唇が歪み、真っ赤な舌が少しだけ覗き見ることができた。

「まあ、私の理想が高いんだと思って。たぶんそれで合ってるから」

「……」

「い、いや、ホントに嫌いじゃないんだよ。ただ、なんというか」

わたわたと、申し訳なさそうな湿っぽい声が地面へ吸い込まれていく。ただ、なんというかこの場では追い打ちにしかなくていいない。

振られるのなら、潔く振られる。それが最も傷つかない方法である。

「……そうか、わざわざ引き留めて悪かった」

深崎くんはそのまま重い足どりで去ってしまう。冗談半分で覗き見をしたが、なんだか罪悪感が沸いてくる。

足音が完全にしなくなった後、「お待たせしました」と冬の乾いたような声が聞こえてくるので、ブロック塀から体を引きはがす。

念のため、もう一度だけ辺りを見回す。告白した子が、その後すぐに知らない男と会っていた何て、俺だったら女を信じなくなり、そいつの悪評を流すレベルである。

「……何か俺に用でもあるのか?」

「いえ、ちょうど聞きたいことがあったので」

切花はそう言うと、俺が元来た道へと引き返す。ここからなら、俺とこいつの帰り道は同じなので、歩きながら話すつもりらしい。

俺もこいつと並んで歩き始めると、こいつの頭が俺の頭よりも少し低いところに来る。外であまり会ったことがないから気付かなかったが、こいつ背が高いな。俺の身長から考えると、百六十五くらいはあるだろう。ヒールを履かれると俺の身長より高くなるかもしれない。

休みの日には遭遇しないようにしよう。

そういえば、横に並んで歩くのも久しぶりな気がする。最後に一緒だったのは、こいつが中学に上がったばかりの頃だから、かれこそ二年ぶりかもしれない。

「なんかお前、デカくなったな」

すると切花は歩みを止めて、残念なものを見る目で俺を見てくる。

「あの、それは男子が女子に言ったらダメな言葉ですよ。もっと言葉を柔らかくして下さい。例えば……スタイルが良くなったな、とか」

「なんかお前、スタイル良くなったな」

「……ごめんなさい、やっぱ無理でした。何かセクハラじみてます」

9

切花は両手で自分の体を抱きしめて、一步後ずさる。それは俺に対して失礼だとは思わないのだろうか？

「それで、俺に聞きたいって何だ？」

「そうでした」

そう言うと、話していた距離を一步詰め、こちらを少し下から見上げて、俺の瞳をのぞき込んでくる。

こういう動作は小町と仲が良いせいか、良く似ている。

「あの、男子ってどうしてあんな簡単に告白してくるんですか？」

なんだか、深いというか、答えづらい質問が来たな。そもそも惚れたら告白するだろうが。

「というか、なぜそれを俺に聞く？」

「いやいや、オタガヤ先輩のお噂は、伝え聞いております。何でも告白については、大ベテランだそうで」

凄まじく嫌な思い出を覚えていやがる。

それでも、こいつの表情を見ると割と真剣に質問をしているらしい、冗談めいた口調の割には、口元は笑っていない。

「ふむ、そうだな。一つ聞くが、お前は深崎くんとは、どんなことをした？」

「えーと、よくラインでやりとりして、席が近かったのでよく話して、小町ちゃんと帰るときに、一緒に帰ろうって言われたので、一緒に帰ったりしました」

「よし、お前のことはどうでもいい。三つ目について詳しく話せ」

その重大事件は一体なんだ？ もし実際に手を出している輩がいたら、俺も武力介入をしなければならぬ。

「他の男子の中で、小町ちゃんのが好きな人はいなかった気がするの、安心して下さい。それよりも、ほら、続きを」

「そうか、ならいい。さらにもう一つ、お前、深崎くんを好きか嫌いかで言ったらどっちだ？」

すると切花は、遠くに見えるタワーマンションを睨むように、眉を寄せると、

「その二つで言ったら好きですね。優しいし、話も面白いので」とあっさり返した。

……どうやらこいつは、本当に無自覚らしい。

「はつきりと言うぞ。今回はお前が悪い」

「いや、そんなことはないですよ?」

切花が不満そうな顔で詰め寄ってきて、吸い込まれるような黒い瞳がすぐそばに来る。

「あのなあ……、中学生男子なんて基本的に単純なんだよ。異性の好意と友情としての好意を全く区別できずに、少し優しくされたら、『あれ? 俺のことが好きなんじゃね』って思って、相手のことを意識しすぎるくらいにはな。だから今回の場合、そこまで思わせぶったお前が反省するべきだ」

切花は何か不満げな顔をしながら、足を止める。この交差点を右に曲がれば切花の家へ、真っ直ぐ進めば俺の家へと繋がる。

「いや、そんな程度で好きになられても、嬉しくないんですけど」

「だから、そんな理由で好きになられたくなかったら、行動には気を付けてろと言ってるんだ」

「なんだか、納得できないですけど、少し気を付けてみます」

そう言いながらも、こいつはなかなか直せないんだろうなと思う。あまり自分の行動が誰かに影響するとは思っていないのか、自分のことについてはどこか理解がないのが、切花だ。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

そう感謝してないような事務的なことを言ってお辞儀をすると、切花はそのまま右に曲がり、そのまま振り返らずに進む。どうやら今日は、小町と家で遊ぶ約束はしていないらしい。

少し不機嫌そうに肩を揺らしながら、歩いている切花の背中を見ながら思う。

やはりこいつは、どこかずれている。

その2　　く由比ヶ浜結衣は動揺するく

「そろそろ中間テストだけど、もう勉強とかしてる?」

由比ヶ浜が紅茶に息を吹きかけながら、話しかけてくる。

吹きかけられた紅茶が、水面に次々と波紋を作りながら白い湯気を歪みながら立ち上がり、すぐに消えていく。

窓からは五月にしては、すこし熱いくらいの風が流れ込み、カーテンを絶え間なく動かしながら、俺たちの頬へと辺りに来ている。

由比ヶ浜が依頼に来て、そのまま奉仕部に入ってきたが、もう大分馴染んだように思える。このように呑気な会話もするし、放課後当たり前のように顔を出す。……馴染むというか、俺と雪ノ下が飼い慣らされたと言うべきかもしれない。

「私は普段から勉強をしているから、テストだからといって特別に勉強をしないわ」

「ほえー、さすがゆきのんだ。ヒツキーは?」

「数学以外の科目なら、勉強しなくてもある程度はできるからな。ほぼ全く手をつけていない」

国語や英語なんかは、普段の授業を聞いていれば、平均点ぐらいはとれるようにできている。念のため、テスト前の休み時間に単語や漢字を確認すれば、まず赤点を回避できる。

数学は基礎問だけを覚えて、最初の簡単な部分だけで点を稼いで回避する。そもそも点を取ろうと思わなければ、意外となんとかなるも

のである。

「あら、比企谷くん。現実逃避はいけないわ。自慢の国語は勉強しないのかしら?」

「どこかの国語一位が、性格が悪くてな。一位になったら性格が悪くなるかもしれないと思うと、勉強も手がつかないんだよ」

「では、私も三位にならないように、気を付けるわ。目を腐らせたくないもの」

……上手く返されてしまった。

雪ノ下は俺を打ち負かして気分がいいのか、口元を少し緩ませると、紅茶を一口啜る。

「で、でもあれだなー。あたしとか、いつも赤点ぎりぎりだから、ゆきのんやヒツキーが羨ましい」

由比ヶ浜が羨望の眼差しを向けてくるが、そのまま雪ノ下へと流す。雪ノ下は呆れたようにため息をついて、由比ヶ浜を見据えた。

「そもそも学校の試験の場合、最低限得点を取らせるように作られているのだから、要点を押さえれば、赤点を取るとは思えないのだけれど」

そういえば切花も同じようなことを言っていたな。小町が勉強している横でマンガを読んでいたのを咎めたら、「だってテストって、できるように作られてるじゃないですか」と真顔で返しやがった。

ちなみに、そう言っておきながら学年でトップを取ったことがない

ことを皮肉混じりに聞いてみたら、切花は当然と返しやがった。「そもそも八十点をとる勉強と百点をとる勉強は全然違います。だいたいい二倍くらいですかね、勉強量の違いとしては。だから、然したる目的がなければ、八十点をとる勉強をする方が賢明です」とは切花の言葉である。思わず納得してしまったのが悔しい。

どうも勉強ができる奴というのは、頭がおかしい奴らが多いらしい。

「それでもできないから、困ってるだけだなー。ねえ、ゆきのん。今日この後一緒に勉強しない？ ヒツキーも」

「私がかまわないわ」

意外にも雪ノ下がすぐに同意をする。

案外、雪ノ下は面倒見が良いんだよな。由比ヶ浜に料理をしつかりと教えていたし。

「ヒツキーはどう？ あーでも、ホントはテストなんて、ないのが一番だよなー」

「ああ、全くだ」

思わず同意すると、由比ヶ浜が目を丸くして、俺を見てくる。

対して雪ノ下は対して驚かずに、春の陽気のような邪悪……もとい暖かい笑みを浮かべている。

「比企谷くんは、学園生活にいい思い出なんてないものね」

「そもそも、テストなんて嫌な思い出しかねえよ。ほら、あれだ。普段ほとんど話したことないのに、テスト前に突然テスト範囲を聞いてくる奴。死ねばいいのに」

「それはあるわね。テスト範囲を他人に聞くことを前提にする人は結構いるもの。普通に聞いてくるなら、教えて上げるのだけでも、なんだかそう言われると、教える気がなくなるものよね」

「あははー。あたしはそういうところあるから、厳しいなー」

一年間でテスト前しか、話したことのない奴が何人いることか。というか、テスト範囲を誰かに聞く前提で聞き逃すことが、そもそもまぢがつてるだろ。

しばらく苦笑いをしていた由比ヶ浜だったが、ハツと何かを思いついたような、顔をする。

「そ、そうだ、ヒツキー。メ、メールアドレス教えてよ。ほら同じクラスだし、テスト範囲とか聞き漏らしたら、聞いてもいいから」

そう言って、ストラップだらけで携帯電話というか、マリモみみたいな物体をじゃらじゃら鳴らしながら取り出す。

それはもはや使いにくいというのは、言っではいけない。

「まあ……、かまわんが。ほれっ、このスマホでアドレス交換したことないから、悪いがそっちでやってくれ」

机の上にスマホを滑らせる。思ったよりも強く放ったつもりだったが、ちょうど由比ヶ浜の目の前へと上手く滑り込んだ。

由比ヶ浜は目の前にあるスマホをおそるおそる触ると、おずおずと画面を操作し始める。

「触ってから言うのもアレだけど、携帯を見ちゃってもいいの？」

「どうせ、妹かアマゾンからしかこないからな。特に見られて困るものはない」

少し前までは、最近業績が悪くなった大手ハンバーガーチェーン店のメルマガも登録をしていたが、今では解除している。月曜の授業中に、新商品の名前を見るのは拷問に近い。昼休みに食いに行きたくなるだろ。

そんな馬鹿な考えをしていたら丁度、俺のスマホが華やかにオーケストラを奏で始める。

「とか言ったらちようど鳴ったし。というか着メロが壮大だ！」

『運命』の第四楽章の冒頭ね。意外だわ、比企谷くんにそんな素養があっただなんて」

「昔メールが来る度に嬉しくてなー。メールが入ったらすぐに分かるようにしていたんだが、来ないまま着信音だけが残った」

「ダースベーターのテーマや、悲壮に変えることも何回か検討したが、それはそれで悲しいので、却下した。」

「まあ、大したことないメールだろうから、そのままほっとけ」

「うん……、そのお」

なんだか微妙に反応が悪い。

由比ヶ浜は俺のスマホを不安げに見たまま、動かない。ただ、スマホを少しだけ強く握ったのが、俺の目に映る。

「その、ヒツキーの携帯に女の子からメール入ってる……」

由比ヶ浜が見せた画面には、「切花朱音」の文字と最新の本文で『今日の晩ご飯何か食べたいものありますか?』と書いてある。

そういえば、今日は母親が遅くなると朝言っていたな。ということは小町と一緒に飯でも作るのだろうか。

「あー、それは妹の友達だ。大して気にしないで良い」

というか、こんなメールなど月に一回か二回来るか来ないかの頻度である。ある意味定時報告みたいなものなので、来ると時間の流れを感じてしまう。

「や、でも、普通兄妹の友達にご飯作ってもらわないよね、ゆきのん」
「そうね、比企谷くん、白状するなら今よ。脅迫をしたのかしら、それともお金を渡したの? 今なら一生軽蔑するくらいで許してあげるから」

なにやらひどい誤解を受けているように感じる。

特に雪ノ下に限っては、いつもの澄ました顔が、怪訝なものへと変わってきている。窓から春の暖かな光が入ってきているのにも関わらず、雪ノ下の周りにはひどく鬱屈した何かが漂っている。

「いや、むしろ弱みを握られているのは、俺の方なんだが」

付き合いの長さから、俺が発狂するような思い出を切花はかなり知っている。うかつにからかうと、三倍以上に返ってくるので相互不干涉が俺と切花の間で締結されている。

「というかあれだぞ。このメールを無視したら、晩飯が俺の嫌いなものづくしになるからな」

以前一回メールを放置したら、その日の夕食がすべて椎茸かトマトを使った料理になっていた。しかも細切れにして料理に混ぜていたので、それだけをよけることも出来きない。

なんか、妹の友達というよりは、姑と喧嘩をする嫁みたいな感じである。もちろん、姑は俺である。

「あら、年下の女の子にそんな仕打ちを受けるとは、流石は比企谷くんね」

流石の雪ノ下さんは、とても嬉しそうにそんなことをおっしゃる。口角がっぴり上がってるじゃねえか。

「い、妹ちゃんって、何歳？」

由比ヶ浜が聞いてくる。

「……今年で中学三年になる」

「ちゅ、中学三年生に料理で負けた……」

机に突っ伏した由比ヶ浜がそのまま、動かなくなる。その哀愁漂う

背中を見ると、何とも言えない気持ちになる。まあ、年下に負けるって、俺らの年だとかなりキツイしな。

雪ノ下も少し可哀相に思ったのか、少し言葉を選ぶような間の後に言う。

「由比ヶ浜さん、人には向き不向きがあるわ。だから中学生でも料理ができる子がいても、気にすることはないと思うの」

「気にするよー。というか!」

由比ヶ浜は勢い良く体を起こすと、こちらを指さしてくる。

「その朱音ちゃんと、付き合ってるの、ヒツキー?」

なんだ、そういうことか。

「お前な、俺に彼女がいたら雪ノ下に対して盛大に自慢をして、上から目線の発言を改めさせるくらいのことはするぞ」

「確かに、比企谷くんに彼女がいたら、それくらいのはしりそうよね」

自分で言うのと、他人に言われるのは大分違うというのを、身を持って感じた瞬間だった。

というか、雪ノ下の目が微妙に笑っていないのがかなり怖い。もし上から目線で言っても、なにかしら報復をくらいそうだ。

「じゃあ、ホントに彼女いないの?」

「さつきも言っただろ。そんな上等ものがいたら、とつとと自慢をしてるぞ」

そもそも、友達がいない奴に彼女ができるのだろうか？ あつ、寧々さんがいたか……。

「そっか、そうなんだ……」

由比ヶ浜は安堵したように息を吐く。その表情があまりにも穏やかで、暖かだったので、正直どう反応していいのか分からない。

そしてすぐに俺のスマホに向き合った由比ヶ浜は、少し使い辛そうにしながら自分のアドレスを打ち込んで、メールを送る。

「はいっ、これがあたしのアドレスだから、メールしたらちゃんと返してね」

そうやって由比ヶ浜の電話帳に載っている俺の名前を嬉しそうに見せてくる。

光が射し込むせいで少し見にくい画面には、あだ名だらけで全く判別できない中に「☆★ヒツキー★☆☆」の文字が踊っている。……その管理の仕方は、五年後くらいに見直した時に誰か分からなくなつて、「あれー、こうじつて、あのこうじだよね？」みたいに困惑するぞ。

「そろそろお喋りはおしまいにしましょう。勉強をするのでしよう」

雪ノ下が窘める。

「えっ、勉強はサイゼに行つてしようと思つただけど」

でたよ、サイゼ。なんで高校生ってカフェじゃなくてファミレスに行くんだろ。しかもあいつら、ゲームから宿題まで全部やりやがる。

俺も昔はサイゼを使ったことがあるが、たまたま入るタイミングが一緒だった二人組の女子大生と同じグループと間違われ、その二人組から「はあ？ キモいんだけど」みたいな目で見られ、しかも席が隣だったため、ものすごく気まずい思いをしながら食事をしてからは、行っていない。

「そんなうるさいところじゃ、集中できないんじゃないか？」

「大丈夫だって、むしろ分からないと聞きやすいし、ヒツキーも行くでしょ？」

正直言つて、あまり行く気はしないのだが、このまま小町と切花の飯を食うのも芸がない。と言つても、こいつらと勉強をするのもどこか、落ち着かないだろう。

「俺は遠慮させてもらう」

「うーん、今度は三人で勉強しようよ。だったらいいでしょヒツキー？」

正直言つて、今度も遠慮したいのか、ここは言葉を濁しておこう。

「ま……、考えておく」

「じゃあ、今度は一緒に勉強しようね！ ゆきのん、じゃあサイゼ行くっか？」

由比ヶ浜が声を弾ませて、返事をする。

とりあえず、スマホを取り出して小町に『今日は飯はいらん』と打つ。どうせ小町と切花は一緒にいるから、伝わるだろう。

テストが近いことだし、俺もあと少し経ったら、ガストへ行くつもりだ。

その3 く比企谷小町は歓喜するく

数学、それは世界で最も美しい学問の一つとされている。

世界はありとあらゆる数字で構成されており、その数字を組み合わせる式よって、この世の美しさを紡いでいる。ピラミッドにギリシア彫刻などに使われている黄金比を見ても、その美しさは圧倒的である。

音楽、数論、幾何学、天文学によつて、世界の本質を紐解こうとした古代の考えにも納得が行く。世界が美しいのであれば、その一端をなす数学が美しいのも、当然の帰結と言えるだろう。

ただ、その数学にも重大な欠点がある。

……分からない奴には全く分からないのだ。

数学ができる奴に言わせると、簡単な問題は公式を当てはめるだけらしいが、そもそも当てはめ方が分からない。どこかの小生意気な年下女子が言うには、学校レベルの数学は暗記らしいが、公式以外に何を覚えれば良いのだろうか。

切花が高校の数学を、公式と例題を一つ見ただけで解いたときには、本気で世界を呪いたくなくなった。あの問題、俺が五分かかっても解けなかったんだけどな。

今までは切花流の勉強の仕方でなんとかあったが、最近の数学でシグマとかいう、どこかもボスみたいな奴とエンカウトしてから、そうは言っていられなくなった。そもそもすればいいのか、未だに全く理解できない。どうやらロックマンは理系らしい。

そんな不安を抱えながら、近くのガストまでの道のりを歩く。

最寄りのガストは学校から徒歩で三十分、最寄りもバス停もなく、アクセスとしては車が最適な立地をしているため、同じ学校の奴と出会う心配もあまりない。

まあ、あれだ。由比ヶ浜には悪いが、そもそも俺は独りで勉強をしたほうが、多分効率がいいから仕方がない。

「あれ？ お兄ちゃん？」

だいたい二十分ほど歩いたくらいだろうか、天使のような可愛らしい声に呼び止められる。

振り返るとやはり、天使のような可愛らしい少女が俺をじっと見つめていた。すぐ隣には、天使とはまでは言わないが、少し儂げな美女が姿勢よく立っている

「おう、小町か。なんだ、夕飯を作るんじゃないのか？」

「お兄ちゃんが外で食べるなら、私たちも外食しようと思って」

何か、今日は子供がいらないから、夫婦水入らずで食べようみたいな話だな。

「ついでにテストも近いので、ご飯のついでに勉強しようと思っただけです」

小町の話に切花が補足する。

なるほど、学生の考えることは大体一緒なのだろう。基本的にテスト期間は若干の誤差があるものの、どこの学校でも同じタイミングで行われる。そのせいもあってテスト期間中の夕方には、マックやスタバで学生が勉強をしている姿も珍しくはない。

「そうか、なら一緒に食うか？ ガストに行こうと思ってるんだが……」

「行く行く！ 流石お兄ちゃん！ ねえ、何食べようか？」

「季節のタルトとかあったらいいよね。多分、誰かのおごりだと、凄く美味しいと思うの」

今晚のメニューを楽しそうに相談する小町と切花を後ろから眺めながら、そのままガストへ向かう。

小町と切花と一緒に食べれば、俺の食費が家計で落ちる可能性がある。我が母も父も切花には甘いのだ。息子には厳しいんだけどな。ならば一緒に食べない選択肢は存在しない。つーか俺のおごりを密かに期待するんじゃない。

「ねえー、朱音ちゃん」

「んー？」

「これ、教えて」

苦みが強いコーヒーを口につけながら、女子二人が顔を寄せ合い、勉強をしている様子を眺める。

切花が大人びているのか、それとも小町の身長も相まって幼く見えるのかは分からないが、こうしていると仲の良い姉妹に見えなくもない。

おっと、いけない。妹に見とれて勉強に手がつかないなんて、まるでシスコンみたいじゃないか。

「あの八幡さん、じろじろ見られると勉強しにくいので、やめてもらえると助かります」

「悪い、小町を見てた」

「うわー、心の中で思うならともかく、流石に口に出されると引くなー、お兄ちゃん……」

心の中を許してくれるあたりが、八幡的にポイントが高いわけだが、言葉に出すと小町の好感度が下がるのでやめておく。

「というかお兄ちゃん、部活出なくていいの?」

小町がノートとにらめっこをしながら、聞いてくる。どうやら、苦戦しているらしい。

顔を伸ばして覗いてみると、二次関数をやっていた。兄妹で数学が弱いということは、親が苦手だったのだろう。だから俺たちが数学ができなくても仕方がない。

「そもそも、奉仕部って何やってるんですか?」

対して切花は自分の教科書をほとんど見ないで、カフェオレを飲み

ながら、小町のノートを覗きこんでいる。相変わらず余裕な奴だ。

「何やってるんだかなー。一言では難しいんだが、まあ、人の相談にのってやるみたいな感じだ」

そもそも事例としては、二件ぐらいしか対応していないから、何とも言えない。普段なんて本読んでいるだけだしな。

切花は言葉を考えるように唇に手を当てると、

「なるほど、良く似合っているとと思います」

と優しく微笑みながら言う。

「おい、俺が人に使われやすいって言ってるのか？」

「いやいや朱音ちゃん、お兄ちゃんはむしろ誰かに見てもらわないとダメだと思うなー。というか早く誰か面倒を見てくれないかなー」

専業主夫希望の俺としては、誰かに面倒を見てもらう気が満々なので、否定はできない。出来る限り養ってもらいたいものである。

ただ、お兄ちゃんをもうちよつと評価してくれてもいいんじゃないかなー、小町さんや。

「つーか、そんななま暖かい活動なんてしてないぞ。隙があれば人の弱点を突いてくる奴とか、無自覚に人のトラウマを刺激する奴とか、そんなな奴ばっかりだ」

というかその二人だけなんだけどな。そもそもあいつらのことを、小町たちに言っていただろうか？ 部活に入ったことまでは、言っ

いたような気がするんだが。

「あら、私は事実を言っているだけよ、比企谷くん」

あれれー？ おかしいぞー。ここにいないはずの雪ノ下の声が聞こえるなー。

恐る恐る顔を上げると、無然とした顔をした雪ノ下と、気まずそうに苦笑いしている由比ヶ浜が目に入る。一度目頭を押さえて鼻筋を軽く揉んで、視線を戻す。どうやら幻覚ではないらしい。

「お前ら、サイズに行ったんじゃないのか？」

「いやー、サイズ混んでて……」

なんで由比ヶ浜たちを避けても、エンカウントするんだろうな。

「お兄ちゃん、ねえ、誰！ 誰！ お兄ちゃんの知り合い？」

小町がやたらと嬉しそうに立ち上がると、社会人かと言いたくなるような腰の低さで二人に挨拶をしに行く。

「いつも兄がお世話になっておりますー。はい、比企谷の妹の、比企谷小町ですー」

なんだ、その自己紹介は。そのまま名刺を渡す勢いじゃないか。

小町の勢いに少し気圧されつつ、若干引いていた雪ノ下であったが、すぐに表情を戻す。小町とはテンションが合いそうだと思っていた由比ヶ浜は、何故か奥歯に物が挟まった様子で、小町から視線を逸らしていた。

「初めまして、雪ノ下雪乃です。比企谷くんと同じ奉仕部にいます」

「は、初めましてー。ヒツキーのクラスメイトの由比ヶ浜結衣です……」

「初めまして……?」

何故か由比ヶ浜の自己紹介に首を傾げた小町であったが、うわごとのように「初めまして?」と何回かつぶやくと、納得したように表情を明るくする。

おい、何に納得した。

「初めましてー。ではどうぞ、座って下さい」

「……おい、とりあえずお前も挨拶しとけ」

口を開けて、惚けている切花を促す。切花は雪ノ下たちと俺を交互に見ると、小町同様に立ち上がり、雪ノ下たちの前に躍り出る。

……雪ノ下たちに驚いているのか、切花の動作がいつもより緩慢なのが気になる。

「……小町ちゃんの友達の切花朱音です」

切花が少し控えめに自己紹介をすると、雪ノ下も由比ヶ浜も動揺したように顔を見合わせて、囁きあう

「すごい可愛いね」「可愛らしいわね」「想像以上だった!」「ええ、まさかこんな子が比企谷くんの妹さんだったなんて……」「えっ、……」

そっち?」「……違うの?」「いや、ほら! 朱音ちゃんのほう」「彼女は……可愛らしいというよりは綺麗だと思っただけかも」「確かに大人っぽいよね」「確か、中学三年生だったかしら」「なんか、大人っぽさでも負ける気がする」「そんなことないわ、由比ヶ浜さん」……ゆきのん!」「大人っぽさが、女性の魅力だけじゃないわ」「否定してくれないんだ!」

……こいつら、声のボリウムを落とす気が全くない。目の前そんな会話をしているものだから、切花が少し気まずそうに、視線を泳がしていた。これはこれで珍しいので少し面白い。

というか、途中から漫才に変わってないか。

一通り自己紹介が終わったところで、切花が小町によって、元いた席の反対——つまり俺の隣に押し込むと、テーブルに広がっている勉強道具を片づけ始める。

「どうぞ、どうぞ。せっかくなんで一緒に話しましょう?」

小町もそう言うのと、こちら側のテーブルへとやってくる。

切花が席に着くときに、俺の耳に手を当てて耳打ちをする。切花の滑らかな髪が耳にあたり、若干くすぐったい。

「なんか、すごい綺麗な人と、すごく可愛い人ですね」

否定の肯定もしにくいので、押し黙る。切花の方も返事はとくに求めていなかったのか、そのまま席へ座る

元からテーブル席だったから三人座れるものの、流石に狭い。切花の肘が体に時折当たってくる。

雪ノ下と由比ヶ浜も、互いに目を合わせると席に着く。どうやら帰ってくれる選択肢はないらしい。

右を見ると窓に写る俺の姿が目に入る。うむ、今日も元気に目が腐っているな。……正面を見ると、由比ヶ浜が少し居心地を悪そうにしながら座っていた。左には切花が、ちびちびとカフェオレを飲んでいる。

なんだかパトカーで連行されている気分になり、意味もなくテンションが下がる。まあ乗ったことはないが……。

こうやって囲まれると無性に家に帰りたくなってくる。とりあえず切花に立つてもらわないと出られないので、切花へ話かける。

「なあ、俺、もう帰っていいか？」

切花は小町から雪ノ下と由比ヶ浜、そして俺をゆっくりと見回す。

「……そつちに窓ガラスがあるじゃないですか？」

「おう、あるな」

「突き破ってみます？」

素晴らしく物騒な提案が笑顔と一緒に返ってきた。どうやら通してくれる気はないらしい。

「なんでファミレスで、そんなハリウッドみたいな帰り方をせにやならんのだ」

今軽く叩いてみたが、この窓ガラス、結構な厚さがあるぞ。

そんな風に切花と軽口をたたき合っていると、小町と由比ヶ浜がこちらをじっと見ているのに気付く。

「お兄ちゃん、朱音ちゃん。じゃれつくのはそこまでだよー」

「やっぱり仲が良い……」

ちょうど大学生らしき男の店員が、雪ノ下たちに水を出しに来たので、切花と話すのをやめる。店員はやたら丁寧に水を置くと、殺意がこもった目線で俺を見ると、そのまま立ち去る。

……逆の立場なら、間違いなく呪詛の念を送るだろうな、俺も。

その4 く乙女たちのガールズトークく

「じゃあ、朱音ちゃんとヒッキーって、幼馴染なんだ！」

由比ヶ浜が、やたらと不健康そうな色をしているメロンソーダを、氷もろともストローでかき混ぜながら言った。

雪ノ下と由比ヶ浜が席に着いてから十分くらい経ったが、会話は和やかに進んでいる。

初対面の場合、本心かどうかは別として、女子のほうが話せるとも聞くし、この中で好戦的な奴は一人しかいない。その一人も基本的にはカウンター型なので、挑発しなければ問題はないため、特に雰囲気が悪くなる要素もないだろう。

「二応小学生からの付き合いなので、たぶんそうなります」

切花も最初のうちは少し堅かったものの、すぐに表情が柔らかくなり、それなりに打ち解けて、軽く冗談まで言っている。

そういえば、切花と出会って七年くらいにはなるのか。そう考えると家族を除けば最も長い付き合いになる。もし付き合いの年数を棒グラフ化すれば、恐ろしく突出したグラフが出来上がるだろう。

「あの頃は、兄も可愛かったですねー。お二人にも是非見せたいですよー」

「比企谷くんの幼い頃ね……。途轍もなく可愛くない子供しか想像できないわ」

小町と切花が俺の昔話を面白可笑しく話し始めると、雪ノ下たちも

興味深そうに聞き入り、時折茶々を入れては楽しんでいる。

女子の会話にはどうも入りづらい。

そもそも話題の展開が早すぎる上に、やたらとファッションの話に入る。しかも俺には理解できない横文字が飛び交い、ファッショナルのか海外の風習を言っているのかの区別ができない。まだ世界史の人物の名前のほうが覚えやすい名詞が並んでいる。

そういうこともあり、俺は世界史の教科書とにらめっこである。脱出はできないが、端っこにいたので話に参加しなくても違和感はない。

千六百十六年、ヌルハチと。民族が違うとはいえ、なんでこいつだけ片仮名なんだろうな。しかもその後に出てくる奴らが覚えにくい、書きづらいことこの上ない。康熙帝、雍正帝、乾隆帝の三人だが……。しかもこいつら一ページに収まりやがるからな。

漢字書きたくないから世界史を選んだのに、なんでこんな目に遭っているんだよ……。しかも世界史の担当は、テストの時には嬉々として漢字のミスが減点してくる。三国志前後のテストで十五点分を漢字ミスで間違えたときには、本気で泣きたくなった。

「是非、うちに来て写真を見てくださいー。ホントに可愛いですよ」

なんだか不穏な提案を小町がしてくる。俺の子供の写真とか、本当に恥ずかしいので、やめてください。しかもその後、大体卒業アルバムまで見られそうで怖い。中学卒業の卒業文集なんて黒歴史でしかないぞ。

このまま家に来られても困るので、切花にレスキューを出す。

「おい、なんとかできんか？」

切花は俺のシャープペンを取り、俺の教科書に何故か隷書体で、『無理です』と書いてくる。やはり『無』は隷書が映えて美しい。行書や草書は目に映る美しさが分かりやすいが、隷書には、不思議な魅力にあふれている。

……というか、なんで口に出さないんだよ。

もう一度催促の意味を込めてシャープペンの頭で切花を小突くと、切花はため息を吐き、

「そういうえば、お二人ともお綺麗ですけど、恋人と違っていないんですか」

と切り出してくれる。何だかんだで甘い奴である。

「あたし？ あ、あたしは、いないかなー」

「私もないわね」

奇遇だな、実は俺もないんだ。

「……………」

思わず俺たちの間に悪い空気が流れる。俺のグラスの氷が弾け、甲高い音が響く。

「こ、小町ちゃんたちはどう？ 二人とも可愛いけど」

「私たちもいませんねー。朱音ちゃんは結構告白されるんですけどね」

……おかしいな、ここにいる奴らは客観的に、見た目が良い奴がいるはずなんだが。

隣の切花を流し見ると、手の甲を顎に乗せていた。中学生らしく、化粧つ気はないが、睫毛は適度に上を向いていて、こうして見ても整った顔立ちをしているのが分かる。

「ほえー、告白された中で、誰かと付き合おうって思ったりしなかったの?」

由比ヶ浜が控えめに聞くと、雪ノ下が切花をフォローする。

「告白されたからといって、誰かと付き合おうと思うのは早計よ」

おそらく、この中で一番告白されているだろう雪ノ下の言葉だけに説得力がある。こいつもそれなりに告白され、付き合わないかと周りから囁かされたことがあるのだろう。

そして聞いたことはないが、切花も同じような事態には一回くらいに遭遇しているだろう。恋愛がらみの話は驚くべき速さで拡散し、誰かの話のネタになってしまう。

「付き合おうって思ったことはないですね」

「誰か、す、好きな人がいるの?」

「そういう訳じゃないんですけど。……なんというか、恋愛的に好きじゃない人と付き合って、デートとかしてして、相手が私を喜ばせよ

うと頑張つて、それでも相手のことが好きになれなかったら、なんか申し訳ないじゃないですか」

それは、この前深崎くんと話していたことは少し似ていて、どこか違っている言葉だった。なんかこいつつて、自分の感情に自信がないんだよな。

意外に真面目な言葉だったので、由比ヶ浜が少し驚いている。

「だから私は、自分が好きになった人しか付き合いません」

「でももし、その人に振られちゃったらどうするの?」

「その時は、諦めて他の人でも探します」

切花は笑顔でそう言った。

雪ノ下も由比ヶ浜も押し黙り、何か言うことを探している。小町は、いつもと変わらない。

流石に気まずい空気になったのを気にしたのか、切花は「そろそろご飯でも食べましょう」と言うと、チャイムを鳴らした。

各々好きな物を注文し、ドラマや最近の流行りの話をつまみにしながら食べ始めると、さっきの雰囲気流しだされ、ゆったりとした会話に戻り始める。

会話をしているうちに、いつの間にか夜の帳が降りてきて、町が人工的な無機質の灯りに照らされ始める。小町も切花も中学生なので、早めに帰るように促すと、その場でお開きとなった。

会計を済まし、フアミレスから出ると、空は墨汁を流し込んだように染まり切っていた。

ここからだ俺の家と切花の家が近いため、まずは小町と切花を家まで送り、そこから雪ノ下と由比ヶ浜を見送りに行く。

「ヒツキーとあんなに距離が近い子って、初めてみた」

俺を先導する由比ヶ浜が、振り向きながら話しかけてくる。

雪ノ下は少し前の信号で別れている。意外にも切花を気に入っているらしく、また会ってみたいと少し機嫌が良さそうに言っていたのが印象的だった。

「まあ、付き合っただけは長いからな。小町二号みたいなもんだ」

なんか小町二号って、宇宙船みたいな響きがするなど、頭の隅で思いつく。

「あんな風に話せるんだったら、もつと学校で愛想よくすればいいのに……」

「それができなかつたから、今ぼつちなんだろうが」

引きこもりだって、家族と会話をするときだってある。だからなんというか、

「ま、あいつは例外みたいなもんだ」

小さい頃は小町とワンペアみたいに捉えていたから、どうしても接し方が小町と同じくらい近くなってしまう。

少し意識をしすぎて疎遠になった時期もあったが、結局妹以下、知り合い以上という関係に落ち着いた。

最近照明の灯りが控えめになったコンビニの前に、同じ高校の奴らがたむろしているのが見え、由比ヶ浜から距離をとる。由比ヶ浜は足音が遠くなったのに気付いたのか、不思議そうな顔をして振り返った。

「ほら、そういうところ」

由比ヶ浜が頬を膨らませながら歩みを止めて、俺の隣に並ぶ。

「あたしとかゆきのんだと、距離に気を使ってるでしょ？　けど、何か話をしていても朱音ちゃんにはそういうのがなくなってる」

「……………」

「だからあたしたちにも、もう少し遠慮をしないでくれると、嬉しかったりする」

由比ヶ浜はそれだけを恥ずかしそうに言うと、早歩きでまた俺を先導し始める。

沈黙を埋めることばを探したが見つけれられず、そのまま夜道をしばらく歩くと、綺麗に並んだ住宅街へと景色が変わる。

「ここまでで大丈夫。送ってくれてありがとね」

等間隔に配置されている街灯を歩く、由比ヶ浜の小さな背中をじつと見つめた後、俺はそのまま帰路へとついた。

その5 く比企谷八幡は赤面するく

外に出ると強烈な光が差し込んできて、思わず目を細める。

まだ気候は夏どころか梅雨にも少し早いくらいだが、降り注ぐ日光の強さは既に夏を感じさせる。オゾン層は一体何をやっているのかと思っただが、あれは紫外線だかを通さないだけであって、光自体の關係ないのか。完全に思い出補正な気もするが、昔の方が日差しも弱かった気がするぞ。

まだ午前中でこの日差しの強さだったら、午後には暑くなるのかも
しれない。

サイクルポートのような便利な外構がない我が家で、野晒しにされている自転車に跨がると、案の定大分熱くなっていた。

駅へ向けて自転車をこぎ始めると、思いのほか顔に当たる風が気持ちいい。どうやら空気自体はそこまで熱くなっていないらしい。

ちなみにだが、自転車の最大の敵は風である。海辺に近いと冬にはからつかぜと呼ばれる風が東西南北関係なく吹きすさぶため、行きも帰りも向かい風になるという意味の分からない現象にかられる。

帰りが追い風だと思って頑張ったあげく、復路も向かい風だった時の絶望感は計り知れない。

「八幡さんじゃないですか、どこか行くんですか？」

聴き慣れた声を振り向くと、私服姿の切花が近づいて来ていた。

黒のストッキングと少し明るいベージュのショートパンツを組み

合わせ、トップスには薄ピンクのブラウスでその華奢な体を包んでい
る。肩に革製のトートバックを掛けていて、いかにもお出かけとい
う格好だった。

思わず足下に目をやると、背の低いサンダルを履いていた。

どうやら切花の目線が俺よりも高くなることなく、安心する。

「ちよつと街に本でも買いに行こうと思ってな」

そういえば都会と田舎の違いとして、駅を中心とした繁華街を駅名
で呼ぶか、街と呼ぶかの違いがあるらしい。地方都市の場合、基本的
に繁華街が一つしかないとともに、駅名が市町村名となっていること
が多い。自分の所在地に行つてくると言うのは、どこかおかしな感覚
でもあるので仕方がない。

「奇遇ですね、私も街に用事があるんですよ」

「何か買いに行くのか？」

「そんな所です。……そうだつ、買い物の後、ちよつと付き合つても
らつていいですか？」

切花が控えめな表情で聞いてくので、頭の中のスケジュール帳を開
いて、今日の予定を確認してみるが見事に白紙だった。というか全て
が空欄でスケジュール帳の意味がない。このスケジュール帳は二度
と使うことはないだろう。

「何の用事だ？」

「行けば分かりますよ。八幡さんにも関係あるものです」

買い物が終わったら家でごろごろしようと思っていたが、どうしようか。

それでも切花の言葉が少し気になる。切花とは接点が強いようで、家以外はほとんどないのである。その切花が俺に関わると言っているということは、それなりのものなのかもしれない。

……少し考えて、結論を固める。

「ん、じゃあ行くか」

そう言つて自転車から降りて、自転車を引きながら歩き始める。ここから歩きだと少し遠いが、仕方がない。自分よりも年下の女子が歩くのに、俺だけ自転車に乗っているのは流石にみっともない。

「えっ？ 自転車乗せてくれないんですか？」

切花が驚いたように、俺と自転車を交互に見比べながら聞いてくる。何でそんな当たり前のように聞いてくるんだよ……。

「お前な、二人乗りは道路交通法違反だぞ」

そもそも合法でも乗せる気はないが。

「そうですか、じゃあ歩きで行きましょう」

切花は少し不満げな顔をして、自転車の荷台の部分を軽く撫でると、そのまま駅へと向かい始める。その足どりはいつも通りで、本気

で言っているのかどうか、俺には判断できない。

とりあえず駅の近くまで行き、駐輪場へ自転車止める。

そのまま駅と複合施設になっているショッピングモールへ向かい、案内版の前に立つ。この辺りは午後にはいつも人混みで溢れているが、まだ午前中なのか人通りも少なく、若干閑散としている印象を受ける。

この分ならお互いの知り合いに会うことなさそうだ。

「私の買い物は後でいいんで、まずは本屋から行きましようか？」

切花がそう言ってくれるので、エスカレーターで三階の本屋へと行く。

「適当に買ってるから、そこら辺でも見とけ」

「いえ、特に買いたい物もないので、後ろで見えています」

「気が散るんだよ、気が」

そう返しても、切花は何が楽しいのか、機嫌が良さそうにしているだけなので、諦めてハードカバーのコーナーへと向かう。

新刊を上から下まで一通り眺めて、面白そうな本がないチェックをしていると、切花が一冊手に取っているのが目に入る。

裏表紙を真剣な目で見ながら、何か考えているようにそのまま動かない。

「お前、その作家のこと好きなのか？」

「好きというか、前に読んだのが面白かったので、気になったんですが、ちよつと高いですね」

切花は物欲しげな顔のまま、少し厚みのある本を棚へと戻す。ズボンに突っ込んでいた長財布を開いてみると、樋口さんと目が合う。少し微妙なところだな。

切花は俺の動作に気づくと、嬉しそうに頬を緩ませ、

「大丈夫です。まずはアマゾンのレビューでも見て考えます」

と言って、可愛らしく後ずさりをして本棚から離れる。

ただ、言ってることは、あまり可愛くねえなあ。いや、まあ合理的といえば合理的なのだが。というかアマゾン使うのな、お前も。

その後文庫本とマンガを悩んだ末に買い、本屋を出ることには既に正午を回っていた。どうやら思いのほか、時間を潰してしまっただらしい。

「待たせて悪かったな。飯はどうする？」

「私は朝ご飯が遅かったので、まだお腹は空いてません」

「実は俺もあまり空いてないんだよな」

家を出る直前に軽くトーストをかじったので、まだまだ俺の腹は空

腹を訴えていない。

「じゃあ、ちよつと文房具を見に行ってもいいですか？」

「別にかまわんが……。お前の用事って、それか？」

「違いますよ。ただ、せっかく来たので、ちよつと見に行きたいなと思
いまして」

「じゃあ、行きましようか」と弾んだ声で言って、切花が軽やかに歩
き出すので、その後をついて行く。

エスカレーターに乗り、三階から五階へと昇ると、優しいパステル
カラーに彩られたテナントが歓迎してくる。

ショッピングモールはフロアごとの特色をある程度絞り、客が大ま
かに行っても、買い物しやすいように設計してあるところが多い。
この五階は生活雑貨をメインとしているのか、文房具屋のほかには
キッチン用品や百円ショップなどが出典をしていた。

さすがに昼時なものもあり、エスカレーター自体は少し混んでいた
が、いざフロアに降りると、人影もまばらとなっていた。

どうやら買い物自体はゆっくりとできそうだなと一人思う。

「何か買いたいものありますか？」

「いや、特にない」

「だったら、一緒に見て回りませんか？」

一瞬断ろうかと思ったが、先ほど付き合わせてしまったことが、頭をよぎる。一応向こうが着いてきたとはいえ、ここで付き合わないのは決まりが悪い。

「お前の後ろで見てるから、適当に回ってくれ」

「はい、ありがとうございます」

文房具屋というのは不思議なもので、そこまで欲しい物がなくても、試し書きや、無駄に高機能な事務用品を眺めているうちに、気付くと時間が経ってしまう。

針のないホツチキスといい、無駄にカッコいいメモ帳といい、なんであんなに男心をくすぐる機能を追加するんだよ。ほとんど使わないが、買いたくなるだろうが。

切花はまず筆記用具のコーナーへと向かうと、少し悩みながらボールペンを取り、そのまま試し書きを始める。

特に俺はやることがないので、試し書き用の横長の紙を見てみると、「うちの友情わまち不滅!!」やら「金山氏ね」とか「——太・極——」と書かれている。この街の人間関係に何やら不安に思わなくもない。

あと最後の奴は間違いなく中二病だな。

「八幡さん、ガラスペンがありますよ」

「ん、何だその強度に不安がありそうな筆記具は？」

切花が指を指す方へ首を向けると、半透明ガラスで形作られたペン

が、少し蒼みがかったインクと一緒に陳列されていた。

……名前のままだな。

面白そうに駆け寄る近づく切花に付き添って傍に寄ると、どうやらこれも試し書きができるらしい。

切花が持ち手が装飾されていくペンを手に取り、インクにペン先を浸して、真つ直ぐに引き上げる。すると濡れたような黒色が側面の溝にするすると通っていく。

上手ことインクが入っていくので、思わずしゃがみこんで見入ってしまう。理屈はよく分からないが、おそらく何らかの圧力でも働いているのだろう。目に見えない力というものは、えてして目に見えて大きな現象を引き起こす。

しばらく透明なガラスに漆黒が満たされていく様子を見入っていたが、口唇を撫でる生暖かい吐息によって意識が引き戻される。

顔を上げると、切花が今にも頬が触れそうな距離でガラスペンを眺めていた。というか頬がくっついていないだけで、肩は当たっていた。

切花はこの体制に気付いていないのか、口元に笑みを浮かべ、興味深そうな目をしながら、ペン先が染まっていく様子を眺めている。

……やばい、思わず薄紅色の艶めかしい口唇や、光沢のある漆のような瞳に目線が奪われてしまう。切花の口から洩れる吐息が顔に当たりくすぐつたい。

頬が熱くなっていることに気づき、飛び引くように立ち上がる。切

花はそのままの体勢だったが、やがてガラスにインクが染みわたると、用意されている紙にすらすらと試し書きを始める。

切花が適当に丸やら漢字を書いている間、戸棚に飾ってあるインクの色を見比べて、心を落ち着かせる。

ラベルによると様々な顔料を使って色を出しているそうだが、今の俺では細やかな色の違いを区別することはできなかった。

……切花がじっくりと書いてくれて助かった。この顔の熱さが引くまでには、もう少し時間がかかりそうだ。

しばらくしてインクが無くなったのか、名残惜しそうにペンを置くと、こちらを振り返る。

「意外に長持ちするんですね。これなら普通に使えるそうです」

「……おう」

そのまま何も買うことなく、切花が出口へと真っ直ぐに向かうので、少し物欲しそうな顔に声を掛ける。

「結構気に入ってたが、買わないのか？」

「ペンとインクを買っちゃうと、それだけでお小遣いがなくなっちゃいますよ」

二人して文房具を出て、目配せしてこのあとどうするか尋ねる。

「お待ちせしました、次から私の買い物です」

と言つて人差し指で下を指す。どうやら下の階に幼児、違う、用事あるらしい。いや幼児はいるだろうが。

人並みを縫いながら一階へと降りると、切花は入り口に面している花屋へと入つていく。外観からして色とりどりの花が並んでいて、男が入つていく姿が一切見えない。

……花屋なんて人生で一度も入ったことがないぞ。

一人で行かせるのも決まりが悪いので、思い切つて入ると、鼻の奥を軽く触るような匂いが漂つてくる。花屋というといいいい香りかと思つていたが、色々なにおいが混ざつて、良いとは言えなかつた。

切花は慣れた様子で店員と話すと、名前の知らない花を白、黄色、紫の三輪選ぶと、一束にしてもらつて購入した。

さっきの買い物長すぎたので、思ったより拍子抜けしてしまつた。

荷物になりそうなので、花束へ手を伸ばすが避けられてしまう。どうやら自分の手で持ちたいらしい。

「じゃあ、行きましようか」

「いや、どこに行くか聞いてないんだが……」

「大丈夫です。すぐに分かりますよ」

多少不安であるが、口元をほころばせてる切花を見ると、どうやら変な所に連れて行かれることはないだろう。

こいつの場合、こういう顔をしているときは、案外真面目な要件
だったりするんだよな。

その6 く二人の墓参りく

子どもの頃の話である。

互いの娘の仲が良かった比企谷家と切花家は、双方が共働きということもあり、どちらかが忙しい場合は片方の家に子どもを預け、面倒を見るようにしていた。

そのため小学校のときは、放課後は小町と一緒に切花の家に向かい、そのまま夜まで過ごすことも珍しくなかった。その時に時折近所から様子を見に来ては、俺たちの相手をしてくれた人がいた。

切花のじいさんである。

定年退職をしてから暇を持って余している老人らしく、日がな一日本を読んだり、囲碁や将棋を打ったりして静かに余生を過ごしていた穏やかな人だった。

小町と一緒に遊びに行っても嫌な顔一つせず、孫が三人になって困ったと笑いながら言つて、俺たち三人の面倒を見てくれた。

俺も時々五目並べをして遊んでもらったが、何より惹かれたのは、じいさんの家の書齋に並べられている蔵書だった。八畳ぐらいの大きな部屋の一面を埋め尽くしていた本は、本人曰くまだ半分も読んでなかったそうだ。ただ、子どもの俺には小さな図書館のように思えたと、書齋のドアを開けたときの古びた紙の匂いが好きで、時々借りにいっては、一人で本を読んでいた。

「本は一人でも、大勢でも楽しめる。だから好きなように読んで、自由に楽しみなさい」というじいさんの言葉に影響を受けた俺は、それからはより一人で本を読むようになっていった。

……まあ、じいさんのせいで俺のぼっち化に拍車が掛かったのは否めないが。

それでも実の祖父母が離れた場所に住んでいる俺と小町にとって
は、第三の祖父ともいえて、穏やかな時間を過ごしていた。

そしてじいさんは今、冷たい墓の下で安らかに眠っている。

綺麗な碎石が敷かれている道を踏みしめると、じやりじやりとした
不協和音が辺りへ鈍く響き渡る。

そのまま門を潜って境内に入ると、御影色を基調とした舗装と、新
緑のコントラストが主張してきて、なんだがそれだけで少し落ち着い
た気分になる。

駅から徒歩で俺たちの家の方へ二十分ほど連れて行かれ所に、その
墓地はあった。

そういえば墓参りに行ったことはあまりないな。祖父母は健在で、
切花のじいさん以外は、近しい人で亡くなった人はいない。だからお
盆に、誰が眠っているか分からない墓に行くくらいだ。

「小町は呼ばなくていいのか？」

「小町ちゃんとは、たまに行くんですよ。だから今日は八幡さんにお
参りに行って欲しくて」

そのまま境内を歩いて行くと、すぐに墓地へと敷地が変わって

く。

切花は慣れた手つきで柄杓と手桶を借りると、桶に水を満たしていく。ただ少し重かったのか、切花は手桶を持ち上げると、少しふらついて一度手桶を置き直す。

仕方がないので切花から柄杓を奪い、手桶を右手で持ち上げる。

「ありがとうございます」

「なんか慣れてるが、よく来るのか？」

「よく行くわけじゃないですけど、お爺ちゃんのことを思い出したら出来る限り行くようにしています」

切花が歩き始めたので、後をついて行く。

「というよりも苦手なんですよ。命日だとか何周忌だとかお盆だとか、そういうった決まり事みたいに会いに行くって、なんだか不誠実じゃないですか。だったらその人のこと想ったときに会いに行つたほうが、喜んでくれるんじゃないかと思ってるんです」

さして広くない墓地であるため、すぐに目的地へとたどり着く。

やはり季節ではないからか、何組かの家族連れとすれ違ったものの、地内は少し閑散としている。まあ、墓参りに行くのだったら、このくらい物静かさがちょうどいいだろう。

切花家の墓は少し古びていて、本来ある光沢が失われて色褪せてしまっていた。それでも住職が掃除してくれているのだろう、全体的汚れは見当たらず、しっかりと手入れをされていた。

「じいさんって、どうして死んだのか覚えてるか？」

ふと気になって切花に尋ねる。

小学校の頃にじいさんは亡くなったので、さすがに死因までは覚えてはいない。俺の記憶が正しければ、八十歳手前で亡くなったはずなので、老衰するには早いだろう。

「確か肺炎だったと思います。何かで入院をして、そのまますぐに死んじゃいましたから」

二人で墓石に水を掛け、花差しにも水を注ぐ。

そういえば墓石に水を掛けるかどうかは、宗派だったり、家のしきたりによって違うらしい。ただ墓の上からとはいえ、故人の頭に水を掛けるのに抵抗があるのはなんとなく理解できる。

そうして、買ってきた花を花立に立てたところで、一息つく。

「というか線香を持ってないんだが……」

「ちゃんと持ってきてるんで、大丈夫ですよ。ほら、マッチも」

切花はトートバックから線香とマッチを出すと、少し誇らしげに見せてくる。

準備万端じゃねえか……。

「じゃあ、こっちがメインの用事だったわけか」

「そうですね、元々お墓参りしようと思って、街に花を買いに行こうとしました。だから、ちようど八幡さんに会えて良かったです」

そう考えると、俺も切花と鉢合えて良かった。

二年か三年くらいだが、かなりお世話になった人なのだ。それでもお参りに行ったのは、じいさんが死んでから一回だけだ。こういう機会がなければ、なかなか行くことはできなかっただろう。

線香に火をつけると、あの独特の乾燥した匂いが漂ってきて、どこか子どもの頃を思い起こさせる。

その後は二人してしゃがみこみ、手を合わせて合唱する。

他愛もないことをじいさんへと語りかけて、顔を上げると切花と目が合う。

「それにしても、お爺ちゃんもちよつと早いすよね。もう少し長生きしても罰は当たらなかったのに」

「それでも可愛い孫みたいなのが二人も増えたんだ。幸せだったんじゃないか?」

「……可愛い?」

切花は首を傾げながら、不思議そうに俺を見てくる。

昔は可愛かったんだよ、昔はな。

「まあ、幸せだったかは分からないですけど、大きな不幸がなくて良かったすよね」

「どういふことだ？」

少し気になったので、聞き返す。

切花はこちらに向けていた顔を正面に戻してから、滔々と話し始めた。

「これは私の持論なんですけど、人は幸福を得るよりも、不幸せにならないことの方が重要なんだと思います。人はみんな幸福には定員があつて、全員がその席に座ることができないのを無意識に知っています。そしてあまり幸せを求めすぎると、夢破れて絶望してしまったり、貧しさに耐えきれず死んでしまうことも知っています。一般的に言う、アノミー的自殺ですね」

切花は一息つくくと、飾つてある花を一輪手に取る。

「だから、誰もが妥協をするんですよ。カッコいい人と結婚するのを諦めたり、ミュージシャンになるのを諦めて会社員になるのもその一環です。好きなことがなくても我慢はできますけど、痛かったり、つらかったりするのは耐えられませんから。でも、不孝つてどんなに頑張つても避けられないんですよ。悪いことなんてしていないのに、理不尽に死ぬことだつてあります。だから私はまず、こういうときには不孝にならないことを喜んであげようと思つているんです。そんな風に生きられたことが尊いことだと、伝えようと思つているんです」

切花は墓石に向かったまま話し終わると、話していることが恥ずかしくなったのか、顔を赤くしてそっぽを向く。

……何を言つたらいいのか、分からなくなつてしまった。しばらく

そのままの体勢でいると、切花が顔を覗かせてくる。

「なんか、しみりしちやってすいません」

「ま、墓の前だから、仕方ないだろ」

その後、線香が倒れないようにしっかりと突き刺したし、どちらとなく立ち上がって柄杓と手桶を返しに行く。

返し終わると、袈裟を着たおじさんとすれ違うので、とりあえず会釈だけをして通り過ぎる。

「……なあ、あの人って坊さんか？」

「何言っているんですか？　ここの住職さんですよ」

「髪を剃ってないんだな……」

寺院の坊さんなんて、誰も彼も髪がないものだと思っていたから、何か違和感が襲ってくる。宗派によつて違うのだろうか。

寺門をくぐって、時計を確認すると、時間は午後二時に迫ろうとしていた。

お互い特に何も言わずに、帰り道へと足を進める。

やはり午後の日差しは思ったよりも大分強烈で、五月とは思えない程の熱気が立ちこめてくる。もう少し薄着にしても良かったのかもしれない。

「そうだ、あの花束って何円したんだ？」

「あつ、別にいいですよ。今回は私が付き合わせちゃったわけですし」
「流石に、そういうわけにはいかないだろう」

というか、もし切花に金を出させたままというが、小町に知られたら本気で怒られる。それに俺も常識を知らないわけではない。

「じゃあ、今度お参りに行くときには声をかけるんで、そしたら八幡さんが花束を買って下さい」

切花は渋々といった様子で、そう提案してくる。

今ここで金を払うのと大して変わらない気もするが、それが良いというなら仕方がないだろう。

「……そのときには小町も誘えよ」

「そうですね。三人で行きましょう」

そう言っつて切花は、いつものように俺の前を歩き出す。

……じいさんの墓参りをしたせいか、子どもの頃のことを思い出
す。

じいさんが死んだと切花から聞かされたあの日、俺は初めて切花が泣いているところを見た。

全然悲しそうな顔をしないで、どこかから零れ落ちてしまったかのように、一滴だけ涙を流した切花は、俺に指摘されて初めて自分が泣いていることに気付いた。

そして俺はあれ以来、切花が泣いているところを一度も見たことがない。

その7 く比企谷八幡は暇を持て余すく

世界がゆらゆらと揺れている。

半透明の薄い膜を通したように視界は不明瞭で、見ているものを上
手く認識できない。それどころか、名前を思い出すことすらもできな
い。

どこかへ叩きつけられて、意識がごちゃまぜになっているようだ。

曖昧な世界で自分を保っているが、それを掴みとることができず、
自己が定義できない。

だが不思議と心地よい。

さっきまで自分がどこにいたのか全く思い出せなくせに、まるで
危機感が沸いてこない。それどころか、ここにずっと居たいとすら
思ってしまう。

まるで崩れ落ちるお伽噺の世界にいるようだ。

矛盾点に気付くことができない、疑問点が思い浮かばない、違和感
が消失してしまっている。壊れかけの人形のように、消え去るまで自
壊を知らずに踊り続けるだろう。

……ああ、そうだ。こういう現象のことを、夢の中にあると言った
な。

いきなり意識が降り戻されて、飛び起きる。

急に意識が戻った拍子で体が跳ねて、机を揺らしてしまった。耳障りな金属音が部室内に響き、雪ノ下と由比ヶ浜がこちらに驚きの目を向けてきた。

「あ、ヒツキー起きた？」

「全く部活中に寝るなんて、とうとう頭まで働かなくなったのかしら？」

……寝起きに冷水を浴びせられた気分になった。

一度頭を振って、意識をはつきりさせる。ぼやけていた視界が鮮明になり、思考もクリアになる。そうして再び顔を上げると、雪ノ下たちがいっものように過ごしていた。

「働いてないのはお前ら同じだろ。戸塚以降、誰も相談に来てないだろが」

ただ、いつものように過ごしているということは、客が全く来てないことでもある。そのことを証明するように、雪ノ下も由比ヶ浜も紅茶を啜りながら、各々に時間を潰している。

「依頼がないということは、平和の証拠よ。むしろ喜びなさい」

「いや、そんな一人暮らしの娘を心配様子で言われても……」

便りがないのは、元気の証拠というが、娘にやられたら間違いないと傷つくと思うぞ。

戸塚が相談に来てからは、閑古鳥が鳴く勢いで誰も来ない。そのせいか、あまりにも暇すぎて、手持ちの本を読み終えたとすぐに眠くなってしまふ。

五月の終わり、昼間はすでに暑さが支配を始めているが、夕方には四月の香りが残り、うたた寝には丁度いいくらいの気温になっている。

「でも、あれだねー。簡単な悩みでもいいから、相談に来てくれたら嬉しいよねー」

由比ヶ浜がのほほんと遠くの空を見ながら呟く。綺麗に澄み渡っている青空は平穩そのもので、なんだか時間がゆっくり流れているように感じてしまふ。

窓から侵入してくる風がカーテンを揺し、吹奏楽部が演奏しているであろう管楽器が閑散とした校舎内に響いている。確かにこの光景は平和そのものだ。

なんだか放課後に紅茶を飲んで、だらだらする部活に変わっている。奉仕部というが、むしろ俺たちが学校から奉仕されているように感じる。

「そもそも知名度が低すぎるだろ。平塚先生からの紹介だと、母数が少なすぎる」

「なら、ポスターみたいなもの作ってみようよ！　なんか可愛いやつ」

「ポスター……ね」

頭の中で宣伝ポスターを思い描いてみるが、やたらポップな書体

で、「最近困っているアナター！」やら「お悩み解決！」とか「神が許せない罪はありません」などの胡散臭い健康食品や宗教の勧誘のような謳い文句しか思い浮かばない。

……どう考えても相談しにくくとは思えない。

そもそも奉仕というのは、言葉だけならボランティアの意味合いのほうが強い。それが校外活動ではなく、生徒の手助けをするというのは、名前だけなら想像しにくいだろう。

雪ノ下と目が合うと、首を横に振られる。あの微妙そうな顔からして、俺と同じようなことを思ったらしい。

「……やめとくか。さつき雪ノ下が言った通り、相談がないことが一番だ」

それに相談が来たら、それはそれで面倒臭いのだ。ならば多少暇なくらいが一番いいのかもしれない。

「そうね。この件は一回寝かせておいて、また必要になったら、掘り出しましょう」

「そっかー、でも相談が来ないのはちよつと寂しいね」

由比ヶ浜が切なそうに言うと、会話が途切れて静寂が訪れる。

……紙コップに注がれた紅茶を一口飲む。少し砂糖を入れすぎたのか、それとも温くなってしまった甘さを余計感じるようになってしまったのか、苦つたい甘さがいつまでも口の中に残ってしまった。

それにしても本当に暇である。梅雨が近づいているからか少し

湿った風が開け放たれた窓を抜けて俺たちの髪を揺らしていた。

「ここって、奉仕部で合ってる?」

退屈を持て余して、再び船を漕ぎそうになっているところに、気だるげで、ややハスキーな声と一緒にドアを開けられた。

流れる様な黒髪をポニーテールで纏めたその女は、奉仕部内を見渡すと、気が強そうな瞳で俺を一瞥する。

……はて、プリーツから伸びる足には多少見覚えがあるが、誰だろう。

どこかで会ったかもしれないが、俺の勘違いだったらとてつもなく恥ずかしいので、知らない人間ということにする。

「そうだけでも、何か用かしら?」

俺たちを代表して雪ノ下が答える。

それにしても、本当に誰だったか。Kから始まる名前な気がするが。川崎……は、鷹のプリンスの名前だし、川端は文筆家だな。……カーメロはそもそも外人だから違う。というかカーメロは頭文字がCだった。全く俺は精神的に向上心がない、ばかなのかもしれない。

「川崎さんじゃん! どうだったの?」

最初に思いついたのが正解だったわけか……。ただ 名前が分かっただけで、どこで会ったのかは未だに思い出せない。

俺の場合、この学校の大半が会ったことはあるが、知り合いですら

ないので、顔を覚えていないのも無理はないかもしれない。いや、まじで。

「由比ヶ浜、お前知り合いか？」

「ヒツキー、川崎さん、同じクラスだよ……」

川崎に聞こえないように小声で聞くと、由比ヶ浜が呆れた声を出す。

道理でどこかで見た覚えがあるわけだ。

「あなた、クラスメイトくらい覚えておきなさい……」

「向こうだって、俺を覚えていないから問題ない」

未だに俺の名前が正しく呼ばれたことって、あまりないんだよな。教師にしたって時々、「ひ、ヒキタ……、比企谷くん、ここ読んで」とか言っている始末である。

「盛り上がっているとこ悪いんだけど、相談があるの」

驚きのあまり、思わず三人で顔を見合わせる。雪ノ下も若干驚いているところを見ると、どうやら雪ノ下は雪ノ下で暇になっていたらしい。

噂をすればなんとやらとは、このことだ。

「どんな相談かしら？」

「ああ、そ、それは、何というか……」

川崎は少し気まずそうに、目を逸らすと口ごもる・

最初の勝ち気な印象とは違い、どこか遠慮がちな言葉に違和感を覚える。どんな性格かは覚えていないが、それでもサバサバ言うような性格に思える。

「弟が人を調べて欲しいって言ってただけど……」

「……弟？」

由比ヶ浜が首を傾げて疑問符を浮かべる。

「それで、その弟さんはどこかしら？」

雪ノ下が言外になぜ弟本人が出てこないかを聞いてくる。確かに本人が出てこないのは、不作法である。

少し体を乗り出して川崎の後方を覗いてみるが、もちろん誰もいない。

なるほど、だから微妙によそよそしいのか。自分の用件ならともかく、弟の代理なら居心地が悪いわけである。

「中学生だから、今はここにはいない。一応会おうと思えば、すぐに会えると思うけど」

携帯電話を取り出して、こちらに見せてくる川崎。三十年くらい前ならやたら丈の長いスカートを履いているような外見とは裏腹に、姉弟仲は良いらしい。

ただ、なんだか嫌な予感というか、依頼主が中学生の時点で、この件の黒幕が見えた気がする。あの小娘二人のせせら笑いが、遠くの空から聞こえてきそうだな。

「では、連絡をとってもらってもいいかしら？ 直接会ってみなければ、私たちが何をすればいいか分からないわ」

「そう。じゃあ電話してみる」

川崎は二回ボタンを押すと、携帯電話を耳に当てて、電話をし始める。

あの操作回数の少なさからして、弟の番号を短縮に入れているか、履歴が一番上にあるのだろう。

……こいつ、ブラコンだな。俺も似たようなことをしたことがあるから良く分かる。

「おい雪ノ下、この依頼受けるつもりか？」

「分からないわ。そこは会ってみて判断するしかないわね」

顎に手を当てて考える雪ノ下の姿を見て、少し安心する。サンプルが少なすぎて判断に困っていたが、どうやら何でもかんでも引き受けるわけではないらしい。

「うん、じゃあ、あそこのサイズで」

電話口から漏れる声を拾う限り、川崎の弟と対面することはできないらしい。川崎はそのあと一言二言話すと、気を付けてくるようにとの注意を付け足して電話を切った。案外、お姉ちゃんとやらをしている

らしい。

体を翻した川崎は、ちらちらと俺の方を見ながら口を開く。

「じゃあ、着いきてもらってもいい？」

「そう、じゃあ行きましょうか？」

雪ノ下は、ティーカップに残った紅茶を飲み干して立ち上がって、俺と由比ヶ浜を誘ってくる。

俺も由比ヶ浜もそれに倣って急いで紅茶を飲み干すと、カップを片づけ、帰り支度を始める。

……できれば行きたくないんだが、ここで断ったところで、あとであいつらに小言を言われるのがオチだ。ならば最初から関わったほうが気分も楽になるし、依頼を断るときも理由をつけやすい。

「あとさ、比企谷だっけ？ あんたの妹たちも一緒にいるっぽいんだけど」

「……………」

この瞬間、俺が川崎の弟と面会することが決定した。

その8 く川崎大志の出会い

「あ、お兄ちゃん、こっち、こっちー！」

サイゼリアに到着すると、鈴が鳴るような声が奥の方から聞こえてくる。

夕陽に照らされている店内を見渡してみると、授業終わりの大学生や、どう考えても仕事をサボっていると思われるサラリーマンが大部分を占めているものの、混雑はしていない。

近寄ってきた定員に川崎の名前を伝えると、得心が行ったような顔をして、店内最奥のテーブル席へと案内される。

俺たちに気付いた小町がこちらに手を振り、切花が頭を下げた軽く会釈しているが、件の川崎の弟はこちらに背を向けた形で座っていた。

「おう、待たせて悪かったな」

小町たちへ向けて返事をする、川崎の弟が振り返って立ち上がる。

中学生らしい短めの髪型に、川崎と似たような少し強気なつり目が印象的だが、それでも全体に優しい雰囲気を感じた、なかなかの好青年である。この調子なら、肅正をせずにかもしれない。

「あ、お兄さんたちっすか？ 呼び立てて申し訳ないっす」

「誰がお兄さんだ、絞め殺すぞ」

思わず反射的に答えてしまう。だが俺は悪くない。

「ちよつと！　うちの弟に何言ってるの？」

「お、おう。悪い……」

訂正、俺が悪かった。

視線を感じて思わず左右を見渡すと、川崎姉弟以外の視線が頬に突き刺さって痛い。……いや、雪ノ下がひとり、口元で手を隠しながらくすりと笑っている。

あんな某ランチチャーさんみたいな視線で殺せそうな目をされたら、謝るしかないだろ。

「ほら、大志もしっかり自己紹介する」

「あー、そうだった。川崎大志つす、比企谷と切花のクラスメイトです」

……すげえ、川崎がちゃんとお姉ちゃんをやっている。あと小町はちゃんと正しい発音で言われているのな……。

空いている席に適当に座り、四人分のドリンクバーを注文して、それぞれ好きな飲み物を取りに行き、一息つく。

「さて、それでは川崎くんのお話を聞かせてもらいましょうか？」

雪ノ下は髪をかき上げると、話を切り出した。

大志はストローを口から話すと、緊張した面もちで背筋を伸ばし、「そうつす」と分からない返事をする。

なんとなく隣に座る切花の顔を覗いてみるが、興味がなさそうにコップの表面にできた滴を眺めていた。この調子からして、小町と切花は事前に内容を知っているのだろうか。

「比企谷と切花は知ってると思うけど、総武高校の人を知りたいんですよ」

「そのことは、あなたのお姉さんから聞いているわ。私たちが知りたいたいのはその詳細よ」

「あ、そうっすね」

それから大志が話した内容をまとめると、要するにこういうことらしい。

先日部活を終えた大志は、いつもの通学路ではなく、回り道をして帰ったらしい。その理由を聞いてみると「ま、まあ、本屋に行つてたんすよ」と口を濁して答えたため、おそらくそういう用事なのだろう。

そして何事もなく買い物済ませた大志は、既に日が落ちてところどころ照明が切れかけている街灯に照らされている道を帰っていたが、そこで財布を落としたことに気付いたそうだ。

急いで来た道を引き返したが、既に夜の帳が降り注いでいる歩道は、街灯の光だけでは足下を見るのに不十分で、ゆっくりと時間をかけて本屋までの道のりを歩いたらしい。

本屋も近くなり、いよいよ大志が諦め掛けた頃、道端でぽつんと立っているショートカットの女子高生を大志は見つけた。総武高校の制服を着たその女の手には、大志の財布が握られていて、すぐに大

志は女に声を掛けたいらしい。

女は驚いたように大志へ向き合おうと、

『良かった、ここに落ちてたから、戻ってくるかもしれないと思って待ってたの』

と安堵の息をつき、大志へ財布を手渡したそうだ。

そのまま大志に背を向けた女は、見返り美人のように振り返り、『今度は無くさないようにね』と言って、大志の帰路とは別の方向へ去ってしまっただけらしい。

……まあ、つまり

「つまり、あなたはその女性に一目惚れをしてしまった、ということね」

雪ノ下が俺の思ったことを代弁してくれる。

「い、いや、そんなことないっすよ。ただ、ちゃんとお礼が言いたいというか……」

「なら高校名が分かっているのだから、正門で待ち伏せでもして、お礼を言えばいいでしょう?」

雪ノ下と大志がやり合っているのを横目に見ながら考える。

なんというか、よく出来た話というか、この後何かオチがないか探してしまう。例えばその女が実は男だったとか。

何より財布が落ちていたからって、その場に留まっている女子がこの世にいるのだろうか？

「なあ、切花。お前この話を聞いてどう思った？」

『『はい』か『いいえ』だと『いいえ』なんですけど、『YES』か『NO』だと『YES』みたいなだなーと』

少しぼうつとした様子で切花は答える。

「……その心は？」

「本命で相手の気まぐれ、対抗は新手の美人局、大穴で怪談といった所です」

「奇遇だな、俺も美人局に三千点くらいだ」

つまりお互い、大志側に全く芽がないと思っっているわけだ。

ああ、だからこいつは退屈そうにしているのか。

由比ヶ浜があたふたし、川崎が機嫌を悪そうに、小町が楽しげに大志の言い訳を聞いていたが、とうとう大志が根を上げたのか、がつくりとうなだれる。

「そうっす……、できれば名前と、彼氏がいるかどうか知りたいっす。あと好きなタイプとか」

「そう、最初からそう言えばいいのよ」

雪ノ下が口元に笑みをたたえ、上品に紅茶に口をつける。

……こいつ、途中から楽しんでたな。まあ、ここまで来て言葉を濁している大志も悪くはあるんだが。

「探すとしても、どうやろつか？ 学年とかは分からないの？」

「大人っぽかったっす。あとは、身長は姉ちゃんくらいで、少し明るめの茶髪でした。あと美人です」

「それでは、何も分からないと同じね」

雪ノ下の言う通りだ。美人の基準も人によって違うし、目が眩むような金髪とか、燃えるような赤色なら見つけやすいが、茶髪でショートカットだと、該当する人数が割と多い。

それにその女を見つけたところで、どうアプローチをすればいいのかも分からない。あなたのことを好きになった中学生がいるのですが、彼氏がいるか教えてくれなんて言えるわけがないだろう。

「とりあえず、川崎くんには私たちの学校の校門の前で、その人を特定してもらおうわ。問題はその後ね」

問題というのは、先ほど俺が考えたことと同じだろう。初対面の間があけすけに恋人の有無や好みのタイプを聞くのはどこかおかしい。俺と雪ノ下はそもそも交友関係が皆無だし、由比ヶ浜にしたって別の学年にまで知り合いがいるわけではない。

顎に手を当て、悩ましげな表情をしていた雪ノ下は、大志を上から下までじろじろと見ると、一人で頷く。

「あと、何個か私の質問に答えてくれないかしら。川崎くんのことを知らなければ、私たちもどう攻めていくか決められないから まあ、

価値観チエックみたいなものよ」

「ういつ、何でも聞いてくださいー！」

大志は緊張した面もちで佇まいを直して、手を握って膝の上に置く。そりや、雪ノ下に見られたら緊張もする。

そうして簡単な問答が始まる。雪ノ下は趣味から始まり、休日の過ごし方、長所や短所、家族構成、葬儀に出席するのは何等親かまで細かく聞いていく。

「あつ、私もいいですか？」

「かまわないわ、どうぞお好きに」

切花の頼みに、雪ノ下は気軽に応じた。もちろん大志には確認をとらずに。……その切花への配慮を、もう少し周りに分けてやれよ。例えば俺とか。

「宝くじで一億円当たったらどうするの？」

「おい、それって必要か？」

どう考えても、適当に思いついたやつだろ、それ。

にしても宝くじを買いに行く姿の父親の背中とは、何度見ても心に来るものがある。もし当たったとしても、その大半がローンの返済に当てられるところが特に悲しい。

確かに俺たちは夢を買っているはずなのに、叶った後に出てくるのは過酷な現実である。

「いや、お金の使い方って、割と人の性格が出るじゃないですか？」

思わず納得してしまったので、そのまま黙ることにする。

百万円の束が百個あることを想像している傍らで、大志は割と真剣に考えた末に答えを出した。

「とりあえず、家買います、家。あと外車も欲しいっす」

なかなか夢に溢れている。さすがドリームの名を冠しているだけある。

切花は天井を見ながら考えた後、笑顔で俺に手のひらを向けてくる。

「参考程度に八幡さんどうぞ」

「まず俺に百万、小町に百万分けるだろ。その後は誰にも言わずに貯金をしたままにして、主夫業の傍らで贅沢をする」

「相変わらず、あなたはブレないわね」

親父には悪いが、家のローンは親父に働いて返してもらおう。大丈夫、あと二十年くらい働くだけだから！

その後も何個か質問が続いたが、ほとんどがお家に関する話題だった。いや、大事といえば大事なんだが、いくら何でも危惧する段階を飛ばしすぎだろう。

詰まりながらも全てを答えきった大志は、疲れ切った様子で机に

突つ伏すと、そのままぐったりとしたまま起き上がらない。

「もう無理っす。細かい宗派まで覚えているわけないっすよ……」

「どうやら身边におかしなところはないようね。誰かと違って性格に問題があるわけでもないし、あとは相手次第かしら？」

「あの、私が言うのも何ですけど、最後の辺りって必要ですか？」

流石に切花も疑問に思ったのか口を挟む。

「あら、親族問題というのは重要よ。本人たちだけでは対処がしにくいし、縁を切ろうと思っても金銭が絡むから難しいわ」

確かにそうだ。家族というのは最小にして最初の社会単位であるから、それ以上は割り切れない。だから、遺産の相続には家族が最も優先される。たとえ互いに無関心でも、社会が縁を作ってしまう。

どんなことがあっても、否が応でも、楔を打ち込まれる。それが家族である。

切花が「そうですね。嫁姑問題にしても、赤の他人を勝手に家族として結び付けるからこそ問題ですもんね」と納得するように返事をすると、雪ノ下が出来の良い生徒を持った教師のように、満足げな顔をする。

こういう切花の頭の良さを、雪ノ下は結構気に入っていたりする。波長が合うというか、由比ヶ浜とは違った意味で、話をしていた楽しいタイプらしい。

「さつきも言ったけれども、とりあえず明日の放課後に総武高まで来

てもらってもいいかしら?」

「はいっ、よろしくお願いします」

最後まで川崎は姉として口を挟まなかったが、終始不満そうな顔をしたまま、話はまとまる。まあ、同級生とかならともかく、知らない高校生に一目ぼれしたと言われても、応援しにくいだろう。

明後日の方向からの依頼というだけ、なんだか面倒くさい。その上、知らない人間と話すかもしれないことを考えると、さらに憂鬱になってくる。

「……そうだ。おい、小町たちも手伝えよ。お前たちが巻き込んだだろ」

「いいよ、いいよー。そこまで忙しくないし」

「まあ、それを言われると痛いので……」

小町たちの協力を取り付けたところで、この会合がお開きとなる。

「総武高って、女子のレベル高いんすか? 姉ちゃんはともかく、二人ともスゴいつすね」

共通の分かれ道へ向かう途中、女性陣が姦しく話しているのを後方で眺めていると、大志から小声で話しかけられる。

「小町と切花と同じクラスの時点で、人のこと言えないだろ……」

雪ノ下と由比ヶ浜は、部活が一緒でもクラスは違う。そう考えれば、小町と切花と同じクラスの方が貴重である。

「それにあの人だっていますし、俺絶対、総武高入ります」

なにやらやる気を漲らせている大志から視線を外して、雪ノ下たちの横顔を覗き見る。

……まあ、割と女子のレベルは高いな。

その9 く比企谷八幡は徘徊するく

静謐な校舎内に、昼休みを告げるチャイムが祝砲のように流れる。板書をしていた金田が意外そうに時計を見上げ、何人かがすでに筆記用具を片づけ始めているのが目に入る。そして金田が「今日はここまで」と言うと、戸部が元気良く号令を掛け、俺たちにも昼休みがやってくる。

さつきまでの静寂が嘘のように、騒ぎ声が目をつんざく。

高校生というものは基本的にうるさい。大学生のように、「ウエイ」などという原始人みたいな言葉のやりとりはないものの、とにかく声が大きく、そして話題が絶え間なく降り注ぎ、いつまでも反響している。

女が三人集まれば姦しいとは良く言うものの、それは男が三人集まっても同じだ。むしろ高校生位の年代であれば男の方が大きい。それが一つの部屋に男女合わせて四十人もいるのだから、それはやかましくもなるだろう。

ただ、こんな馬鹿みたいなやりとりであっても、当人たちにとっては重要なコミュニケーションツールである。それぞれのグループがやたら大きな声で話している姿は、どこか縄張り争いしている鳥類が思い浮かぶ。実際にグループ同士でしつかりと距離が取られているのが面白い。そして何よりカーストが高いほど、声の大きさは大きくなる傾向になっている。どうやら人間はまだ、動物の本能からは解放されていないらしい

そつと教室から脱出し、いつもの昼食スペースへと向かって、弁当を広げる。

普段なら冷凍食品の進化に感動しながら、のんびりと暖かなランチを楽しむところだが、今日は技術の進歩を堪能することなく、すぐに胃の中へ流し込む。いつもより早めに昼食の時間を終わらせると、再び校内に戻って校舎を散策することにする。

どうせ何もすることがなく、適当に時間を潰すのだ。だったら候補に辺りをつけておいた方が良い。

ただまあ何というか、大志の話聞く限り、やはり男は単純である。しかし創作でも定番であるが、運命的な出会いと感じているものほど相手は何も思っていないことが多い。

校舎に戻ると、先程までの日差しがなくなり、仄かに暗い。窓が多い割には、案外日の光が入らない作りをしている建物は意外と多い。

まだ制服に着られているような一年生たちの階を歩き回るが、それらしい人物は見当たらない。

亜麻色の髪をした一年生が少し近かったが、そいつは髪型がセミロングだったので違うだろう。というか、あのキャピキャピ感はわざとやっているだろ。どう考えてもあざとい。

どうせ戻るので、最後に二年生を見て回ろうと思い、昇降口から一番近い階段を登り始める。

我が校では学年ごとに使う階層が上がっていくシステムだが、どうやらこれは学校ごとに違うらしい。三年生が一階で、二年生が二階、一年生が三階といった形で、学年が上がるごとに昇降口が近くなるシステムもあるらしい。

立体的な上下に上座・下座がどう適用されるかは知らないが、それ

でも三年生になって朝に階段を昇らなくて済むのは素直に羨ましい。慣れるほどに時間にルーズになるのは、どこに行っても適用されるルールだ。俺もあと一年経てば、今以上にぎりぎりの時間で登校することになるだろう。

三年生の階はゆったりとした空気に満ち、半分ほど空けられた窓から、五月の暖かな光が射し込んでいる。それだけで俺たち二年生とは違う、独特の雰囲気は漂っていて、一年という時間の重さをこちらに訴えてくる。

怪訝な顔を向けられながら廊下を歩き、教室を通り過ぎると同時に中の人間の顔を盗み見る。ショートカットを目印にして探してみるが、美人と言える人間はいない。

「君、誰か捜しているの？」

声が出た方向へ振り返ると、見事にショートカットの美人が姿勢よく立っていた。

シックなブラウンに染められた髪と、起伏が少ない体つき。どこか落ち着いた雰囲気醸し出しながらも、制服を着崩しているせいか、親しみを感じさせる。この階にいるということは、三年生なのだろうか。

その表情には人懐っこい笑みが浮かべられていて、特にこちらを疑っている様子は見られない。というかなぜ俺に声を掛けたのだろうか。

「ち、血の繋がっていない、生き別れの姉を捜していました……」

「あなたと良く似た外見の人を捜しています」とも言うわけにもい

かず、適当なことを口走ってしまおう。

……嘘が下手だな、俺。

美人の先輩は不思議そうに教室内を見渡し、人差し指で差しながら、もう一度俺の顔を見てくる。細長く綺麗な人差し指が、可愛らしく上下しているのがとても気になる。

「生き別れたんだ」

「そうなんですよ、小さい頃はよく遊んでいたんですけど、向こうが引越してしまつて。大きくなったら結婚しようって、約束していたんですけどね」

「そうなんだ。じゃあ、その子の名前教えてよ、名前。私知り合い多いから、聞けば紹介できるよ」

「……名前ですか？」

「そう、名前。結婚の約束をしたなら覚えているでしょ？」

名前なんて知らねえよ。

適当に名前を考えているうちに、先輩の人差し指が、だんだんと円を描く動きに変わってくるとともに、俺の目の前まで持ち上げられる。思わずくるくると回る指を追って、視線が泳いでしまう。

そのままの体勢でしばらくいたが、俺たちの間に堆積する沈黙とつけをされている犬みたいな気分に耐えられなくなり、顔を逸らしてしまう。

「……すいません、嘘です。特に意味もなく、のぞき込んでいました」

「うん。まあ、知ってたけど」

花の咲くような晴れやかな笑顔でそう言って、先輩は指を引っ込めると、今度は自分の顔の側で指を回し始める。この人、人差し指を遊ばせるのが癖なのだろうか。

もう一度先輩を見てみると、やっぱり大志の言った特徴に符合している。暗めの茶髪に、こちらをあまり緊張させない気さくな話し方、こんな人が二人もいたら、この学校の女子のレベルの高さを、改めなければならぬ。

「うん、まあ詳しい理由は聞かなくていいや。それはまたの機会に聞けばいいしね」

先輩はそう言うと、ひよいと一步距離を詰めると、自分で指を指す。

「私は井杖恵いづえめぐみです。あなたは？」

「ひ、比企谷八幡です」

「よろしくね、ヒキガヤくん」

すべすべした綺麗な手を差し伸べてくるが、その手を取らず、そのまま見つめてしまう。

頭の中の天使が、もの凄い勢いで警鐘を鳴らしている。いやいや、絶対おかしいだろ。こんなことで一々、名前を聞いていたらどこかでストーリーカーに遭うだろ。

少し意外そう俺の手を見た井杖先輩は、ゆっくりと伸ばしていた手を引き戻す。そうして何故か納得をした表情で頷くと、改めてこちらの目を見てくる。

「あの、どうして俺に声を掛けたんですか？」

とりあえず一礼だけしてとっと立ち去ろうと思ったが、少し気になったので聞いてみる。

「ん、変わった……、間違えた。腐った目をしていた子がこそそと教室を覗いていたから、とりあえず声を掛けてみただけ」

さりげなく酷いことを言われる。

当の言った本人は、涼しい顔で人差し指をひよこひよこ動かしていた。どうやら辛辣なことを言っているわけではないらしい。

「まあ、何かあったらよろしくね」

こちらが立ち去る前に、井杖先輩は手を振って二つ先の教室へと悠然と入っていく。

……ここ、あんたのクラスじゃねえのかよ。

何だか狐につままれたというか、通り雨にでも遭った気分だ。大した被害はないが、何か心に付きまとう意味で。

このまま残りの教室も見回ろうかと思ったが、もう一度井杖先輩に会うのも嫌なので、来た道を引き返す。一応は目的を果たしたわけなのだから、これ以上働いても仕方がない。

校舎が古いためか、段差が高い階段を降りて二階に足を着けると、そのまま図書室へ向かう。何か読むわけではないが、時間を潰すのに図書室は丁度いい。

古くなり微妙に立て付けの悪い引き戸を開け、図書室へ入ると、共同の机で静かに読書をしている雪ノ下が目に入る。

校内の喧噪が嘘みたいに静まりかえった図書室の中で本を読んでいる雪ノ下の姿は美しく、近寄りたがい雰囲気纏っている。そのせいか大きめの長机には空きがあるのにも関わらず、雪ノ下に近づくものはいない。

こいつ、昼休みはこうして時間を潰しているのか。やっぱりこいつ友達いねえなあ。

どこに座るか少し迷ったが、丁度報告したいことも会ったので、雪ノ下から見て対角線上にある椅子に腰掛ける。計らずというか、やはり俺と雪ノ下はこの位置関係が一番落ち着く。

「何か用かしら？」

雪ノ下が顔を上げると、済ました声で聞いてくる。

「ここに来たらお前がいたからな、昨日の件でちょうど話したいことができたんだ」

「川崎くんの片想いの話？」

「片想いというか、一目惚れだな」

「どちらも大して変わらないじゃない」

雪ノ下は読みかけの本に花柄の葉を差し込むと、こちらに視線を寄越して続きを促してくる。

閉じられた本の表紙を目で追うと、『ガリヴァー旅行記』と記されている。……ふむ、イギリス文学の中でもなかなかの名作である。

著名な話であるが、絵本での『ガリヴァー』では小人の国、さらには巨人の国までを描いてあることが多い。ただ、スウィフトの原作では、先の二つに加えて、天空の国とその諸国、そして高い知性を持った馬が支配する国へと訪れる。

この作品は風刺小説として当時のイギリスへの批判が多く含まれているが、現在読んでも十分に読み物として面白い。なんと行って、ラピュタの元ネタが存在するわけだし。

雪ノ下の目がだんだんと険しくなってきたことに気付き、余分な思考を停止させる。思わずシータが降ってくるまで再生してしまった。

「ついさっきだが、大志が惚れたとおぼしき人物に遭遇した」

「そう、どんな感じの人だったの？」

「多分計算でやってるだろうが、基本的に人当たりはいいな。初対面で俺に声を掛けてるなんて、普通はありえないだろ」

初対面もしくは、話したことがない女子から優しくされたことは小・中で計五回ある。その全てが罰ゲームまたはドッキリという結末だったが。つまり統計学上、純粋な好意で最初から話しかけてくる女子は存在しないことになる。

「どうして比企谷くんが言うと、こんなにも説得力があるのかしら？」

雪ノ下は呆れたように息を吐くと、頭に手を当てて悩ましげな表情を作る。

「実体験なんだよ……。まあだから、やっぱり相手は何も思っていないことの方がかもしれないな」

一番可能性が高いのが、井杖先輩に恋人がいることだ。そうなってしまえば、よほど大志が惚れていない限りは、泡沫の恋としてすぐに消えてしまうのだろう。

まあ、失恋をしたにしても、それはそれで大志は世の中の世知辛さを学び、大人への階段を一つ、上ることになるかもしれないが。それでも多少は同情を禁じ得ない。

「そこは今考えるべきではないし、考えても仕方がないものよ。どちらにせよ、動いてから対策を練るしかないわね」

「なんか、行き当たりばったりだな」

「臨機応変と言いなさい」

少しの沈黙の後、昼休みの終了を告げるチャイムが流れ、図書室内も慌ただしく動き始める。

「お先に失礼するわ。また放課後に会いましょう」

雪ノ下も席を立ったが、何かを思い出したように静止し、不思議そうにこちらを見る。

「確か、由比ヶ浜さんが五限は体育だと言っていたのだけれど、比企谷くんは大丈夫なのかしら？」

「……あつ」

五限開始まで、残り約五分。その間に俺は、教室へ戻り、体操服に着替え、運動場まで降りなければならない。軽く見積もって七分くらいはかかるだろう。そして近くの窓から校庭を覗き込むと、談笑しながらそろそろと出てくる葉山たちが目に入る。

……無理だな、これは。

その10 く井杖恵は愛想を振りまくく

「あっ、お兄さん！ こっちはです」

放課後、時間を持て余した帰宅部に紛れて、正門の前に切花と大志がぼうつと立っていた。

切花たちの側に寄り、辺りを見渡してみるが、こいつら以外には中学生は誰もいない。

「小町はどうした？ あいつも来るって、朝に言っていたぞ」

「小町ちゃんは、数学の補習に捕まりました。今日は難しそうです」

兄として少し心配になってくる情報だった。あいつ、高校受験は総武高校を受けると言っていたが、果たして受かるのだろうか。

ただ、俺も中学の時に数学で補習を受けたことを思うと、遺伝子とというのは相当強いらしい。

黒ずんだ大谷石で積まれた塀に背中を預けながら、川の流れのように増えていく人波に視線を泳がせる。「なかなか来ない」と大志が残念そうに呟いていると、流れるような黒髪とお団子頭が目に入った。

「出てくの早いよー、ヒツキー」

「お前らが遅いんだよ。いつも話している癖に、なんで放課後まで残って話しているんだよ……」

帰宅部の女子のグループの場合、なぜか放課後に教室に居残ってお喋りに興じている場合が多い。普段ならそこまで害はないのだが、教

室掃除の際にまで居座るのがやつかいだ。あいつら、俺が机を運ぼうとするともうの凄く嫌な顔をしやがる。しかも別のクラスの奴が。

これで一応は全員が揃ったことになる。川崎（姉）はこの見回りに参加はしないと休み時間の間に聞いている。まあ、弟の恋愛相談の手伝いなんて、ブラコンの姉ならば受けたくはないだろう。

「……よし、五人で固まっても怪しまれるだけだし、男と女で分かるか」

「それだと、私が来た意味が全くなくなるんですけど……」

切花がぽつりと呟く。

「遠目でそれらしき人が来たら、すぐに合流すればいいだろう」

実は言うと、先ほどから通行人の視線が少し気になるのだ。切花も大志も中学校の制服姿のままなので、この空間では非常に浮く。

その二人が俺たちと一緒に居て、傍目から見ると特に何もしないで喋っているのだから、多少は怪しまれるだろう。

「それでいいですよ」

主催者というかクライアントの意向により、二手に分かれることが可決される。判別できるのが大志しかいないため、俺たち男陣営が校門から少し離れて全体を見渡せる位置へ、切花たちが校門の直ぐ側でいることに落ち着く。

近くに植えられた防風木を背にし、帰り道を歩く奴らの顔を一人一人確認するついでに、さりげなく聞いてみる。

「まあ、何だ。小町は学校じゃどうだ？」

切花にはたまに聞いてはいるものの、基本的に小町と近いので、少し離れた視点が欲しかったのだ。

「比企谷っすか？ 普通に人気あるっすよ。優しいし、可愛いんで、中心っすよ中心」

思わず安堵してしまう。小町の性格上、上手くやるとは思っていたが、それでも地雷を踏む可能性はいつでもから、少し不安だったのだ。

「……切花はどうだ」

「切花も普通に人気ありますよ。ただ、綺麗で大人っぽいんで、時々たじろぎます」

……普通か、まあ、良いだろう。

雪ノ下と由比ヶ浜と会話している切花を見る。軽く肩に掛かるささらさらとした黒髪と、高い腰の位置といい、中学の制服さえ着ていなければ、雪ノ下たちと同一年くらいに見えるだろう。

俺にしたって気を抜くと年下には見えなくなるのだから、大志たちからすれば、だいぶ大人びて見えるのだろう。

「だったら、お前の姉ちゃんの方が怖いだろ。川崎に比べたら切花なんて大したことないぞ」

「いやいや、姉ちゃんなんて、ぶっきらぼうなだけっすよ」

「……そんなもんか」

「そうっすね……」

結局の所、自分に近い人間ほど評価が低くなる傾向があるのだろう。俺にしたところで、小町の良い所と同じくらいに悪い所も知っているのだ。合計すれば評価が低くなっても仕方がない。

特に話す話題もなくなってしまったので、下校中の生徒の会話をBGMにしなから、再び人波を観察する。

かれこれ十分くらいは軽く眺めていたが、大志は何も言っていない。

時折男子生徒が通り過ぎる際、切花たちに気づき、チラチラと盗みみているのが目に入る。

総武高校の制服が群青色を基調にしたブレザーに対して、切花は白に深緑色を合わせたセーラー服だ。大志はまだ学ランだから、俺たちに紛れてそこまで目立たないが、どうしても切花の制服が存在を主張してくる。

でもこいつ、中学の制服があまり似合わないんだよな。切花のスタイルに中学生向けのデザインだと、どうしても噛み合わない。言い方が悪くなるが、なんだかコスプレをしているようなちぐはぐさがあったりする。

ただ、そのことを指摘すると機嫌が悪くなりそうなので、切花に直接言ったことはないが。

どちらかというと、総武高校のような落ち着いた服装の方が切花は

似合うだろう。よくよく思い出してみると、切花はシックな色の服を着ていることが多かったな。

「あつ……！ たぶん、あの人つす」

大志が遠目から指した先には、三人組で歩いている女子の集団が見える。遠くなので顔まではよく見えないが、その中の一人には、どこか見たことがある髪型と体型だった。具体的には昼休みくらいに。

「あの中央にいた、短い髪の人がそうなのね？」

「そうつす。間違いないつす」

あからさまに凝視しないように気をつけながら、五人で顔を寄せながら集団を見やる。

近づくにつれて顔がはっきりと見えるようになると、少し前に見た井杖先輩だと判別できた。やはり大志が出会ったのは、井杖先輩だったようだ。

三人組の中央で楽しげに話している先輩は、少し前にいる俺が大志に気付いたのか、愛嬌たつぷりに手を振ってくる

「今の子たち、知り合い？」

「ううん、一回会ったことがあるだけ」

「またそんなことやってるの……。……あんた、いつか刺されるよ」

そのまま別の話題へ移り、先輩たちは俺の前を通り過ぎる。一緒に

いたゆるいウエーブの掛かった女子が、興味深そうに俺たちを一瞥したが、何も言わなかった。

そのまま先輩たちの華奢な背中を呆然と眺めていたが、大志がだらしのない顔をしていたので背中を叩いて、正気に戻す。

「どうっすか？　誰か知り合いとかいないですかね？」

「比企谷くん、どうかしら？」

雪ノ下が俺に尋ねてくる。

「井杖恵。多分三年生で、後は知らん」

「八幡さん、知り合いなんですか？」

切花が意外そうな顔をして、こちらを見てくる。

「名前と顔を知ってるだけだ。それより由比ヶ浜は知らんのか？」

「見たことはあるかも。けどどちよつと分からないかなー。誰かに聞けば分かるかもしれないけど……」

まあ、井杖先輩は三年生なのだから、由比ヶ浜が知らないのも無理はない。

そうになると、まずは地道にこつこつと情報収集から始めなければならぬ。そして最終的に井杖先輩と、大志のことについて話をする必要がある。……どうもあの先輩と、直接話す気にはなれないんだよね。

マジで面倒だ。何が面倒かというと、こうなると由比ヶ浜の力に頼り切りになるのがとうによろしくない。

「恵さんっすか……。いい名前っすね」

大志がうつとりと、名前を繰り返す。ただその名前、全国にたくさんあると思うぞ。

「とりあえず、顔と名前は分かったわね。後は、本人にそれとなく確認したり、人づてに聞くしかないわね」

「そうっすね。申し訳ないっすけど、よろしくお願いします」

「……じゃあ、今日は解散？」

由比ヶ浜の言葉に、雪ノ下が首を縦に振る。本人も目の前を通り過ぎてしまったし、周

りに聞くにしても放課後だと人が少なくて聞きづらいので、仕方がないだろう。

ただ、本当に切花が空振りに終わってしまったな。付き合えと言ったのが自分なだけに若干申し訳ない気持ちになる。

大志は川崎と帰ると言って、メールを打ち始めたので切花たちの方へと向き合う。

雪ノ下と由比ヶ浜は帰りに買い物でも寄っていくと行って、俺たちに挨拶だけをして、先に帰ってしまう。

「……切花は行かないのか？」

「さつき小町ちゃんから出所したとメールが来たので、保護観察でもしようかと思つて」

何でそんな縁起の悪い例え方をするんだよ。

すぐに川崎が大吉のところまでやつてきて、雪ノ下たちと同じく挨拶をして帰ると、俺たち二人が残される。

下校の波が一段落したのか、付近には人影がほとんどない。さきほどまでこの辺りを支配していた喧騒は、遠くに聞こえる運動部の掛け声によつて流しだされている。これ以上居ても、もう何もすることがないだろう。

「……帰るか」

「はい、帰りましょう」

新緑が色づく街路樹の通りを足早に歩く。時刻は既に午後五時を回っているが、空は水に朱色を溶かしたような、夕焼けとも青空とも言えない様子だった。

切花は小町に比べると歩くのが早い。というよりも歩幅が俺と近いせいか、俺と歩くスピードが同じくらいなのである。

小さい頃から小町と歩く時には、歩くスピードを合わせるように躡をされてきたが、その点では非常に楽である。

「川崎くんとお姉さん、仲が良いですね」

俺たちが小学校の頃からある古びた駄菓子屋を通り過ぎた辺りで、切花が遠くを優しく見ながら話しかけてくる。

「川崎の方もブラコンだが、大志の方も割とだよな」

「川崎くんも学校じゃあ、結構しっかりしているんですけどね。だからちよつと面白くて、ほっこりしました」

手を後ろに組みながら軽快に歩いている切花の顔は、その言葉の通り柔らかい表情だった。

ただ切花にしたところで、そのしっかりしている大志には大人びていると言われていたのだから、大して変わらないだろう。

「まあ、姉弟の仲が良いにこしたことはないだろ。もし小町に反抗期が来たら本気で泣くぞ」

実際に、親父に対しては反抗期は来ていないが、倦怠期はすでに来ているからな。

「二人は十分に仲が良いので、大丈夫ですよ」

「そうか」

「それに私は、小町ちゃんと八幡さんが仲良くしているのを見るのは、凄く好きですよ」

「……………」

「あ、照れてます？　顔が赤いですよ」

太陽が地平線に沈みゆく中、切花は悪戯な表情を浮かべて笑っていた。

夕陽のせいにするのでしやくなので、そのまま黙り込むと、切花も何も言わずに隣を歩いてくる。時折その表情を覗き込んでみると、何が楽しいのか機嫌が良さそうだった。

世界が紅緋色に染まりきるまで切花の表情が変わることはなく、俺は気恥ずかしい思いをしながら帰り道を後にした。

その11　く井杖恵の名前は轟いているく

『愛の光なき人生は無価値である』

ドイツの思想家であるシラーの言葉であり、恋愛の格言としても有名な言葉だ。

愛とは人生を彩るものであり、愛なくしてはどんなに裕福な暮らしをしても無価値などという、肉体を持って余した現代の若妻が聞いたなら不倫の良い言い訳にされそうなものだ。

ただシラーが語る愛とは、男女間の恋愛のみではなく、隣人愛も指している。断じて「命短し、恋せよ乙女」のような意味合いはない。なぜシラーがこんなことを言ったのかは分からないが、基本的に西洋の詩人は、兄弟とかそういう言葉が大好きなので仕方がない。ベートーベンの交響曲第九番、第四楽章における『歓喜の歌』でも、「魂を分かち合おうぜ、兄弟！」みたいなことを言っているし。……『時よ止まれ、汝は如何にも美しい！』はゲーテだったな。

恋愛をしないと生きていけない、みたいな自称恋多き乙女のように、恋愛を特別視する風潮は今でも根強いが、案外そうでもない。性と恋愛と結婚が分離されている現代においては、恋や愛なんてものは流行歌の一部として語られて、単なる娯楽として消費される。

そう考えてみると、シラーの言葉は今では通用されないのかもしれない。

恋愛が趣味となってしまうえば、その代替はいくらでも存在する。ときめきが欲しいのならば本を読めばいいし、疑似的な恋愛体験をしたいならギャルゲーをやればいい。性欲を満たしたいなら、それこそ風俗にでもいけばいい。恋愛なしでは生きていけないなんて、もっぱら

の嘘である。

だからこそ、無理に恋愛をする必要はないのかもしれない。

恋愛関係は人の感情を強く刺激するからこそ、軋轢を生む。二股から刃物沙汰に発展したり、「私、あの人と寝たの……」と言われてビンタされ、友人関係が破綻してしまったりと、痴情のもつれが人を不幸にする例を挙げればキリがないだろう。

……さて、そろそろ現実を直視しなければならぬ。

昼休みの部室は、沈鬱な雰囲気而降り積もり、中の人間の表情を暗くしている。

この部室の色をそのまま表したかのような空は灰色に曇っていて、その先にある青空を覆い隠した曇天模様だった。

大志の片恋相手が井杖先輩だと分かってから二日ほど、俺たちは井杖先輩についての情報を各々で集めていた。

由比ヶ浜は知り合いに評判を聞き、雪ノ下は教師の評判を聞き込み、そして俺は校内を徘徊した。

人の話は誇張されるのが当たり前なので、話半分で聞きながら集めた情報を、本日の昼休みにまとめた結果が以上である。

男子の噂によると、かわいい。俺にも優しい。一回だけならデートしてくれる。男をとつかえひつかえている。才女。愛想がいい。なんか見ていると楽しい。話をしていて面白い。なでなでされたい。貧乳。ビッチなどなど。

女子に談によると、普通。美人だけどバカ。放火屋。なんかうざい。面白い。自分に酔ってる。というか美人じゃない。グロリアス。猛禽類。藪をつつきまくる。友人としては楽しい。彼氏を寝取られた。あの子になら食べられてもいい、その他諸々。

ちなみに、学年が下なほど評価が悪い傾向が見られた。

A4用紙に出力された明朝体たちをもう一度上から下まで眺めると、ついため息を吐いてしまう。

「……なんか凄いな、井杖先輩」

由比ヶ浜も俺と同じように思ったのか、少し頬がひきつっていた。

いやまあ、初対面の俺や大志にあそこまで優しくできるなんて、相当な天然か、狙ってやっているかのどちらかだと思っていたが、それでもこんな評判だとは思ってもみなかった。

「でも、由比ヶ浜さんの中学校の先輩に聞いてみたら、意外と評判が良かったのよね」

先ほどの、「美人だけどバカ」というのは由比ヶ浜の先輩の言である。昨日の放課後に話を聞きに行ったが、その先輩はけらけらと面白そうに笑いながら、井杖先輩について話をしてくれた。ただ細かいところには触れられず、悪い奴じゃないだとか、見ていて面白い奴だとか、大まかな所しか話をしてくれなかった。

「……さて、そろそろ比企谷くんには仕事をしてもらおうかしら？」

俺がもう一度ため息を吐き、由比ヶ浜がこの雰囲気飽きて、スマ

ホに手を伸ばした頃に、雪ノ下が提案してくる。

「ん？ 仕事ならこれの打ち込みとかやってただろ」

「これ以上の現実逃避はやめなさい。比企谷くん、井杖先輩とアポを取ってちょうだい」

先日から危惧していたことが現実になる。

空気が湿っているせいか、それともこの天気を引きずられているのか、少し大人しめの校内の喧噪がより一層意識される。

既に三人とも昼食はここで済ませてある。上手く引き延ばせないだろうか。

「アポって、appointmentの略だろ。そしてappointmentはappointmentを名詞化したんだよな。そこで俺はいつも思うんだよ。mentって後ろに付け加えただけなのに存在感が強すぎねえか。形容詞化したり副詞化したりするときは地味に追加されるのに、どうしてあいつだけ本体を食いそうになるんだろうな。なあ、そう思わないか、雪ノ下、由比ヶ浜？」

「……比企谷くん？」

雪ノ下が猫を撫でるような声で、話しかけてくる。ただし目が奥が怪しく光っている。

「井杖先輩と会う約束をとりつけてね」

ちょうど背後で、待ち望んでいたはずのチャイムが鳴る。

雪ノ下は、異論を挟む雰囲気を一切与えないまま、席を立つ。

「ヒツキー？ 私から井杖先輩に話してみる？」

由比ヶ浜が心配そうに覗き込んでくる。

「いや、遠慮しておく……」

チャイムが終わるまでの間、俺は頭を抱えながら適当な口説き文句を考えつづけた。

その12 く比企谷小町は狼狽えるく

「色々聞きたいこともあるし、途中まで一緒に帰ろっか?」

井杖先輩は蠱惑的な表情で、人差し指をぴんと立てる。大変魅力的であるが、全力で遠慮をしたい提案であった。

放課後、俺はつい先日と同じように校門で手持無沙汰にしていた。昼休みには灰色一色だった空は、今では所々が黒ずんできて、今にもほろほろと泣き出しそうだ。

校門を通り過ぎる生徒たちも、ちらほらと片手に傘を持ちながら心配そうに空を見上げていた。

今日の天気予報は曇りのち晩から小雨が降るとのことだったが、この分だと夕方ぐらいから降り始めるかもしれない。

午後の二限分を睡眠と井杖先輩への口説き文句の思考に費やした結果、俺のスパコンが弾いた答えはアドリブで適当にやれであった。……マジで壊れているんじゃないやねえかな、俺の頭。

アドリブほど失敗の可能性が高いものは存在しない。そもそも即興というのは、熟練者がやるからこそ味があるものであり、素人がやったところで大した意味がない。ただ、しっかり練って失敗すると嫌だから、アドリブでやった方が傷つかないし、言い訳になるだけだ。

こうして一人で校門に突っ立っていても、以前のようにこちらに目をやる人間は誰もいない。誰かの視線を乗せることのない風は心地よく、ぼっちにとってはこの軽さが最も過ごしやすい。

「この後、クレープでも食べにいかない? それかパフェでもいいけ

ど」

「私はいいけど、加世は厳しいかも。……ねっ、加世？」

「知ってる？ 炭水化物を摂らなければ、いくら甘いものを摂っても太らないんだよ……」

「あんた昼におにぎり食べてたでしょうが……」

聞いたことがある声でしたので、その方向へと顔を向ける。

先日を引き続き、ゆるふわウェーブの先輩に、井杖先輩よりも少し明るめの茶髪を肩まで伸ばした先輩、そして件の井杖先輩のトリオが何やらスイートな会話をしている所だった。

……やばい、本当に目の前まで来てしまった。マジで何も考えてねえぞ。

そもそもこうやって待ち伏せをするのではなく、最初に会った時のように廊下で声を掛ける方が良かったのかもしれない。

あーだ、こーだ考えているうちに、井杖先輩たちが近づいて来る。どのように話しかけようと思つて眺めていると、ちようどすぐ目の前で井杖先輩と目が合う。

「ああ、ヒキガヤくん。この前もここにいたけど、またお姉さんでも捜しているの？」

井杖先輩は手を伸ばせば触れそうな距離で立ち止まり、明後日の方
向に人指し指を向ける。

残りの二人が井杖先輩につられて足を止める。そして俺を一瞥すると、一人はあからさまに不信な表情で井杖先輩の方を見て、もう一人は呆れたように額に手を当てていた。

「どうも……。ちよつと用事がありました……。」

よく考えてみると、近いうちに奉仕部に来て欲しいと言うだけなんだよな。しかも俺の用事ではなく、大志の用事であるので、別段俺が気を使う必要もない。俺は何を言われようとかまわないし、この人の噂からして、俺が告白しているように見えても大したことにはならないだろう。

「先輩、奉仕部って知ってます?」

「聞いたことないな。美弥たちは知ってる?」

井杖先輩が聞くと、残りの二人が首を横に振る。どうやら、ゆるふわウェーブの方が美弥で、セミロングの人が加世という名前らしい。

それにしても、奉仕部の知名度の無さは流石である。というかこの学校は文化部の数がやたらと多い。ゲーム研究会やら生物部などの部員が少ない部活を簡単に承認しているのが原因らしいが、部活動の数を削減する話は一向に聞こえて来ない。延べ床面積の無駄遣いな気もするが、その恩恵を受けている身からすると何も言うことはできない。

「あの……、その部長が井杖先輩に会いたって言っているんですけど、どこかで時間を作れますかね?」

「詳しい話を聞かないと分からないけど、別にいいよ。明日の放課後でいい?」

「……あ、はい。多分大丈夫です」

いとも簡単に話が進んでしまった。誘った俺が言うのも何だが、この人大丈夫なのだろうか。

「恵さあ、こんな濁った目をした子を拾って、ちゃんと面倒見られるの？ どうなっても知らないよ？」

「多分大丈夫だよ。この子、悪いことする度胸がなさそうだから」

この人たち、目の前にいる俺を犬扱いしていることについては、罪悪感を抱かないのだろうか。

そうして井杖先輩はこちらへ振り向き、魅惑的な表情で言う。

「色々聞きたいこともあるし、一緒に帰ろっか？」

そうして話は現在へと至る。

話を聞いたところによると、井杖先輩は俺の家の隣の校区に住んでいるそうだ。つまり家が同じ方向にあるということであり、こうして同じ帰り道を歩いている訳である。

年上の女性と二人きりで歩くというのは、俺の人生では初めてでどこか落ち着かない。

美弥先輩と加世先輩は俺との下校を丁重にお断りしている。別に「絶対いやだ」とか「ちよつと無理」とかのキツイ言葉を掛けられたりはしていない。

頭が俺の頭一つ低い先輩は、タクトのように人指し指を振りながらのんびりと俺の隣を歩いていた。

「つまり、文化的領域間で緊張関係が起きると、それぞれの文化が内向きに進むの。他の法則が進入することなく、それまでも模倣、発展、否定によって文化は成熟されていくわけ。ピカソがそれまでの単一焦点を否定してキュビズムに走ったように、ジョン・ケージが旋律の分解、そして不協和音の導入の先に『4分33秒』に至ったみたいだね。でもそれって文化領域を狭めているんだよ」

「はあ、そうなんですか……」

年上の先輩と制服姿で帰るといのは、男のロマンである。夕暮れの中、他愛もない話をしながら、少しときまぎしながらも距離が詰まればなお良い。

「否定を理解するには前例が必要になってくるでしょ？ 芸術にしろ、サブカルチャーにしろ、基本的に現代の創作作品は受信者に前提知識を求めているの。だから理論が発展するにつれて、文化は細分化されて対象は少なくなる。それが今の多様社会の一端を説明できると思わない？」

……それなのに、この会話は一体何だろう。少なくとも下校途中の高校生の会話ではないだろう。何で下校途中まで勉強をしないといけないんだよ……。

二人で一緒に帰路へ着いた方がいいが、話の導入が見つけれられないので井杖先輩に主導権を渡していたら、いつの間にかこうなっていた。

「あの、もう少し分かりやすく話して下さい」

『俺T u e e』が流行ると、次は最弱系主人公だったり、転生しても能力がしょぼいとかそういうのが出てきたりするでしょ？」

「確かにそういうのありますよね」

「でもそのタイプって、『俺T u e e』を知らない人にとっては、割とどうでもいいんだよねーってこと」

「分かりやすいですけど、その例えはやめろ」

割と色んな方面に敵を作るぞ。

「あ、そう？　じゃあ、なんで私が君たちの部活に呼ばれるのか教えて？」

井杖先輩は一旦立ち止まると、口元に笑みをたたえながら聞いてくる。少し距離を縮められて、端正な顔立ちがすぐ目の前にやってくる。その目はどこか見透かしているように見えて、どこか居心地が悪い。

「別に大したことではないですよ。ちよつとした恋愛相談みたいなものです」

「ふうん、もしかしてヒキガヤくんの恋愛相談だったりする？」

嫌らしく微笑みながら、髪をかき上げる。

そうしてようやく顔を遠ざけると、体を翻してなめらかに歩き出す。

「……違いますよ。ちよつと井杖先輩と絡むことがありますて、先輩

に聞きたいことがあるだけです」

「そう、それは楽しみだね」

それからしばらく、校内の恋愛事情について話をした。

一体どこから情報を仕入れているのかは分からないが、何故か井杖先輩は学年問わずに恋模様については詳しい。誰と誰が雪解け期だとか、三年生の女子が葉山に告白してやんわりと振られたとか、誰それが二股をしてそれが親にバレただとか、そんなろくでもない情報ばかりだったが、なかなかどうして面白い。

また井杖先輩の語り部が上手いのだ。単純に事実だけをばらまくのではなく、出来事を大げさに表現しながら話しているせいか、なにやらドラマでも見ている気分になる。どうして先ほどにこの話し方が出来なかつたのかを、しつこく問い詰めたい。

「よくもまあ、そんなに知っていますね」

「うんまあ、実益を兼ねた趣味みたいなものだしね。だから、君の好きな人を教えてくれてもいいんだよ？」

「それにしても、美弥先輩と加世先輩はいいんですか？ さつきデザートでも食べに行くような話をしてましたけど……」

「君、話を逸らすのが下手だよね……」

全く持って同意である。

そろそろ俺が住んでいる校区へと入ろうかという頃、進行方向の先に小町と切花が歩いているのが目に入る。

小町たちは仲良く談笑をしており、こちらに気付く気配はない。あいつら、こうやって離れて眺めると本当に姉妹のように見えるな。身長の違いが大きい過ぎる。

そのままニアミスするかと思ったが、切花が首を巡らす拍子にちやうど俺と目が合う。

切花は、最初は珍しいものでも見るような目をしていたが、隣でくるくる人指し指を回している井杖先輩を確認すると、何やら得心の言った表情をする。

「あの子たち知り合い？　　というか大きい子、どこかで見たことあるんだけど」

「妹とその友達です。でっかい方は、この前俺と一緒にいた奴ですね」
大きい子とかでっかい方だったり、本人に聞こえないことをいいことに好き勝手に言う俺たちであった。

「どつちが妹さん？」

「小さい方っすよ」

「なるほどね」

ここでこいつらを井杖先輩に紹介するべきかで少し迷う。普段ならば間違いなくスルーする所だが、大志の件もある。

切花の視線につられて小町がこちらに気付いたので、仕方なく覚悟を決める。俺たちから大志に井杖先輩の印象を話すよりも、小町たち

から話をさせたほうが手っ取り早いだろう。

歩くテンポを早足にすると、「おっ、紹介してくれるの?」と嬉そうな声が後ろから付

てくる。……あんた割とうるさいな。

「う、嘘だ。お、お兄ちゃんが綺麗な人を従えてる!」

小町が大げさに狼狽えて井杖先輩へと視線をちらちらとやる。

わざとらしさが半端ないが、井杖先輩には効果てきめんだったようだ。何やら目を輝かせている。

「……やだ、この子可愛い。ねえヒキガヤくん、この子私の妹にしてもいい?」

いいわけないだろ。

小町と井杖先輩が弾んだ声で自己紹介をしているのを横目で、切花が近寄ってくると小声で呆れた声を出す。

「どうやってたら恋愛相談の対象と一緒に帰れるんですか? 全くどこかの少女マンガですか?」

「部室に来てくれて頼んだら、何故か一緒に帰ることになったんだよ」

もし少女マンガならば、仲介をしているうちに井杖先輩のことを好きになってしまって、いつの間にか井杖先輩と両想いになるのだろう。そのことを隠しながら大志と話をしていくうちにそのうち罪悪感に耐えられなくなり、大志に真実を告げる。当然俺と大志は絶縁に

なるが、その後大志は傷心しながらも、新たな恋に向かっていくというところだろう。

うむ、少女マンガというのは相変わらずカオスだ。

「そつちの子は二度目だね。お久しぶり、井杖恵です」

「切花朱音です。よろしくお願いします」

「うん、よろしく。せっかくだし、小町ちゃんたちも一緒に帰ろっか」

小町と切花が俺に伺いの目を立ててくるので、両手を外側に開いて降参のポーズを作る。今日のところはこちらの立場が低いので、どうにも断り辛いのだ。

それに井杖先輩の話からすると、先輩の家はここから大した距離もないだろう。だったらもういつそ諦めた方が気が楽だ。

そうして、ほぼ初対面の井杖先輩を中心としたカルテットができる。とはいっても、俺は三人の後ろに控えているだけなので、実質はトリオだが。

「朱音ちゃんと小町ちゃんは、彼氏とかはいないの？」

やはりというか、女子の会話の主題は恋バナになるらしい。最近の中学生の恋愛事情について一通り尋ねた井杖先輩は、最終的に二人にそう聞いた。

「私たちはいないですよー」

「あら、そうなの？ 二人ともモテそうなのに。……じゃあ、好きな人

とかは？」

先輩が笑顔と共に、小町たちを全方向に人差し指を回す。

「私は思いつきませんねー。……あつ、強いていうならお兄ちゃんですかねー。やだ、今の小町的にポイント高いかもです」

兄として嬉しいことを言ってくれる。

「私も、思いつきませんね。それより井杖さんとかは、どうなんですか？ 彼氏とかいないんですか？」

切花がさりげなく恋人の有無を聞いてくれる。改まって聞くとなんだかおかししいし、だからといって俺がさりげなく聞いたところで、俺が井杖先輩にアピールしているようにしか聞こえないだろう。

女子と男子では、同じ言葉を使っても相手に与える印象が全く違う。例えば、「こ、恋人とかいますか？」を男子が言うのと、明らかに恋愛経験がない奴が見苦しく聞いているだけであり、女子が引く可能性が高い（シヨタは例外である）。だが女子が言うのと、憧れの人に必死に勇気を出して、恥ずかしそうに聞いている姿が目には浮かぶ。全くもって可愛い。

井杖先輩は驚いたように自分を指さすと、そのままの手を横に振る。

「私？ 今はいないよ。気になっている男の子もいないかなー」

とりあえずは、景気の良い回答が返ってきた。

その後もう一回俺に好きな人がいないかを確認しながら、井杖先輩

は小町たちとメールアドレスの交換をし始める。凄いなこの人。会ってから十分ぐらいの女子中学生のメールアドレスを入手しやがった。

少し歩いて開けた道に出ると、井杖先輩は俺の家とは逆の方向へと指を向ける。

「ん、私の家はここを曲がったところだから、ここまでだね」

「そうですか。じゃあまた明日、よろしくお願いします」

「うん、放課後に行かせてもらおうよ。じゃあね」

そうやって井杖先輩は鮮やかな街路樹の先へと消えていく。

「なんか、凄い生命力がある人だね」

小町がそう呟くことに思わず納得してしまう。

バイタリテイがありすぎて、こちらから何かを吸い取られたようだ。肩にのしかかる疲労感が半端ない。

空はどんどんと仄暗くなっていき、だんだんと雨の臭いが浮き上がってくる。アスファルトの上をアマガエルがひよこひよここと飛び跳ね、雀たちは木の枝で羽を休めている。

もうすぐにも雨が降りそうだ。

その13 くラブコメチックな話は起こらないく

担任の「お疲れさま」の一言で、今日一日の授業がつつがなく終了する。

一気に弛緩した空気とともに、慌ただしく教室から飛び出していく運動部に混じって教室を出ると、廊下に突き出している柱に背中を預けた井杖先輩が目に入った。

他のクラスはまだ、ホームルームが終わっていないのか、廊下は閑散としている。本日の天気が雨模様なのと相まって、薄暗く、沈んだ空気が停滞していた。

黙って立っている先輩は、窓の外から降り注ぐ雨をつまらなそうに眺めていた。そうしていると顔立ちの良さがより際立って、まるで映画のワンシーンを見ている気分になる。

「……おつ、ヒキガヤくん。やっと来たね」

「こんなところで、何をしてるんですか？」

それよりも、いつからここに居たのだろう。上の階からは、どこかのクラスがホームルームを終えたような声は聞こえてきていないので、もしかしたら井杖先輩は六限をさぼったのかもしれない。

「よく考えたら、奉仕部ってどこにあるのか分からなくて。だからヒキガヤくんに連れて行ってもらおうと思って」

そういえば詳しい場所までは言っていなかった気がする。これだからマイナーな文化部というのは面倒だ。書道部や吹奏楽部みたいに、名前と場所が一致すると助かるのだが。

しかし奉仕室なる部屋があつたところで、基本的に使わないし、使われたとしても男子高校生の妄想くらいだろう。

「北校舎の三階の、一番西にある部屋ですよ」

「うわっ！　一番遠いところだ」

奉仕部は最近新設された部活なのもあつて、立地条件は文化部の中でもかなり悪い。おかげで毎日、必要以上に階段昇降をしている気がする。

一度教室の中を見る。由比ヶ浜は、まだ三浦たちと雑談に興じており、解放されるにはもう少し時間が掛かるだろう。

「じゃあ、行きましようか」

そう返して奉仕部へと足を向ける。

すぐに他のクラスが時間差でホームルームが終わり、甲高い声と共に学校内がにわかに活気づいてくる。

週末の予定を相談している女子。速足で昇降口へと向かう運動部。流行の芸人のモノマネをしながら、やかましく廊下を歩く文化部。加速度的に人口密度は増していき、すぐに見慣れた光景ができあがる。

その人混みの中から、ちらほらと視線を感じた。

かつて俺が受けたからかいの視線でも、やつかみでもない。強いて言うなら好奇心とでも言うべきだろうか。それが井杖先輩ではなく、何故か俺へと向けられているのが不思議だ。

「あの、先輩って二年に知り合いとかいます?」

「んー?」

口唇に指を当てながら考えると、「前の彼氏と、後は中学の部活の後輩くらいかなー。だからちよつと気まずいんだよね」と軽く答える。

……間違いなくそれが原因だ。

つまり、その昔の彼氏くんや中学の後輩からすると、俺が井杖先輩の新しい男に見えるわけで、その男の俺がどんな奴なのか興味津々というわけか。全くもって、ひどい誤解である。

「気まずいなら、ここまで来なければいいでしょう?」

「でも前の彼氏に遠慮して、自分の行動が取りづらくなったら意味ないでしょ? それはそれで終わった関係だし」

澄ました顔で井杖先輩は言った。

確かにそうである。終わった人間関係に引つ張られて、こちらが損をするようではよろしくない。自分が悪いことをしていないのであれば、堂々としていればいいのだ。他人に遠慮をしすぎていては、きつと肩身の狭い思いを強いられることだろう。

渡り廊下を通って、文化棟の三階へと上がる。通る度になぜかコーヒー豆の香りが漂ってくる生物室を過ぎると、すぐに奉仕部のドアの前に立つ。

「結構色んなものがあるねー。いいなー、ポットもある」

誰もいない部室に入ると、井杖先輩が部室内を物色して歩き回る。

「コーヒーか、お茶か、紅茶、どれがいいですか？」

「じゃあコーヒーでお願い、ブラックでいいよ」

ケトルで湯を沸かして、紙コップでインスタントコーヒーを二つ作る。三本目の砂糖を入れ、井杖先輩が残念な目で俺を見始めたところに、雪ノ下と由比ヶ浜が部室にやって来る。

雪ノ下が紅茶を二人分煎れ、全員が手持ちの飲み物に一口浸けたところで井杖先輩が切り出す。

「……それで、私に聞きたいことって何かな？」

大志が井杖先輩に財布を拾ってもらったこと、そしてその件で大志がお礼をしたいこと伝えると、井杖先輩は思い出すように、ふむふむと頷いていた。

「大志のこと、覚えていたりしますか？」

「うん、財布なんて、なかなか拾わないからね」

井杖先輩はスカートの裾を直すと、パイプ椅子に深く座り直す。

覚えているのなら話が早い。後は適当にどこかで二人を引き合わせてしまえば、俺たちの仕事は終わりになる。意外に楽な仕事だったな。

雪ノ下は顎に手を当てて考えた仕草を見ると、何か訝しげな顔色を

しながら尋ねる。

「一つ聞きたいことがあります」

「どうぞ、どうぞ」

「井杖先輩は財布を拾った後、何故わざわざその場で待っていたのですか？ 交番に届けた方が正しい行動に思えるのですが……」

俺と同じような疑問を、俺とは違って切り出す。

「私の心が天使の様に清純だからは？」

「論外です」

井杖先輩は「困ったなあ……」と全く困っていない声音で返すと、吟味するように俺たち一人一人の顔を舐めるように見渡し、「口外しないだね」と人指し指を口唇に当てて、口外無用のポーズを作る。

なんだか嫌な予感がするが、気にしてはいけない。

「ぶっちゃけ言うとな、財布を拾ったときに学生証が入っていたから、顔と名前が分かったんだよね。それで顔はまあまあだったから、とりあえず知り合いになつところかなー、って思ってる」

「うわあ……」

由比ヶ浜が思わず呻き声を出してしまう。

つまりあれか、大志は井杖先輩の餌で見事にフィッシングされたというのか。

「だから、どうせ会うなら、一回くらいデートして、どんな人なのか試したいなーって」

うわっ、この人ビッチだ。

それは大志からすれば願ってもないことだろうが、このまま引き渡してもいいのだろうか。なんだか手離れの悪い仕事になってきたな。これだからサービス業は嫌なんだ。

「それは多分大丈夫でしょうけど……」

「じゃあ、ついでに一個お願いしていい？」

「内容によります」

どうせろくなお願いじゃないんだろうな、と思っていると何故か井杖先輩は椅子を俺の方向へと向け、首を傾げてしなりを作る。

「ヒキガヤくん、一緒にデートしよつか」

「ふえっ！」

「……………」

何考えてんだ、この人は。しかも口元をいやらしく歪め、流れるように俺たち一人ひとりを見渡してやがる。

「どうして三人でデートしないといけないんですか？ どう考えても俺が邪魔になるでしょうが」

「そうですよ！ ヒツキーなんて居たって、邪魔になるだけですよ」

……あの、自分で邪魔と言って何だが、ヒツキーなんて酷くないか。
「ごめん、言葉が足りなかったね。ダブルデートをしようってこと。
いきなり二人きりじゃあ、大志くんも緊張するでしょ？」

なんだか理に適っているような、いないような感じだ。そもそも年上のお姉さんからすれば、その初々しさが良いと、どこかの漫画で読んだことがある気がするが……。

「ダブルデートって、そもそも俺は誰と行けばいいんですか？」

「たくさんいるでしょ？ 雪ノ下ちゃんとか、由比ヶ浜ちゃんとか。
……それとも、切花ちゃんとか」

何故か、切花の名前だけをはっきりと区切るように言う。

「……もし俺が行かないって言ったらどうします？」

「私と大志くんが二人でデートに行くだけだよ。ただ、どこで何をするかは私たちの自由だよ。ヒキガヤくんの仕事は、大志くんを私に紹介するだけだから、その後には干渉するのは余計なお世話だよ」

「手を出す気満々ってことですか？」

「そこまでは言っていないよ。ただ私も大志くんも若いから、有り余る情動に逆らえず、過ちが起きるかもしれないだけ」

この人、思いつきり手を出す気が満々だよ。

それにしてもデートか。行きたいか行きたくないかで言えば、もちろん行きたくないが、だからといって、このまま獅子に喰われる兎を見逃すというのも寝覚めが悪い。

それに井杖先輩の性格を分かった上で、大志を引き渡したことが川崎に知られれば、間違いなく川崎に怒られる気がする。

雪ノ下はどう思っているのかと思つて目を向けると、ちょうど雪ノ下と目が合う。何秒か見つめ合った後、雪ノ下は仕方がないと言つた様子で、大きな息を吐いた。

「比企谷くん、別に私でも、由比ヶ浜さんでも、それこそ切花さんでも良いから付けてもらつてもいいかしら？」

「別にかまわんが、どうしてそんな含みのある言い方をする？」

「特に何も無いわ。ただ、少し女子としてもプライドが関わるだけよ」

つまりあれか俺が誰を選ぶかによつて、女子の格付けがされると言うことか。全く女子というのは面倒だと思つたが、よくよく考えれば男もそういう部分は大いにあるので、女子だけを取り上げて批判することができなかつた。

さて、そうなるど誰を選ぶのが良いだろうか。

何やら頬にここにいる全員からの視線を感じる。雨足が強くなり、うるさいくらいに窓を横殴りに叩きつけている。遠くの空が紫色の光に満たされるのが目に入る。雷でも落ちたのだろうか。

正直に言つてしまえば、それぞれに一長一短があるので、誰を選んでもあまり変わりをなないように感じる。井杖先輩を監視する意味で

は雪ノ下が一番適しているし、健全なデートコースを回るなら由比ヶ浜がいい。切花は、……まあ一番気を使わなくてもいいだろう。

それよりもさつきからクイックセーブの項目を探しているが、なかなか見つからない。なんだ、このクソゲーは。

「……切花に頼んでみる。切花なら大志と同じクラスだし、大志も気が楽だろう」

「まあ、無難な選択よね」

「やっぱ、ヒツキーは朱音ちゃんを選ぶんだ……」

俺の答えに雪ノ下と由比ヶ浜がそれぞれに反応を示すと、井杖先輩は満足気な顔で言う。

「じゃあ、決まりだね。悪いけど、大志くんと切花ちゃんにこのこと伝えといてね」

やっぱり選択肢をまちがえたかもしれないと、頭の隅で思った。

「切花、お前週末って暇か？」

「特に予定はないですけど……」

二本目のエビに箸を伸ばしたところで、切花に尋ねてみる。

「よし、ならデートするぞ」

「はいっ!？」

切花が驚いた拍子に、喉を詰まらせて可愛らしくむせていた。

井杖先輩にダブルデートを提案されたその夜、ちょうど切花が俺の家に夕食を食べに来ていたので、話を切り出してみる。ちなみに我が家の献立はエビと野菜の天ぷら、筑前煮、サバの塩焼きと夕食の中では割と当たりな方である。基本的に母親が夕飯を作っているが、その母親曰く、筑前煮は切花が味付けをしたらしい。なかなか旨いが、完全に俺の家の味になっているので、手放しに褒めにくい。

「えっ、お兄ちゃん、どうしたの？ いや、全然問題ないけど……」

「小町ちゃん、問題あるよ……」

こほんと咳払いをした切花は、「ちゃんと一から説明して下さい。どうしたんですか一体?」と言って茄子の天ぷらを口に入れる。心なしか、若干顔が赤くなっていた。

井杖先輩が大志とデートをしてくれることにはなったが、先輩を単体で放置すると何をするか分からないので、同伴者が必要だということ伝える。

話を聞いていくうちに、だんだんと納得した表情へと写り変わっていくと、その仕草さから面倒臭さを滲ませた切花は、油もののせいか口唇がグロスを塗ったように光っていた。

その様子がいつもよりも艶めかしく、話していると思わず目が口唇へと吸い寄せられてしまう。

「いいじゃない、一緒に行ってきなさいな。朱音ちゃん悪いけど、この

子の面倒を見てくれないかしら?」

それまで黙々とレンコンを口に運んでいた母親が、箸を置いて言う。ぶつきらぼうな物言いだが、目尻が少し笑っている。

ちなみにこの母親、切花がいない時には「お嫁に来るなら、朱音ちゃんみたいな子がいい」と俺に聞こえるように、しきりに言っていたりする。将来は間違いなく、たちの悪い姑になるだろう。

「……分かりました。そういうことなら、お付き合いします」

どうやらこれで、切花と一緒に井杖先輩に付いていくことが決定した。雪ノ下が言ったように、これが一番無難な選択だろう。

テーブルの下で、小町と母親が静かにハイタッチしているのが目に入る。前から思っていたが、この親子は本当に仲が良いな。

何だか色々な人に振り回されている気がしてならないが、だからといってこのまま放置するのも決まりが悪い。

切花は居心地が悪そうに一本目のエビをかじっていたが、何かを思いついたように俺を見ると、井杖先輩のような笑みを浮かべる。

「じゃあ、せっかくなので、デートの日には私の家まで迎えに来て下さいね」

切花の家に迎えに行くということは、切花の両親に会うということだ。

……俺、あの人たち苦手なんだよなあ。

その14 く比企谷家のご近所さんく

インターホンを押すと、ばたばたとした足音とともに、木調色のドアが勢いよく開かれる。

「あら、八幡くんじゃない。どうかしたの?」

切花と良く似た瞳に、形の良い唇が特徴の女性が驚いた顔をしていた。明るいブラウンに染められた髪が後ろで一つに纏められており、若草色のエプロンと相まって、生活感を醸し出している。

切花の母親である絹絵さんは、今日も年相応さの綺麗さがとても似合っていた。

「いえ、きり……朱音さんと出掛ける約束をしてるんですけど、呼んでももらえませんか?」

「そうなの? 今呼んでくるから、ちよつと待っててね」

絹絵さんが満面の笑みを浮かべながら再び室内へ戻るのので、一息ついてその場に立ち尽くす。

やっぱり、絹絵さんと切花は目元以外あまり似ていない。落ち着いた雰囲気をごちらに与える切花と違って、絹絵さんはどちらかと言うとほんわかとした雰囲気だ。

何でも切花の外見は父方の血が強いらしい。俺は会ったことがないが、切花の父親の妹、つまり叔母とは外見がよく似ているそうだ。歳をとった切花というのを見てもみたい気がするのので、どこかで顔だけでも見てみたいと常々思っていたりする。

「ちよつと仕度に時間がかかっているから、中で待っていて貰っていかしら？」

あいつ、わざと仕度に時間を掛けてるだろ。

「い、いや、外で待ってるんでいいです」

「いやいや、わざわざ来てもらったんだから、入って行って」

絹絵さんに背中を押される形で、切花家へと足を踏み入れ、十畳以上はあるリビングへと通される。

小学校以来の切花の家は、当たり前といえば当たり前だが、大分様変わりをしていた。

壁紙は真新しい織物の白へと変わっているし、以前は痛んでいた和室の畳は張り替えられて、近くを通ると井草の香りが漂ってくる。ブラウン管のテレビは大型の液晶テレビへと変わり、デスクトップのパソコンは、ノートへ買い換えられて省スペースとなっていた。

「ど、どうも……」

案内をされたソファには先客である切花の父親が背をもたれながら、ワイドショーを眺めていた。

別に俺と切花の父親の仲は悪くない。道ばたで会えば、挨拶を交わして世間話くらいはする。時折将来の夢や、卒業後の進路に聞かれるくらいで、特に不仲になる要素などない。ないはずだ。

ただ小町が、切花の家で俺の話題が出ると微妙に不機嫌になると

言っているので、俺が勝手に恐れているだけである。

ちょうどテレビでは、二十歳の女優ができちゃった結婚した話題で盛り上がっている。何でも付き合ってから半年でゴールインしたらしく、せつかく仕事盛んな時期にこれでは、今後の仕事に大きな影響が出るだろうと熟年のコメンテーターが喚き立てている。

「今日、どこかに行くのか？」

切花の父親が尋ねてくる。

「映画、とかです。いやあの、知り合いの付き添いと言いますか、二人で出掛けるわけじゃないんですよ。何でも二人だけだと、緊張するそう。そりやそうですよね、二人きりじゃまずいですよね」

矢継ぎ早に言葉が口から飛び出てくる。普段からこれだけ言葉がでてくると助かるのだが、普段からこんな状況になりたくはないので、やはり今のままでいいのかもしれない。

ちなみに映画というのは全く嘘である。本日のコースは井杖先輩が一任しているため、直前になっても知らせてはくれなかったのだ。

「そうだな、二人きりはまずいな」

「そ、そうですよね……」

そういや、少し前に切花と街に行ったことがあったな。いや、この場では、全然関係ないが。ほんとに。

そうして、本来ならば家族の団らん場に重苦しい雰囲気而降り積もる。絹絵さんは隅のキッチンでのん気にお茶を煎れている。もう

少し空気というものを読んでもらいたいものである。

「八幡くんが家に来るのも久しぶりね。こうして見ると、やっぱり大きくなったわ」

茶柱が立つお茶を目の前にお茶を出してくれると、絹絵さんは俺の少し隣に座る。どうしてこの夫婦は俺を挟むように座るのだろう。

「さすがに背は伸びましたね。でもそれなら、そっちの方が背は伸びましたよね」

出されたお茶に口をつけるが、熱くて味が分からない。

切花の両親の前だと名字で呼びにくいために、つい代名詞を使ってしまう。だからといって、具体的に名前を呼ぶのは抵抗があるので、やりづらいことこの上ない。

「そうなのよねー。あんまり背が伸びすぎると、男の子が寄ってこないと思ってたんだけど、余計な心配だったわね」

もう一口お茶を飲むが、やっぱり味が分からない。もしかしたら絹絵さんの家事スキルが落ちたのかもしれない。

「……当の本人は、まだ降りてこないんですか？」

「もうちよつとかかるかもね。せっかくだから、お菓子でも食べていって。ほら、うなぎパイ」

いい加減脱出をしようととっと待ち合わせ場所へと行きたが、うなぎパイが差し出されるので一口かじる。

うなぎパイは自称夜のお菓子と名乗っているが、その理由には二つの説がある。一つは夜の家族団らんのお菓子に使ってほしい、という願いから来ている。そしてもう一つは、うなぎがあることを増強するからこそ、夜のお菓子と言われているのだ。後者は完全に俗説なのだが、なぜか信じている人は多い。

その後十分に渡り、絹絵さんとしんどい会話を続けていたところで、ようやく、切花が二階から降りてくる。

シックな黒のふんわりとしたワンピースに、薄いピンクのジャケットを着こなしている切花は、今日も変わらず落ち着いた雰囲気であった。私服のときはよくストッキングを履いていたが、今日は素足をむき出しにしている。

「お待たせしました。では、行きましようか」

全く悪びれる様子がない切花は、俺とその両脇に座る両親を見て小さく笑う。……こいつ、間違いなくわざと遅れてきたな。

すぐにお礼を言って切花の家を出ると、「遅くならないようにね」と絹絵さんから背中中で注意を受ける。何だかんだいっても、こういう部分はやはり母親である。

年長者として肯定の意味で振り返ると、「あと八幡くんも、たまには小町ちゃんと一緒にご飯でも食べに来てね」と言われる。

「……遅れてしまって、すいません」

「お前な、そこまで悪いと思ってないだろ。まだ顔が笑ってるぞ」

集合場所となっている駅の東口へと向かって歩き始める。さすが

に日曜日だけあって、子供連れの夫婦が楽しそうに通り過ぎる光景が、そこら中で見られる。

ここ三日くらい雨模様だったが、今日は鮮やかな青と入道雲が空から吊り下げられている。久しぶりの晴天のせいか、道行く人々の顔もどこか明るく見える。

「川崎くんからの伝言なんですけど、様子を見て上手く消えて欲しいそうです。何でもできれば、今日決めたいそうです」

「そう言われてもなあ、とりあえず今日の予定が分からなければ、どうしようもないだろ」

何だか段階をすつとぼそうとしているというか、大志は普通にデートとして次に繋げようとは思わないのか。

この焦り具合が中学生らしい気もするが、相手が高校三年生なだけに、不安を禁じ得ない。特に井杖先輩みたいなタイプの場合、一回遊びに行くくらいなら大したことはないわけだから、大志だけ張り切りすぎる嫌がある。

十分ほど歩いたところで駅に到着したので、人混みの中から大志や井杖先輩を探す。切花の家で時間は消費したものの、ほぼ待ち合わせ時刻に着いたので、どちらかはいるだろう。

「比企谷さん！ こっちつす」

体育会系らしい敬語とともに、聞いたことがある声の方を振り向くと大志の姿が目に入る。体育会系らしく、メンズパンツにデザインの良いTシャツを合わせているだけだが、日焼けの跡も相まってなかなか格好が良い。

「井杖先輩は？」

「まだっすね。さっきから、この辺りうろちよろしてたんですけど、見当たらなかつたですし」

まあ、五分、十分くらいなら、そこまで遅れても問題はないだろう。

歩き回っても仕方がないので、邪魔にならない所で三人で待つことにする。

「ほんとうに、来てくれるんすか？ 何か、信じられないっす」

「安心しろ、来る途中に交通事故にでも遭わない限りは確実に来るぞ」

大志は、俺たちデートのセッティングまでをしてくれたと思い込んでいるのか、何度も俺に対して礼を言う。デートは井杖先輩が勝手に言ってきたくれたわけだが、中学生男子の夢を壊すのも悪いのでそのままにしておく。

待ち合わせの時刻から五分ほど経ったくらいに、遠目から井杖先輩がやってくるのが分かった。

アクアブルーのフレアスカートに、練乳色のカーディガンを合わせた清楚な格好であるが、不思議と井杖先輩に似合っている。スカート丈にしても制服よりも長く、膝が隠れていた。

「待たせちゃってごめんね」

「いや、全然そんなことないっす」

大志が筋を痛めそうなくらいな勢いで首を振ると、井杖先輩は微笑みながら大志に手を差し出す。

「こうやって話すのは二度目だね。井杖恵です、よろしくね」

「か、川崎大志です。よろしくお願いします」

緊張した面もちで同じく手を出した大志と握手をすると、井杖先輩はこちらへ向くと、俺と切花を見る。

「切花ちゃんも、わざわざ来てもらって、ありがとねー」

「いえ、面白いものが見られたので、来て良かったです」

こちらを横目で見て、機嫌の良い声で切花は答えた。

切花の機嫌が良さそうでなによりだが、それよりも井杖先輩が割と普段通りなのに驚く。清楚な服装ではあるが、その表情にはいつもの親しみを抱かせる笑みが浮かんでいる。案外、キャラを作るタイプではないのかもしれない。

「遅れるのは全然良いですけど、今日ってどこに行くんすか？」

「ウインドウショッピングをしたり、映画を見たりするだけだよ。中学生が二人いるわけだし、あまりお金が掛かるのも嫌でしょ？」

指をぴんと立てて、井杖先輩は言う。

確かに、映画は高校生にとっては意外と安い。千八……、高校生は千円で見れるのだから、下手にカラオケに行くよりは安く済む場合の方もある。別に高校生料金だと、大人二回分見られるとか、思ってい

るわけではない。

最近はブルーレイがあるために、映画館には足を運ばないという層もあるが、やはり映画は映画館で見るのが一番良い。とくに少し暇な時に映画館に行き、上映されている中で見ることは、なかなか面白い。それに映画はあの薄暗い空間で映し出されること前提として作られるわけだから、最適なメディアで見るからこそ分かる良さもある。

「とりあえずは、映画館に向かいながら、ぶらぶらと歩いて回ろうか？」

そもそも俺と切花は、井杖先輩たちに付いていくだけなので、特に異論はない。

先輩たちが談笑する姿を後ろから眺めながら、人混みの中を通り抜けていく。今の所、特に詰まることなく、大志が話をできているので少し安心する。

「なんだから、いい雰囲気ですね」

「今の所、はな。先輩のことだから、どうなるか読めないんだよなあ……」

流石にその場で帰るとかはないとは思いますが、笑顔できつぱりと大志を振る可能性は捨てきれないし、逆に気付いたらどこかにテイクアウトしているかもしれない。樂觀視するにはまだ早いだろう。

近くの店を軽く覗きながらふらふらと歩いていると、井杖先輩が一つの店舗を指で差す。

「ここに入ろうと思うんだけど、いいかな？」

人指し指の先には、窓や壁面に可愛らしい犬や猫、ウサギなどの写真が載せられたポスターと、看板に書かれた「ペットショップ」の文字が踊っている。

ポスターを見る限りでは、ペットといっても女子受けしそうな動物ばかり扱っているようだ。鳥類や魚類といった、おいがキツイ生物は販売していないらしい。

ふむ、どつちから提案したのかは分からないが、なかなか良い所だな。会話のネタにしやすいし、可愛い生き物を見ていれば、誰でも和やかな気分になるだろう。

「俺はいいんですけど、切花が……」

「ありや、切花ちゃんは動物は苦手？」

「基本的には平気なので、大丈夫です。是非、入っちゃって下さい」

井杖先輩は少し心配そうに何度か切花に確認をしていたが、切花が平気だと突っぱねるので、仕方なく店内へと入る。

「おい、いいのか？」

「私が川崎くんのデートを邪魔しちゃいけないですよ。それに動いて鳴かなければ平気ですから、離れた所で犬でも見るので大丈夫ですよ」

ちなみに、切花は猫が苦手である。

別に猫アレルギーではないし、切花もこういう性格なので声を上げ

て逃げる程ではないが、それでも動いている猫には出来る限り近づこうとはしない。ただ、犬やウサギなどは普通に大丈夫なのだから、人の得手不得手は分からない。

写真ならば平気とは言っているものの、それは大丈夫のうちには入らないだろう。

そのため、我が家に切花が来るときは、愛猫であるカマクラは空気を読んで俺の部屋へと退避してくる。大変空気の読める猫であるが、誰に似たのか出不精なのでその後しばらく俺のベッドを占拠しやがるのが難点だ。

井杖先輩に引き続いてペットショップに入ると、店内の隅々から愛くるしい鳴き声が聞こえてくる。その中に混じる猫の鳴き声に、切花は一瞬だけ体を竦ませるが、そのまま歩いている。

……全く、嫌なら入らなければいいのに。

「おい大志。俺たち犬のコーナーの方にいるから、先輩と適当に回っていきなさい」

「えっ、いいんですか？　じゃあ、ある程度回ったら、そっちに行きます」

「またねー」とこちららに向かつて手を振りながら、猫のコーナーに向かう井杖先輩を見送った所で、犬の鳴き声がうるさい方へと足を向ける。

「ほら、行くぞ」

「ありがとうございます」

切花の言葉を背中で受け止めたまま、店内の隅へと向かう。

犬のコーナーには、様々な種類の子犬がゲージに入れられていた。辺りを見渡してみてもある程度大きくなった犬が見えないので、この店は小犬をメインに扱っているのだろう。

少し間だけ体を強ばらせていた切花であったが、次第にゲージの中にいる小犬たちを見て、頬を緩ませる。

「あつ、この子とか落ち着いていて可愛いですね」

切花の視線の先には、黒と茶色が混じった毛並みの利発そうな小犬が伏せの体勢のまま切花をじつと見ていた。

ゲージに取り付けられた名札によると、犬種はジャーマン・シェパードらしい。確か警察犬や軍用犬としても使われるくらいには、知能が高かったはずだ。

「お前、そういう頭良さそうな犬とか好きそうだな」

「チワワとか豆柴よりは好きですね。やりとり出来る感じが特に」

そう言うとゲージ越しにシェパードの頭を優しく撫でる。やはり頭が良いのか、シェパードは嫌がる素振りを見せずに、切花の為すがままにされている。

愛玩動物みたいな見た目よりは、シェパードやレトリバーのような狩猟犬から改良されたような犬種が好きな気持ちは多少は分かる。うちのカマクラにしたところで、先ほどは生意気といったが、その生き物らしさが美点でもあるのだから。

「よろしければ、抱いてみますか？」

切花の後ろから若い女性店員が声を掛けてくる。

「いえ、今日は買いに来たわけではないので」

「別に買わなくてもいいんですよ。こちらとしましては、また来たいと思ってもらえるようにするのが目的ですから」

なかなかぶつちやけた店員であるが、その分こちらとしても遠慮をしなくて済むのだから、なかなか上手いものだ。

切花が少し逡巡した後、「では、お願いします」と言うと、なぜか店員は俺に向けてウインクをして、誇らしげな顔を作る。

別にいい雰囲気にしてくれとは言っていないぞ。

それでも、小犬を腕に抱いた切花が嬉そうだったので、少しはお節介な店員に感謝しても良かったかもしれない。

その15 くコーヒーの苦みく

B級映画というジャンルの映画が存在する。

映画に掛けられる予算が低かったり、撮影に使っているカメラの台数が少なかったり、やたらとチープなセットや無名の役者ばかりで構成されているあれである。

脚本にしても同じで、無名の脚本家を使っているせいか当たり外れが激しく、時にはカオスな内容であることも多々ある。インターカレッジでバスケットをしていたと思ったら、なぜか宇宙人が攻めてきて地球の存亡に関わったりなんて展開も、意外なほどよく見る。

だが、その混沌さが好きという変わった人種は割といる。

そもそも映画を見るスタンスが違うのだろう。彼ら彼女らは展開の杜撰さを口汚く罵ったかと思えば、次の瞬間にはカメラワークと空間の演出が上手いと褒めたたえる。そうして役者の演技について話しが移ったかと思えば、最後には展開の出鱈目さについて大笑いをする。もう何を評価しているのか全く分からない。

「いやー、すっごいつまらなかったね。ほら、あの主人公っぽい男が、後半になって意味もなく首を切断されたシーンなんて、スタッフとかどんな顔して撮ったんだろうね」

俺と切花の後方から、井杖先輩が弾んだ声で大志に話しかけている。

ペットシヨップを一通り堪能した俺たちは、当初の予定通り映画館へと足を運んだ。流石に全国展開している映画館だけあってシアター数が多く、上映している本数も多かったが、その中で井杖先輩が

選んだのは『地下三百メートルからの侵攻』という、インディージョ
ンズの副題でもなければ遠慮したいものだった。

俺と切花は先輩たちの付き添いであるために、先輩の方針には逆ら
わないので大志が反対することを密かに期待したものの、結果は二つ
返事で了解してしまった。

どうなっても知らないと思って見た結果がこれである。大志の奴、
「ああ」とか「そうっすね」とか言えていないぞ。

「……感想は？」

隣で難しそうな顔をしている切花に尋ねてみる。

「最初は面白くなかったんですけど、映画というよりはコントのよう
に見てみると、案外普通でした」

「……大体俺と同じだな」

井杖先輩が映画を見る前に俺たちにアドバイスしたのは、「映画を
見ようと思わないで」ということだった。何を言っているのかと思っ
たが、実際に見ているうちに、どういう意味なのか理解できた。

要するに、普通の映画のような期待をせず、それこそ身内の演劇で
も見るような気分で見るのがいいのだ。

始まってから十五分くらいで出てきた地底人なんて、最初は特殊メ
イクのレベルの低さに戦慄を覚えたが、だんだんと慣れてくるとメイ
クの手法について考えが及んだ。完成度が高すぎると疑問点が思い
浮かばないのだが、稚拙なものだどうしても過程や手法が気になっ
てしまう。だがそれがいい。

というか、あれはメイクというよりは被り物だ。

「でも、結構ユーモアは利いていましたね」

「ああいうノリだから、あれだけジョークを詰め込めるのかもな。ハリウッド超大作であんなのやられたら、ドン引くぞ」

何だかんだで、B級映画が好き人間の気持ちは少しは分かった気がする。下品だったり、陳腐だったりするものの、そのくだらなさについて考え、時には頭をからっぽにして楽しむことができるのだ。

もちろん予算が豊潤なものでもそういう作品はあるだろうが、B級映画の方がより見直に感じるのだろう。カメラが少ないのも、裏を返せば視点が少なく、自分の視線に近くなる。そういったものだろう。

作品について、それぞれのペアで一通りに語ったところで、井杖先輩が指を回しながら言う。

「じゃあ、ご飯食べに行こっか?」

そういえば昼を抜いていた。映画を見ているときにはジュースを飲んでいたものの、やはり多少は腹が空いている。

切花や大志も空腹なのか、井杖先輩の提案には反対しない。まあ、デートといえば食事だし、食事というのは意外と育ちや個性が出るから、相性が見やすい。

美人だけれど食べ方が汚いとか、酢豚にパイナップルを入れる、キスフライに醤油をかけるかソースをかけるかなどなど、その例を上げればキリがないだろう。

そんなわけもあって、井杖先輩のセンスに期待しながら連れて行かれた先は小綺麗なカフェだった。入り口付近の壁面を透き通るガラス張りにし、その中のインテリアはアンティーク調のテーブルや椅子が不規則に並べられている。

床も大理石のような白地で光沢のある石材を使っていた。今日は誰も履いていないが、革靴ならばコツコツと小気味良い音が聞こえるだろう。

いや、何これ。なんでこんな清潔感がありそうな場所で、飯を食べないといかんだ。というか、腹を満たしそうな炭水化物はあるのか、ここは。

「ここ、パンケーキが美味しいんだよね。切花ちゃんは、甘いもの好き？」

「好きですよ。でも、パンケーキはあまり食べたことはないですね」

女子陣が窓際で黄色い声でスイーツ談義を咲かせている中、メニュー表をぱらぱらとめくる。一応タコライスやスパゲッティくらいはあるが、やはりメインはパンケーキらしい。

「八幡さんは、何食べます？」

無難な選択としてはスパゲッティのだが、少しパンケーキが気になる。ここでパンケーキを食べなければ、一生縁がない食べ物な気がする。それに甘いものは嫌いな訳ではない。

「俺もパンケーキでいいぞ」

俺がそう言うと大志も、

「お、俺もそれでいいっす」

と言うが、若干声の上擦っている。失敗した、俺がパンケーキを選んだせいで、大志が他のメニューを食べにくくなってしまった。

そんなことを気にしているうちに、テーブルの上に四つのパンケーキが並ぶ。二重に積みまたパンケーキの上に苺やバナナ、ブルーベリーが宝石のように散りばめられている。そしてその横にどっさり生クリームが盛られ、その横に小さな容器一杯に黄金色のメープルシロップが満たされていた。

「それじゃあ、食べよっか」

食べるのはいいんだが、どうやって食べればいいのかだろう。生クリームとメープルシロップは最初にのせるものなのか？

ナイフとフォークを握ったまま戸惑っていると、切花と井杖先輩はケーキを一口大に切り分け、その上に好きな量のクリームやシロップを乗せると、口に入れる。

「あつ！ 甘過ぎなくて食べやすい」

「でしょ！ 生クリームもあんまりカロリーないんだって」

「それは嬉しい情報です」

二人してぱくぱくと食べていくのに倣って、苺にクリームを乗せて、口に入れる。切花が言った通り、パンケーキ自体はそこまで甘くなく、意外とあっさりしている。むしろケーキ単体で食べると物足り

なさを感じそう。その分、苺やクリームのとろけるような甘さが美味い。今度はもうメイプルシロップとバナナを合わせて、もう一口食べる。

案外イケるな、これ。

そう思って、適時切り分けながら喰っていたが、目の前に座る大使のパンケーキがあまり減っていないことに気付く。

……ああ、こいつ。甘いものが得意じゃないのか。無茶しやがって。

井杖先輩はそのことに気付いていないのか、他愛のない世間話を大志にしている。この人が気付かないことはないと思うのだが、だからといって指摘する気はない。そもそも苦手ならば、最初からそう言わなかった大志が悪いのだから。

「おつ、大志じゃん。なになに、デート？」

下世話さと好奇心を詰め込んだような声が、店内から浴びせられる。

声の方向にはまだ幼さが残る顔立ちを、薄目の化粧で覆い隠した女子の四人組がそこにはいた。

そいつらは、俺と井杖先輩、そして最後に切花を順々に確かめると、興味深そうな表情で大志に近づく。

「結構美人じゃん。ねえねえ、紹介してよ」

中学の同級生なのだろう。ということは切花とも同級生ことになる。

るが、切花は気にした風でもなく、パンケーキと向かいあっている。

リーダー格の女は大志をからかうように喋っているが、残りの三人はチラチラと切花の様子を冷めた窺っていた。逆にリーダーの女は切花の方を一切見ない。

何か府に落ちない。

「お前たちうるさいって、ほら、あっちいった」

大志が少し苛立った様子で立ち上がって、女たちを追い払うので、その合間に切花に尋ねてみる。

「おい、あいつら知り合いか?」

「同じ中学校の子ですよ。半分は私たちと同じクラスで、時々話していました」

ならどうして、切花に話しかけないのだろう。女子同士のコミュニケーションならば、こんな場でも挨拶をするのは当然だ。

「あいつらと何かあったのか?」

「ちよつと向こうから敵視されているだけですよ。この前私に告白してきた深崎くんって覚えてます?」

「あの運動マンっぽいやつだろ」

とりあえず一言突っ込みたくなかったが、我慢をして話を先に進める。

切花は普段と変わらない調子で話しながら、手を動かしてケーキを切り分けている。

「どうもあの子たちの中に、その深崎くんのが好きな子がいたらしくて、嫌われちゃいました」

そう言っつて切花は、たつぷりと生クリームとシロップをかけてパンケーキを一口入れると、頬を緩めて幸せそうな顔をする。

まあ、よくある話ではある。女子同士の友情には、何故かルールが存在していて、その中で一番重いのが恋愛絡みである。誰かの好きな人と知って、そいつと付き合おうものなら、翌日には仲間外れにされるか、いじめられるかのどちらかだ。

切花の自覚がないにしろ、結果的に深崎くんを誘惑したように見え、そして振ったのだから、その女子のルールに抵触でもしたのだろう。

でも、それでも。だからといって。

「お前はそれでもいいのか？」

「だって仕方がないですよ。向こうが私のことを嫌っているんですから、私がどうこうすることじゃないですよ」

やっぱり切花は、変わらない様子で食事を進めている。

本来ならば、それでいい。本人が納得しているのなら、これ以上俺が何かを言う必要はない。前に切花に言ったとおり、深崎くんをその気にさせた切花にも悪い部分はあると俺は思うし、その意見を変えるつもりはない。

「でも、寂しくないのか」

下らない理由で相手から嫌われて、時々話していた相手とほとんど話さなくなつて、こうやってな冷たい目で見られることに。

「寂しくないですよ」

切花は言う。あつさりど、散歩でもしているような調子で。

「勿論、私物を隠されたり、痛い目に遭うのは嫌ですけど。今の所はそういうのもないので、……だったら変わりがありませんよ」

「……それは、駄目だろ」

思わず語気が荒くなつてしまう。

「駄目じゃないですよ。それに八幡さんもよく言っているじゃないですか。その程度で壊れるなら、きつとその程度だったんですよ」

ああ、よく言っている。何しろ俺自身が信じてやまない理屈だ。ちよつとした惚れた腫れたで縁が切れるなら、深崎くんの件がなくても自然に縁が切れたいたのだろう。

「そういうことじ……」

「はいっ、そこまで。そろそろ大志くんが戻ってくるよ。続きがしたいなら、このデートの後でね」

井杖先輩の冷静な声で、意識に空白ができる。視界の隅には澁々といた様子で離れた席に座る女子たちと、こちらへ戻ってくる大志の

姿が確認できた。

息を一つ吐いて、一緒に頼んだコーヒーを喉に流し込む。甘いものと合わせるために砂糖とミルクを入れてなかったせいかな、強烈な苦みが舌を刺激する。

「すいません。同じクラスの奴がうるさくて。……何かあったんすか？」

「ううん、何でもないよ」

井杖先輩と大志の楽しげな声をBGMに、コーヒーをもう一口飲む。

俺は意味もなく群がる奴らが大嫌いだ。

あいつらは自分の弱さをひた隠しにしているくせに、そのことに気付いていない。嘘や欺瞞に満ち溢れている人間関係を素晴らしいと声高々に叫び、他人にそれを強制しようとする。

本当は仲良くなってるのに、表面上では付き合って、その裏で陰口を叩く。寂しさを紛らわすために誰かを傷つけ、人を見下して小さな虚栄心を満たしている。

一人でいるのを何よりも怖がるくせに、一人でいる奴を嘲笑うことなんてしたくない。

だから俺は一人でいい。

一人でいることにはもう慣れた。そんな曖昧で崩れ落ち易いものに頼るくらいなら、一人で孤独と向き合った方がよっぽどいい。

嘘を吐いて、無理をしなければいけない友達なんて、俺はいらぬ。

……でもこいつは、切花だけには、俺のような生き方をして欲しくない。嘘を吐いたり、無理をしても、誰かと一緒に居て寂しさを紛らわせて欲しい。寂しいと思つて欲しい。

俺は、初めて切花と言葉を交わしたときから、ずっとそう思つてい

その16　　く月明かりと太陽く

空に広がる濃紺のキャンパスの片隅に、茜色がひっそりと身を寄せて控えめに存在を主張している。

未だ一番星を見つけることはできないものの、もう少し経てば綺麗な顔を覗かせて、街に夜の訪れを知らせてくれるだろう。

隣で歩く切花は、ぼうっとした表情で遠くの空を見つめたまま何も言わない。

カフェでしばらく時間を潰し、その後には適当にウインドウショッピングをして俺たちのデートは終了した。何ともあつけないが、初回のデートなのだからこの程度で良いだろう。ただ井杖先輩たちは、大志がもう一カ所寄りたい所があるといつて、どこかへ向かってしまった。おそらくそこで告白でもするのだろう。

良いも悪いも両方の意味で大志が心配になったが、先輩には手を出さないようにキツクいつてあるので、とりあえず間違いだけは起こらないだろう。

「……………」

昼間とは対照的な閑散とした道を、黙々と歩いていく。

切花との沈黙には慣れている。そもそも誰かと一緒にいても話さないこと自体に慣れているので、相手が小町や由比ヶ浜、雪ノ下だろうと会話をしなくてもやっていける自信がある。まあ、自信にはいけないのだろうが。

……だから、この胸の中に引つかかっているしこりは、この沈黙と

は別の所から去来している。

「……なあ、あのカフェにいた奴らと仲直りとかしないのか？」

「仲直りって……、私は平気なので、向こうから言っつてこない限りは、何もしませんよ」

正面の空間の見たまま、切花は答えた。

「そういう意味じゃなくてだな……」

「しつこいですよっ！」

ようやくこちらへ向いた切花の顔を見て、吐き出そうとした言葉を慌てて飲み込む。言葉を確認してみるが、果たしてこれが正しいものか分からなくなってしまう。

「いや、何でもない……」

再び沈黙が訪れる。適当な話題でも振ったほうがいいかもしれない。

頭でも振って話題を探してみるが、何も出てこない。流石に俺の頭だけあって、なかなか働いてはくれなかった。

そんな俺の様子を切花は呆れた様子で見えていたが、何か得心のいった表情を見ると、再び前を向いて歩き始める。

「……八幡さんって、どうして友達がいらないんですか？」

「おい、どうしてその話題を選んだ」

話題を変えるにしても、もう少し俺が傷つかないものがあるだろう。いや、変えてくれたことは有り難いが。

「いえ、割と昔からの疑問でしたので。八幡さんって、目の腐り具合とひねくれた性格と、時々出てくる駄目な発言に目を瞑れば、話をしていて面白いじゃないですか？」

「その三つがほとんど答えじゃねえか」

さつきまでしんみりしていたのが、馬鹿みたいに思えるぞ。

「そういう意味ではなくて、目以外の顔のパーツは整っていたり、何だかんだで面倒見が良かったり、意外と優しかったりするんですから、頑張つて無理をすれば、友達の一人くらい作れたと思うんです。どうしてですか？」

「誉めてるのか、貶してるのかのどっちだよ……」

「割と本気で聞いていますよ、私」

そう言う切花の顔は、少し湿った重たい風が髪を舞い上がらせたせいで、その表情を盗み見ることができなかった。

一呼吸をして切花の問いについて考えてみると、すぐに答えは出てくる。

「そんなの決まっているだろ。そうして無理をするような友達なんて、いらないだけだ」

無理をすれば、どこか綻びが出てくる。

頑張れば、ずっと頑張らなければいけない。

嘘を吐けば、それが棘になっていつまでも残る。

最初は一緒にいるのが楽しくても、嘘や欺瞞を積み重ねていくうちに、いつしか仲間外れにならないことが目的になる。そんなのは本末転倒だ。

「そうですね。比企谷さんは、いつもそういう人でした」

久しく呼ばれなかった呼び方を切花は使う。

「それなら、どうして比企谷さんは、自分のできないことを私にやれ言うんですか？ ……それは傲慢です」

切花は冷め切った瞳でそう言った。

そう言われても仕方ない。逆の立場ならば、間違いなく切花と同じ行動をとっているだろう。だけれども、

「違う、大事なのはそこじゃない」

はつきりと切花を見据えて言う。

誰とでも仲良くはできない。どんなに頑張つて、無理をしたところで、亀裂の走った人間関係を元に戻すことはできないことは多々ある。

切花が人間関係を広く持つて欲しいとは、確かに思っている。

だけれども、俺が胸の中心で抱え続けてきたことは、昔からずっと

変わらない。

「お前はさっきのカフェで、寂しくないと言ったんだ。平気だとも言った」

そして俺は、その切花の言葉が強がりではないことを知っている。

「そんなの、八幡さんも良く言っているじゃないですか？」

「いや、言っていない」

切花の目が吊り上がるのが分かる。そんな表情の切花を見るのは初めてで、一瞬たじろぐがそのまま話を続ける。

「俺は一人が好きだと言っているんだ。寂しくないなんて、一度も思ったことはない」

一人でいれば、誰かに気を使うこともないし、好きなだけ自分だけで楽しいことが出来る。誰かに責任を擦りつけることもない。

だがどれだけ一人でいるのが好きでも、寂寥感だけは気まぐれにやってくる。

例えば卒業式の日、誰もが別れを惜しんでいる中、一人で校門から出るとき。

例えば昼休み、校舎中に響く騒ぎ声を聞きながら昼食を食べているとき。

例えば休みの日、朝起きたら家族全員が外出しているとき。

そんなとき、自分が石になってしまつて、どこにも繋がっていない感覚が心の中から染み出してくる。確かに自分はこのにいるのに、その自分ですら輪郭が曖昧になってしまう。一人でいるのが好きなのに、どうしようもない怖さが襲つてくる。

それはきつと俺の中の弱さなのだろう。本当に孤独な人間ではないからこそ、ふとしたときに誰かを必要としてしまう。

「……でも、それでいい。一人でいても、寂しいと思えることが一番大事だ」

でなければ、本当に大切な誰かを見つけたときに、そいつを見失つてしまうかもしれないから。たとえその誰かを見つけることができなくても、求め続けることだけはしなくてはならない。

「だから、お前は間違つているんだ」

切花は何も言わない。ただ唇をぎゅっと引き締めて冷たく俺を見つめ続けるだけだ。

いつの間にか空は完全な暗闇へと染まってゆき、半分に切られた月が幾何学的な模様を表面に映し出している。

「……その考えは、八幡さんの自己満足ですよ」

切花は言う。

「二人ぼっちを正当化しているんですよ。自分の都合で、誰かの都合で友達を作れないで、一人ぼっちになってしまったのを、理由をつけて誤魔化しているんですよ」

冷たい声が体に染み込んでいく。否定をしたくなかったが、頭がそれを受け入れている。

「自分の中にある漠然とした不安感に耐えられなくて、でも寂しいから、本当は求めているから大丈夫だって、心の奥で思っているだけじゃないですか」

「……………」

「別に悪いと言っているんじゃないんです。それはきつと誰でもあることでしょう。……ただ、その自己満足を私に押しつけないで下さい。その自己満足で、私の中にあるものを否定しないで下さい。それが、私は一番嫌です」

そう言つて切花は前を向くと、俺を先導する形で歩いていった。

アスファルトの中に沈む込みそうになる足を無理矢理動かして、切花に付いていく。車道を走る車のライトがやたら眩しくて、仕方がないので目を細める。

そのまましばらく歩き、いつもの分かれ道へ出ると、ようやく切花はこちらを向いた。

その顔は先ほどの氷のような表情ではなく、たまに一人で居るとき
の平坦な表情で、まるで先ほどのやりとりがなかったような落ち着き
だった。

「今日は楽しかったです。ありがとうございました」

綺麗な礼をして帰り道を進む切花の背中を、立ち止まったままぼんやりと見つめる。

普段よりも少し早足で歩いた切花は、生ぬるい風に舞い上げられた黒髪と共に、すぐに薄暗闇の中へと消えていった。

小学校の三年生か、四年生くらいだったと思う。まだ俺が色々なものを諦めきれなかった頃だ。

小学校の帰り道はいつも一人だった。まあ、小学校に限らず中学校、高校も一人なわけだから、特に強調することもないのだが。

周りの奴らが楽しそうに笑いながら帰っているのを、悔しさを滲ませながら帰っていた俺であったが、ある日下校の集団に年下の女の子が一人でいることに気が付いた。

俺の小学校は学年によって授業が終わる時間が変わったため、違う学年で帰り道が一緒になるのは珍しい。事実、この頃は小町が先に帰っていたので、小町くらいの年の女の子がいたのは意外だった。

そいつはちっとも辛そうな顔をしないで、退屈そうな素振りを見せなかった。そうやっていつも平然な顔で歩いていたから、背は低いくせに俺よりもずっと大人に見えて、正直に言ってしまうえば、憧れてもいた。あんな風になってみたいと、帰り道で一緒になるたびに思っていた。

当時の俺は馬鹿だから、そいつが俺と同じ立場にいると思いついて、それなのに、年下の、しかも女の子が自分よりもずっと格好良く振る舞っていると勘違いをしていた。

結局その勘違いは、俺の一方的な思いこみだということを少しして

知る。

ある休み時間、移動があつたので下級生の階を歩いていたら、そいつが楽しそうに話している姿を見つけてしまった。

帰り道の時とは打って変わって、頬を緩めて、目元を歪ませて笑っているそいつの姿を見て、ひどく落ち込んだのを覚えている。

普通に友達がいる奴が一人が平気なのに、どうして自分はこんな思いを抱えているのだろう。そんな風に振る舞えないから、自分には友達ができないのだろうか、なんて放課後までずっと考えていて、でもやっぱり答えなんてでなかったから、その日の帰り道に思いきって、本人に聞いてみることにした。

太陽が燦々と輝く中、近くに俺とそいつ以外居ないことを念入りに確認してから声を掛ける。

『なあ、一人でいて寂しくないのか?』

そいつは一端周囲を見渡し、自分に声を掛けられていることを確認すると、おずおずと答える。

『……はい、寂しくないです』

『何でだ? お前友達いるだろ。休み時間にみんなと楽しそうにしてるだろ? でも今一人でいて寂しくないのか?』

今になって思うと、初めて話した人が、休み時間や友達の有無までしているわけだから、警戒されてもおかしくなかった。

そいつを少し間において、答えを考えていた様子だったが、すぐに

口を動かしてくれた。

『元々そういうのは平気なので。皆と一緒にいるのは楽しいですけど、それだけ。いないのだったら、それでもいいんです』

澄ました顔でそいつは言った。

それはきつと悲しい生き方だと、子供ながらに俺は思った。いつか誰もいなくなってしまうような生き方だ。そして、友達がいるのをどっちでもいいだなんて言ってしまうことが、何よりも嫌だった。

そいつはそれで満足をしているのかもしれないが、それでもその姿を見るのが嫌で、その二日後、俺はそいつに小町を紹介した。

誰かと一緒にいることを、心から望んで欲しくて。

……それが切花と初めの出会いだった。どこにでもあるような、ただの初恋だ。

その17　　く雨の日の月曜日く

沈鬱な表情の鱗雲とともに、月曜日がやってくる。

普段と同じ時間に起きて、同じ時間に家を出る。そうして、沈んだ顔をしている中学生や高校生に混じって、学校への道を歩いていく。

空は今にも雨を落としそうで、そのせいか傘を手を持った学生たちが心配そうに空を見上げていた。

その姿を見て、傘を持つてくるのを忘れたことに気付く。そういや天気予報では夕方から雨が降ると言っていたな。

……まあ、帰りに雨が振ったのならば、最悪職員室に行つて傘を借りればいい話だ。

特に遅く歩いたつもりはなかったが、教室に入ると一緒のタイミン
グで始業のチャイムが鳴り響く。いつもなら着いてから鳴るまでに
数分の猶予があるので、歩くのが遅かったのだろう。

「おはよう、ヒッキー」

由比ヶ浜との擦れ違いざまに掛けられた挨拶に、顎を引いて応え、
無造作に席に座る。

そうして退屈な授業が始まった。

学校の授業は、基本的に大勢に教えることを前提にして内容が作ら
れる。その為、前に習った文法だったり、一回読めば覚えられる内容
についてもしつこい位に繰り返す。

覚えている内容を復習するほど、退屈で効果的な勉強はない。つまり授業の六割が新しい内容でも、残りの四割は復習ということで、授業中がつまらなくなるのも仕方がない。

つまり、俺が眠たくなるのも仕方ないことだ。

そういう訳で、現代文だけを背筋を伸ばして聞き流し、残りは睡眠導入材として活用して一日の授業を消化する。なぜか『マトリックス』の背景のような数字の羅列がひたすら並ぶ夢を見たりもしたが、放課後には不思議なほど頭がすつきりしている。

そういえば、大志についてどうなったのだろうか。一応デートに付き添ったのだから、結果くらいは雪ノ下と由比ヶ浜に伝えなければいけない。

そう思って井杖先輩の教室を覗いて見るが、ブラウンの髪と特徴的に指を動かしている人物は見当たらない。

「ねえ……、恵なら、今日は用事があるって先に帰ったよ」

後方から声が聞こえる。

恵って誰だろうか。多分知らない人だろうから、俺に宛てられた言葉ではないだろう。

「ねえってば」

そう思って声を無視して、教室内を見渡していると苛立たし気な声と一緒に、肩を乱暴に叩かれる。

肩にかかる頼りない感触を感じながら振り返ると、肩まで伸ばした黒髪をゆるめのウェーブにかけた先輩が不機嫌そうに立っていた。

この人、井杖先輩の友達のはずだが、名前が絞れない。美弥と加世、どっちだったのだろうか。

「ひ、ひ、ヒキガヤくんだけ？ 恵のこと探してるんでしょ？」

「まあ、そうですね」

恵って井杖先輩の下の名前か。名字が目立ちすぎるせいで、名前で顔が出てこなかったぞ。

「恵は今日は帰っちゃったから、探してるんなら無駄足になるよ」

「……そうですか」

そのまま回れ右をして部室へ向かおうとしたが、ふと頭に思いついたことがあるので口に出してみる。

「あの、先輩って運動とかやってました？」

「中学までは、バスケをやってたよ」

「……例えばバスケット素人の俺が、先輩のプレーについて上から指摘して直そうとしたら、どう思います？」

加世（？）先輩は少し顎を引きながら、上を向いて考え始める。井杖先輩の癖でも移ったのだろうか、腰に当てられている右手の、人差し指がくるくると回っている。

やがて思いついたのか、晴れやかな笑顔で先輩は言う。

「殴りたくなる」

想像以上にバイオレンスな答えが返ってきてやがった。

「そ、そうですか……」

「うん。だってムカつくじゃん。別に下手だなーとか思うのは勝手だけど、それを言葉に出すんだったら、それ相応の説得力が欲しくなるじゃん」

「それは、俺が正しいことを指摘してもですか？」

「もちろん。だってヒキガヤくんには、そのプレーが正しいかなんて、想像でしか分からないでしょ。逆に言えば、私が意味のないと思ってる指摘でも、ラリー・ブラウンが言ったら、普通に聞くよ」

先輩は両手でシユートフォームを作ると、虚空へ向かって、架空のボールを放り投げた。

その際にスカートが少し舞い上がり、引き締まった白い太ももの可視面積が増加する。

「……まあ、そうっすよね。ありがとうございます」

そう事務的に二重の意味で挨拶をして体を翻そうとすると、先輩は「何か伝言があるなら伝えとくけど」と言ってスマホをこちらに向けて振ってくる。その表情は先程と変わらないままなので、面倒見が良い人なのだろう。

「……じゃあ、明日の昼休みにでも顔を出すって言うておいて下さい」

「はいよー」

すぐにスマホに向かってメールを打ち始める先輩を見ながら、もう一度礼を言う。

「ありがとうございます、加世先輩」

もう一度礼を言うと、先輩は残念なものを見る目をして、

「私の名前、美弥なんだけど……」

「……………」

幸い拳は飛んでこなかった。

「……………では、昨日の様子を報告して頂戴」

部室に入るとともに、鋭く冷えた声を浴びせられる。

窓の外の曇空とは打って変わった、蛍光灯の青白い光が降り注ぐ部屋には、すでに雪ノ下と由比ヶ浜の姿があった。

まあ、三階に寄ってから文化棟まで来たのだから、遅くなっても仕方がない。

本と携帯に目を落とす二人を横目に見ながら定位置へと向かい、パイプ椅子に無造作に腰掛ける。

「報告つつてもな。最後まで付き添わなかったから、大志が告白したかどうか分かんぞ。一応最後に二人でどこかに行つたみたいだが……」

おまけに今日は、井杖先輩に聞くこともできなかつたから、それ以上は報告のしようがない。

「えっ、それだけ？」

由比ヶ浜が疑問符を浮かべながら首を傾げる。雪ノ下も顔を上げて、俺の目を覗き込んできた。

「何も結果だけを報告しろとは言っていないのよ。途中経過くらいは、話すことはできるでしょう？」

「そんなの言つたところで意味はないだろ。どんなにいい雰囲気でも、振られるときは振られるもんだ。だったら、報告しても意味はないんだよ」

「……そういうものなのかしら」

雪ノ下の言葉が、部室の壁へと吸い込まれていく。

部室へ行くついでに買ってきたMAXコーヒーを、一口飲む。喉に甘さが引つ掛かるのを感じながら、半分以上中身が残っている缶をテーブルの上に置く。

そうして、しばらく窓の外を眺める。すぐにでも雨が振りそうなのに、運動部は通常通りにグラウンドで活動をするらしい。遠目で葉山たちと思しき集団が、きびきびとブラジル体操をしているのが目に

入った。

「……それで、比企谷くんが目が、いつもよりも影を帯びているのは、昨日のデートと関係があるのかしら？」

運動部を観察するのにも飽きて、凶太い木の枝で羽を休めている雀を観察していると、雪ノ下に聞かれる。

「……何のことだ？」

「見るからにダウンナーな雰囲気を纏っているじゃない」

「そんなの、いつものことだろうが」

「そう言われると、そうなのだけれど……」

雪ノ下は顎に指を当ててそう言うと、雪ノ下と対面に座っている由比ヶ浜が、こちらを向いて身振り手振りで説明してくれる。

「ヒツキーっていつもだらーんってした目をしてるでしょ？ でも今日は何て言うかぼよーんっていうか、でらーんとした目をしてるって感じなの……」

でらーんって、何でそんな名古屋人みたいな例え方をするんだよ。

由比ヶ浜は平行線を作っていた両腕を下ろすと、心配そうな声を出す。

「だから、昨日何かあったのかなーって思ってた……」

そーいや今朝、小町にも似たようなことを言われたな。いつもより

も目がおかしいとか、何とか。どうして、どいつもこいつも、人の状態を目で見て判断するんだよ。

「……別に、何にもなかったぞ。井杖先輩と大志に付き添って、途中で退席して、どうでもいい話をして、帰っただけだ」

そう、本当にどうでもいい話だ。一番最初に結論が出ていて、それが嫌だから、駄々を捏ねていただけ。

そうして部室内が一段と静かになる。遠くから聞こえる運動部の掛け声と仄かに香ってくる雨の匂いが、俺たちの間を埋めていく。

何とはなしに首を巡らすと、本に目を落としている雪ノ下の姿が目に入る。

雪ノ下はページをめくる手を少し止めて、目を伏せたまま言う。

「なら、その気持ちを姿に出すのはやめなさい。本当に何にもなかったのなら、そういう風に振る舞いなさい」

「そうだな、悪い」

何故か横で由比ヶ浜が、「すごい、ヒツキーが謝った……」と呟いたが、気にしない。人のこと、何だと思ってるんだよ。

でも、言われてみればそうだ。誰かに頼る気がないのならば、そんな素振りなど見せるべきではないのだ。

そんな、俺と雪ノ下からすれば、当たり前のことをすっかりと忘れていた。どうやら自分が思っている以上に落ち込んでいたらしい。

一度思い切り背筋を伸ばして、深呼吸をする。湿った空気を肺に入れて、重くなつた空気を肺から出す。

目を瞑って肩の力を抜く。少し気だるげな、いつもするような表情を作ると、目を開ける。

……そうして、一番重要なことを思い出す。

「俺、今日は帰るわ」

「えっ、ヒツキー来たばっかだよ？」

「傘持ってきてねえんだよ。だから、雨が振る前に帰りたいんだ」

何だか感傷的な気分には陥っていたが、それどころではない。そもそもまだ雨が降ってきていないのだから、その間に帰らないと濡れ鼠になるぞ。

「だったらゆきのんとか、あ、あたしとかが傘を入れればいいじゃん……」

由比ヶ浜が少したじろぎながら言う。

「私は折りたたみ傘しか持っていないから、そもそも無理よ」

そもそも最初から入れてくれる気が無いような奴が、もってもらしい理由をつけて否定しやがった。

それに、雪ノ下と帰ったところで、針のむしろになるに決まってる。そんなのはごめんだ。

「そういうわけで、じゃあな」

「あ、待ってよ、ヒツキー」

通学鞆を肩に掛けて、由比ヶ浜の声を背に受けながら部室を出る。

このくらいの雰囲気か、やっぱり俺にはちようどいい。

その18 く比企谷八幡は不良になるく

昼休みの開始が知らされるとともに、登校前に買っておいだ総菜パンとおにぎりを口に詰め込む。

うむ、元々単品でも美味しい訳でもなかったが、一緒に食うと最悪に不味いな、これ。仕方がないのでコーヒーで纏めて流し込もうとするが、コーヒーと白米が混ざり合い、思わず吐き出しそうになるほど不味くなってしまった。

……くそ、これなら片方だけ食ったほうが良かった。

何とか飲み込んで席を立つと、教室内はだらだらと会話をしながら机をくつつけている最中だった。無秩序に動き回るクラスメイトをすり抜けて廊下に出ると、三階へと足を向ける。

二階よりも少しだけ落ち着いた雰囲気のある廊下を通り、井杖先輩のクラスへとたどり着く。開け放たれている引き戸から乗り出すようにして覗き込むと、昨日とは違いすぐに井杖先輩の姿を確認することができた。

机に腰掛けてクラスメイトと話していた井杖先輩と目が合う。先輩は一言二言クラスメイトに言うと、こちらへやってきた。

「昨日はわざわざ来てもらったのに、ごめんね。……ヒキガヤくん、お昼は？」

そう言う先輩の手首には、ビニール袋が下げられていた。どうやら昼食は弁当派ではないらしい。

「もう食べたんで、一人で食べて下さい」

一緒にご飯食べて、噂されたら恥ずかしいし……。

そんな俺のメモリアルな乙女心は知ってか知らずか、井杖先輩は「話があるんでしょ？ だったら一緒に食べようか」と言っていた。遠心力が無事に働いてくれることを祈るのみである。

「……話しやすい場所なら知ってるんで、付いてきて下さい」

「うん、よろしく」

北校舎への一階まで下り、保健室の横かつ購買の裏、つまりは普段俺が使っている昼食スポットへと行く。

昨日の帰宅途中に降り始めた雨は、夜明けとともに立ち消えてしまった。それでも空には依然として灰色の雲が蓋をして太陽を覆い隠していた。

昼休みには戸塚を筆頭に女子たちが溢れているテニスコートは、まだ地面が湿っているのか閑散としていた。

そんな暗いグラウンドが目の前にあるものの、今日のこの場所はどこか華やかだった。

「それで、話って？ ……もしかして、告白とか？」

その華やかさの原因である井杖先輩は、コンクリートで作られた階段に腰掛けて菓子パン

の袋を開けていた。

「あんたに聞きたいことなんて、一つしかないだろうが」

「まあ、そうだよ。ご飯食べちゃうから、ちよつとだけ待ってて」

到底午後を乗り切れるとは思えない量の菓子パンを、三分ほどで食べ終える。そうして先輩が紅茶を飲んで一息ついた所で、口を開く。

「日曜日、俺たちを別れてから、何したんすか？」

「別に何もなかったよ。その後には大志くんにご飯に誘われたからご飯食べて、帰り道に告白されただけ」

「何かあったじゃねえか。……それで何て返事したんですか？」

「デートした感じだ、ちよつと遠慮しておこうかなーって感じだから、そのまま伝えただけだよ」

だけって。

「ボランティア感覚で、付き合つてやればいいじゃないですか？ 一月くらい夢を見させてやれば、先輩も休みの日にタダ飯にありつけますよ」

「……ヒキガヤくん、私のことどう思ってるのよ？」

「そりゃあ、男と付き合うのに抵抗がなくて、恋愛をスイーツ感覚で食べている人とか」

「つまり、ビッチっぽいですね」と言うとしたが、だんだんと井杖先輩の目が険しくなってきたので、途中でやめる。

いや、でも本当のことだし……。

先輩はわざとらしく、大きな溜め息を吐くと、立ち上がり、鼻先が触れそうなくらいの距離へと躍り出る。

漆黒の瞳と目が合うと、微笑みかけられる。なんとも言えないむずがゆさが背筋を駆けるので、身をひねるようにして何とか視線から逃げ出した。

「一応私、男の人に対する理想は高いんだよ」

「はあ、そうっすか」

「ただ、付き合ってみないと分からない部分が多いから、そこまで好きじゃない人でも付き合うだけ」

「だから、影でビッチとか言われるんだろうが！」

噂と全く変わらねえ。

「……だったらなおさら、試しに大志と付き合ってみてもいいんじゃないですか？」

それとも、よっぽど大志とは合わなかったのだろうか。

井杖先輩は困った顔をして明後日の方向を見るが、人差し指は機嫌が良さそうにくるくる回っていた。

「それがこの前美弥に、簡単に付き合いすぎだって怒られました……。まあ、最近知らない子から親の敵でも見るような目をされたこともあったから、付き合うハードルを少し上げたの。……それで」

「それで、大志の奴は残念ながら先輩の目に適わなかったと」

「そういうこと」

大志の奴も間が悪いタイミングで出会ったというか、という先輩も控えているんだったら餌を垂らすのをやめろよ。キャッチ&リリースを地で言っているじゃねえか。

「……ちなみに、大志のどこがダメだったんすか？」

「んー？ ちよつと大志くんは私に合わせすぎかな。映画にしても、ご飯にしても、無理に合わせて欲しくないの。自分と価値観の違う人がいて、お互いに違うのを理解しながら近づきたいの」

「案外、乙女なんすね」

「そういうこと。恋に恋い焦がれて、恋に泣く女なの、私」

そう言つて井杖先輩は小さく、そして儂げに笑った。

いつの間にか野球部とおぼしき坊主の一团が、グラウンドの上でトンボをかけていた。褐色の土はまだまだ緩く、足を踏み入れれば沈み込みそうだが、それでも部活はやるらしい。

その光景をしばらく先輩と黙って見ていた。無秩序な騒ぎ声はどこか遠く、人寂しいこの場所が切り離されてしまった感覚に陥る。

「だから、君と切花ちゃんの関係とか、凄い自然で、結構憧れてたんだけど、違ったのかな？」

そのせいか井杖先輩の冗談めいた言葉は、するりと俺の中に入って

暴れまわった。ある種、不意を衝かれたような形だった。

「……何のことっすか？」

声に色を乗せないように、気をつけながらとぼける。

「私のも気になってたの、日曜日に別れた後、何があったのか」

「それは、先輩には関係ないじゃないですか」

「うん。でもあんなやり取りを目の前でやられたら、流石に気になるでしょ？」

「……」

「それに、冗談っぽく言っちゃったけど、君たちの関係に憧れてたのは本当だよ」

だから、何だというのだろう。

先輩に話したところで、何かが変わるわけではない。そもそもあれは切花の問題だ。あいつが納得をしているのだから、俺がどうこう言うべきではなかったのだ。

だから、先輩にも関係ない。

そのままむっつりと口を閉ざす。先輩はさきほどの生暖かい表情のままですら俺に近づいた。

「なら私は、関係のない君に、大志くんと顛末を語った訳じゃない。

だったらヒキガヤくんも、私に話す義務があると思わない？」

「俺はお願いして聞いた訳じゃないですよ」

「でも一回は一回でしょ？」

ちようど先輩が言い終わるとともに、校舎に重苦しいチャイムが鳴り響く。

チャイムはグラウンドから校舎まで満遍なく往復し、校舎と地面を軽く震わせ、生徒たちの足をそれぞれの教室へと向かわせた。

その音も先程までとは違った喧噪に紛れて、直ぐに立ち消えてしまふ。

慌ただしさと気だるいさが混じった風が頬を叩き、俺たちの髪を軽く揺らした。

「……先輩、お人好しって言われませんか？」

「うふふ、よく言われる」

校内の喧噪が寄せては返す波のように小さくなっていく。さえずりを交わすような静けさが辺りを包んだ。

五限までの時間はどんどん近づいているのに、先輩は一向に教室に行く素振りを見せない。そして俺も、足を動かそうとは思えなかった。

「ヒキガヤくん、教室に戻らなくていいの？」

「先輩こそ、いいんですか？」

「私は優等生だからね。一回くらい授業に出なくても問題ないんだよ」

「そうですか。俺は次の授業が思い出せないんですよ。だから、そんな不誠実な態度で授業に出るのは申し訳ないので、サボることにします」

そうして二回目のチャイムが鳴った。

「授業始まつちやったね」

「そうっすね。……授業が終わるまで暇なんで、話に付き合ってもらっついていいっすか？」

「うん、いいよ」

日差しもないのに午後の空気は暖かく、気を抜くと瞼が落ちてきそうになる。

まあだから、この後の言葉は、きつと寝言のようなものだ。特に意識をしないで、ただただ口から零れ落ちるだけのもの。

「別に何てことないですよ。あのまま帰って、自分のわがままを相手に押しつけてしまっただけです」

「……それは、あのカフェで話していた続きのこと？」

「そうっすよ。本人は平気だっけってしているのに、勝手に心配して、挙げて相手にすることを否定してしまっただけです」

大きく息を吐くように俺は言った。

言葉に出してみると、胸の奥がスツと軽くなる。話すだけでも楽になるのは、どうやら本当らしい。感情や想いには質量や輪郭はないけれど、それでも、目に見えない形でそこら中に偏在しているのだろう。

それは触れば簡単に変質してしまう弱いもので、誰かが吐き出したものを自分の中に入れてしまうだけで変わってしまう。

同じ空気を吸って、誰かと同じものを共有したと思っても、決して混ざらない。

「ヒキガヤくんは本当に、切花ちゃんのことを好きだね」

同じ場所にいる先輩は、しみじみとそう言った。

「……今の話をどう解釈すれば、そうなるんですか？」

「むしろ、他にどう解釈すればいいの？」

「いやほら、切花に勝手に俺の理想を押しつけていた、みたいな」

「それは、恋愛感情かどうかは置いて、好きだから起こることだよ」

耳を撫でつけるような先輩の声は、優しく、子守歌でも歌うような響きを帯びていた。

「好きだから、同じものを共有したいからこそ、相手が思い通りになら

ないのが許せなくなるんだよ」

「そんなことはないですよ。どいつもこいつも、友情を押しつけてきます。自分たちとは違う誰かを否定しています。それは全部好意から来るんすか」

「そう言われると厳しいけど……。でも、そう思ったほうが楽しいですよ。ラブ&ピースみたいな」

そう軽い調子で言って、井杖先輩は笑顔でピースサインを作った。

あまりに軽々しく、適当な調子で言うので笑みがこぼれてしまう。どこまでも甘く、とろけてしまいそうだ。

「でも、だったら、俺たち全員工ゴイストじゃないですか？」

好きだから理想を押しつけて、求めるから擦れ違う。自己満足を主張し合うのが避けられない。それならば、人生は悲劇的だ。

「それでいいじゃん。喧嘩になったら謝ればいいじゃん。そうやって擦れ違った先に、相手の中に自分を感じられるって、凄く嬉しいよ。自分の思い通りの他人がいたって、そんなのはきつと面白くないよ」

「難しいこと言いますね」

どこかの教室から、高低入り交じった声が漏れてくる。その声は俺たちしかいないこの場所にも控えめに届き、俺たちにぶつかって地面へと吸い込まれていった。

ここからは誰の人影も見ることができない。直ぐ近くには何百といた人間がいるのにも関わらず、感じられるのはただ一人だけだっ

た。聞こえてくる音がすべて遠い。

雲の切れ目から覗き込んだ太陽がやたら眩しくて、手を伸ばして遮る。

「……先輩」

「んー？」

続きの言葉は、冗談めいた形でしつかりと言うことができた。

「俺と付き合って下くれませんか」

「……いいよ。けど私、浮気とか二股は許さないから。というか私以外に好きな子がいる時点でギルティ」

「そうっすか。じゃあ止めておきます。罰を受けるのはいやなんで」

「そっか残念だね」

そうして俺たちは授業が終わるまで、取り留めのない話をした。決して意味のある話ではなかったが、自然と笑みがこぼれるくらいには楽しかった。

そうして教室に戻った後、由比ヶ浜から五限の授業が現国ということを知らされた。担当は勿論、平塚先生である。

……そりゃ、思い出したくないわな。

その19　　くそうして三人は始まるく

放課後は部活に出ないことを由比ヶ浜に告げて、早々に帰宅する。小町はどこかへ遊びに行っているのか、家には誰もいなかった。

そのまま二階へと昇り、部屋に入ってカバンを放り出して、ベッド仰向けになって倒れ込む。

部活に出なかったのは、何か用事があったわけではない。ただ、考え事がしたかっただけだ。

外はまだ明るいが、リモコンに、蛍光灯の電気を点ける。

何条かの青白い光が揺曳する光景を見ながら、頭の整理をする。

別に今考える必要もないかもしれない。明日か明後日か分からないが、それでも近い間に切花とは会うだろう。もし切花がいつも通りに挨拶をしてきて、俺が何か余計なことを言わなければ、今まで通りの関係が続くかもしれない。

それとも会ったときに無視されるかもしれない。……まあ、自分勝手な言葉を随分言った訳なのだから、それも仕方ない。

でも、どちらも嫌なのだ。あいつはきつとそのまま平気なのだろうけど、そのことは嫌だ。

だから考える。次に切花と会うまでに俺がどうしたいかを考えて、しっかりと行動する。

結局の所、問題の根幹は俺と切花の認識の違いだ。俺は切花には人間関係を大事にして欲しくて、切花はそんなことがなくてもいいと

思っている。

俺と切花の、どちらが正しいのかは分からない。自信を持って正解を出せるほど、俺の人生は周りに友達がいなかったし、喧嘩別れだったことは無い。

自分自身が知らないものを、きつと美味しいからと言って他人に強制してしまったのだ。

そもそも理想を押しつけるだけでも駄目なのに、さらに追加で過ちを犯してしまった。届けたいものがあるならば、もつと説得力を持たせなければいけなかった。その努力をしなければいけなかった。

ならば俺らしく、そして俺だからできる形で伝えよう。

……では、どうして俺は切花に寂しいと思つて欲しかったのだろうか。いや違う、俺は切花のどういった風景が見たいのだろうか。

そう思つた時に、初めて切花と出会つた時の光景が思い浮かんだ。続いて切花のじいさんが死んだ時、そして俺が中学三年の時の切花の表情、そしてついこの前の切花の表情。

それらを思い返す度に胸の奥底が疼く。甘さをほろ苦さが口の中に満たされるのを感じながら、ただただ俺は考えた。

青白い光と蜂蜜色の夕日が複雑に混じり合い、そして夕日が消え去ってしまう頃ようやく、俺は体を起こした。

思いついたものは極めて単純で、陳腐で、ありふれたものだった。でもきつとこれが俺の答えなのだろう。

そうたどり着いたとき、二人の少女の顔が同時に浮かぶ。わずか二ヶ月の付き合いで、部活仲間以上も以下もない二人。でもきつとその二人には真つ先に、話さなければいけないだろう。

それが俺のやりたいことなのだから……。

「あつ、ヒツキー……」

「あら、今日は来たのね、比企谷くん」

深呼吸をして思い切り扉を引くと、由比ヶ浜と雪ノ下の姿が目に入った。

授業が終わった後も、教室でぐだぐだと話す内容を吟味していたので部活に出るのが大分遅くなってしまった。

心臓の鼓動がだんだんと早鐘を打ち始めるのを聞きながら、定位置に腰を落ち着ける。

普段と何も変わらないこの場所は、四月に比べると大分暖かくなってしまった。未だ衣替えを行っていないため、冬服の俺たちにとって少し暑いくらいだ。

「それで、川崎くんの件はどうなったのかしら」

雪ノ下の言葉で、口の中に溜ったものが霧散した。

そういや、完全に大志のことを伝えるのを忘れてた。昨日はそのまま帰ったし、先輩は先輩でわざわざ聞かれなきや報告しなきさそうなの

で、雪ノ下たちは知らないのか。

「大志は振られたぞ。先輩曰く、付き合うにはちよつとレベルが足りないそうだ」

「そう。なら川崎くんにも一度話を聞かないといけないわね。このままお依頼を続けるかどうか、確認しないと」

「そういやそうか。まあ、諦めるかどうかは、あいつの気持ち次第だろ」

「そうね……」

大きな息を一つ吐く。何でも頭の中で反芻した言葉だ。

「二つ、話がある」

「どうしたのヒツキー、凄く真面目な顔をして？」

真面目な顔か、確かにそうなのかもしれない。今から言うことは、部活だとか依頼だとか、クラスメイトだからとかは関係ない。

ただ純粹に、比企谷八幡個人として、雪ノ下と由比ヶ浜に言う言葉だ。だから怖い。自分を晒すことは、相手に否定されるかもしれないということだから。

「……何かしら？」

本のページを繰る手を止めた雪ノ下は、落としていた視線を上げる。由比ヶ浜も椅子を向けてこちらをじっと見ていた。

「俺は、切花のことが好きだ。たぶん、ずっと前から」

声が震えそうになりそうなのを必死に押さえながら、丁寧に口に出す。言葉にしてみれば、思ったよりもずつとしっくりきた。

「……それを、私たちに言う必要があるのかしらっ？」

雪ノ下は澄ました顔でそう言った。由比ヶ浜は何も言わない。

由比ヶ浜から何かしらの感情を向けられていることは、知っていた。

その気持ちをも、どういうものか断定することはできない。それを判断するには俺の人生経験は短く、それに反比例して濃いわけではない。

何となく想像はしているものの、由比ヶ浜の優しさを、思春期の男子特有の過剰な自意識で勘違いしているのかもしれない。

勘違いならそれでいい。俺が勝手に舞い上がっただけなら、単に恥ずかしい思いをするだけで、青春の失敗として記憶されるだけだ。

だがもし由比ヶ浜の気持ちがあ俺の想像通りだった場合、やっぱりけじめをつけなければいけないのだと思う。それはただの自己満足で、由比ヶ浜を傷つけるだけかもしれないが、それでもしつかりと言っておきたい。

「必要かどうかは分からない、それでも言っておきたくてな」

由比ヶ浜はその小さな手をぎゅっと握って、俯いていた。ここからでは僅かしか見えないが、髪の間から覗いた瞳は潤んでいた。

少しの沈黙の後、顔を上げた由比ヶ浜は苦しそうな笑顔を表情に張り付けたまま、俺に尋ねる。

「……知ってたよ。だってヒツキー、朱音ちゃんにだけ、距離が近くて、自然に視線を追ってるんだもん。……でも、どうして今、そんなことを言うの？」

「はじめをつけたかったんだ。色々見つめ直して、やり直したくなかった」

誰かに理想を重ねて押しつけるのは必然だと、井杖先輩は言った。それによって擦れ違うのも当たり前だと。

でもあの人は一つだけ大切なことを言い忘れていた。

理想を押しつけていいのは、理想を追って、努力している奴だけだ。

先輩は自分が求めて努力するのを当たり前だと思っているから、そんなことを言わなかったのかもしれないが。

「どういふこと？」

「それが二つ目の話になるんだが……」

用意していた言葉が急に途切れる。心臓の音は雪ノ下たちに聞こえてしまうと思ってしまうくらいに大きく、そして自傷をするかのようによく叩いていた。

……ああ、やっぱり怖いのだ。拒絶されることが、嫌われることが。大多数の人間から受けても何も影響を及ぼさないそれは、親しい人間からのものになると途端に刃が鋭くなる。

それでも、何とか絞り出す。たとえ痛みを覚えても、嫌われるかもしれないなくても、俺が望んでいるものなのだから。

「……なあ由比ヶ浜、それに雪ノ下、俺と友達になつてくれないか？」

切花に変わって欲しいなら、俺も少しだけ変わろう。欲しいものを、欲しいとねだろう。この場所は気を抜くと眠ってしまうくらいに居心地が良い、だからちゃんと言葉に出して求める。

視界がぐにやぐにやと揺らいでいる。座っているのに平行感覚がおぼろげで、世界がゆっくりと回っている。それでも、二人の視線が突き刺さる。

「……ずるいよ。ヒツキー。そんな風に言って欲しいことと、嫌なことを一緒に言うなんて。すつごく自分勝手」

「……悪い」

幾許かの静寂。それでも俺にとっては果てしない沈黙が訪れた。

ああ、本当に俺は自分勝手だ。由比ヶ浜の気持ちをないがしろにして、自分の気持ちを押しつけている。

これから由比ヶ浜の口から放たれる言葉を想像すると、凄く恐ろしい。完全に自業自得で、自分勝手に振る舞った人間の末路だ。

だが、俺の思い描いた言葉は舞い降りてこない。

由比ヶ浜はことごと椅子を俺の方へ一歩分近づけると、ぎこちないが、それでも本当の笑顔を浮かべて言った。

「そんなことを言われたら、嬉しくなっちゃうじゃん」

「……………」

由比ヶ浜はもう一歩分椅子を近づけた。

「一つだけお願いがあるの」

「できる限り叶えやすいやつで頼む」

「……………ちゃんと、朱音ちゃんに告白して。そしたら友達になる」

……………ああ、こいつは本当に良い奴だ。良い奴すぎて、もし違う形で出会っていたら、絶対に好きになっているくらいだ。

「……………結果は随時報告する」

「うん、友達なんだから、恋バナくらいしよ」

嬉しさがだんだんと込み上げてくるが、まだ喜ぶには少し早い。俺は由比ヶ浜だけではなく、雪ノ下とも繋がりたい。

その雪ノ下は、何も言わず俺たちの会話ずっと見ていた。普段通りの澄ました顔で、流れるような黒髪と陶磁器のような白い肌を持った彼女は、この場においても美しく、鋭利な印象を振り撒いていた。

由比ヶ浜と頷き合うと、自然と俺たちの視線が雪ノ下に集まった。

雪ノ下は視線が集まったことに一瞬困惑し、少しだけ上を向いて考えたのちに言った。

「私は、友達と呼べる程、比企谷くんのことを知らないわ」

「……だな」

「俺たちは互いの名前と、大まかな性格くらいしか知らない。共有している時間もほんのわずかだ。」

「ゆきのん……」

由比ヶ浜が悲しげな声を出す。

やはりこればかりは、時間が必要なのかもしれない。僅か二ヶ月足らずで友達になってくれる由比ヶ浜が飛び切りに良い奴で、雪ノ下が普通なのだ。むしろいつもの毒舌を吐かれなかっただけでも、上手くいった部類だろう。

「だから、知り合うところから始めましょう。今この場であなたの友達になることはできないけれど、しっかりとお互いのことを知ってから、築いていきましょう」

でも雪ノ下はしっかりと気持ちを受け入れてくれた。その先を考えてくれている。それだけでも、今の俺には十分過ぎるほど嬉しかった。

「ああ、よろしく頼む」

そうして今日、俺は大きな一歩を歩き出した。

知らないものを探しに行こう。おぼろげで、今まで手に入らなかったものだけでも、その喜びを、嬉しさを、しっかりと理解して、誰かに伝えられたらと思う。

「では、行きましようか」

俺がそんな干渉に浸っていると、雪ノ下はそう言って席を立ち始めた。

「行くってどこにだ？」

「喫茶店か、ファミレスよ。あそこなら高校生は十時まで居られるじゃない？ 私たち全員がお互いのことを話すには、十分な時間よ。そうでしょう、由比ヶ浜さん？」

「ゆきのん……。うん、そうだよ！」

由比ヶ浜が、今度は嬉しそうに言った。

雪ノ下は立ち上がりつつ、俺と由比ヶ浜を一瞥すると、晴れやかな笑顔で言った。

「比企谷くんと切花さんのことについても、しっかりと聞かせて頂戴ね」

こうして俺は、少しだけほろ苦い後味を胸に残しながらも、人生初の友達を二人も同時に作る事ができた。

……。それでもまさか、日付を跨ぐまで話すとは思わなかったな。

その20　　くそうして二人はこの場所に帰ってくる
　　)

由比ヶ浜と雪ノ下と友達になった二日後の放課後、まだ太陽が高く
にそびえ、この町が朱色に染まりきららない中を足早に駆けていく。

この時間帯ならば、切花は小町と一緒に下校中だろう。ならば大ま
かなルートは想像がつく。

走っているうちに自然と息が上がっていく。だらしく生きてき
た俺の体が悲鳴を上げ、心臓の鼓動がどんどん早くなっていく。だが
それが心地いい。

勿論、この先に対する不安もある。それでも心の中からは、不安を
上書きする事実がどんどん出てきていた。それは久しぶりに切花と
話すことができることだったり、数日前の個人的に良いニュースで
あったりするが、そんな小さなことが、自分の支えになっているのが
何だか面白い。

十分程度走って、母校へと続く路線へと入る。そうしていくつかの
交差点を通り過ぎ、一つ右に折れた所の交差点で足を止めた。

中学校から帰るには、多少寄り道をするにしてもここを通るのが一
番だ。それこそ駅の方面まで出ることがなければ、あいつらはここを
通るだろう。

手近な擁壁に背中を預けて、息を整える。制服越しにコンクリート
の冷たさを感じながら、道行く人間の顔を覗いていく。ただ、見覚え
のある制服姿を何回か通り過ぎるだけで、切花と小町の姿を見ること
はできない。

少しこの場所にくるのが遅かっただろうか。授業が終わってから直ぐに学校を出たものの、ラグはどうしてもあるわけだから、既に家に帰っているかもしれない。

引き返すことが脳裏を掠めるが、足は棒のように動かない。しばらく撫でつけるような風を浴びながら立ち尽くしていると、少しだけ光に橙色が混じり始めたころにようやく、身長差のある二人組が歩いてくるのを確認できた。

透き通る午後の光の下、切花の肩まで伸びた黒髪が風に揺らさている。幾条の髪が舞い上がり、その一本一本が光を浴びて、金色に輝いて、切花の端正な顔立ちを一層引き立てていた。

まだ遠目だからだろうか、二人は俺に気付くことなく歩いていたが、交差点から五歩程度離れた距離で、ようやく俺の姿を認めた。

「……………よお」

できる限り自然に、気さくな声色で話しかける。

「お兄ちゃん……………」

「どうも、ご無沙汰しています」

切花は一瞬だけだじろいだ表情をしたが、すぐに堅苦しい挨拶と小さな会釈をして立ち止まる。

ご無沙汰、という程でもないんだがな。日曜日から数えれば五日しか経っていない。小町と遊ぶときに家に来ないことも多々あるため、この程度顔を合わせないことは、よくあることだ。

……それでも、これまでで一番長い五日間だっただろう。

切花の視線と絡み合う。だがそれも一瞬で、すぐに切花は気まずそうに顔を逸らした。そのことに少し傷つきながらも、となりで不安そうにしている小町に声を掛けた。

「なあ小町、少し切花を借りていいか？」

「うん！ いいよ！ できるだけ早く返してね」

小町が即答すると、「あ、あの二人とも、私は私のものですからね」という空しい反論が聞こえてくる。完全に正論であるが、似たもの兄妹は見事に無視をして、二人で目を合わせていた。

家族特有の心配するような感情が小町の目に浮かんでいる。それに返すように不遜に笑ってみせると、小町も顔にも笑顔が浮かぶ。

そのまま小町は体を翻して切花を見据えると、「じゃあ朱音ちゃん、ちようどいいし、またね」と言った。何が丁度いいのだろうか。

「あ、うん……。またね」

切花の中途半端な返事を満足そうに受け取った小町は、俺がもと来た道へと進み、そして少しだけ色づき始めた住宅街に消えていった。

小町が完全に見えなくなったところで、一步踏み出して切花に近づく。切花は困ったように眉を寄せた。逡巡した様子で何度か口唇が動いたが、言葉にはならず、すぐに自動車の騒音に紛れていった。

「お久しぶりです。八幡さん」

切花は迷った挙げ句、今度は少しだけ砕けた挨拶をした。

五年前までは毎日のように歩いていた通学路は、俺が高校に上がるまでの間に大分様変わりをしていた。

かつては空き地が多く物寂しさを感じさせていたこの近辺は、今は開発されてその大部分が画一的な住宅が並んでいる。

ただのアスファルト舗装だけだった道も道幅が広げられているとともに、煉瓦敷きの歩道と曲線の多い街灯、街路樹などが新たに設置され、昔と同じ場所とは思えない程賑やかになっている。

「あ、あの、八幡さん。どこに行くんですか？」

隣を歩く切花がおずおずと聞いてくる。

「いや、ただこの辺りを歩きたかっただけだ」

「……そうですか」

切花の歩みはいつもより少しだけ遅く、自然と俺も歩く速度が緩まる。

だんだんと船を漕ぎ始めた太陽が世界を鮮やかに染め始め、それに伴い人影も伸びていく。

揺らめく影を踏みながら、一番始めに言おうと思ったことを口に出す。

「……この前は悪かった。自分勝手に言い過ぎた」

「いえ、私のほうこそごめんなさい。ちよつと感情的になっちゃいました」

「何でお前が謝るんだよ」

それでも真面目な顔をして、「いえ、私も謝っておきたいんです」と言うので、仕方がないので受け取る。

変に律儀というか、昔からよく分からない所で謝るんだよな、こいつ。

新興住宅地を抜けると、一転変わって田園風景が見え始める。とはいいつつも小さな畑と田圃だけだ。子供の頃はやけに広く感じたものだが、こうして成長すると大分小さい。

「ここはあんまり変わらないな」

「そうですね。でも畑や田圃を潰して家を建てるのも、風情がないですよ」

「そうか？ 発展して綺麗になるならいいだろ」

「発展したって、良くなったと思ったのは新しく住んだ人だけかもしれないですよ。もしかしたら、元々の住人は迷惑だっしてしてるかもしれません」

「……」

橙色が辺り一面に染まっていくと同時に、重く硬い雰囲気満ちて

いく。

口の中が乾いていくのを感じながら、感情的にならないように言葉を頭の中に浮かべていく。

「……なあ、一人でいて寂しくないのか？」

そうして、初めて話したときと同じ問いかけをする。

足を止めた切花は、瞳に猜疑と警戒の色を浮かべ、探るようこちらを覗いてくる。その瞳が少し前のデートのときと良く似ていて、背筋がふるえる。

しばし見つめ合ったあと、切花の顔が平時のものに戻り、口を開いた。

「……はい、寂しくないですよ」

その表情はやっぱり、あの時と変わらなくて、自然と胸が締め付けられていく。

「元々そうなんです。誰かと一緒にいるのでも、一人でいるのも、あんまり変わりがないんですよ、私は」

「……そうか、元々か」

「ええ、元々です」

どこか内緒話をするように、微笑みながら切花は言った。

元々ならば仕方ない、俺だって自分の性格を変えるなんて到底思っ

ていない。せめて、友達くらいは作ろうと行動しただけだ。

ただ、その切花の言葉を聞いて、俺は自分の中に渦巻くものを改めて確認した。

「……なので」

「なあ、切花」

「えっ、……あ、はい」

言葉を遮られたのにも関わらず、律儀に切花を返事した。ただ、少しだけ不満が表情には残っており、口を尖らせている。

その顔を見て、鼓動がどんどんと激しくなっていく。ただ、それは緊張ではなく、胸が弾んでいるからだ。

……断られるかもしれない。でもきつと、俺はこの言葉をずっと切花に言いたかったのだ。

「俺はお前が好きだ。何があろうと独りにさせないから、ずっと側にいさせてくれ」

俺は、切花に何が何でも幸せになつて欲しいわけではない。もちろんその気持ちも間違いなくあるが、それでも一番に想うことは別にある。

俺はただ、切花が独りになつてしまふ光景が見たくないんだ。

切花がそのまま、誰かと一緒にいるのを求めなくても、変わらなくても、ただ側にいたい。

「……っ」

俺たちの間を悪戯な風が通り抜ける。

切花はぱちくりと瞬き、それこそ鳩が豆鉄砲を食らったかのように目を丸くしていた。徐々に頬が赤くそまり、ぎゅつと手を握って必死に何か堪えるように、体を震わせていた。

それでも堪えきれなかったのか、口唇が動く、

「あははははっ！」

と堰を切ったかのように大笑いし始めた。

……おい、ちよつと待て。今は笑う所なのか。「何言つてんだ、こいつ」みたいな目で見られるのまでは覚悟していたが、こんなリアクションは完全に想定外だ。

普段からは考えられない程の大きな笑い声に、道行く人々が何事かといった風に、じろじろと見てくる。しかし、切花はそんな無遠慮な視線にもおかまいなしに、体をくの字に曲げ、本当に可笑しいといったように笑い続けている。

そのまましばらく待っていたものの、切花の笑いは一向に収まらな
い。むしろ悪化して、腹を手で押さえている程だ。

「おい、いつまで笑い続けるつもりだ？」

「だ、だって、ほとんどプロポーズじゃないですか、しかも昭和の匂い
がする。……ふふっ」

「……悪かったな、古くさくて」

二日間真面目に考えた結果がこれである。いや、自分でも臭い台詞なのは分かってるんだよ。

「ああ、いえ、ごめんなさい。茶化しているわけではないんです」

切花はようやく笑いを堪えて、姿勢を正して背筋をぴんと伸ばす。そうして上がっていた口角を元に戻して、一瞬だけ表情を和らげると、

「……でもその古くさがさが、私はとても好きです」

これまでで一番眩しい笑顔で、そう言った。

これまでとは全く違ったものが胸の中に広がっていく。それは甘酸っぱく、胸を痛いほど叩いてくるくせに、どこかむず痒い。そのむず痒さを噛みしめながら、やっぱり俺はこいつのことが好きだということに改めて自覚する。

その切花は先程までとは打って変わって楽しそうに笑っている。肩を揺らしながら小さく、「プロポーズだ、この人馬鹿だ」と呟いて、口の中をくつくつさせていた。

ちくしょう、馬鹿で悪かったな。

ただその楽しいげな表情も長くは続かず、何かに気付いたように、切花ははっと真面目な顔を作ると、おずおずと聞いてくる。

「でも、いいんですか？ 私はこのままです、きっとあなたの望むような

人にはなれないと思います。もし八幡さんがいなくなってしまうても、私は寂しいと思うことができないかもしれないかもしれません」

こいつは本当に、何というか。深崎くんに告白されたいと思ったりと、自分については本当に理解がないな。

「あのな、俺はお前がいなくなったら寂しいんだよ。だから安心しろ、お前が嫌がらない限りは、手を離したくないつもりだぞ」

「ふふっ、ストーカーみたい」

あまり否定できねえな。

でも思うのだ。切花が誰も求めなくて、そして周りが切花を求めなくても、俺だけは側に居たいと。傲慢で、単なる杞憂かもしれないが、やっぱり俺は切花が独りであるのが嫌だから。

「それにな、お前の澄ました顔は病的に綺麗なんだよ。……だから、たまにはそんな顔を覗くのも悪くないと思っただけだ」

「……そうですか」

切花は硬い顔で若干上擦りながら言った。

否定してしまっただが、俺は切花が一人でいる姿を見て、好きになっってしまったのだ。全く我ながら矛盾しているが、だからこそその部分もきっちり受け入れようと思う。

「……それで、返事を聞いてないんだが」

「そうですね」

そう言つて、切花は胸に手を当てて、酩酊したように体を揺らす。細長い指がタクトのように振られると、少し先の夏を感じさせる風が辺り一帯を包み込んだ。

切花は優しく微笑んで、唄うように言葉を紡ぐ。

「では不束者ですが、よろしくお願いします」

「なんか、嫁に行くみたいだな」

「誰かさんが、プロポーズみたいな告白をするからです、……つよ」

切花は嬉しそうに手を繋いでくると、「では、帰りましょうか」と言つて歩き始める。

その柔らかさと重さを腕に感じながら、黄昏に思う。

できる限り切花の人生を楽しみましょう。

馬鹿みたいなことで笑つて、素敵なことで喜んで、面白い物を楽しんで。

嫌なことだつて色々あるだろうけど、それでも誰かと一緒にいることの味わいを、切花と一緒に見つけていこう。

……その果てに切花がそのままだったとしても、この小さな手だけはしっかりと握つていこう。

その21　　二人分の重み

切花と付き合い始めて一つ週を跨いだ日曜日、駅に向かって自転車を漕いでいると前方にしっかりとした足取りで歩いてくる切花が目に入る。

時刻はまだ十時を過ぎたぐらいのため、六月なのもあってか意外と風が涼しい。これが午後には突っ立っているだけで汗が噴き出るほど、津差が増してくる。そのため早い時間のうちに用事でも済ませておこうと思ったのだが、どうやら切花も同じ考えだったらしい。

少し反応が遅れる形で向こうも俺に気付いたのか、切花は微笑みながら会釈をすると足を早めた。

そのまま進み、横断歩道を渡った所で鉢合わせになったところで自転車を降りて声を掛ける。

「よう」

「おはようございます、八幡さん」

淡いピンクの花柄が施されたショートミニのワンピースに、白いカーディガンを羽織った切花は、少し恥ずかしげな笑みを浮かべると、するりと俺の隣に並ぶ。

流石に大分暑くなってきたのか、切花の格好も薄着になってきている。プリーツの端からすらりと伸びる生足がやたら眩しく、思わず視線が下に向いてしまう。

とりあえずは行人の邪魔にならないように道路の端の日陰に身を寄せて、一息ついたところで口を開く。

「どこかに行ってたのか？」

「はい、少し寄りたい場所があったので。本当は先週の土日に行こうと思っていたんですけど、ほら、色々バタバタしちゃったじゃないですか？」

「……まあな」

告白をした当日、由比ヶ浜と雪ノ下には結果の良し悪しに関わらず報告しようと思っていたので、とりあえずはメールで報告した。

細かいことは週が明けた部活で礼を含めて伝えようかと思っていたのだが、恐ろしい速度で二人から、すぐに俺と切花から直接聞きたいという旨の返信が来た。俺の休みの予定なんて大抵は決まっているのに切花に確認を取ると、向こうも空いているので、土曜を使つて由比ヶ浜と雪ノ下に挨拶をしたわけである。

ぶつちやけ俺が会話に参加しているのは本当に序盤だけで、三人の女子会を眺めているだけだったのだが。ただ一つ言えることは、人がどういう告白をしたなんてかは、興味津々で聞くものではないということである。あれ、本当に恥ずかしいから。

そして日曜は小町がデートと称して切花を一日どこかに連れ去ってしまった。まあ、小町と切花が仲良くするのは、俺としても願ってもないことなので、そのまま見送った次第である。

「八幡さんこそ、これからどこかに行くんですか？」

「ああ、ちよつと本でも買いに行こうと思つてな」

そういえば五月にも、似たようなやり取りをしたな。まあ、俺が外出するなんて、買い物くらいしかないわけだから仕方がない。

「だったら丁度いいですね。八幡さん、今からお爺ちゃんの家に行きませんか?」

「別にいいが、何でだ?」

あの家には、切花のじいさんが死んでからは足を踏み入れていない。今は誰も住んではないが、時々近くを通ってみても荒れた様子は見られなかったので、おそらくは絹絵さんが手入れをしているのだろう。

切花はこちらを伺うように控えめに覗き込むと、言葉を継いだ。

「今までは固定資産税とか色々な事情で、家をそのままにしていたんですけど、この度土地の買い手が見つかりまして、取り壊すことにしたんです」

できれば固定資産税よりも、その他の事情を聞きたかったが……。いや、固定資産税も至極全うな理由だけれど。

それにしても、じいさんの家が無くなるのか。小学校の頃に過ごした場所だけに、胸の中がどこか欠けてしまう感覚に陥る。それまであったものが無くなるというのは、人や物にかかわらず大きな影響を与えるものだ。

「それで遺品を整理していました……。なのでもしよかったら、書齋にある本で八幡さんの好きな本があれば、是非貰ってもらいたくて」

「貰えるのなら貰うが、けどいいのか?」

「はい、本はやっぱり人に読まれるものなので。知らない人よりも、できれば八幡さんや小町ちゃんに読んで欲しいんです」

「そうか、なら貰っておく」

確か日本文学以外にも、海外文学や哲学系も割と揃えてあったはずだ。小学生の頃は宮沢賢治や夏目漱石などの読みやすい本ぐらいしか読んでいなかったが、この年になればもう少し読める本もあるだろう。

確か三島由紀夫がかなり揃えられているので全部頂こうかと考えていると、切花の指に違和感を覚える。

「指、どうかしたのか?」

「……これですか?」

細長くすべすべした指が目の前に差し出される。べたべた触るの憚られるので少し離れて見てみると、白い人差し指の先端に絆創膏が貼られていた。

女の子らしい可愛げのあるものではなく、薬局で売られているような不無骨なもののだが、それが切花らしくて少し可愛い。

「ちよつと火傷をしてしまいました。でも軽い火傷なので、大したことありませんよ」

「そうか、気を付けろよ」

「はい。ちよつと馬鹿みたいな失敗だったので流石に反省しました。次はないので、安心して下さい」

少し晴れ晴れとした表情で切花は言った。

大方料理でもしている時に失敗でもしたのでだろう。そういえば小町と一緒に料理を始めた頃は、二人と小さな火傷や切り傷は時々ついてたな。

最近は大分安定したのだが、時々はこんなこともあるだろう。俺だって、お湯を捨てるときに失敗することがあるわけだし。

「……おい、ならじいさんの家に行くか」

「はいっ」

切花が返事をしてそのまま軽やかに歩き始めたので、腕を掴んで止める。

「……おい、ちょっと待て」

手の平から切花の肌の柔らかさと体温の温かさが伝わりどきまぎしている、切花は首を傾げながら振り返る。

ちょうど見返り美人のような構図になり、切花の瞳と絡み合う。すると気恥ずかしさどが頭に上ってきて、切花の顔が見られなくなり思わず目を逸らしてしまう。

「どうしたんですか？」

「……ま、まあ、なんだ。じいさんの家ってここから少し距離があるだろ？」

「はい、ちょっとですけど」

切花はいまいちピンとこないのか、疑問符を浮かべながら生返事をした。腕を振り払わないので、ぽつんとしているので本当に俺が何が言いたいのか分かっていないらしい。

……ああくそ、どうしてこいつはこういう時だけ察しが悪いのだろう。

少し声の上擦りながら、明後日の方向を見ながら言う。

「だから、あれだ。切花が荷台に乗っていけば歩くよりも早く着くからな。……まあ、乗ってけ」

言った瞬間に火が出るほど顔が熱くなっているのが分かる。似合わないセリフだが、せつかくこういう関係になれたのだから、これくらいはしても罰は当たらないだろう。

始めはぼかんとしていた切花であったが、やがて真夏の青空のように綺麗に笑うと、「では、お邪魔します」と一言掛けてから、控えめに荷台に腰掛けた。

いつもより重いペダルを踏み、自転車を漕ぎ始める。梅雨らしい湿った風に顔に当たる。首を巡らしてちらりと後ろを見てみると、切花は手で髪を押さえながらも、心地良さそうにしていた。時々バランスをとるように服を引っ張るのが少しだけくすぐったい。

見慣れた町並みが素早く流れゆく中、背中の切花が透き通った声で呟いた。

「八幡さん。そういえば、一つ言い忘れていたことがあるんです」

「なんだ？」

「案外私、和服が似合うんですよ？」

「お、おう……」

どう返していいか分からず、中途半端な返事になってしまう。そもそも切花は黒髪が良く似合うのだから、和服が似合うのは当たり前だと思っただけだ。

ただ切花は俺の返事を介さずに、何が面白いのかくすくすと笑いながら俺の背中に頭を預けてくる。

……まあ、来月くらいに夏祭りか花火大会にでも行って、切花の浴衣姿でも拝むことにしよう。

見上げた空には所々に梅雨の雲が浮かんでいる。風に流された鱗雲が太陽の縁にかかり、染み込むように浸食していくと焼けるような日差しが遮られ、ぬるくじめじめとした感覚が襲ってくる。

梅雨が明けるのはまだまだ先で、夏になるのはもう少しだけかかりそうだ。

切花朱音

幼少期　　くモノクロフィルムの記憶く

ぴかぴかに磨かれた自動ドアをくぐり抜けると、煌びやかな世界が私を出迎えました。

古めかしい装飾が施された照明から目を細めるほどの鮮烈な光が溢れ出し、フロア一帯を染め上げています。整然と陳列された高級そうな洋服や、ガラスケースに入れられた指輪やネックレスは、幼い私が見たことがないくらいお洒落なもので、それがあちらこちらに並べられています。

何よりも私を驚かせたのは、川の流れのように常に絶えることない人の数でした。そしてその誰もが、近所のおじさんや、幼稚園の先生よりもずっと大人びていたのです。そのせいか私の手を握る両親の手がいつもより逞しく見えて、何だか大変な所に来てしまったのだなと、私はしみじみ思っていたのです。

……そうして私が初めて訪れた百貨店は、新鮮な喜びと未知への興奮で満たされていたのでした。

当時の私は百貨店かどういふ場所か知りませんでしたし、両親からは大きなスーパーとしか聞いていなかったのも、もつとこじんまりとしたものを想像していたのです。

そのため私は、頭の中に思い描いていた景色と目の前に広がる景色の差に大層喜び、困ったように笑う父と母の手を引っ張りながら、百貨店の中を回ったのを良く覚えています。

父の友人への贈り物を買うために百貨店に来たのですが、両親はそ

の予定を後回しにして様々な場所へと連れて行ってもらえました。

それは不思議な光沢をした万年筆を取り扱った文具屋であったり、普段着るよりもずっと上等な子供服や、やたら凝った仕掛けの世界各国の玩具を売っているお店であったりと、それはもう面白いお店ばかりでした。

もちろん何一つ買うことはなかったのですが、それでもただ見て触っているだけでも十分に楽しく、それこそ目を輝かせながら一つ一つのお店を堪能していました。

私が一通り回り満足し、いよいよ両親の買い物のために紳士服売場へと向かったところからです。

あの頃の私は好奇心旺盛な子供の例に漏れず、目新しいものにはふらふら吸い寄せられてしまうという厄介な性質を持っていましたので、ふと両親が目を離れた隙に、また別のお店へと足を運んでしまったのです。

そのまま何店かを回りました。全く知らない、それでいて宝石箱のようなこの場所は、私を退屈させることなく煌びやかな世界へと導いていったのです。

そうして私がスポーツ用品売場から飽きて出たとき、ようやく私は、自分が両親とはぐれてしまったと分かりました。

どうやってここまで来たのかは覚えていません。何度かエスカレーターを上り下りしたことは分かっていますが、私が今何階にいて、そして紳士服売場が何階にあったかなんては全く覚えていなかったのです。

不思議と慌てることはありませんでした。一人になったことで、これ幸いにと先程訪れたお店をもう一度回ることも考えましたが、改めて考えると後ろ髪を引く程のものではなかったため、その場に留まることにしました。

とりあえず近くのベンチへと座りました。木製の、ワックスをふんだんに使って磨かれたベンチは背もたれがなく、座り心地があまり良くはありませんでしたので、お行儀悪く両手で頬杖をつきながら座っていました。迷子になったときは無理に動かずその場に留まったほうが良いという幼稚園の先生の教えを、ようやく思い出したからです。

特にすることなど無かったので、目の前を通り過ぎる人たちを眺めながら時間を潰しました。

腰が少し曲がった老夫婦、香水とコロンの匂いを漂わせる年の離れた男女、姉弟を引き連れた親子と様々な人が通り過ぎました。そして誰もが大なり小なり口元に笑みを浮かべて、頬を緩めているのです。

子供ながらに素敵な場所だと思いました。

きっとこの場所は誰でも幸せな気持ちにしてくれるところで、ここに来る人たちはこの温かな気持ちを求めて、ここを訪れるのでしよう。

そんなことを考えていると、見ているだけの私でも何だか嬉しい気持ちになつて、きつとあの人は美味しいものを食べたからだとか、あの子はずつと欲しかったものを買ってもらったのかもしれないとか、そんな想像をしながら自然と口元に笑みを浮かべていました。

しばらく時間を潰していると、遠くから両親の声が聞こえてきま

す。その声に幾らか切迫感が混じっていたのですが、そんなことに全く気付かず、すぐに私は声が響く方向へと走っていききました。

私はこの感動を両親に伝えたかったのです。こんな素敵な場所に連れてきてありがとうと、ただ言いたかったのです。でも小さい私にはなかなか感謝の言葉は浮かんでこず、ごちゃごちゃと頭の中をひっくり返しているうちに、私は両親の元へと駆けつけたのです。

両親は私の姿を見つけると、大きな安堵の息を吐いて安心した表情になりました。そして私が二人にたどり着くと、私が何かを言う前に、母は私を思いきり抱きしめたのです。

正直に言うとう母の抱きしめかたが強く少し痛かったのです。ただそんなことよりも私の喜びをどうにかして両親に伝えようと言葉を探していたら、母が魔法の呪文を紡ぎました。

「二人にできてしまったごめんね。寂しかったでしょう？」

その言葉の意味はよく分かりませんでした。それでも母の腕の中は温かくて心地がよく、一人で歩き回って疲れていたこともあって、すぐに私はその幸福感に包まれながら眠ってしまいました。

……それが私の思い出せる一番古い記憶です。

こんな私が私であった、最初の時間です。

幼少期Ⅱ 　　く太陽の光く

幼稚園の年長に上がると、母が第二子を身ごもりました。桜が散りきる間際、一枚だけ取り残された花びらが、生命の息吹を感じさせる新緑に囲まれて物寂しく揺られていたころです。

父と母と三人で、休日に公園に遊びに行っていたときです。その週は両親がやけに機嫌が良く不思議に思っていたのですが、木陰で休んでお昼ご飯を食べていると母が言いました。

「朱音、あなたお姉ちゃんになるのよ」

私はそれまで、あまり弟や妹が欲しいとは思ったことはありませんでした。

もちろん同じ幼稚園には兄弟や姉妹で通っている子供達はいて、仲が良くて楽しそう、くらいには思っていたのです。しかしそれはガラスケースの向こう側から眺める程度の感覚で、決して羨ましいわけではなかったのです。

しかし実際に弟が出来るのかと思うと、私は何だかとても尊いものを手にした気持ちになり、まだあまり膨らんでいない母のお腹を触って、「こんにちは」と語りかけました。

それからは慌ただしい日々が過ぎていきます。

祖父は二人目の孫が生まれると聞くと、嬉しそうに目を細めて「大事にしなさい」と言いながら、私の頭を撫でました。祖母に先立たれたからは一人暮らしをしている祖父は、私が遊びに行くたびに眩しいように目を細めて、友達を大事にしなさい、物を大切にしなさいと決まって言うのです。

だんだんと母のお腹が膨らんでいき、両親は定期検診に向かつては母子ともに健康だと私に伝えてきます。夏頃にはお腹の子が男の子だと分かり、私が使っていたベビーカーを男の子向けにアレンジしました。

私は私で、なかなか姉としての心構えが出来ずにいて、姉弟で幼稚園に通っている子に、

「弟がいるって、どんな感じなの？」

と聞いていたりしました。

彼女は「すぐ泣くし、うるさいだけだよ」とやぼったく言っていました。それは身内を話題に出すとき特有の信愛表現みたいなもので、本当はすごく大事に思っていて、頻繁に面倒を見ていることを私は知っていたのです。

そのことを家に持ち帰って考えてみても上手く理解ができず、寝る間に布団の中で母に聞いてみました。

「お姉ちゃんって、何をすればいいの？」

「別に特別なことはしなくていいのよ。ただ家族として、愛してあげればいいの。別にお姉ちゃんだから、何かをしなきゃいけないなんてないわ」

「一緒にいてあげればいいってこと？」

「そうね。でも朱音は女の子だから、いつまでも一緒という訳にもいかないの」

そこで母は少し考え込むように薄紅色の口唇に指を当てると、

「……だから、家族でいるために努力をすること。一緒にはいられなくても、一緒にいたいと思うことが大事なのよ」

その言葉を一生懸命に呑み込みながら、自分なりに想像してみます。

想像の中の私は小学生で、顔も分からない弟は幼稚園くらいの歳でした。やっぱり男の子なので戦隊モノやヒーローに憧れるのでしよう。私は弟のごっこ遊びの相手をしながらも、時々退屈になってしまいうのです。でも最終的には仕方がないとため息を吐いて、最後まで付き合うのかもしれませんが。

「……うん、楽しみになってきた」

「あら、そうかしら？」

そうして布団の中で母と二人、笑いながら寄り添います。隣で寝ていた父が怪訝そうにこちらを覗いてきました。

そして私は、その楽しみの質がどういふものか全く気付くことなく、それからの日々を過ごしていったのです。

季節が一つ過ぎて、秋になりました。

……そして私の弟は、母のお腹の中で生き絶えたのです。

その日は秋にしては大分涼しく、庭の植木鉢に小さな霜が降りてきていました。腐葉土を指で押し込んでみると、さくつと小気味良い音を立てて沈み込んでいきました。

三日ほど前から体調を崩して入院していた母が、病院から戻ってきて悲痛な面持ちで弟の死を告げると、自分でも驚くほど冷静に受け入れていることに気が付きました。

何故死んでしまったかはよく覚えていません。一応父が説明をしてくれたのですが、子供の私には難しすぎて理解できなかったのです。

いつもふんわりと笑っている母が、「ごめんなさい」の言葉を嗚咽とともに吐き出します。病院から連れ添っていた父は、あやすように母の背中をさすっていました。

そんな光景を目の前にながら、自分の中で糸が切れていくのを感じます。確かにその糸はぴんと張られて、私の感情を繋いでいたはずなのに。

弟ができるのを楽しみにしていました。少し歳は離れているけれど、私なりにしっかりと面倒を見ようと思っていたのです。自分の中にゆっくりと彼のため居場所を築いて、確かに大きな場所をとっていたはずでした。

……でも私はどうしても、未練を持つことができなかったのです。

私の中で育まれていたものは弟の死と一緒に燃え尽きてしまつて、灰くらいしか残っていません。弟の居場所が無くなってしまったのに関わらず、心の中は落ち着いていて、もう届かないものを諦めきれずに手を伸ばそうとは思えなかったのです。

だからでしょうか、私の感情よりも、彼が太陽の光を浴びることなく無明の暗闇に沈んでいったことや、母が目の前で泣いている方がよっぽど悲しかったのです。

でも弟は蘇らないし、どうすれば母が泣き止んでくれるのか分からないから考えて、母がいつもしてくるのように体を抱き締めたのです。

「朱音、ごめんね。あんなに楽しみにしてくれていたのに」

母は大粒の涙を流したまま言いました。

「大丈夫、私は大丈夫だから。……だから泣かないで」

その夜は久しぶりに、家族三人で川の字になって寝ました。でも全員なかなか寝付けずに、何度も寝返りを打ってはお互いの顔を認め合い、確かに家族がそこにいることを一々確認していたのです。

しばらくしてようやく寝ることができた私でしたが、真夜中にトイレに行くために布団から出ました。

僅かばかりの距離をふらふらと歩いていると、夜風が木々を揺らす音に紛れて、赤ちゃんの泣き声のような声が聞こえてきました。

それは赤ちゃんがよくやるような周囲に声を撒き散らすような泣き方ではなく、ただこちらに訴え掛けるような泣き方なのです。

赤ちゃんが泣くのは、何かを訴えかける為と母から聞いたことがあります。では一体何を訴えているのだと考えると、すぐに恐ろしい想像が浮かび、急いでトイレを済ませて寝室へと戻りました。

滑り込むように布団に戻って泣き声から逃れようとします。しかしどんなに丸まって耳を塞いでも、小さな隙間から泣き声が流れ込んで、私に語りかけてくるのです。

どうして泣いてくれないのだと。どうして僕が死んだのに寂しいと思ってくれないのだと、たった一人の姉なのに、それなのに、どうしてお前は。

どんなに頑張っても、頭の中にこびりついた声は拭うことができず、むしろ目が冴えてしまったこともあり、より一層酷くなりました。

いよいよ耐えられなくなり両親を起こそうとも思いましたが、たださえ気を病んでいる二人に、さらに負担を掛けてしまうのが悪い気がして、泣き声の正体を確かめるために、仕方なく一人で玄関の外へと確かめることにしたのです。

秋の夜長は肌寒く、吹き付ける体が薄着に包まれた私の体を冷やしていくのを感じました。辺りは全て寝静まっていて灯りは全くなく、一寸先も見えない中、自分の記憶を頼りに声の方向へと歩いていきます。

本当は夜に外に出るなんて、怖くて仕方が無かったのです。お化けや良く分からない妖怪を当時は信じていて、夜になると夜の街を闊歩しているとも思っていたのです。それでもこの声を放置すると、もつとお化けより恐ろしい何かに遭遇してしまう気がして、その大きな恐怖心で小さな恐怖心を押し殺して足を動かしたのでした。

ようやく発生源に辿りつくのと、そこには二対の黄金色をした瞳が浮かび上がっているだけでした。それ以外は真っ暗闇で何も見えません。次第に目が慣れてくと、暗闇に溶けて輪郭が曖昧になった黒猫の

肢体が辛うじて見えるのです。

黒猫が口を動かします。例の泣き声に近い、しかし今度はしっかりと猫の鳴き声として聞き取ることができました。強ばっていた体の緊張がほぐれ、少しだけ安堵したのです。

ただ安堵してたのも一瞬で、その黒猫の双眸が全く離すことなく私を見つめていたことに気付きました。暗闇の中でも鮮烈に輝く瞳が、私の中にある空っぽの部分指摘してするような気がして、結局怖くなって布団の中に戻ったのです。

布団の中で両親の暖かさに包まれながら、私自身のことを必死で考えました。子供ながらの貧弱な語彙を必死で使い、僅かな人生経験を元にこの心の平穩の理由を探していきました。そしてようやく答えが出たのです。

要するに私は、人に対しての執着心が全くない人間なのでした。

その結論が出てからすぐに夜が明け、私は太陽の光を浴びたのです。

幼少期Ⅲ くガラスの向こう側く

季節が冬を通り過ぎて春になると、私は小学生になりました。

その頃には母が職場に復帰したこともあり、弟の死から家の中になだかまっていた嫌な空気がだんだんと薄くなっていききました。

毎日お線香を上げるときは、それでもしんみりとしてしまうのですが、その質も次第に変わっていき、死自体を悼むものへと変わっていったのです。

小学校では、幼稚園よりもずっと多くの子供たちがクラスの中にいて初めのうちは少し困惑していましたが、それもすぐに慣れて、クラスメイトと当たり前の様に仲良くなりました。

授業中にこそそそと小言で友人たちと話し、決められた授業をこなして勉強をし、休み時間は友達と遊んで学校生活を楽しんでいました。

ただ仲良くなった子で同じ方面に帰る子がいなかったため、帰り道はいつも一人でした。しかしそれが嫌だとは思いませんでした。どんなに楽しいことでも、一人になってしまうとそれは遠くへ追いやられてしまい、どちらでもいいものへと変わってってしまうのです。

そのため自分の周りにあるものが、何だか私には過ぎたものに見えるてしまい、学校にいる自分と一人でいる自分にずれのようなものを感じてしまいました。

なのでそんな自分を少し嫌悪しつつ、何故か一人でいることへの安心感を伴ってまだ歩き慣れない道を踏みしめて下校していったのです。

一人で帰ることをいいことに時々放課後、図書室に行つては本を読んでいた。昔から本を読むのは好きで、幼稚園でも絵本を良く呼んでいたのです。そのため小学校の図書室へも本を探しに行きました。

ただ蔵書の中で私が興味を惹かれるものはどれも難しく、文字を追っているうちにうつらうつらと眠ってしまいました。

この頃はまだ、夜中に起きるとたまに猫の鳴き声が聞こえることがあり、それを聞くと眠れない夜を過ごしていたため、昼間の間に眠くなることが度々あつたのです。

次第に本を読むためではなく、ほんの一時お昼寝をするために図書室へ通うようになり、私の下校時刻は少しずつ遅くなっていったのです。

そうした毎日を通り、長い梅雨が明けてすぐのある日、私は下校途中に一人の男の子を見かけるようになりました。男の子と言っても、私より少し背が高く、おそらくは年上でしたが。

周囲が騒がしくしている中、その男の子は不機嫌そうに口唇をぎゅつと結んで歩いていました。近くで石蹴りをしたりして遊んでいる子たちを少しだけ濁った目で一瞥し、ぷいと仏頂面で不機嫌そうに正面を向くのです。

そうやって人嫌いの雰囲気纏っていた彼でしたが、時々、ほんの一瞬だけ気を抜くときがありました。するとその表情に悔しさと寂しさが滲みでて来るのです。そして私とその表情を偶然覗いてしまったとき、きゅつと胸が締め付けられました。

……だって彼が浮かべていた表情は、私とは正反対だったから。

彼は私のようにどうでもいいなんて思っていないくて、中途半端に仲良くしている子たちに唾を吐いて、それでも誰かと深く関わる事がその表情からありありと分かってしまったのです。

だから私にとってその彼は凄く眩しくて、羨ましくて、私は彼と同じ仮道になる度に彼の横顔を眺めていました。

それで私の欠陥が直るわけでもないですが、玩具箱から綺麗な宝石を見つけたような気持ちになり、それこそガラスケースの向こう側を眺める気分で眺めていたのです。

だから彼が私に話しかけたときは本当に驚きました。私自身、彼が私を知っているだなんて微塵も思いませんでしたから。

七月の初めの頃。まだまだ高い太陽から肌を焼くような光線がこれでもかと降りしきり、顔をしかめながら歩いてみると、喧しく鳴く蝉に混じって知らない声が流れこんできました。

「なあ、一人でいて寂しくないのか？」

初めは私に話しかけられているとは全く気付きませんでした。私はそれまで彼の声を聞くことはなく、普段通り知らない誰かの会話だろうと思っていました。

でもそういえば、ここには私と例の男の子しかいないことに気が付き、辺りを見渡してみると、孤独の影を帯びた瞳と目が合いました。

そうして私は初めて彼を正面から見据えたのです。

男の子にしては少し長めの黒髪。目鼻立ちは整っていて、少しだけ濁った目が印象的でした。ただ口を閉じていると、どこかむすつと機嫌が悪いように見えてしまいました。

その瞳が私を映していることがどこか不思議で、少し呆然としてしまいます。

「……はい、寂しくありません」

何を言うべきか一瞬迷いましたが、正直に答えるようにしました。

そもそも私は嘘を吐くのが苦手でした。幼稚園の頃から得意ではなかったのですが、小学校に上がる頃にはその意識が一層強くなり、こんな私が嘘まで吐いてついてしまったら、人間として失格してしまう気がして、どうしても忌避を感じてしまうのです。

「何でだ？ お前友達いるだろ。休み時間にみんなと楽しそうにしているだろ？ でも一人でいて寂しくないのか？」

ひどく切実さを含んだ声で彼は言いました。

「元々そういうのは平気なので、みんなと一緒にいるのは楽しいですけど、それだけ。いないのだったら、それでもいいんです」

自分の内面を晒すのは初めてで、しっかりと言葉を考えて話していると、緊張で自分の心臓の音が聞こえるほどでした。でもそのことを彼に知られるのは恥ずかしく、どうにか平然を装って口を動かしました。

上手く言えたかどうかは分かりませんでした。ただ、彼は私がい終えるともうの凄く悲しげな顔をしました。目尻を下げて、その瞳が揺

れるほどに。

私は彼にそんな表情をさせてしまったことが申し訳なくなつてしまい、場の雰囲気や和らげようと考えましたが、何も思い浮かびませんでした。

夏の訪れを知らせる蝉の泣き声がより一層耳に入ってきてきます。さつきよりも日差しが強くなった気がして、肌に髪が張り付きました。

「……私は、私は切花朱音といいます」

出てきた言葉はありきたりで、どこにでもあるようなものでした。

「今から一緒に帰りませんか？」

「お前、どうして一人で帰っているんだ？」

隣を歩く比企谷さんが、若干真剣みを帯びた声で尋ねてきました。

一人で歩いていた男の子は比企谷八幡という名前で、私よりも二つ上の三年生だそうです。

自己紹介の様な簡単な話によると、比企谷さんの家は近所にあるらしく、私の家から歩けば十分もかからない場所にあることが分かりました。

「仲の良い子で、同じ方面に帰る子がいないんです」

「……そうか」

「比企谷さんこそ、どうして一人で帰っているんですか？」

「俺は友達がないからだ」

「……どうしてそんな自信ありげに言うんですか？」

やがて会話がぽつんと途切れました。隣にいる比企谷さんは、ぶつぶつと言って何かを考えながら物思いに耽っていました。

考え事を邪魔するのを悪い気がして、そのまま何も話さずに帰り道を一緒に歩いていきます。

突き抜けるような青空の下、何の変哲もない風景が一面に広がり、聞こえる音は真夏の風が風切り音しかありません。私の隣には比企谷さんがいて、どうにも落ち着かずにふわふわした気持ちになりました。

そのような中私は、現実感を確かめるように伸びた私の影をしっかりと踏みしめながら歩いていきました。

私の家へと繋がる分岐までたどり着き、いったん足を止めました。比企谷さんも私に倣うように止まりました。

「私はこっちの道から帰りますが、比企谷さんはどっちから？」

「俺はここを真っ直ぐ行くぞ」

「そうですか。なら、ここまでですね。……では、さようなら」

「おう、気を付けて帰れよ」

学校で習ったように、丁寧にお辞儀をしてから比企谷さんに背を向けます。

家までの道のりは、歩き慣れた代わり映えのない風景で蒸し暑いだけでしたが、顔に当たる風は、何故か涼しく感じました。

それから二日後、比企谷さんが紹介をしたい子がいるというので、放課後に待ち合わせをしました。

帰りの会が終わり、クラスの子たちと少しだけ話をして昇降口へと向かうと、比企谷さんと一人の女の子が顔を付き合わせて話をしていました。

背は私よりも少し小さいくらいでしょうか、少し癖つ毛で表情豊かな大変可愛い女の子でした。

「お待ちせしました」

首を傾げながら声を掛けると、二人が同じ表情をしてこちらを振り向いたのが面白くなってしまい、思わず頬が緩んでしまいました。

そのことを疑問に思ったのか、また二人で顔を見合せて。それが更に面白かったのですが、そうなると話を進められないので、笑いを堪えてました。

「呼んで悪かったな。……ほれ」

比企谷さんは女の子の背中を押して、私の目の前に出すと、明後日の方向を見ながら言います。

「俺の妹も一緒に帰る奴がいなくてな。……だから一緒に帰ってやってくれ」

その言葉に女の子は不満そうに比企谷さんを見ていましたが、すぐに笑顔になると私の手を握りました。

「比企谷小町。小町って呼んでね」

「……切花朱音。朱音でいいよ」

それからは、毎日小町ちゃんと一緒に帰るようになりました。

帰り道にはそれぞれにクラスの出来事を話し合ったり、道沿いで飼っている犬を柵越しに可愛がっていたりしました。

その夏の休みでは毎日のようにお互いの家を行き来するようになり、小町ちゃんのご両親にも可愛がってもらうようになりました。

お互いの両親が忙しいこともあって、私と小町ちゃん、そして比企谷さんの三人で祖父の家に預けられては、遊んでいたりました。とはいっても比企谷さんは祖父の書斎にばかりいました。

以前、祖父の「大事にしなさい」という言葉を守れなかった後ろめたさから、なかなか祖父の家に行きづらかったのですが、比企谷兄妹と一緒にいると自然と足を運ぶことができました。

いくつかの季節が通り過ぎました。

秋には家族で栗拾いにいきました。緑色の葉っぱからだんだんと色が失われていった林は、枯れた葉っぱの乾燥した匂いがどこか懐か

しく感じました。

冬の木枯らしが街を包んでいた日には、薄く張られた氷を小町ちゃんと二人で割っては、登校をしていたりしました。

そうして小学校に入学してからいくつかの春を経験したころには、私が感じていたずれのようなものは徐々に薄くなっていき、眠れない夜を過ごすこともなくなっていくたのです。

少女期Ⅰ　　く将来の影く

小学四年生に上がって少し経った頃、学校の宿題で将来の夢についての作文ができました。

自分が将来になりたい職業について各々で調べ、職業と絡めながら未来の自分についての作文を書くというもので、提出期限が一月も先にある、小学生の宿題にしては大がかりなものでした。

この時は別のクラスだった小町ちゃんも同じ宿題が出されていたので、学年共通で行われていたものだったのでしょう。

クラス子たちは、男の子は野球選手なりサッカー選手を題材にするという会話が聞こえてきて、逆に女の子に聞いてみるとお花屋さんやアイドルなどを選んでいたようでした。

私かというと、これといって思いつく物がなく少し困っていたので、比企谷家に遊びに行っているときに、参考がてら小町ちゃんに聞いていました。

「小町ちゃんは何て書くの?」

「まだ特に浮かんでないかなー。……あつ、お兄ちゃんのお嫁さんとかは?　小町的にはポイント高いかも」

「それで喜んでくれるのは、比企谷さんだけだと思うな……」

「むー、そういう朱音ちゃんは?」

「そう言われると言葉に詰まってしまいます。」

私とすれば健康に生きられるお金と環境があれば何でもよく、そう

なると候補なんて数え切れないくらいありあした。

「……公務員とかは？ 早く帰れるみたいだし、安定してるって比企谷さんが言ってたよ」

「朱音ちゃん、お兄ちゃんから変な影響を受けてきたよね」

その後小町ちゃんといくつかの案を出していきます。ケーキ屋さんにブティックの店員、デザイナーにモデルなど。それぞれの職に就いた自分を想像しようと思っても、なかなか上手にいきません。

ではどうなりたいかと考えてみても、出てくるのは痛い思いや苦ししい思いをしたくないということばかりで、それは将来の希望というよりは、なりたくないものなのです。

「お兄ちゃんは、こういう宿題って出たことある？」

小町ちゃんが近くのソファアに埋もれながらゲームをしている比企谷さんに聞きました。

「確かそんなのやったな……。ちよつと待ってろ」

そう言つて比企谷さんは自分の部屋に戻ります。少ししてリビンクに降りてくると、少し古びた原稿用紙を私たちの目の前に広げました。

意外にも几帳面に書かれた文字を追っていくと、意外な言葉が原稿用紙の上に踊っていました。

「シンバル奏者、ですか……。意外に格好いい夢ですね」

「いや朱音ちゃん、もう少し先を読んでみて」

小町ちゃんに促されて先を読んでみると、シンバル奏者は四十分以上ある演奏の中で、一回叩くだけでバイオリン奏者と同じ給料を貰えることが書かれていました。こんなに費用対効果が高く、これ以上自分に向いている仕事はないことも。

「……………」

無言で原稿用紙を折り畳んで比企谷さんに戻します。

先程まで少し格好良く見えていた比企谷さんの瞳が、何故かいきなり腐ったように見えます。とういかあまり格好良くないような。

「まず世界のシンバル奏者に謝って下さい」

というか、シンバル奏者つてそんな簡単な仕事なのでしょうか。確か打楽器奏者として一括りにされていたので、案外やることが多く大変だとテレビでやっていた気がします。

「当時の担任にも同じようなこと言われたな。というかオーケストラの定員の厳しさを延々と説明された」

遠い目をしながら比企谷さんが言いました。

そもそも比企谷さんに聞いたことが間違いということに気付き、少し頭を抱えながら、頭の隅で思います。

私がどんな大人になるかは全く分かりません。将来にこれといった希望もなければ展望もなく、ただ普通に生きていければと。

ちょうど同じ頃、祖父が体調を崩して近所の病院へと入院しました。

たまに一人で町内会の催しに参加をする位には元気があつた祖父ですが、少し前に風邪を引いてからなかなか熱が下がらずに病院に見て貰ったところ、念のため入院となったのです。

そこで休みの日に、父と母に連れられて祖父のお見舞いに向かいました。

お見舞い、とはいっても病状が酷いわけではないので、生活用品を持って行くついでに顔見せをする程度でした。そのため私は、看護婦さんを題材にするのもいいかもしれないと、少し祖父に失礼なことを考えながら病院を訪れました。

消毒液と乾いた皮膚の匂いが全体に漂っている病院は、クリーム色の壁紙とライトグリーン色の床材が優しく目に入ってきました。看護婦さんの制服も純白ではなく薄い桃色が使われていて、そこで初めて白衣の天使という言葉が全ての看護婦さんに適用されないことを知りました。

全体的にのんびりとした空間は、悪く言ってしまえば活力がなく、何年前か前に家族で行った秋の林が連想されました。

祖父の病室は個室で、大きなベッドと小さな戸棚、それとテレビしかありませんでした。テレビも着けていないためか、日当たりが良く暖かい病室には、廊下の話し声や台車を押す音が僅かに聞こえてきます。

「お義父さん、体の具合はどう？」

「熱は下がらんし体は重いが、それでもまあ、元気なほうだ。勝手に動く怒られるから、家にいるよりは退屈で窮屈だ」

「その辺りは我慢して下さいね。何冊か読み物を持ってきたから」

「そのことは咲耶にも言われたよ。『どうせ家でも本しか読んでないんだから、それくらい我慢しなさい』と。……あいつも私とよく似てきたな」

咲耶とは、私の叔母のことです。

すでに結婚をして家庭を持っている叔母ですが、どうやら時間を見つけては祖父のお見舞いに来ているようでした。しかし祖父の話によると、病室に来て、ほとんど世間話をして帰っているようですが。

ただそう愚痴っぽく言っていた祖父でしたが、退屈しのぎのはちょうど良いらしく、私の従姉妹について、叔母からの又聞きで両親に話していました。

大人たちの世間話が始まってしまおうと私は手持ち無沙汰になってしまい、仕方がないので足をふらふらと遊ばせながら時間を潰していました。

のろのろと動く時計の針をぼんやりと眺めます。窓の外では空一面に広がった青色に、飛行機雲が一筋だけ伸びていました。

「……少し悪いが、朱音と二人きりで話をさせてくれないか？」

いよいよ飽きてしまい、近くの休憩室に行こうかと考えていると、

祖父が言いました。

両親が不思議そうな顔をしながらも、祖父の声が真剣味が混じって
いたのを感じたのか、

「休憩室にいるから、終わったたら呼んでね」と言っつて病室から出ていっ
てしまいました。

少し困惑しながら、腰掛けを動かして祖父のベッドへと近づけま
す。やたら清潔感のある病室は何にも刺激がないとも言えて、普段元
気だった祖父の姿もどこかやせ細って、存在が少しだけ虚ろになっ
てしまったように感じました。

その祖父は眩しいものを見るようにすつと目を細めると、私を上か
ら下まで眺めて言いました。

「……朱音は、本当にお祖母ちゃんにそっくりだな」

「お祖母ちゃん？ 叔母さんじゃなくて？」

小さい頃から叔母に似ているとは良く言われてきましたが、祖母と
比較されたことはほとんどありませんでした。

そもそも父方の祖父は、私が生まれる前に亡くなってしまったの
で、祖母の姿は写真でも見たことがありません。そのせいか私の中で
は父方の祖母はどこか頭の中から抜け落ちてしまっていて、その人が
いたことすら考えたことがありませんでした。

「そもそも咲耶の外見は母親似だ。まあ、性格は私に似たが。……で
も朱音は性格までそっくりだ」

「……どういう所が？」

「二人でいるときの顔が本当に似ている。笑い方は絹絵さんに似たが、さめた表情は瓜二つだ」

その言葉を聞いた瞬間、嫌な予感が頭を駆け巡りました。

これから聞くことは、私が触ってはいけない気がして。せつかく頭の片隅に追いやったものが、もう一度顔を覗かせてしまう気がするのです。

でも祖父が真剣に何かを伝えたいことは分かってしまったので、居心地が悪いながらも結局腰掛けに座り直しました。

「……お祖母ちゃんはどのような人だったの？」

「綺麗な人だったよ。あまり愛想は良くなかったが、それでも笑うと柔らかな表情をした」

そう言う祖父の目は、どこか遠くに思い馳せるように窓の外へと向いていました。

「初めて会ったのは見合いのときだったが、それこそ造り物のように綺麗な顔をしていたよ。……ほとんど一目惚れだった」

それから祖父は、祖母について様々なことを語ってくれました。

祖母は旧姓齋園皐月という名前で、それなりの家柄の出身だったこと。

祖父とは結婚を前提としたお見合いで、初めて会ったその日には今で言う交際を始めたこと。

祖母の誕生日に簪を送ったら、凄く申し訳なさそうに受け取って、次の逢い引きのときに身につけてくれたこと。

しばらくして結婚の申し込みをして、迷いながらも受け入れてくれたこと。

自分とよく似た人のことを語れるのはどうも落ち着かなくて、しかも祖父が懐かしそうに語るので止めるわけにもいかず、恥ずかしいような、そうでないような気持ちで祖父の話を聞いていました。

ただ祖父が語る祖母の姿は、やっぱり私とよく似ていて、顔も見ることがないのに、祖母の行動に共感を覚えて、私もきつと同じような行動をとるだろうなと思っていました。

「……ただな、目の前で話していると綺麗に笑ってくれるのに、一人で見るとき、皐月はひどく冷めた表情をしたよ」

たまに祖父が早く帰宅すると、彼女は一人でぼうっとしていることが時々ありました。その表情は孤独に耐えるわけでも、空想に耽るわけでも、思い出に浸るわけでもなく、ただただ一人で過ごしていたそうです。

「私は皐月のそういう表情が怖かった。まるで誰も必要ないように皐月は佇んでいて、あいつの視界の中に自分が入っているとは到底思えなかった。いつかこの生活に飽きてしまったら、どこかにふらりと行ってしまいかもしれないと思ったよ」

祖父はそんなことを恐れながら毎日を過ごしていたようですが、ある時午後の陽気の中、うたた寝をしている祖母の姿を見つけました。

透明な光を頬に受け、しつとりとした黒髪を敷くようにして眠っている祖母の姿はびっくりするくらい儂くて、触れば消えてしまうと錯覚してくらいに存在感がなかったそうです。

「その姿を見て気付いたよ。あいつの生き方は簡単に一人になってしまつて、すぐに誰にも知られなくなってしまふものだ。親しい人に看取られることなく死んでしまふかもしれない。……それは、とても寂しい人生だ」

確かにそうなのでしょう。誰も求めないのならば、最終的にはどこにも繋がらなくなります。きつと周りには誰もいなくなるのかもしれない。

でもきつと、彼女はそれが平気なのだど頭の片隅で思いました。……だって、私がそうなのですから。

「出来る限り一緒にいようと思った。一度誓った言葉を繰り返して、早く帰れる仕事に転職もした。一人でいても何かに熱中して欲しくて、本をたくさん買ったよ。……まあ、皐月は不思議そうにしていたが」

祖父の家の書齋に並べられたたくさんの本。読書家というほど本を読まない祖父が、あれほどの本を揃えたのは、全て祖母の為でした。

その事実が重苦しいほど私の胸に残っていきます。

「……それで、お祖母ちゃんはどうなったの?」

もし祖母の性格が少しでも改善されたのならば、きつと私の性格も歳をとるにつれて直るものだと、不思議と思つてしまいました。

「……分かんよ。できる限り一緒にいたし、一緒に居ればしつかりと皐月は笑ってくれた。それでも心の内は読めないよ。……でもな、朱音に伝えたいのはそこじゃないんだ」

そうして祖父は久しぶりに私の頭を撫でました。ここ数年で少し痩せた祖父の手は、骨が若干浮き出てごつごつしていました。

祖父が手をどけてから顔を覗いてみると、老人がどこか懐かしむ笑い方ではなく、どこか青年のように、爽やかに祖父は笑っていました。

「私は皐月と一緒にいて幸せだったんだ。簡単な話をするだけでも楽しかったし、二人でどこかに出掛けると心が安らいだ。もしかしたら皐月は最後まで孤独を抱えていたかもしれないが、私はあいつと結婚ができて本当によかったと思っている。皐月も朱音も、自分を卑下しているようだが、そんなことはない。朱音は自分で思っている以上に優しくて、いい子だ」

祖父は一つ咳払いをすると、

「お前は人とは少し違うかもしれないが、それでもちゃんと誰かを幸せに出来る子だ。だから、もし少し気楽に生きて、そしてできるなら誰かと一緒にいたいと、そう言葉にしなさい」

そうして祖父の話は終わりました。

昼寝をするといって眠りについた祖父を置いて、休憩室へと向かいます。祖父を起こすのも悪いということで、そのまま帰ることになりました。

帰り際に母が、「ずいぶんと長く話していたけど、どんな話しをしていたの？」と聞かれたので、

「んー、お祖母ちゃんと、私のこと」

と答えました。

少女期Ⅱ　く綴られたものく

からっぽで誰も居ない祖父の家は、建物の古さがにじみ出たような停滞した空気が漂っていました。

以前はおそらく綺麗な檜皮色をしていたと思われる柱や床は、今はもう大分黒ずんでいて、縁側に出て木目の端の方を踏んでみると、きしきしと嫌な音を立てていました。

祖父のお見舞いに行ってから何日か経った後の放課後、ここしばらく祖父の話しが頭の中から離れず、つい祖父の家を訪れてしまいました。

私とよく似ているはずの祖母のことを、もう少しだけ知りたくなったのです。

本当は父に話しを聞くのが一番でつとり早いでしょうが、祖母のあまり良くない部分を父に尋ねるのは何だかはばかられてしまい、結局こうして自分の手で調べることにしました。

もし彼女が私と同じような性質を持っているならば、果たしてどのように考え、そして生きていったのでしょうか。

そうして祖父が普段使っている部屋を検分してみます。八畳ほどの大きめの部屋は日当たりが良く、南側には雪見障子が設えてありました。

ざらっと見渡すと、戸棚の上にちよこんと飾られた二つの写真立てが目に入ります。幾ばくかの期待を胸に、手にとって確認すると、やはり私が想像していた通りのものが映っていました。

一つ目はおそらく祖父と祖母が結婚した時の写真でしょう。今よりも大分若い、精悍な顔つきの祖父が、紋付きの袴姿で映っています。そしてその隣には、絹のような黒髪を結び、紅や金色などが狂い咲いたような艶やかな打掛を纏った女性がいます。

そして二枚目は、一枚目よりもずっとラフな写真でした。祖父と祖母、そして子どもの頃の父と叔母が一同に映っていました。今度は少しやぼったい洋服を着た祖母は、背中まで伸ばした黒髪と儂げな表情がとても印象的な女性でした。

初めて見た祖母の外見は、祖父の言った通り私とよく似ています。特に二枚目の写真は、この頃私が背中まで髪を伸ばしていたこともあって、本当に瓜二つで、今の私の容姿をそのまま成長させた様な姿です。

少し呼吸が乱れていることに気が付きます。深呼吸を幾度かした後、祖母の顔を指で一撫でして、写真立てを元の位置に戻して部屋を後にしました。

そしていくつかの部屋を同じように検分して周っていると、一つの部屋に辿り着きました。

六畳くらいの畳敷きの部屋。古びた桐の衣装箆筒が二つと、小さな戸棚、そして化粧台だけが設置された場所でした。乾燥した藪草と桐のおいが部屋一体に満ちていて、自然と落ち着く、不思議な場所です。

最近あまり使われていなかったのでしょう。最低限は掃除されているものの生活雑貨は置かれておらず、何年も前から時間が止まっているような錯覚を抱いてしまうのです。しかしその停滞感を嫌いになることができません。

……だからでしょう、祖母は普段ここにいたのだらうと確信しました。

何か日記みたいなのがあればいいなと思いつつ戸棚を漁ってみても、漆黒の簪が置いてあるだけでした。続いて襖の中を覗いてみましたが、布団が一組あるだけでほとんどからっぽです。

その後大ざっぱに部屋の中を見て回りますが、何も見当たらず、やる事がなくなつた私は畳の上に寝ころんで、天井を眺めました。そうして先ほど写真でみた祖母の顔を頭の中で思い浮かべます。

彼女は一体何を考えながら生活を送っていたのでしょうか。自分を愛してくれる人がいて、それなのに簡単に捨てられてしまうような性格ならば、私と同じようにえも言われぬ違和感を持っていたのでしょうか。

……どうして私が生まれる前に祖母は死んでしまったのでしょうか。もし生きていたら似たもの同士で色々なことが話せるのに。

そう思いつつ、彼女早死にしてしまったことには、何だか納得しているのです。憎まれっ子世にはばかるの逆で、あまり世界と繋がっていない人は、それこそ消えてしまうように、あっさり死んでしまうのかもしれないとも思うのです。

しばらくそのままの体勢でぼうっと祖母のことを考えていたのですが、寝返りを打ったときに、日に当たらない形で備え付けられている衣装箆笥が目にはいりました。そういえばこの箆笥は、まだ開いてはいませんでした。

買ってから随分時間が経つたのでしょうか。桐本来の色は大分汚れ

て、全体的に黒ずんでしまっています。同じように引き手の金具も錆びていて、赤銅色へと変質してしまっていました。

おもむろに立ち上がって胸の辺りにある引き出しを開けてみると、先ほど写真で祖母が纏っていた打掛と、もう一着、濃紺の大島紬が丁寧に畳まれていました。その下の段を出してみると、少し古めのデザインの洋服がありました。

思い切って他の引き出しも開けてみると、高級そうな着物がいくつもあって、祖母が良家の出身だということを感じました。

八割方の引き出しを開けてみて、箆筒らしく衣装しか入っていないことに落胆しながら一番下の引き出しの中を覗いてみると、真っ黒な喪服がありました。落胆が更に重なり、思わず畳みの上にお尻をぺたんとつけて座ってしまいます。

そのまま引き出しを元に戻そうと思つて視線を移すと、喪服の奥に長方形の物体が重なっていることに気が付きました。先ほどは視線が高かったため、奥の物まで見えなかったようです。

喪服をどけるようにして手を伸ばします。少しざらざらとした紙の感触が指に引っかかり、そのまま親指と人差し指で摘んで腕を引き抜きます。そうして取った物を確認すると、そこには色あせた若干黄色くなった封筒がありました。

全部で五枚ほどの古びた封筒。表面に宛名は書かれておらず、ひっくり返してみても差出人の名前は書かれてはいませんでした。しかし夕日に透かしてみると、中に便箋が入っているのが分かります。

ほとんどためらいなく、そして罪悪感も抱くことなく、便箋を取り出して目を通しました。

……そこには最期まで夫を好きになることができなかつた女性の謝罪がありました。

彼女は元来、誰にも好意を抱くことも、それ以前に精神的なつながりを必要とすることがなかつたそうです。彼女が幼い頃は自分のそんな性質を、自身の精神年齢の高さと勘違いしていたそうですが、歳をとるにつれて、それが自分の欠点だと気付いたそうです。

そんな性質を持っていながら、人は互いに想い合うべきという、乙女らしい純粋な思想を持っていた彼女は、誰かに想いを返すことのできない自分をひどく恥じたそうです。

自分のような人間は本来一人で生きて、誰かの幸福を奪うべきではない。そう綴っていた彼女でしたが、彼女の生きる時代は、女性が肉体的に一人で生きられる時代ではなく、家に勧めもあつて、お見合いをして、結婚をしました。

その後は彼女の夫への謝罪で溢れていました。本来はこんな形で結婚するのは間違つていて、最後まで夫のことが好きになれなかつたことに。自分が不幸にならないために、夫を利用してしまったことに。

他の封筒の中身も確認してみると、所々の内容は違っているものの、基本的には同じ内容が書かれていました。

その一言一句を隅から隅まで頭の中に焼き付けるように読んだ後、その全てを元の引き出しの奥へと戻して、部屋から退室します。

祖父の家を後にする頃には太陽は大分沈み掛かつていて、夕焼け空が朱色と薄紫色が溶け合うように絡み合う中、私は太陽が完全に沈み

きり前に帰宅をしました。

「お祖父ちゃん、亡くなったの。お父さんと一緒に病院で手続きとかして来るから、朱音はしばらく家に居てね」

そう母から連絡を受けたのは、私が祖父のお見舞いに行つてからちょうど一週間後の午前中のことでした。

電話を受話器に戻して、これからのことを考えます。祖父が亡くなったということは、弔いをしなければいけません。ということは一日か二日くらいは学校を休む必要がでてきます。

そうやって考えていると、今日の午後から小町ちゃんと遊ぶ約束をしていたことに気が付きます。流石に身内が死んでしまったのに、遊ぶのは不謹慎でしょう。

比企谷家に電話を一本入れれば良いのですが、何となく風に当たりたくなり、直接小町ちゃんに伝えることにしました。

歩き慣れた道のりを、普段道理に歩いていきます。

電話越しで聞いたからか、それとも私の性格なのかはわかりませんが、どうも祖父が亡くなってしまったという実感が沸きません。もつと悲しむべきなのでしょうが、頭の中に浮かんできくるのは、祖父が幸せと言ったときのあの表情なのです。

比企谷家にたどり着き、インターホンを鳴らします。長い間の後、眠たそうな顔をした比企谷さんがドアを開けて出てきます。

「おお、切花か。何か用か？」

「比企谷さんですか……。小町ちゃんいますか？」

「なんで一瞬だけ微妙そうな顔をするんだよ……。小町なら母ちゃんと一緒に買い物に出掛けたぞ」

比企谷さんが駅の方を指差しながら言います。

「あのお爺ちゃんが亡くなってしまっ……。今日、小町ちゃんと遊ぶ約束をしていたんですけど、お葬式とかあるので、多分無理だと伝えて下さい」

「……。そうか、じいさん死んじゃったのか」

どこか遠くの空を眺めるような様子で比企谷さんは言います。その表情は悲しげで、その顔を見ると、私はかつての様に胸がきゅっと締め付けられるのです。

その一方で頭の中は、どんどん冷静になっていくのが分かりました。祖父と話しをした時のことが鮮明に思い出され、それと同時に祖母の手紙が頭の中で繰り返し読まれていきます。そうして、祖父の話しを聞いて以来、ずっと頭の中に引っかかっていたものが、すんと落ちました。

……。結局、祖父の想いは祖母に届かなかったのです。

祖父は確かに幸せだと言いました。祖母と一緒に暮らすことができ、きて幸せだと。

でもやっぱり正しい想いというのは、しっかりと報われるべきなので

す。届けたものが返ってくるからこそ、しっかりと幸せになれるのだと思います。

あんなに優しい人が、愛した女性に愛されず死んでしまったのです。それはきつと、とても悲しくて、苦しいことです。

「……お前、泣いているのか」

「えっ?」

比企谷さんに言われて、左頬につめたいものが伝っているのに気が付き、驚きました。

私自身、泣けないわけでも、泣かないわけでもないのでありますが、それでも人前で涙を流すのは本当に久しぶりでした。

「……本当だ。もつとちゃんとした理由で泣いてあげたかったのに……」

手の甲で頬を拭きました。きらきらとした透明な雫が肌につき、風にあたるとその部分だけ涼しく感じました。

本当に、どうしてこんなことでしか泣くことができないのでしょうか。祖父とはもう二度と会うことができなのだから、そのことで悲しんで、喪失感とともに泣いてあげるべきなのに。

私がいきなり泣いてしまったことに少したじろいだ比企谷さんは、それでも決然とした表情で口を開きました。

「あのな。世の中家族が死んでほくそ笑んでいる奴らが、いくらいると思っっている。そいつらに比べれば、下らない理由だろうと泣いてい

るお前の方が大分マシだ」

私があまりにも熱心に比企谷さんを見ていたからでしょうか、私の視線に気付いた比企谷さんは、恥ずかしそうに顔を背けて言いました。

「それに天国から見りや、泣いていることには変わりがないだろ。だったらバレなきや問題ない。……まあ、だから、あれだ。……あんまり自分を責めるな」

比企谷さんは途中でしどろもどろになりながらも、壊れ物に触るように、優しく言ってくれました。そして私はそんな比企谷さんの言葉に触れると、心の中で温かいものが広がっていくのが分かります。本当になんて不器用なんだろう。もっと色々な方法があると思うのに。

そんなことを思っていると、自分の心の中でずっと輝いていたものに気が付きます。

……多分私は、いつからかこの人のことが好きだったです。

無愛想で、ぶつきらぼうで、不器用のくせに優しく。普段から捻くれたことしか言わないのに、それでも話していると自然と楽しい気分にならせてくれる比企谷さんのことが。

それが異性としてかどうか、そして一般的な好きかどうかとも分からないですけど、それでも好きなのだと思います。

「ありがとうございます。ちょっとだけ元気になりました」

「……俺は一般論しか言っていないぞ」

「はい、一般論ですね。でも言ったのは比企谷さんなんですから、お礼を言いたいです」

……だから、比企谷さんにはちゃんとした意味で、幸せになっても
らいたいとこの時
はつきり思いました。

どちらか片方が簡単に気持ちを捨ててしまえるような偽物ではな
く、しっかりとした本物を。

「お母さんに家に居るように言われているので、もう帰りますね。ま
たお母さんからお爺ちゃんのことについて連絡がいくと思いますの
で」

一拍置いて、少し緊張しながら口にします。

「では八幡さん、また今度」

八幡さんの顔を見ないで、そのまま回れ右して家路に就きます。少
し歩くと、左目に遅れるようにして、右目から一粒だけ涙がこぼれ落
ちました。

祖父の葬儀はしめやかに執り行われました。

多くの方がお通夜に参列してきてくれて、祖父の人望の広さを知り
ました。小町ちゃんと八幡さんもお通夜に来てくれて、小町ちゃんは
棺の中の祖父を見て、涙を流して悲しんでくれました。

出棺の際、私と祖母によく似ている叔母が涙を流しながらお花を添えていたのが、とても記憶に残っています。

それからしばらく当たり前に過ごし、例の宿題での将来の夢には『キャリアアウーマン』について書き、提出をしました。学校の先生は「切花さんだったらきつとなれるわ」と無責任に言い、私は「頑張ります」と覇気のない声で答えました。

キャリアアウーマンになりたいかと言えばそこまでないのですが、せめて一人で生きていく力くらいは欲しいなと思います。一人で生きて、誰にも迷惑を掛けずに生きていければなあと。

少女期Ⅲ　く仄かな思ひく

またいくつかの季節が巡って、私と小町ちゃんは中学生になりました。

初めての制服は小町ちゃんが着ると凄く可愛らしいのに、私が着て鏡の前に立つと何故かあまり似合っていないのが多少不満でした。それでも初めて袖を通したときには、少しだけ大人になったような気がして、見慣れた並木道も少しだけ違って見えました。

私たちよりも二年早く中学校に上がった八幡さんも、比企谷家にお邪魔しているときよりもずっと大人に見えて、それなりに格好いいなあと思っていたりもしたのです。

そんな大人への第一歩を感じたのは私だけではないようで、クラスの子たちの会話も少しずつ変わっていきます。以前の恋愛話は誰々が好きだけで終わっていたのですが、それが誰々と付き合っただとか、あの子を狙っているだとか、そんな会話が交わされるようになりました。

実際に何人かの女子たちは既に恋人ができたり、初デートを済ませたという話しも耳に入ってきました。そういった子たちは未だ恋人がいない子に比べて垢抜けてきていて、スカートの裾の折り方とか爪の手入れとか、そういった細かい部分のお洒落の違いが見え隠れしていたりするのです。

「昨日の月9に出てた人、マジでかつこよかったよね。えっと、ほら、名前何だっけ？」

「名前覚えていないんだ……」

「だって初めて見た人だったし。ほら、メガネ掛けていかにも俺様、って感じの人」

「あゝ、あの人。……私も名前知らないや」

「朱音もじゃん！……で、どう？」

そんな私はというと、そういった甘酸っぱい空気に少しだけ気後れしながらも、色恋話に耳を傾けていたりしていました。

時折私のところに恋愛相談を持ちかけてくることもあり、そういう場合は何となく彼女たちが自分の好きな男の子を告げる意図を理解することもできたのです。

しかしだからといって彼女たちが挙げる男の子にさして興味を抱くこともなく、そういった与太話には適当に返事しながら、普通の学校生活を送っていました。

「私はああいうタイプはあんまり好みじゃないかも」

「ふくん。じゃあ、というのが好み？　できれば芸能人で言って」

流行のドラマに出ている登場人物の名前を何人か挙げると、

「あゝ」

納得されたのか、されてないのかよく分からない返事をされ、しげしげと上から下まで眺められます。

「……朱音って、ちょっと趣味変わってる？」

「そんなことないと思うけど……」

「ツンデレ、みたいな感じ？ 不意に優しくされた感じでしょ」

「そう言われるとちよつと違うような……。普段擦れてるのに変に真面目で、ちよつと不

器用で、でもやっぱり不器用に優しい人がいたら、いいと思わない？」

「思わない。私はどん引つ張つてくれる人が好きなの」

そこで予鈴が鳴って休み時間が終わり、この会話は打ち切りになります。

その後の授業、一次関数の公式を聞き流しながら、先ほど話した好みのタイプに一人だけ当てはまったことに気付き、少しだけ恥ずかしくなりました。

女の子たちが徐々に変わっていくように、男の子たちもだんだんと変わっていきました。

小学校までは普通に話していた人がいきなり距離をとったり、逆に妙に話しかけてきたりするのです。

特に後者の人たちは、メールアドレスを交換して欲しいと言い、特に断る理由がないので交換はするのですが、それだけです。

交換をしたときに「暇だったらメールして」と言われるものの、学校で顔を合わせるクラスメイト、しかもさして興味のない男子とメールして話す内容などありません。

結果、私からは送ったことのない、ほとんど意味のない名前が電話帳に残っていったのです。

そうやって距離をとっていたのに関わらず、それでもいきなり告白されることがありました。

私に告白をしてきた人たちとはそこまで親しいわけではなく、たまに話しをする間柄でした。しかも僅かばかりの交流の中で、私に好意を抱いてもらうようなことをした覚えはなく、大層困惑しまして、返事をするのに若干時間がかかったりしてしまいました。

結局彼らと一緒に過ごしている自分というものが、どうして想像できず、全て断っていました。

そんなある日、小町ちゃんが委員会が遅くなるため一人で帰っていると、私と同じように一人で帰っている八幡さんを見つけました。

「八幡さん、お一人ですか？」

車道を渡り、反対側の歩道へ行って声を掛けると、八幡さんは周囲をざらっと見渡した後、口を開きました。

「なんだ、切花か。一人だぞ、むしろ進んで一人でいると言っていない」

「いえ、あの。私としてはほとんど挨拶みたいな感じだったんですけど……」

というよりも八幡さんの場合、一人でいることが大半なので、むしろ誰かと一緒にいる

方が驚きます。

隣に並んで歩き始めると、八幡さんが歩く速度を緩めてくれて、私は八幡さんのそんな心遣いに感謝しながら、いつもより足早に足を動かしました。

こうやって二人で帰るのは初めてで、夕日の射し込み具合も相まって、映画のワンシーンのようだなあと自分のことながら思いました。

「小町はどうした？ いつも一緒に帰ってるだろ」

「美化委員会の活動があつって、学校の周辺を掃除しなくちゃいけないそうです」

「はー、あいつも面倒な委員会に入ったもんだ」

私も小町ちゃんも部活には入らなかったので、放課後は基本的に時間があるのですが、

たまに委員会活動が入ります。

私たちの中学校は全員がなんらかの委員会に入ることになっていて、私は教科委員なので放課後まで拘束されることはないのですが、小町ちゃんは不運にも維持管理的な委員会に入ってしまったようで、たまにこういうことがあるのです。

「そうですね。久しぶりにババを引いたって言ってましたよ」

「……お前ら、要領いいからなあ」

「私はそこまで良くないです。小町ちゃんと一緒にいるから、そう見えるだけですよ」

「かもな」

その調子で小町ちゃんの話しを続けます。

八幡さんは小町ちゃんが誰かに言い寄られていないか私にしきりに聞いてきましたが、私は今も別のクラスなので、小町ちゃんのクラスで誰が狙っているのか分かりません。

でも小町ちゃんから男の子の話題をほとんど聞かないことを伝えると、八幡さんは露骨に安堵して大きな息を吐きました。

大通りを外れて、細い、歩道のない道に入ります。正面から車が来たので避けるように路肩に寄ったとき、擦れるように八幡さんの腕にぶつかりました。

「……すいません」

「おう」

八幡さんと触れた部分が一気に熱くなるのを感じました。

ここ最近、このようなことが度々起るんです。何気ないことで胸がどきどきして、会話をしているだけに凄く楽しくて、触れ合うと火傷をしたように熱くなります。

そのような現象を少女漫画の中で何度も読んだのですが、私が持っている感情は、物語の登場人物とは少し違っている気がして。具体的にどうこう言えないのですが、所々感情移入ができずにいるので、どうも自分の感情に自信が持てないのです。

「……それにしても不思議です」

「何がだ？」

少しだけ迷って、この不透明な気持ちについて八幡さんに尋ねることになりました。

「何ヶ月前まではみんな小学生だったのに、今は恋愛の話しばかりなんです。付き合いたいとか、そういった感じで。どうしてそんなに彼氏彼女の関係になりたいんでしょうか？」

「そりゃ、ただの背伸びだろ。中身はまだまだ子供のくせに、大人の真似をして慣れないことをしているだけだ」

「でもそんな憧れだけで、わざわざ放課後の教室に呼び出して、いきなり付き合って欲しいって告白するなんて変じゃないですか？」

「やけに具体的だな」

「一般論ですよ。一般論」

別にわざわざ次の日に噂になりそうな状況で、告白をしてきたことを不満に思っているわけではないのです。

いや、実際噂になって困りましたけど……。

「……まあいいか。そりゃ、好きだからだろ。好きだから一緒にいたいと思って、他に表現したり繋がる方法がないから、恋人関係になるしかないだけだ」

「それは、八幡さんもですか？」

「……一般論だ」

「……ふうん、そういうことですか」

その八幡さん言葉で、自分の感情に気が付きます。

きっとおそらく、一般的な意味での『好き』ということは、好意的な感情を抱いて、相手に何かを望んで、相手に何かをしてもらうことを望むことなのです。

だから付き合おうとしたり、好きな人への希望を言ったりして、誰かに何かをしてもらおうとするのです。

……でも私にはその感情がありません。

私は異性として八幡さんに好意的な感情を抱いていると思います。その言葉の通り、今も心臓は少しだけ早く鳴っていて、それと一緒にきゅつと締め付けられます。

恋人になったらきつと楽しくて、手を繋いだらどきどきして、キスをしたらとても甘い味がするのでしょう。

でも私は恋人になりたいわけでも、手を繋ぎたいわけでも、キスをしたいわけでもないんです。

ただ、好意を持っているだけなんです。

この気持ちを伝えようとも、叶えようとも思わないんです。

……何だ。私、祖母とあんまり変わらないじゃないですか。

祖母ほど状態が酷いわけではなく、きちんと誰かに感情を向けるこ

ともできますが、結果は変わらず、さして繋がりたいとは思いません。

「……どうかしたのか？」

八幡さんが少し心配そうに声を掛けてきます。

「いえ、ちょっとした疑問に納得がいったので」

本当にちよつとしたことです。

涼しげな風が街路樹を揺らし、深い陰影が所々にまき散らされながら、太陽は沈んで星空が顔を覗かせようとしています。

高校の制服を着た男女が手を繋いで、顔に笑みを浮かべながら私たちとすれ違いました。

ほんの少しだけ手を伸ばせば届きそうな距離にいる八幡さんは、やっぱり手を伸ばそうとは思わないのです。

だいたい祖父の四十九日の法要が終わった頃からでしょうか、たまにぽかんと時間が空いたときに、お墓参りに行くのがいつからか習慣になっていきました。

習慣、といつても三ヶ月に一度のときもあれば、二週間ごとの時もあったので、厳密な意味で習慣とはいえないのかもしれないですが、それでも通つてはいたのです。

お盆や三回忌のような式典はどうも苦手です。決められたように死んだ人のことを思い出すと、日常の情報の中に埋もれてしまって、

きつと大切なものを忘れてしまう気がするんです。

お墓参りといっても大したことはありません。お墓を掃除して、花を添え、お線香をあげて、いなくなった人たちに語りかけるくらいです。

名前しか知らない弟に謝って、良く知っている祖父に近況を報告して、顔と名前しか知らない祖母に愚痴や文句を言ったりしていました。

本当は故人に愚痴を言うのは間違っているかもしれませんが、それでも祖母だけはどうも他人の様に思えず、つい口が軽くなってしまいます。

そうして私が八幡さんのことを好きになったことも伝えました。

お墓の中で眠っている祖父はきつと喜んでくれるでしょう。祖母は無関心な表情しか浮かびません。弟のことは何も分かりません。

……本当に意味のない行為です。それでも、何故かこの三人にはしっかりと伝えなければいけない気がするのです。

少女期Ⅳ　　く冷たい曇り空く

少し背が伸びて制服に着られている状態から脱して、紺色のスカートに慣れてきた秋ごろ、一年生の間で小さな噂が流れました。

その噂とは、私こと切花朱音が上級生と付き合っている。しかもその相手が三年生の比企谷八幡という冴えない男子だというものでした。

実際にそのような事実はないのですが、噂が事実無根で根も葉もない、というわけではないのです。

例えばたまの帰り道に、小町ちゃんと八幡さんと三人で帰ったこととか。

例えば夏休みに偶然外で出会って、そのまま一緒に買い物をしたこととか。

そのような出来事を誰かに見つけられ、どうやら学年内で噂が流れ始めたそうなのです。

誰かが直接教えてくれたわけではないので、確証があるわけではないのですが、たまに遭遇するような内緒話でちらほらと聞こえてきただけです。

ただその噂は、誰かから告白されたようなわあつと囃したてる広がり方ではありません。あくまでも遠巻きに、こそこそと、こちらのよすすを伺うだけで、誰一人として私に詳細を尋ねることはしません。

私としても噂が広がって何か実害があるわけではないので、ただぼうつと毎日を過ごしていたのです。

変わったことと言えば、女の子との雑談の中で、何人かの子たちが勝ち誇った顔をしながら恋人の話をしてきたり、男子たちから不満げな視線を向けられるくらいです。

それでも時折、「趣味が悪い」や「思わせぶり」などの悪口かどうか微妙な言葉が聞こえて来るのですが、どう反応するべきか分かりません。

元々ネガティブな感情を向けられることに抵抗はありませんので、「ああ、向こうが私のことを嫌っているのかなあ」、程度にしか思うことができないのです。

しかし話はそれだけでは終わらず、上手にはいきません。ある日廊下から教室に戻るとき、クラスの男子たちが教室内で、八幡さんの陰口を叩いているのをたまたま聞いてしまいました。

彼らは八幡さんがいつも一人でいることや、友達がいないことを殊更に誇張した内容を冗談混じりで話していました。口元をにたあと醜くゆがめて、全員が同じような嫌らしい笑みを浮かべていました。

彼らの話の半分くらいは否定できないのが辛いところです。

中学校に上がったくらいから、八幡さんの目がどんどん濁ってきて、それに伴って言動も少し残念になっていました。たまに一人であるときに薄ら笑いを浮かべているのを見ると、知らない人からすれば、変な人に映っても仕方がありません。

それでも、八幡さんの一番良い部分である面倒見の良さや捻くれた優しさは全く変わっていなくて、プラスマイナスすればゼロに落ち着くと私は思っていました。

……だから、八幡さんは陰口を言われるような人ではないのです。

「どつたの、朱音？ そんな怖い顔して？」

「……ううん、何でもない」

そんな会話が聞こえたのでしよう、男子たちは私の視線に気付くと、少しでも気まずい沈黙が残り、そして何事もなかったようにサッカー部の顧問の先生についての話を継ぎました。

本当に、彼らは何がしたいのでしょうか。

他人の陰口を言うくらいなら、誰だつてあると思います。でもそれは誰かに不満があつて、その不満を別の誰かに話して憂さを晴らすためです。

しかし八幡さんは彼らとは何も関係がなく、そして陰口の内容は不満ですらない、事実と虚偽が入り交じつただたの言葉です。あの会話で何かを得るのかは、さっぱり分かりません。

それでも、たった一つだけ分かることがあります。

……八幡さんの話題が出るきっかけは、おそらく私にあるのでしよう。

「最近、学校はどうだ？」

「別に普通ですよ。少しだけ周りがうるさいですけど。……八幡さん

はどうですか？」

「普通だな。時々知らない奴が見てくるときがあるが」

「……………」

「……………」

きつかけとなる会話はほんの些細なことで、しかし必然として起きます。

だって、私が嫌なんです。好きなことには執着できなくせに嫌なことには耐えられない、自分勝手な性格をしている私は、八幡さんが謂われのない中傷に晒されることが、嫌なんです。

そしてその原因が私であるならば、とるべき道は決まっています。……元々、誰かを幸福を奪ってまで得たいものなんて、本当に僅かしかありませんから。

それから私の生活に少しずつ変化が起こります。だんだんと外で八幡さんと一緒にいたり、話をすることを避けるようになりました。帰り道にばったりと会ったとしても、軽く目を合わせるだけで、そのまま知らないふりをして歩き去ります。

そうやって距離をとったことを八幡さんから何か言われるのかと思いましたが、不思議と何も言われません。それどころか私と示し合わせたように、声を掛けず、知らないふりをしてくれます。

そのことに私は少しだけホツとして。自分が誰かから陰口を言われているというのは一般的に傷つくことだと知っていて、嘘のつけない私はどうしてと聞かれたら、距離をとった理由について答えてしま

うでしょうから。

もしかしたら八幡さんは、「そんなのは慣れている」の一言で返すかもしれませんが、それでも八幡さんが慣れるまで陰口を叩かれたことを考えると、やっぱりそのような事実を聞かせようとは思わないのです。

十一月に入り、寒い冬が訪れます。

私たちの行動が功を奏したのかは分かりませんが、そのころになると噂も大分小さくなってきました。十月の終わりごろは、「勝手に別れた」だの「切花が振った」だのそんな勝手な憶測が流れましたが、その話題も冷たい西風に削られていくように、だんだんと薄くなっていったのです。

そんな私かというと、何故が小学校に入ったばかりのころの感情がぶり返えされるようになりました。あの、弟が死んでからの半年くらいのこと。

あれほど心に火がついていたはずなのに、今ではすっかりとくすぶっていて。それが弟を失ったときとあんまりにも似たものだったので、弟にも八幡さんにも申し訳なく思ってしまった。

噂は下火になりましたが、このころには八幡さんと会う機会は殆どなくなっていました。十月の上旬くらいから受験のために予備校に通うようになっていて、比企谷家にお邪魔しても、ほとんど外出していることが多かったのです。

それについては特に何も思わなかったのですが、いつもより人が減った比企谷家は大分広くて、よくお邪魔するリビングも、私と小町ちゃんだけだと持て余してしまうくらいでした。

そして、小町ちゃんが料理を作ろうといったのもこの頃からでした。よくよく考えれば、小町ちゃんなりに私たちの様子を気にしていて、気を使ってくれたのかもしれない。

実際に、ときどき交代で八幡さんにご飯のリクエストをメールで聞いて、返事がなければ八幡さんの嫌いなものを食事に使って、反応を伺っていたりもしました。

一月になり、路面に薄い氷が張り始め、時折雪がちらちらと降るようになってきました。

その冬は例年よりもずっと寒い冬で、冷え込んだ空気が辺り一杯に満ちていて、いつもより一層、冬の物悲しさが引き立てられています。朝と夕方には、息をはっーと吐くと、白い吐息が空气中に散らばっていったのです。雪が薄く積もった日には、小町ちゃんと一緒に路面で滑りそうになりながら、きやあきやあと騒ぎながら登校をしました。

二月になり空気がもつと冷たくなると、三年生の雰囲気がどんどん張りつめていきます。受験が近くなつた彼ら、彼女らはそれまでからまた一つ、大人の雰囲気になっていって、また一つ大人への階段を昇つたのだとなぜか私実感しました。

そのころには八幡さんと話すことなどめつきりなくなっていて、たまに比企谷家で一緒になつても、話す内容なんてすぐには思い浮かばず、ただ会釈をするだけで終わりました。

少しだけ暖かい風が吹き始めた三月。八幡さんは無事に総武高校へと合格し、中学校を卒業しました。

卒業式の日にはまだ桜が咲いておらずつぼみのままで、少し味気な

い式でした。卒業生一人一人の名前が呼ばれる中、八幡さんの名前が呼ばれても周りが何も反応をしないのを見て、あのくだらない噂は既に通り去って、誰の中にも残っていないのだと実感しました。

春休みに入っても生活は変わることなく、小町ちゃんやクラスの女の子と遊び、宿題をこなしていました。

宿題の一つに図書館から資料を借りなければできないものがあつたのですが、借りた本が思いの他重くて、本を詰めたバッグを持ち上げたときに、二の腕から嫌な悲鳴が聞こえました。こういう本も早く電子化して欲しいと言って、春の陽気に包まれながら帰っているときに思うのです。

……きつとあと百年も経ったら、科学が発達して、私たちの心も電子のように扱うことができるのかもしれませんが。

もしそうなってしまうたら、この世のありとあらゆるものが零と一で構成され、おいしいものを食べて心まで膨らむ気持ちだったり、好きな人告白されて胸が熱くなるとか、そういつた私たちが心の奥底に宝物のようにしまっていた感情を、つまらない理屈をべたべたに張り付けて人工的に再現していくのでしょうか。

そうなれば、きつと人は電子の海に溺れながら幸せな夢を見続けることができるのかもしれませんが。私や祖母のように悩むことも、自分を嫌悪することもなく、至福な時間を過ごすときがいつかは来るのです。

その夢はスイッチ一つで簡単に霧散してしまう陽炎みたいなもので、みんなそんな曖昧なものに頼り、どんどん弱くなってしまふのかもしれないですけど、そんな光景をみることには、少しだけ憧れてしまいます。

そんな馬鹿な妄想とともにすっかり時間が過ぎて四月に入り、二年生に上がります。

そしてその始業式の日、私は小町ちゃんから八幡さんが交通事故に遭ったことを聞いたのです。

少女期Ⅴ　　く幼馴染く

八幡さんは車に轢かれてしまったそうですが、命に別状はなく、左足を骨折して三週間ほど入院するだけだと、小町ちゃんから休み時間のときに聞きました。

放課後、小町ちゃんから一緒にお見舞いに行こうと誘われましたが断ります。初めてのお見舞いというのは、やっぱり家族だけで行くべきで、余所者の私が一緒にいる違和感を、どうしても拭えなかったのです。

車で迎えに来た小町ちゃんのご両親と挨拶だけ交わし、一人で帰る道に就きます。

……命に別状はないと小町ちゃんは言っていました。三週間の入院というのはとても長い時間です。特に進学したばかりの時間というのとはとても貴重で、八幡さんはその貴重な時間を失ってしまったのです。新しく学校が変われば、八幡さんに友達ができるかもしれないと密かに思っていたので、少し残念な気分になりました。

誰もいない家に帰って部屋に入り、制服のままベッドで仰向けになります。寝ころんだときにスカートが乱れて太腿が露わになりましたが、誰の目もないので気にしません。そのままごろごろしていると、制服の生地に皺が寄るかもしれないですが、今日は母も父も少し遅くなると言っていたので、しばらくはこのままの体勢でも何かを言われることはないでしょう。

それにしても骨折、といってもどの程度の状態なのでしょう。骨を折るくらい強い衝撃だったら、もしかしたら轢かれた拍子に頭まで打っていることもあり得ます。脳震とうというのは頭を打った直後よりも翌日の方が危ないと聞きますし、まだ安心とは言えないのかも

しれません。

……すぐに馬鹿なことを考えていたことに気が付きます。

病院で検査をしているでしょうから、素人の心配など無意味です。馬鹿な想像です。急に恥ずかしくなって体勢を変えてうつ伏せになり、枕に顔を埋めます。さらに目を瞑って光を完全に遮断して、真っ暗闇に身を浸します。

そもそも自分の心配の種類が分かりません。八幡さんが死んでしまうのが怖いのか、八幡さんが死んだ後の自分を想像するのが怖いのか、私には全く区別が付かないのです。

そのままいつの間にか眠っていて、亡くなってしまった人も含めた家族六人で食事をしている夢を見ていたのですが、携帯のバイブレーションが震えて目を覚まします。いつの間にか外は暗くなっていて、暗い部屋の中携帯だけが怪しく光っています。携帯を手にとって確認すると、液晶画面に小町ちゃんの名前が踊っていました。

「……もしもし」

「あ、朱音ちゃん？ お兄ちゃんの様子なんだけどね」

「うん」

小町ちゃんは一拍つきましたが、その間がとても長く感じます。

「全然大丈夫だったよ！ もう足の骨以外はほとんど健康なくらい」

「そっか。……よかった」

自分でも少し驚くくらいに安堵の声を出していました。

「もうね、心配して損したくらい。もうこの際に、目の腐り具合も病院で治してもらえないかなっ？」

「……ふふっ、そうだね」

小町ちゃんと簡単な話をして電話を切ります。どうやら八幡さんは祖父が以前入っていた病院に、三週間ほど入院するそうです。

翌日のお昼休みに小町ちゃんと話をして、お見舞いに行こうと再度誘われましたが、私なんかが行っていいのか分からないと言って、もう一度断りを入れました。

でも分からないのは本当なんです。もうほとんど関係のない、強いて言えば親友のお兄さんのお見舞いに行くべきなのでしょうか。

もっと自分の感情に従って行動するべきなのでしょうが、従った場合は結局何もしないのは分かっています、だから常識というものを知りたいんです。でも私の短い人生経験だと、その常識すら知りません。

そして八幡さんが入院してから最初の土曜日。朝起きて、少し遅い朝食を食べ、シヨートパンツにパーカを合わせただけのラフな格好でリビングでテレビを見ていると、植裁の水やりから戻ってきた母が声を掛けてきました。

「朱音、少し悪いんだけど、今からちよつと頼まれごとをしてくれない？」

「んー？ いいよ。何すればいいの？」

お風呂掃除か買い物だと思って適当に返事をすると、母は思いを読らない言葉を口にしました。

「ありがとう。じゃあ、ウチの代表として、今から八幡くんのお見舞いに行ってくれる？」

「……どうして？」

「どうしてって、朱音がお世話になってるし、それに何度もウチに来てくれるのに何もしないのは不人情じゃない」

母は手を頬に添えると、さも当然のように言いました。

「でも最近ほとんど話をしてないし、それでも行くべきなの？」

「それでもよ。疎遠になっちゃっても、お世話になったことには変わらないんだから、ちゃんとこういう時は顔を出すべきなの。それに朱音だって、八幡くんが嫌いなわけじゃないんでしょ」

「そりゃ、そうだけど……」

そうやって言われてしまうと、断る理由がなくなってしまいました。

でも確かに不人情と言われると、そういう気がしてきました。私と八幡さんの関係を今はいまうまく説明することができませんが、それでも大切なものをいくつも貰ったのです。

だったら、お見舞いくらいは行ってもいいのかもしれない。

「……分かった。着替えてくる」

「あ、朱音。ちよつと待って」

流石に八幡さんの前に出られるような格好ではないので部屋に戻って着替えようと思つて階段を昇ろうとすると、母が背中に声を掛けました。

「お母さん、お見舞いの花はクロッカスがいいと思うな」

そして私は道中で買った花束を手に地元の総合病院行きのバスに乗っていました。休日の午前中だからか、それとも地元の人はみんな車でお見舞いに向かうのかは分かりませんが、バスの中は私と、どこかのお婆ちゃん、スーツを着たサラリーマンしか乗っておらず、閑散としていました。

何を着ていこうか散々迷つた挙句、病院に行くということとで清楚めのロングスカートとブラウスを着て家を出ましたが、それでもバスの中で変な格好ではないか気になってしまい、窓を鏡代わりにして自分の姿を確認します。

舗装が悪いのか、がたがたと座席が揺れる中、考えごとを進めます。

久しぶり話すせいもあり、何を話せばいいのかよく分からないのです。以前は二人きりになつても話す内容なんて簡単に見つけられたはずなのに、今はこれっぽっちも話題を用意することができません。

最後に話したときは、何を話したんでしたっけ。確か比企谷家で一緒にドラマの再放送を見ていたときだと思つのですが、その内容を記憶の片隅から拾い上げることができませんでした。

とりあえず、お見舞いの言葉をかけて、外で無視するような形になったことを謝ろう、とだけ心の中に決めたところで、バスが病院前の停留所に止まり、バスを降りました。

四年ぶりに訪れた病院は、外観も、院内にこびりついた匂いもあのころと全く変わっていなくて、祖父のお見舞いに行った記憶が自然と蘇ります

でもあの時は今ほど緊張していませんでしたし、腕に花束を抱えてもいません。両親と一緒に行ったときとは違い、今は自分の足でこの場所にきています。

あらかじめ小町ちゃんから聞いた病室へ向かって足を進めます。病室に近づく度に、自分が緊張していくのが分かり、話す内容を何度も何度も吟味をします。

「あつ、ごめんなさい」

そうやってうんうんと唸っていると、曲がり角の所で強い衝撃にぶつかります。

前方を確認すると、五十代くらいで話好きそうな雰囲気な、女性の看護師が驚いた顔をして私を見ていて、次に私が持っている花束へと視線を移しました。

「いえ、いいのよ。……それにしても、いいお花ね。もしかしてお見舞いの相手は、男の子？」

「……どうしてそう思ったんですか？」

「その花の名前はクロッカスといってね。花言葉は『信頼』、『私を信じて』、『青春の喜び』、『愛の後悔』でね。まあ色々あるけど要するに、仲

直りしたいっていう意味なの」

「ああ、そういうことですか」

……本当に私のお母さんは優しくて、綺麗で、お節介な人です。

そして特に院内で迷うことなく、八幡さんの病室にたどり着きます。

扉の取っ手に触るとき、心臓がびっくりするほど早く打っているほど早く打っていることに気が付いて、一つ、大きな深呼吸をすると、まだまだ緊張は残っていましたが、それでも少しだけ落ち着きました。

「こ、こんにちわー」

大きい声にならないように気を付けながら病室にゆつくりと入ります。

個室ではないようで、四つのベッドが左右に二つずつ備え付けられています。その内の二つはシーツや布団が置かれておらず、一つは八幡さんと同じ歳くらいの男の人が使っていました。彼は病室に入った私をちらっと見ただけで、すぐに手元のサッカー雑誌へと視線を戻しました。

「……こんにちは、八幡さん」

そして残りの一つ。クリーム色のカーテンの向こう側のベッドに、病院服を着た八幡さんが座っていたのです。

「足の具合はどうなんですか？」

「左足が全く動かん。寝返りを打つのがこんなに大変だとは思わなかった」

クロッカスを花瓶に活け、花びらをちよろちよろと触りながら出てきた言葉は、やっぱりずっと頭の中で考えていたものでした。

それでもしつかりと、声が上擦ることも噛むこともなく自然に尋ねることができて、八幡さんも自然と以前と同じように答えてくれました。

「それにしても八幡さんが入院してしまうなんて、本当に驚きました」

「そういや、今まで怪我らしい怪我なんてしなかったしな。不用意に外出しなかったからな」

「それもあるんですけど……。子犬をかばってひかれたって、小町ちゃんが言っていましたよ」

そう、そのことに一番驚いて、すごく安心して、そしてとっても眩しいって思ったんです。

きつと私だったら、我が身可愛さで見逃してしまうでしょうから。

「別に助けてなんかないぞ。ただ見逃せなくて勝手にドジを踏んだだけだ」

「それを助けたって言うんですよ。いいじゃないですか、誇ってももし私が飼い主だったら、八幡さんのことが好きになってくるくらいです」

「……もしも、だろ？」

「そうですよ」

緊張を押し込むように、唾を飲み込みます。

冗談も言えて、凄く自然に話すことができる今だからこそ、しっかりと伝えなければいけないんです。

言葉は胸の中のため込んでおくとどんどん重くなって、どんどん外に出し辛くなってしまいます。だからこの機会を逃してしまえば、さらに言いにくくなってしまおうでしょうから。

バスの中から何度も何度も繰り返してきた言葉を、この半年間ずっと言うのを先延ばしにしてきた言葉を、ようやく吐き出すことができました。

「八幡さん……」

「なんだ？」

「秋ごろからずっと無視していて、ごめんなさい」

「……それは、小町に言うべきだろ」

「小町ちゃんには後で言います。でも、まず八幡さんに伝えないとって思っ」

小町ちゃんはこの半年間ずっと心配をしてくれていて、それでも無理に私と八幡さんを引き合わせるようなことは一度もしませんでし

た。

そのことにずうっと申し訳なく思っていて、ずっと謝らなければいけないと思っています。でもそれは、私がしっかりと八幡さんに謝った後に言うべきなんだと思うんです。

「お前に謝る前に、先に謝るのは俺のほうだぞ」

八幡さんは目を反らすことなく、しっかりと私の顔を見て言いました。この人は普段どうでもいい場面ではすぐに顔を背けたりするくせに、大事な所では絶対に目を反らさないのです。

「俺だって、外でお前のことを無視していた」

「……あれって、私に合わせてくれたんじゃないんですか？」

「というか、切花が俺に合わせてくれたと思っていただけだ」

「……………」

「……………」

要するに私たちは、同じように考えて、同じタイミングで、同じ行動をとっていたのです。

環境も性格も全然違うのに、行き着いた先が同じというのは少し可笑しく、少しだけ笑みがこぼれてしまいます。

「なんか、馬鹿みたいですわね。私たち」

「かもな」

「ねえ、八幡さん。私たちってどういう関係なんですか」

「や、藪から棒にどうした」

「いえ、誰かに聞かれたときに何て答えればいいのかなんて思いまして」

もし私たちの関係を恋人以外で上手に表すことができれば、きっともう少しだけ上手く立ち回れたのではないかと思っただけです。

それで八幡さんが変に中傷を受けたことが無くなるわけでも、これから半年前と似たような場面があったときに説明して納得してもらえるのかは分かりませんが、それでも私たちの関係を説明できるのならばしておきたいんです。

「そりゃ、親友の兄貴じゃねえのか」

「そうなんですけど、何か私の中で落とし込めないっていうか。言い方が悪いんですけど、八幡さんって小町ちゃんのお兄さんって感じがしないんです」

「自然に傷つくことを言うな、お前」

「ごめんなさい、そういう意味じゃなくって……」

出会った順番が八幡さんの方が先だからでしょうか。私としては小町ちゃんは小町ちゃん、八幡さんは八幡さんという認識が強いんです。どちらかがどちらかに付随するのではなく、二人ともそれぞれに大切なんだと思います。……言葉にするには恥ずかしいですけど。

「……なら、一つだけいい言葉がある」

自信満々に八幡さんは言いましたが、何故か少しだけ顔を赤くしていました。

「幼馴染だ」

「……はい？」

「だから、幼馴染だ。小町を絡めないならそれだろ。まあ、妹二号的な意味合いでもあるが。まあ、ほとんど腐れ縁的な意味だし、ちょうどいいだろう。それに、幼馴染は恋愛的に結ばれにくいというデータがあるから誤解もされにくい」

参考にしたデータに凄い偏りがある気がしますが、その点については指摘しないでおきます。

それにしても、幼馴染というのはあまり意識していなかったのですが、改めて考えると、確かにそう言う間柄になるのかもしれない。

それに幼馴染という言葉は、少しだけ心地がいいんです。

「……だから、もし誰かに関係を聞かれたら、腐れ縁の、妹の兄貴だから切っても縁がなかなか切れない、幼馴染とでも答えておけ」

「分かりました。では失礼して」

病室に入るときと同じように大きく深呼吸をしました。さつきと違って緊張は全くしておらず、心の中はただただ穏やかな気持ちでした。

言うべき言葉はすぐに決まりました。半年前の会話は思い出せないくせに、出会ったばかりのころの記憶は不思議と今もはつきりと残っていました。

「……私は切花朱音といって」

だから、この事実をまず最初に八幡さんに伝えたいんです。

「あなたの、幼馴染です」

それからは平穩に時間が流れていきます。

二年生になっても小町ちゃんと同じクラスにはならなかったのですが、それでもいじめなどもない普通のクラスに入ることができたと思っっています。

一年生の頃の噂はもう完全に消え去っていて、また何人かの男子に告白をされましたが、一年生のときと同じように断りました。

八幡さんが高校に通い始めたからでしょう。帰宅時間がずれたために、帰り道でニアミスすることが殆どなくなったため、かつてのように誤解されることはありませんでした。

それでも比企谷家に遊びに行ったときは、小学生のころとは少し違っていましたが、時に他愛のない話をして、下らない冗談を言い合ったりしたのです。

何かが変わったかと言われると、具体的に答えることができないのですが、それでも一年生の後半のような胸のつつかえがなくなっ

心が軽くなったのだけは感じました。

二年生の冬のバレンタインには、小町ちゃんと一緒にクラスメイトに配るようなチョコプレートと一緒に作りました、余った材料を使つて、小町ちゃんと二人で一つでチョコプレートを作り、八幡さんにあげたりもしました。八幡さんはぶっきらぼうに受け取っただけですが、私も小町ちゃんも、ただ恥ずかしがっているだけというのはすぐに分かつて、二人でほくそ笑んでいました。

そして三年生になり、ようやく小町ちゃんと同じクラスになった春のころ。放課後に深崎くんという女子に人気のあるクラスメイトに告白されたのを八幡さんに目撃され、私は約二年ぶりに八幡さんと同じ帰り道を歩くことになったのです。

正直、八幡さんも深崎くんも、もう少しだけタイミングを読んでくれると有難かったのですが……

少女期VI　　胸の中

私が中学三年生に上がり、八幡さんも高校二年生に上がって、少しだけ変化が起きました。八幡さんが部活動に入ったのです。

奉仕部という名前からすると校内の掃除でも行いそうな部活ですが、八幡さん曰く人の相談に乗るそうです。八幡さんの説明が曖昧だったので具体的な所までは分かりませんでした。それでもその活動内容は凄く八幡さんに似合っていると思いました。

八幡さんは否定をするでしょうけど、あの人は誰かの為に動くことができる人なのです。だから憎まれ口を叩きながらも、結局は見過ごせないで相談に乗ってあげる姿が簡単に想像できて、その話を聞いたとき、つい頬を緩めてしまいました。

そして小町ちゃんとテスト勉強をして八幡さんと合流したとき、ちやうど八幡さんの同じ部活の人にも会いました。

雪ノ下雪乃さんと由比ヶ浜結衣さん。始めは二人とも女の子だったのですごく驚いたのですが、話してみると二人とも凄く魅力的な女性だということがすぐに分かりました。

八幡さんも今まで私が見た中でも一番というくらいに自然に、力を抜いて話していて、その姿を見てみると、私は嬉しい気持ちが半分、納得する気持ちがちやうど半分わき上がって、複雑な気持ちになりました。

何となく、八幡さんと一緒にいるのは、雪乃さんたちがいいなって思っただけです。

初めて話しただけで全部は分かりませんが、雪乃さんが人間関

係に不器用で、結衣さんが器用というくらいは分かります。そしてお二人とも私が持っていないような暖かいものを持っている気がするんです。

悩んで、傷ついて、すれ違って。それでも嘘や欺瞞で覆い隠さないで、誰かと繋がって、互いに受け入れること。八幡さんが、密かに望んでいるもの。

それは私が絶対に持つことのできないものです。

初めて雪乃さんたちに会ったとき、結衣さんに「付き合おうと思ったりしなかったの？」と聞かれて、私は「好きな人としか付き合わない」と答えました。その答えはやっぱり私の本心で、これから一生抱え続けるものなんだと思います。

中学校に入ってから二年間過ごして、恋や愛について、自分なりに解釈をすることができました。

……好きってというのは酷く独善的なものなんです。

相手に自分を理解してくれることを願ったり、自分の想いが相手に伝わらなかったことに憤ったり、自分にとっての理想の相手を思い描いたり。

でもそれは悪いことではなく、むしろ正しいくらいで。そうやって願うからこそ、叶ったものはどこまでも幸せに満ちあふれたものになると思います。青臭くて、夢見がちだと言われるかもしれませんが、それでも私はその考えを信じます。

だから私は、ちゃんと誰かを好きになることができるまで、誰とも付き合わないと決めました。もし私が誰かと付き合ったとしても、私

はその人と愛のようなものを育めるとは思えません。

だったらもっと別の人、例えば私と付き合う人を好いている人とかが隣に座る方がよっぽど正しくて、安心するんです。その方がきつと幸せになれるはずです。

……何も得ようとしないう人間が、誰かの幸福を奪ってはいけません。です。

そういったことを上手に誰かに伝えられればいいのですが、なかなか思い通りにはいきません。

それは私が深崎くんから告白されてから数日経ったときでした。朝登校して席に着き、順々に来るクラスメイトと挨拶を交わしていたとき。何人かの女の子から返事がこないのです。

後から考えてみると、その子たちはクラスでは派手目の、男の子から好かれそうな顔立ちをした四人くらいのグループで行動をしていました。

彼女たちとは特別に親しいわけではありませんでした。席が近くなったときには流行のミュージシャンや俳優について話すくらいの、一般的にはクラスメイトで、女の子的に言うところの友達ぐらいの間柄です。

機嫌が悪い日なのかな、と楽観的に思っていたのですがどうやら事態は違っているようです。

彼女たちはあからさまに私と敵対はしませんでしたが、わざとらしく私を無視しました。露骨に非難の言葉を浴びせることはなくても、かすかに私が聞き取れる声で、陰口を言いました。

声の方へ顔を向けると、全員が薄めの化粧をした女の子たちが固まっています。人によって違います。全員が髪に軽くパーマを当てていて、僅かに茶色に見える程度に髪を染めている子もいました。

学内では化粧をしてはいけないのですが、生活指導の先生と言い争っている内に妥協点を見つけて、黙認してもらえる程度の化粧。ファンデーションとアイブロウくらいしか許されなかったせいで、目と口唇が妙に印象の薄い顔が、冷たく笑っています。

のっぺらぼうみたいだと、その時思いました。チークをしていないせいかただ白いだけの顔は、遠くから見るとそう思ってしまうくらい表情が欠けていて、誰が誰だか判別ができません。

寂しくも、苦しくもありませんでした。ただかつてのように、頭の中に張られていた糸がまた一つ、ぷつんと切れてしまったのを感じたくらいです。

そうなってしまうえば後は簡単です。向こうが一方的に嫌ってくるのならば、私はただ無関心でいるだけでいいんですから。別に何の問題もありません、中学校を卒業したら切れてしまう細い糸が、一年早く切れただけです。

ただこういう時はもつと悲しむべきなのは分かっています、それができないうちに嫌気がさしました。

私が何もしなかったせいで大して表面化に出ないこの問題も、女子たちには簡単に伝わりました。

幸いというか、私を嫌う子たちは女子たちに敵を作りやすい性格だったので事件が飛び火することはありませんでした。

むしろ別のクラスの子たちから若干心配されるくらいで、親切に私が彼女たちから嫌われる原因を教えてくださいました。

綾ちゃん、剛志くんのごことが好きだったんだって。

そう言われても、綾ちゃんにも剛志くんにも心当たりが全くありません。よくよく思い出してみると、綾ちゃんは芹沢綾といってあのグループの中では少し地味めの子。剛志くんは私に告白してきた深崎くんの下の名前でした。

しかし原因が分かったからといって、解決には至りません。

私が深崎くんに興味がなかったことや、そもそも好きな人しか付き合えないと決めていることを伝えても良かったかもしれませんが。でもきつと彼女たちを無理に怒らせることになりそうで、結局は何もしませんでした。

そして少し時間が経つ頃には、私の生活習慣の中には綾ちゃんたちと話していたことなんて、とつくに消え去って、平穏な毎日を取り戻していったのです。

私と小町ちゃんが奉仕部の仕事を手伝うようになったのはほんの偶然です。たまたま同じクラスの川崎くんが八幡さんたちにお問い合わせがあつて、私たちがその仲介をしたからです。

相談の内容はただの一目惚れで、正直言って成功するとは思わないまま川崎くんに着いていききました。しかしその時に私が一番に気になったのは、川崎くんのお姉さんの沙希さんでした。

制服を着崩して、強気そうな目とちよつとだけぶつきらぼうな言い方の人。てつきり怖い人で姉弟の仲が悪いのかなと思っていました。これが川崎くんを前にするとお姉ちゃんに早変わりします。

川崎くんも川崎くんで、クラスでの振る舞いと全然違っていました。沙希さんが何かを注意すると、小言で言い返し、それをまた沙希さんが注意するという家族らしい光景が、私の前に繰り広げられたのです。

結局別れ際まで姉弟の微笑ましい光景は続き、夕焼け空の染められた道を姉弟で仲良く帰る姿を見て思います。

あの光景は私が入れるかもしれないなくて、でもとつくの昔にどこか遠くに消えて、それつきり手を伸ばさなかったものでした。

あんな風に私がお姉さんぶって弟を諭し、弟が鬱陶しがってぐちぐちと文句をいって。それを小町ちゃんや八幡さんが苦笑いしながら見守っている現在も、あつたかもしれないんです。

それはとても温かくて、素晴らしくて、心が満たされるもので。だからこそ私はそんな光景を今もガラスケースの向こう側から遠巻きに眺めただけで、ただ通り過ぎてしまったことの罪悪感で胸が苦しくなりました。

ずっとずっと忘れていたものが喉までせり上がってきて、吐き気をこらえるので必死でした。どうにか笑顔を作って小町ちゃんと八幡さんに「私たちも帰ろう」と伝えて足を踏み出したとき、胃が嫌な動きをして気持ち悪さが増しました。

そして今でも足繁くお墓参りに行っていた理由に、ようやく気が付

きました。

あれは、私なりの贖罪なんです。

死んでしまった弟を思つて泣くことができなかつたから、今でも思ひ出すようにお寺に行つては、弟のことを記憶に刻みつけているんです。そうしなければ、私はきっと年に一度の行事で思い返すきりで、弟のことをほったらかしにしてしまうから。それだけはいけないと頭の中で分かっていたからこそ、せめて心の中で抱えていようと思つたんです。

川崎くんの一目惚れの相手は井杖恵さんという、少しユニークな性格をした人で綺麗な顔立ちをした人でした。こざっぱりとした印象で、初めて会つたときでも距離を感じさせない人なのですが、井杖さんが時折見せる表情が、私はあまり得意ではありませんでした。

初めて井杖さんと話した日。彼女は妙に透き通つた目で私をのぞき込みながら好きな人を聞かれて「いない」と答えたとき、井杖さんは「ふうん」と小声で呟いて、口元に笑みを浮かべました。

その笑い方は年下の女の子をやれやれと見守るようでした。侮蔑の心もなく、昔の自分を思いだすような温かい目で。だから嫌な予感がありました。なんとなく自分の奥底に封じていた感情を勝手に引き抜かれて、私の前にさらけ出しそうな恐怖感が体を支配しました。

その予感は半分当たつて、半分外れます。

その翌日のこと、八幡さんと私、井杖さんと川崎くんとデートをすることになりました。八幡さんにデートに誘われたときは飛び上がるくらいに驚きました。絶対に何か裏があると思つて理由を尋ねる

と、井杖先輩の発案だと言うので少し訝りましたが、それでも断る理由なんてありませんでした。

だからその週末、普通のデートにようにお洒落をして出掛けて、普通のデートをしました。

ペットショップで犬と戯れて、つまらない映画を見て二人で内容について愚痴って、ご飯を食べて。

それは夢に見ていたわけではないですけど、夢のように楽しくて。井杖さんの考えていることはよく分からないけれど、来て良かったと、井杖さんがデートの提案をしてくれてよかったと心の底から思いました。

そしてだからこそ、一番いい場面に来る前にあっさりと醒めてしまいました。

お洒落なカフェで、綾ちゃんたちに遭遇したとき、本当に何も思わなかったんです。私の中では彼女たちとの関係が切れてしまっていたから、後悔も未練も全然なくて、だから彼女たちが向ける視線なんてどうでもよくて、生クリームがたっぷり乗ったパンケーキを味わっていたいと思っていたんです。

しかし、八幡さんはやっぱり、そんな私のことを許してはくれませんでした。

「でも、寂しくないのか？」

八幡さんに言われたとき、嘘を吐くのが最良だとは分かっていたのです。

寂しい。知らないうちに傷つけて無視をされてしまった。仲直りしたいのにどうしていいのか分からない。ずっとこのままだったらどうしよう。

そのように言えば、八幡さんはきつといつも悪態をつきながら、独特の人間関係論を語って、諭してくれるのでしょう。そうやって波風を立てないで、やり過ぎすことだってできたはずです。

……でもそれだけは、できなかつたんです。嘘を吐こうとすると口唇が動かなくなつて、頭の中に描いていた言葉は喉を通ることすらしませんでした。

ただ正直に自分の中にあるものを吐き出しただけです。

何てことはありませんでした。あの嫌な予感を実行したのは私です。自分で胸に手を突っ込んで、ぐちゃぐちゃにかき回した後引き抜いて、八幡さんと私の前に差し出したのは、私自身だったのです。

……差し出したものは、空虚な形をした私の心臓でした。

少女期Ⅶ　　いろいろな涙

「だから、お前は間違っているんだ」

その言葉を八幡さんが口にしたとき、体の奥から熱くドロドロしたものがせり上がってきて、震えそうになりました。

震えを必死でこらえていると、すぐに懐かしい気持ちに雪崩こんできて、胸の中で色々な感情が絡みあつてできたものは、諦めました。

結局八幡さんは、あのときからちっとも変わっていませんでした。成長するにつれて目がどんどん濁って、格好良さが大分減ってしまいました。それでも一番奥に秘めていたものは、あのときそのままでした。

八年前のあの帰り道。太陽が夏を知らせるような鋭い日差しを照りつけて、汗と緊張を必死で押さえていたあのときと。

……そして私も、あのころからまったく成長していません。元々欠けていた部分は、相も変わらず空っぽのままでした。

だからでしょう、何となく八幡さんの望む人間にはなれないと分かかってしまったんです。八幡さんの隣に居て幸せになれる人を二人知っていて、私なんかが享受するよりもずっとふさわしいと思いました。

決心はもの凄く簡単に決まります。方法も、すぐに見つけることができました。何てことはありません、私はそんな不器用なずっと見えてきたのですから。

「……その考えは、八幡さんの自己満足ですよ」

しかし出てきた言葉は、私が思い浮かべていたものとは、全く違うものへと変貌していきます。

「二人ぼつちを正当化しているんですよ。自分の都合で誰かの都合で友達を作れないで、一人ぼつちになってしまったのを、理由をつけて誤魔化しているんですよ」

理不尽なことを言つて、こんなやつと二度と話したくないと怒らせなかったのです。しかし、こぼれ落ちる言葉はすぐに外装が剥がれて、むき出しになっていきます。

「自分の中にある漫然とした不安感に耐えられなくなって、でも寂しいから、本当は求めているから大丈夫だって心の奥で思っているだけじゃないですか」

口からでる言葉はどんどん鋭利になっていって、容赦なく八幡さん突き刺していきます。私が言葉を紡ぐ度に、少しずつ悲痛な面もちになっていくのを知りながら、それでも私は言葉を止めることはしませんでした。

もしかしたら、今までで一番怒っているのかもしれない。普段あまり怒ることがないから、心の落ち着かせ方が分からなくて、気持ち が全く収まれなくなっています。

「別に悪いと言っているわけじゃないんです。それはきつと誰にでも あることでしょう。……ただ、その自己満足を私に押しつけないで下さい。その自己満足で、私の中にあるものを否定しないで下さい。それが、私は一番嫌です」

最後に吐き出した言葉は、紛れもない私の本心でした。そして言い

切ってから八幡さんの顔を覗いたときに、言った全ての言葉を後悔しました。

結局私は、八幡さんのことを傷つけただけなんです。嫌われようと思っても全然上手くいかなくて、ただ頭に血が上ったまま、無防備な相手に酷い言葉を浴びせただけです。

そんなことしかできない自分が嫌で嫌で仕方がなくて、目の奥から涙がこぼれそうになるのを感じて、必死で我慢していました。

傷つけた人間が泣いているだなんて、許されるはずがありません。

一旦八幡さんに背を向けて、引き締めていた表情を緩めます。涙がこぼれないように注意しながら普段の表情をどうにか作り、ようやく振り向くことができました。

「今日は楽しかったです。ありがとうございました」

そう言ってお辞儀をしたとき、とうとう堪えきれなくなって、涙が数滴落ちました。涙はアスファルトに落ちて、黒い染みをいくつかわたっていきます。

顔を覗かれないように気を付け、もう一度八幡さんに背を向けて、帰り道に就きました。

一回決壊してしまった涙は、もう止まりませんでした。しゃくり上げることもなく、涙はぼろぼろと頬をつたい、ただ流れ続けます。

涙を流していると、頭の中がどんどん冷静になっていき、あんな言葉をついてしまった理由に見当がつかまりました。

私は自分の性格を肯定していません。私の価値観はどこか歪で、誰にも執着できないのなら、きつと周りに一人になつてしまふような生き方を、躊躇うことなく進むかもしれません。それは、一般的な倫理から外れているのでしよう。

でも……それでも私は、自分のこの性格を誰かに否定されたくはなかつたんです。否定するくらいなら、放っておいて欲しかった。

間違っているなんてとづくに知っているんです。そのことを知つて、罪悪感に苦しんで、どうにか諦めて、折り合いをつけて生きているのに、それでも間違っているとされたら、どうしたらいいんですか。

正しいと言われたいわけではありません。それでも、正しくはないけれど、この空虚な心を抱えたままでもいいと、言つて欲しかったんです。

それは、小学生でも持つている自己承認欲求。自分のことを認めて受け入れて欲しい、幼稚な心。

……何だ、私はちゃんと八幡さんのことが好きじゃないですか。

私は八幡さんにその言葉を言つて欲しかった。そのままでもいいと、言われたかつた。

だつて自分から私の性格を晒したのは八幡さんだけですから。もしかしたら、小町ちゃんや両親も気付いているかもしれないが、自分から晒そうと思つたのは八幡さんだけでなんです。

しかし、その片想いも今日で終わりです。

私が突き出した心臓は、八幡さんに否定をされました。

涙はもう自分を責めるものなのか、それとも失恋から来るものか分かりません。きつと前者でしょう。

それでいいのかもしれませんが、だつてこの恋心も、明日か明後日になるか分かりませんが、すぐに消えてしまう。後悔を引きずることあつても、未練だけは引きずらないと、私の頭が冷徹に訴えてくるんです。

ようやく涙が止まったので、少し回り道をして、コンビニに寄って洗面所を借りて顔を洗います。頬に残っていた涙の辿り道は、水に触れて少し擦られただけで、跡形もなく消えました。

顔を洗うと気持ちのほうも大分晴れてきていて、いつも通りの私が戻ってきます。

店を出て空を見上げると、いつの間にか夜の帳が降りてきていました。眩いばかりの星たちは、手の届かない、遙か遠くで踊っていました。

前日の晴天とは打って変わった灰色の空が覆った朝。目が覚めてご飯を食べて洗面台の鏡の前に立つと、何事もなかったような顔の私が写っていました。

もちろん寝癖で髪の毛は所々跳ねていて、瞼が半分くらい閉じていましたが、いつもの私の朝の顔です。

顔を洗って、化粧水と乳液をつけ、髪をとかします。一通りの支度

を終えて、指でほつぺたを持ち上げてれば、完全にいつも通り。

家を出て、小町ちゃんとの待ち合わせ場所に着くと、小町ちゃんはすでに到着していました。そして私と顔を合わせると開口一番、

「朱音ちゃん、昨日お兄ちゃんと何かあったの？」

と呟き、反射的に私は固まってしまいました。

どうしてそのことを聞くのでしょうか。私は普段通りの表情のはずですから、外見で何かを察することはできないと思います。八幡さんから昨日のことを聞いたのでしょうか。でも八幡さんが誰かに言うとは思えません。

「どうして、分かったの？」

答える言葉を間違えたことに気が付いて、小さく首を振りました。これでは何かあったと自分から白状しているだけです。

「あのね、気付いてないかもしれないけど、朱音ちゃんって嬉しいことがあったときは結構表情に出るのに、嫌なことがあると凄い普通の顔をしてるの」

「うん」

「で、お兄ちゃんとデートした朱音ちゃんが普通の反応してるなんてあり得ないから、何かあったのかなーって思ってた」

「……………」

色々と言いたいことはありませんが、それでも大体的を射ているの

で、黙ることにしました。

どうしようかと頭の中で考えながらも、実は言う和小町ちゃんに話すことには全然抵抗がありません。ただ今から昨日の出来事を話すと、学校に到着するまでに話を終えられるとは思いません。

「……放課後でいい？」

「いいよ！ ゆっくり話そ」

小町ちゃんはそう言うと、爽やかな笑顔を浮かべて、ひらりと私の前に躍り出て、学校への道のりを歩いていきました。

授業の内容が全く入らないまま、学校での時間が過ぎていきます。休み時間に綾ちゃんのグループから何かを言われましたが、大したことのない内容のようで、すぐに忘れてしまいました。

放課後になり小町ちゃんと一緒に学校から少し離れたファミレスに行きます。空模様はどんどん不安定になってきて、町ゆく人々が傘を片手に心配そうに空を見上げる様子がちらほら見られました。私は、傘を持ってきていません。

夕方どきのファミレスは私たち以外にも学生が多く、店員さんがせわしなく働いていました。少し間って席に着き、ドリンクバーを注文します。

そうしてオレンジジュースが二つ、テーブルの上に並べられると、ようやく小町ちゃんが「それで、昨日何があったの？」と今朝と同じ言葉を口にしました。

どこから話すべきかで一瞬迷い、そして色々な出来事を口にしまし

た。

ずっと私は八幡さんのことが好きだったこと、それ故に自分の性格を間違っていると言われてどうしようもなく怒ってしまい、酷い言葉を浴びせてしまったこと。

私がおか言う度に小町ちゃんはどういうふうにと頷くばかりで、何も言いません。全て話し終えてからしばらく、珍妙な沈黙が漂っていると、ようやく小町ちゃんは相槌以外の言葉を口にしました。

「それで、朱音ちゃんはどうしたいの?」

「それは、謝りたい……というか謝る。酷いことしちゃったし」

「それだけ? 謝った後はなにかしないの?」

妙に威圧感ある声で、小町ちゃんは言います。

「……う、うん」

小町ちゃんは私を舐めるように上から下まで眺めると、呆れたようにため息を漏らしました。そしえジュースを一口飲みます。

「昔から思ってたけど、朱音ちゃんって本当に鈍感。どうしてこんな簡単なことに気付かないってくらい鈍感。」

「そんなことない……と思うけど」

「そんなことあるの! だって朱音ちゃんどうせお兄ちゃんに嫌われて、このまま縁が切れるとか思ってるでしょ。しかもそのほうがお兄ちゃんの為になると本気で考えてそうだし」

目を丸くしながら、小町ちゃんを見返します。小町ちゃんは未だ言い足りないのか、ぶつぶつと何かを呟いていましたが、それは私まで届きませんでした。

それでも、私の心の中を覗きこんだように言い当てられたんです。もちろん小学校のころから一緒にいましたが、それでもここまでは見透かされるとは思っていませんでした。事実私は、小町ちゃんの考えていることは半分以上分かりません。

しかし、私の思考を「どうせ」呼ばわりするには納得がいきません。

「だって本当だし」

「そこが鈍感だって言ってるの！ そんな小さなことでお兄ちゃんが朱音ちゃんのことを嫌いになるはずないじゃん。朱音ちゃん自分のことを過小評価しすぎ」

「それこそ過大評価だよ。私、小町ちゃんが思っている以上に嫌な子だよ」

「そんなことないと思うけどなあ……。ねえ、朱音ちゃん、私が朱音ちゃんと友達になりたいって思ったきっかけって分かる？」

小町ちゃんはどこか懐かしむような、内緒話をして秘密を共有するような表情を浮かべて、前のめりになります。

「八幡さんに頼まれたからじゃないの？」

「それは友達になったきっかけ。……実は言うとな、お兄ちゃんに紹

介される前に一回だけ私たち、話したことあるんだよ」

私が首を捻っていると、小町ちゃんは「やっぱり覚えてない」と口を尖らせながら言いました。ストローでコップの中身をかき混ぜると、氷が弾けてからからとした音がします。

しかし、八幡さんに紹介された以前に小町ちゃんと会った記憶なんてありません。校内で擦れ違ったことはあるかもしれませんが、話したときは昇降口が最初のはずです。

「小学校のときに校庭の端っこにウサギ小屋があつたのは覚えてる？」

「うん。……入学してすぐに死んじゃったけど」

私たちの小学校では一年生と六年生がペアを組んで様々な行事に取り組む風習がありました。学芸会だったり、レクリエーションだったり、要するに一年生が小学校に慣れるために行われていたものです。そして、その風習の中に校内で飼育されたウサギの世話が入っていました。

二対の、白と黒のウサギ。ハナとブチと呼ばれていたウサギは、二羽とも目が小さく、くりんとしていて、私がウサギ小屋に入るとちよこちよこと寄ってきて、戯れるように懐いてくる可愛い子たちでした。

世話といってもウサギ小屋、餌を与えるくらいです。食事のときに私が苦手な人参スティックを口の前に持って行くと、美味しそうにかじるのが微笑ましくついてい何本も上げては眺めていました。

しかしハナとブチは私たちが入学してから、僅か二ヶ月ばかりで亡

くなつてしまいました。死因はナイフでお腹を引き裂かれたことによる失血死。犯人は、地元の中学生でした。

……覚えています。その記憶は鮮明に残っています。なぜなら二羽の死体を一番初めに見つけたのは私でしたから。

その日の朝の餌やり当番だった私は、必然的に全てを見たのです。金槌で破壊された錠、冷たくなって動かなくなった二羽のウサギの内蔵、血が染み込んで黒ずんだ土と、その光景を見て真っ先に気持ちが悪くなった私も、全部覚えています。

「……そうだね。それで死んじやった後に、ウサギのお葬式みたいなのをやったのも覚えてる？」

「それは、少しだけ」

あの話のどこまでを小町ちゃんが知っているかは分かりませんが、私は第一発見者だったので警察の人に話して事件の顛末まで聞きましたが、その顛末は全校集会で語られることはありませんでした。

「そのお葬式のとときに小町が泣きそうになると、朱音ちゃんが近くにいて」

「……声は掛けてなかったよね」

「そうだよ。だけど全然悲しそうにしていなかった。ホントにちつともつてくらい。周りの女の子はみんな沈んだ表情だったのに朱音ちゃんだけそんな顔をしているから、頭にきて」

その辺りはあまり記憶に残っていないのですが、おそらく私は小町ちゃんが言うような、平然とした表情をしていたのだと思います。死

体を見た後、気持ち悪さが真っ先に泡だつて、殺されてしまったハナとブチへの同情心が膨らんで、それだけでしたから。

だから、あつたとすれば悲しめなかつた罪悪感くらいだったと思います。

「その場で文句を言いそうになつたけど、先生もそのときに居たから諦めてね。次の日に朱音ちゃんに改めて文句を言おうと思つたら、朱音ちゃん、あのウサギのお墓の前で、手を合わせてた」

「……それは」

言うべき言葉が見つからず、尻すぼみになっていきます。あの姿は同じ生徒には不思議とあまり聞かれませんでした。

ハナとブチのことを忘れてしまったわけではないのに、どうしてだろうと今でも思っています。

「あんまりにも真剣にお祈りしていたから、次の日にしようと思つたら次の日も、その次の日も毎日お参りしてて。不思議に思つたから、一回だけ背中から声を掛けて理由を聞いたの」

確かに覚えています。あのとき、先生以外で心配をしてくれた子が一人だけいました。会話したときに私は背中を向けていたので、顔は見えていませんでした。

「そしたら朱音ちゃん、『この子たちが死んでしまつて悲しめなかつたから、せめて天国で幸せに暮らせるように祈ろうと思つて』って言つたんだよ。そのときに思つたの、この優しい子と友達になりたいって」

小町ちゃんは尊い思い出を語るように、懐かしさをもった顔で笑っていました。逆に私はほとんど頬が熱くなってきた、その恥ずかしさを押さえつけるのに必死でした。

弟が死んでしまった後、初めてお墓参りに行ったときに母が教えてくれたのです。お墓の前で手を合わせるのは、死んだ後でもしっかりと幸せに暮らせるように神様をお願いすることだと。

「呆氣にとられてたら朱音ちゃん、どこかに行っちゃうし。放課後に声を掛けようと思って探しても見つからないし。挙げ句にお兄ちゃんに紹介される形だったけど、それでも小町は朱音ちゃんと友達になりたいってずっと思ってた」

「……うん」

「だからね、小町は朱音ちゃんが言う嫌な部分を一番初めに見て、その次に優しい部分をしまったの。でも朱音ちゃんのことを全然嫌いにならなかったし、むしろ好きになったよ」

どうしよう、泣いてしまいそうです。だんだんと視界がぼやけて小町ちゃんの顔が歪んで見えます。胸の奥から鮮やかな感情がわき上がってきて、体を包んでいきます。

もう、やめてほしい。だってこれ以上聞いてしまったら、きっと私は泣いてしまうから。みっともなく小町ちゃんの前で大泣きしてしまうでしょうから。それは、すごく恥ずかしいです。

「だから小町は、そんな朱音ちゃんのが好きなの。ちよつと変わってるけど、でもすごく優しい朱音ちゃんだから好きになった」

小町ちゃんはようやく笑顔を変えると、先ほどと同じようにむつと

した表情を作ります。

「だから朱音ちゃんは鈍感だって言ってるの。小町たちの気持ちも全然分かってない。自分が居ないほうが幸せになれるとか朱音ちゃんはあると思うだろうけど、小町は朱音ちゃんがいなくなるのは嫌だよ。それで別の人と仲良くなったって、朱音ちゃんと離れちゃったら何の意味もないもん」

「……………」

とうとう堪えきれなくなって、泣いてしまいます。昨日と今日で涙腺が壊れてしまったからでしょうか、子供のようによくも悪くもなく、涙を流してしまいました。

だって、嬉しかったんです。そうやって私と一緒にいる方がいいと言ってくれたことがこんなにも嬉しかった。

私がしゃくり上げていることに気付いて、小町ちゃんが正面の席から私の隣へと移ります。

そうしてあやすように私の頭を優しく撫でました。ここ最近私の身長ばかり伸びてしまって、大分背が離れてしまいましたが、そんなこと関係ないように小さな手で撫でてくれます。

そのことが、余計に私の胸を熱くさせます。

「あーあ、せつかくの綺麗な顔が台無しだよ」

「小町ちゃんが、泣かせるから悪いの」

「そうきたか……………まあ、だからね、朱音ちゃん」

「……なあに」

「朱音ちゃんの性格からして、自分から告白するのは難しいけど。でももしお兄ちゃんがそれでも朱音ちゃんと一緒に居たいって思ったら、ちゃんと自分の気持ちに素直になつて」

「人をへタレみたいに言わないで。……でもがんばってみる」

私はそれからしばらく泣き続け、泣きやんだときには店内から好奇の視線に晒されていました。いたたまれなくなつてしまい、素早くお会計だけを済ませて、小町ちゃんから手を引かれるようにファミレスから出て行きます。

……きっと私はこの子には一生敵わないと思います。それでも、一生親友でいられるのなら、それは素晴らしいことなのでしょう。

少女期Ⅷ　　く大きなたのひらく

小町ちゃんとまた少し距離が縮まってから数日経りましたが、私は未だ八幡さんに謝ることができていませんでした。

ここ数日のうちに何度も謝りに行こうと思っていたのですが、そのことを小町ちゃんに相談すると、

「それはだめ。先にお兄ちゃんが酷いことを言ったんだから、朱音ちゃんから謝っちゃだめでしょ」

と言つて私から謝ることを許してはくれなかつたのです。しかし一度は納得しても、時間が経つとやっぱり謝りたくなり、再び小町ちゃんに止められる。そんなこの数日を過ごしていました。

だからその日の帰り道も、ここ数日で決まり事になった決まったやりとりを交わしながら小町ちゃんと下校をしていました。

太陽が沈む時間が少しずつ遅くなり、街並みは夕焼けに染められず白いのままでした。お昼ごろには大分気温が上がっていました。今は随分過ごしやすいくところまで落ち着いて、風が心地よい、そんなときです。

すうつと伸びた黒い影を一步步踏みながら、ここ数日で何度目になるか分からない「でも」を私が言いかけたときに、八幡さんは私たちの前に姿を現しました。

「どうも、ご無沙汰しています」

咄嗟に出てきたのが堅苦しい挨拶だったことを悔やみながら会釈をしたあと、顔を上げると八幡さんの濁った目に視線がぶつかりまし

た。

心の準備が全然できておらず、何を話せばいいのか分からなくなりました。気まずさと照れくささが襲いかかって、つい顔を逸らしてしまいました。また一つ、後悔をしました。

小町ちゃんが丁度いいからと言って立ち去ってしまい、この場に私と八幡さんだけが残されました。

木々がざわめく音や、遠くで犬が鳴いている声が聞こえます。

自覚をしてしまったからでしょうか、胸が苦しいほどに痛くなり、顔が熱くなっていくのを感じます。

八幡さんが一步距離を詰めました。ちよつとだけ太陽が傾いて伸びた八幡さんの影が、私の影と交わります。

それだけで私の思考は散り散りになってしまい、拾い上げることができません。

少し呆けたあとに、何かを口にしなければと思いを巡らしますが、何も浮かびません。口唇を何度も動かしてみますが、ただの吐息となつて意味を持たずに霧散していききました。

「お久しぶりです。八幡さん」

結局、普段使っている挨拶が口から漏れました。

小学校のころの通学路を、八幡さんと歩きます。

真新しく現代的な住宅に、色とりどりの舗装。アンティーク調の街灯は、夕焼け色に染まり始めている街並みの中で、無機質な白色を主張していました。

この通学路は八幡さんが卒業をしたあと開発が進み、今では大分整備されています。私と小町ちゃんは整備後の通学路も使っていたのであまり新鮮味はありませんが、八幡さんはきよろきよると珍しそうに、一つ一つの変化に注目するように歩いていました。

そういえば、八幡さんとの道を歩くのも、小学生のころ以来です。

「……この前は悪かった。自分勝手に言い過ぎた」

感傷的な気分に戻っていた所で、私がずっと言いたかった言葉を八幡さんが口にしました。私を視界に入れた八幡さんの目は、夕日を反射してちよつとだけ輝いているように見えて、出会ったばかりのころを思い出しました。

「いえ、私のほうこそごめんなさい。ちよつと感情的になっちゃいました」

そしてようやく、私はここ数日胸に抱えていた思いを吐き出すことができました。

「何でお前が謝るんだよ」

「いえ、私も謝っておきたいんです」

本当はもっと謝りたいのですが、これだけにします。小町ちゃんに言われたんです。謝るのなら、簡単に謝れと。そうやって気軽に仲直

りをしてしまえば、喧嘩してしまったことなんて簡単に忘れられるそうなんです。だから、小町ちゃんの見解に従おうと思います。これは、二人で一言ずつ謝って、それで終わり。

住宅街を抜けると、目の前に田園風景が広がります。幾つもの田圃の中で規則的に植えられた苗が揺れています。その瞬間過去からの風が私を包み込みました。

もう大分昔になってしまった、初めて話して、そのまま一緒に帰ったあのころの記憶が駆けめぐります。

「ここはあんまり変わらないな」

だからでしょう。この風景を目の前にして八幡さんと会話をしてると、すらすらと言葉が出てきました。

「そうですね。でも畑や田圃を潰して家を建てるのも、風情がないですよ」

「そうか？ 発展して綺麗になるならいいだろ」

「発展したって、良くなったと思うのは新しく住んだ人だけかもしれないですよ。もしかしたら元々の住人は迷惑だっと思っているかもしれません」

八幡さんが息を飲むのが分かりました。梅雨の、湿っぽい空気がどンドン重くなつてのし掛かりましたが、この言葉は本心から出てきた言葉です。後悔は、しませんでした。

それでも緊張だけは押さえきれないで、喉が乾いていくのを感じます。私の心はここ最近で壊れてしまったかのように、激しく点滅を繰り返

り返しているました。

八幡さんの顔に色々な表情が浮かびます。そしてその後、彼は懐かしい言葉を口にしました。

「……なあ、一人でいて寂しくないのか？」

急なその言葉に、思わず心臓がどきりとします。いくら八幡さんだからといって、私の内面に触れられるのには慣れていなくて、その意図を探ってしまいます。こわごと八幡さんの瞳を覗きこむと、すぐに考えていることが分かり、私は慣れ親しんだ表情に戻りました。

「……はい、寂しくないですよ」

これは、私のこの空虚な性格を、二人で確かめ合っているんです。

「元々そうなんです。誰かと一緒にいるのでも、一人でいるのも、あんまり変わりがないんですよ、私は」

「……そうか、元々か」

「ええ、元々です」

だから私も、言葉を紡ぎながら、しっかりと自分の性格を積み上げ、形作っていきます。

私は誰かと一緒にいることを、心の底からは望んでいません。いつか周囲の人が溶けて消えてしまっても、変わらず私は一人でいられることでしょう。

そしてその性格は簡単には変わらないでしょう。だって元来持ち

合わせているものなんです。心に影を落とした出来事なんてなく、生まれたときから抱えていて、もう切り離すことができません。

だから、この性格はこれから一生、後ろめたさを抱えながら付き合っていくものなのでしょう。

……それでも、以前よりも自分を信じてみようと思います。こんな私でも、一緒にいたいと言ってくれた子がいましたから。

「……なので」

「なあ、切花」

「えっ、あ、はい」

急に八幡さんが真剣な表情で呼びかけるので、思わず答えてしまいました。

タイミングを見計らって、折角自分の想いを吐露しようと思つたのに。

そんな不満げな私とは対照的に、八幡さんの周りの空気がどんどん張りつめていきます。緊張を押さえるように手を何度か握り直して私を見据えると、八幡さんはある言葉を口にしました。

「俺はお前が好きだ。何があろうと独りにさせないから、ずっと側にいさせてくれ」

それは、かつて私が聞いたことがある言葉とよく似ていました。

けれどもこんな場面で耳にするとは予想もしていなくて、頭の中が

真っ白になりました。

これまで嫌われていないくらいには思っていました。異性として好かれていて、ましてや八幡さんから告白されるなんて思ってもみませんでした。

私たちの距離の近さは単に過ごした時間に比例しただけで、特別な絆が育まれているなんて、信じられなかったから。

体を支配する驚きに、いつしか溢れ出した嬉しさが入り交じり、温かな温もりに包まれているように感じます。きらきらとした綺麗な粒が胸の中に広がって、懐かしい記憶が呼び起こされました。

八幡さんの言葉を遠い昔に聞いたことがありました。……だってそれは、祖父が祖母にプロポーズした言葉なんですから。

それは、祖父が亡くなる前に、病院で私に語ってくれたこと。私が訪ねたら、祖父が困った顔をしながら私に教えてくれた、遙か昔の、小さな告白。

「あははははっ！」

だから、自然と笑い声がこぼれてしまいました。

容姿も性格もよく似ている私たちなのに、まさかこんな所まで一致するなんて考えても見ませんでしたから、この奇妙な偶然が面白くて仕方がありません。

八幡さんが呆気にとられた様子で目を見開いています。少し離れた所で歩いている人たちが、ちらちらと、怪訝そうに私たちを伺っています。まるで気になりません。

こんなに面白くて、幸せな気持ちで満たされているのに、どうしてもその気持ちを隠さなくてはいけないのでしょうか。

照れくささの波が寄せては返すようにやってきて、そつと足で触れると透き通った水が足下に絡んできて離してはくれません。

「おい、いつまで笑い続けるつもりだ」

いつまでも私が笑い続けていたからでしょう、八幡さんが不満げに睨みます。

「だ、だってほとんどプロポーズじゃないですか、しかも昭和の匂いにする。……ふふっ」

「……悪かったな、古くさくて」

「ああ、いえ、ごめんなさい。茶化しているわけではないんです」

八幡さんが口を尖らせて、ぶつきらぼうに言いました。その拗ねかたが子供っぽくて可愛かったのですが、口にせず、胸の中に仕舞い込めます。そうして一旦笑うのを止めて、心の奥底に住んでいた綺麗な感情を掘り起こして、言葉を紡いでいきます。

「……でもその古くささが、私はとても好きですよ」

だってこんなにも胸が熱くなるのですから。

祖母はこんな素敵なプロポーズを受けて、どのように感じたのでしょうか。もし何も思わなかったなら、勿体ないです。この言葉だけで一生満たされてしまうくらい幸せになれるのに。

……というか、それにしても、

「プロポーズだ、この人馬鹿だ」

私はまだ十四歳ですから、そもそも結婚なんて思いついてもみませんでした。ただ自分の想いを伝えることばかり考えていて、先のごことは全く想像していませんでした。

しかしそんな馬鹿な考えだからこそ、すうつと心の琴線に触れました。好きな人が何があるうと、一緒にいてくれる。自分勝手に独りよがりでも、手放してしまったものを追えない私に、きつと一番必要なもの。

だから残っているのはあと一つだけ。こんな至福な瞬間でも、顔を出してしまった嫌な性格について尋ねるだけです。

「でも、いいんですか？ 私はこのままで、きつとあなたの望むような人にはなれないと思います。もし八幡さんがいなくなってしまうても、私は寂しいと思うことができないかもしれません」

そんな意地悪な質問をしておきながら、私はある答えを期待して、心の中が浮き足立っていました。

八幡さんは少し面食らった様子でした、いつもの不遜な態度で言いました。

「あのな、俺はお前がいなくなったら寂しいんだよ。だから安心しろ、お前が嫌がらない限りは手を離さないつもりだぞ」

「ふふっ、ストーカーみたい」

期待通りの言葉はとびきり甘く、体の芯が痺れてしまうくらいに心地が良いものでした。

その甘さに酔うように浸って体を揺らしていると、八幡さんが真面目な顔で言葉を継ぎます。

「それにな、お前の澄ました顔は病的に綺麗なんだよ。……だから、そんな顔を覗くのも悪くないと思っただけだ」

「……そうですか」

期待以上の言葉に、頬が熱くなるのを感じました。

にやけそうになる顔を押しさえつけ、声に動揺を残さないように落ち着いた調子を意識します。しかしあんまりにも胸がときめいているせいで、上手にできているか自信がありません。

幸い八幡さんは少し首を傾げただけで、私の様子に気付いていないようでした。

「……それで、返事を聞いていないんだが」

「そうですね」

返事なんてとっくに決まっています。素直になると親友と約束をしましたし、私を知って、それでも一緒に居てくれる人を無碍になんてできません。

けれども、返事はもうちよっと後にしようと思います。

もう少しだけこの瞬間を味わっていたいから。これから先、色々な幸福と不幸に出会うでしょうが、これと同じ種類の幸福は二度と訪れないと知っているからでしょう。

あたたかな気持ちに体を浸し、そのまま身を任せます。顔に当たるそよ風が気持ち良く、

目を細めてしまいました。いつまでも八幡さんを待たせるわけにはいけないので、名残惜しく手放して、万感の思いを込めて返事をします。

「では不束者ですが、よろしくお願いします」

返事はかつて祖母がしたように、古くさく、ありきたりな言葉を選びました。

「なんか、嫁に行くみたいだな」

「誰かさんが、プロポーズみたいな告白をするからです、……っよ」

そう言つて空いていた八幡さんの手を取り、家路に就きます。ずっと前から思っていた通り、八幡さんの手は男の人らしく大きくて、胸の鼓動が一段と早くなりました。

遮られた言葉はまだ口にしません。折角なので、しっかりと胸を張って言えるまであと少しだけ先延ばしにしようと思います。少し申し訳ないですが、仕方がありません。このチャンスをふいにしたのは、八幡さんなんですから。

いつの間にか太陽はほとんど沈み欠けていて、街は小さな闇と橙色が入り交じった複雑な色合いをみせ、遠くの空には青白い月と、一番星が顔を覗かせていました。

……きつと私はこの性格のままであり続けます。こんなになんか幸せな気持ちに満たされていても、この手の平から伝わる温もりを手放してしまったり、取り戻そうとは思えないのでしよう。

それでも、こんな私でも、この大きな手を握り続けることくらいは、できるのかもしれない。

少女期IX くちよつとした嘘く十エピローグ

八幡さんと付き合って初めての週末は、慌ただしく過ぎていききました。

一日は雪乃さんと結衣さんに、八幡さんと二人で挨拶に行きました。お二人とも私たちの交際を聞くと自分のことのように喜んで、笑って祝福してくれました。

途中からは女子三人のガールズトークになってしまい、八幡さんの告白について結衣さんに乗せられるままに話して、八幡さんが拗ねたように顔を背けたのが印象的です。

何となく、前にお会いしたときよりも奉仕部三人の距離が近づいていた気がして尋ねてみると、「私たち友達になったの」と結衣さんが頬を綻ばせながら口にします。

以前からあれだけ自然に会話をしていたので、てっきり最初から友達だと思っていたのですが、それでも自分たちの関係を言葉にできるくらい仲が深まったことが本当に嬉しくて、私も結衣さんにつられて、小さく笑ってしまいました。

そしてその次の日。快晴だったこともあり、小町ちゃんと二人でデートに出掛けて、夏物の新作を見て回りました。その道中に改めて、八幡さんと恋仲になったことと、そして親友としてこれからもよろしくと伝えます。

言っている最中に恥ずかしくなってしまう、少し声の上擦ってしまったことに照れていると、小町ちゃんがにやにやとしながら笑っている姿が目に入ります。そのことに小さく反論していると、だんだんと楽しくなってきた、最後には二人揃って笑っていました。

そしてある日の夕食。食卓をトンカツと筑前煮と海鮮サラダが彩り、三人で好物をつついていると、父が口ごもりながら言いました。

「お祖父ちゃんの家だけど、あの土地を買いだいたいと言ってきた人がいてな、取り壊すことにした」

「そうなんだ。けっこうの間ほったらかしだったもんね」

私はというと揚げ物のカロリーを気にして、海鮮サラダばかりお皿に盛っていたのもあって、上の空になりながら返事をしました。

私が中途半端な返事をしたからでしょう、父の言葉を補足するように、口元に笑みを浮かべながら言いました。

「お祖父ちゃんの遺言でね。必要とする人が出てくるまでは、そのままにしておいてくれて。お祖母ちゃんが住んでいた場所を、できる限り残しておきたかったみたいよ」

「……本当に、一途だね」

海老を飲み込んだあと、思わず本音がこぼれ落ちます。

「何か言った?」

「ううん、何でもない」

どうやら祖父の家の整理をしなくてはいけないそうです。とりあえずは母が翌日に有給をとって片付けをするそうでした。そして片付けのときに、何か欲しいものがあれば好きにきなさいと父から言われます。

欲しいもの、と言われても特に思い浮かびません。ただ書齋に眠っている、祖母のために収集した古書の行方が気になりました。あの本を売り、誰とも分からない人の手に渡すのは、据わりが悪い気がします。

その翌日、小町ちゃんからの誘いを断って、母の手伝いをしに祖父の家に向かいます。古くなって大分立て付けの玄関をくぐると、最後に見たときとはまるつきり違う風景が目に入ります。

住人がいなくなった建屋は寂れたように、人の痕跡が無くなっていました。元々祖父が亡くなったときにある程度は整理したそうなので、小物や食器類などはまったく見あたりません。年代物の壁掛け時計は、何年も前に動きを止め、本来の時間とは全く違う方向を指しています。

机の上には祖父が使っていたであろう、高級そうなネクタイピンや腕時計が置かれていました。もしかしたら、父が再び使うのかもしれない。

書齋を覗いてみると、こちらはまだ手がつけられておらず、乾燥した髪の毛が部屋中に広がっていました。それでも掃除だけは母がしたようで、書架に手を滑らせてみても、埃が手に付くことはありませんでした。

最後に例の祖母の部屋を訪れると、母が衣装箆の前で困った表情をしながら座っていました。母は私がぼつんと立っていることに気が付くと、「おかえりなさい」と言っ、また箆へ視線を戻しました。

「どうしたの？ そんな所で固まって？」

「それがね、お祖母ちゃんが使ってた着物をどうしようと思つて」

母が頬に手をやり、引き出しの中の、鮮やかに咲いている彩りを見て言いました。

「お祖母ちゃんって良家の出身だから、若い頃に着ていた服が良いものなの。この大島紬も結構高級なものだし、あの打掛なんてもつとい値段がしそうなもの。……でも打掛はお義母さんが結婚式で着たものみたいだから、売るわけにもいかないじゃない」

思い出の着物、と言うときつと祖母は否定するかもしれませんが、それでもこれは祖父母にとって大事な品なはずです。

一生に一度、結婚式にしか着ることのない贅沢すぎる打掛。祖母が身に纏つてから何年経つたか分かりませんが、今でも全く色褪せることなく、美しい模様を描いています。

だから、自然にこの言葉が口から漏れました。

「それ、私が結婚するときに着てみたい」

いつか私が結婚をするときに、この打掛を身に纏つて、そして思い切り幸せな笑顔を浮かべたいと、このとき思つたのです。この祖母とよく似た容姿と性格のままです。

結婚なんてまだ大分先の話で、そんな年齢になつた私なんて全く想像できませんが、ついこの前に少しだけ意識する出来事がありましたから。捕らぬ狸の何とやらです。

母は私の言葉を聞くと、柔らかい、花の咲くような笑顔を浮かべて

言いました。

「そうね、朱音はお祖母ちゃんに似て綺麗だから、きつと良く似合うわ」

「……うん」

他に欲しいものがないか探してみて、という言葉を残して、母は祖母の部屋を後にして、別の部屋の片付けへと向かいました。

壁に寄りかかるようにして、ぼうつと部屋の中を眺めます。この場所ももうしばらくしたら、取り壊され、祖母の残り香は完全に消えてしまうのでしょうか。

祖母の痕跡を一つ一つ、確かめるように見ていると、一点だけ頭に引っかかったものがあり、部屋の隅の戸棚の引き出しをあけます。檜の香りが残る中に、かつてと同じように漆黒の簪が鎮座してありました。

落とさないように丁寧に取り出して、手のひらにそつと起きます。美しく、吸い込まれそうなほどに黒光りしているそれは、ひんやりとした肌触りを与えてきました。これもきつと、大切なものでしょう。赤の他人の手に渡すことはできませんし、埃を被らせておくには忍びないです。私では荷が重いかもしれませんが、機会があるときに身につけようと思います。

折角なのでその場で髪を纏めてみようかと思いましたが、上手に結うことができず、ポニーテールにしかならず諦めました。

少しだけ納得が行かず、衣装箆筒へと向かいます。そしてたった今私のものとなった打掛を手に取ります。

少し埃っぽい匂いのする打掛を、制服の上から大ざっぱに羽織りました。想像以上に服が重いことに驚きながら、似合うかどうか期待しながら化粧台の布を払って、自分の姿を眺めます。

……全然似合いませんでした。

下が中学校の制服なのがいけないのか、髪型が駄目なのか、化粧をしていないからか分かりませんが、打掛の艶やかさに完全に負けてしまっていました。どんなに私が大人っぽい表情を作ってみても、打掛はこれっぽっちも私と調和をしてくれません。

これを着こなすためには、もっと時間が必要になりそうです。

それでも一通り自分の和装を堪能したのち、打掛を仕舞い直そうと思いましたが、たたみ方が分からずに困ってしまいます。畳の上に敷き、折り目に従ってたたんでみても上手にいきません。

仕方が無く母を呼びに行こうと立つと、畳の上はどこかで見たことがある、しかし以前よりも色褪せていない封筒が落ちていることに気が付きました。先ほどまで落ちていなかったので、どうやらこの打掛の中に挟んでいたようです。

書き手は思い当たっていたので、かつてと同じように躊躇なく封筒をあけ、中に入っている便箋を読んでききます。別に後ろ向きな内容でも構わなかったのです。ただ、結婚をした後の彼女が、どのようによく考えて生活していたのかを今まで以上に知りたくなったのです。

しかし手紙の内容は、私が想像していたものとは全く違いました。

震える手で便箋を仕舞って、胸の中で抱きしめます。書かれていた

文章を反芻すると、鮮やかな感情がたくさん押し寄せてきて、心が簡単に揺さぶられてしまいます。

一滴だけ頬に涙がつつたあと、この尊い手紙を記した人を想って眩きました。

「何だ、あなた普通に幸せだったじゃないですか」

でも、ありがとうございます。この先にどんなことがあっても、何とか生きていける勇気を頂きました。

ただ、それでも一つだけ彼女に言いたいことができました。

「そんな大事なことはちゃんと口で伝えなさい、このへタレ」

次の日曜日、良く晴れたこともあって、私は習慣になっているお墓参りに行きました。これまで通りお墓を掃除して、お花を添え、手を合わせて、亡くなった三人へと語りかけます。

私物をいくつか頂いたことと、最近あった嬉しいことを報告したあと、最後に弟に向かって「ごめんね」と言いました。私はこんな性格のまま生きていこうと思います。あなたが死んだときに悲しめなかつた私のままで、ごめんなさい。

弟が埋骨されたかどうかは分かりませんが、それでも物言わぬ、冷たいお墓に向かって言います。返事は、当然返ってきません。

そうしていつもの手順を済ませたあと、ハンドバックから一通の便箋を取り出します。私が最後に見つけた、祖母が祖父に宛てた手紙で

す。

他の手紙は私が丁重に引き取って、部屋の片隅にでも眠らせようと思いますが、それでもこの手紙だけは、きちんと祖父に届けたいのです。

辺りを見渡して、他にお参りしていない人がいないかを確認します。そしてマッチを擦り、火を灯します。

ゆらゆらと風に揺らされているオレンジ色の火を、便箋に近づけます。便箋の表面を舐めるように触れていた小さな火は、だんだんと便箋を飲み込んでいきました。

古びた和紙が少しずつ塵となっていく様子に不思議と魅せられます。祖母が生きていた証の一つが、ただの灰になりこの世から消えてきます。私が手元に残していれば、きつと大きな支えになったであろうものは、すでにその意味を無くし始めていました。

炎が半分ほど便箋を浸食すると、摘んでいた左手まで鋭い熱さが伝わってきて、だんだんと持っているのが辛くなってきました。

地面に落としてしまった方が安全なのかもしれませんが、中途半端に燃やしてしまつては供養がなくなってしまう気がします。

「きみ、何をしているー。」

そんな様子で若干悩みながら、炎が便箋を飲み込んでいく様子を眺めていると、墓地の入り口から厳しい声が飛んできました。振り向くと、そこにはこのお寺の住職さんが、声音の通り厳しい顔をして私を睨みつけています。

「えっ？ あ、これは。……あつう」

私がしどろもどろになっている間に、炎は全て燃やし尽くし、最後に私の指に軽く撫でて、ぽつんと地面へと落ちていきました。

炎が触れた部分を触ってみると、鋭い痛みが走りました。どう考えても、火傷です。

最初は怖い顔をしていた住職さんは、そんな私の間抜けな様子に毒気が抜かれたのか、こめかみを指で押さえると、苦々しく言葉を口にしました。

「……とりあえず、うちに入りなさい。妻に手当させる」

お説教は到着するまでのわずかな時間で行われます。

火を扱うならばもう少し丁寧に扱いなさい。そもそもこのお寺は供養をやっていないから、供養がしたいならもっと大きな寺院に行きなさい。君も高校生なんだから、もう少し節度と常識を持って行動したほうがいい、などなど。

真剣な顔をしながら、しかし私を高校生だと勘違いしているのが面白くて小さく笑っていると、聞いているとさらに怒られてしまいます。

本堂と繋がる住居の縁側へと連れて行かれると、住職さんは「ここですばらく指を冷やしておきなさい」と言つて、建物の中へと入って行ってしまいました。

蛇口をひねり、流水に水を浸します。冷えた水が当たると痛みが鋭くなりましたが、それも一瞬でだんだんと痛みが和らいでいくのを感じ

じます。

しばらく冷たい水の心地よさを味わっていると、縁側へと連なる和室の向こうから声を掛けられました。

「あら、お墓の前で火遊びして、火傷をした女の子って、あなただったのね」

親しげのある調子で話しかけられるので、首を傾げます。

「ごめんなさい、初めてお会いしましたよね？」

色白で、初老の女性は面白いものを見るように、私を眺めていました。笑うと目が細くなり、顔が狐のようになりました。両手には、絆創膏と軟膏がそれぞれ握られています。

私が流水から手を引こうとすると、女性は「もう少し冷やしておいたほうがいいわ」と言いながら縁側に腰掛け、先ほどの私の問いに答えました。

「あなた、しょっちゅううちのお寺に来るから、顔を覚えちゃったのよ」

女性はからからと快活に笑いながら、ジーンズに包まれた細い足を、子供のようにふらふらと遊ばせています。

この人が住職さんの奥さんでしょうか。少し浮き世離れた雰囲気とこぎつぱりとした笑い方は、ある意味で寺院の空気と調和しているように感じます。

しばらく奥さんは、私の様子を退屈そうに眺めていましたが、ふ

うっつと息を吐くと、鋭い目つきで私に尋ねてきました。

「一つ、聞いてもいいかしら?」

「……………」

「どうしてそんな頻繁にお参りに来るのかしら? 年輩の人ならともかく、あなた位の歳でこんなにお参りにくるのは結構珍しいのよ。」

「……気を抜くと、亡くなった人のことを遠くにおいて、そのままにしてしまう気がするんです。忘れてしまうのはいけないことですから」

奥さんはじいっと私の目を見つめますが、何も言いません。近くの林から、ウグイスの調子の外れた鳴き声が聞こえてきました。奥さんは「そろそろいいかしら。中にいらっしやい」と言って障子の向こうへと入ってしまうので、あわてて手を拭きながら奥さんに続きます。

由緒正しい日本家屋はやはり畳ばりの和室ばかりで、どこもかしこも居草の匂いが漂ってきて、自然と心が落ち着きました。遠くから砂利を踏む音が音と、木々のさえざりが聞こえるだけでした。

自分で治療すると訴えましたが、奥さんが全く聞いてくれず、しかたなく、されるがままに手当を受けます。奥さんは乳白色の軟膏をすくいながら口を開きました。

「ねえ、どうしてお葬式の後でも、四十九日や三回忌をやると思う?」

「死後の安寧を祈るためだって聞いたことがありますけど……」

「それは故人に対しての話ね。じゃあ残された人にたちに対してはどう思う?」

何だか学校の先生に教わっている気分だなと思いながら、考えを巡らします。

「……心の整理ですか？」

私が答えるのと同時に軟膏が塗られていきます。肌がべたつくのを感じながら、こうやって手当してもらうのは小学校の頃以来だなど、心の隅で思いました。

「そうね。宗教って基本的には生きていく人のためだから、救済や解脱うんぬんを抜きにしても、必ず風俗的な意味合いがあるの」

「はあ……」

奥さんは調子良く、軽々と言いますが、その言葉はちよつとだけ後ろめたく感じました。

お寺というのは檀家の人はともかく、住職さんやお坊さんたちは教義を真剣に信じていると思っていたので、身内の人がこういうことを言うのは果たして仏様が許してくるかどうかわかりません。

そんな私の思いを全く汲み取るようすのない奥さんは、私の返事を受け取るとさらに続けます。

「こういう考えを主人は嫌うけど、さつき話した四十九日や三回忌にしても、最初は残された人に対して設けられた期間だと思うの。これだけ過ぎたのだから、亡くなった人のことを忘れて日常に戻りなさいって」

「……でも故人を忘れてしまったらダメですよ」

「別に完全に忘れろと言っているわけじゃないわ。でもたまに、そうね、一年に一回くらい思い出して、謝ったり、死後の安寧を祈ったりするくらいでいいのよ。それだけしてあげれば十分よ」

無骨な絆創膏を指に巻かれます。口調そのままに大きっぱに巻かれたせいで、指が全く曲がらなくなってしまいました。やっつもらっている立場なだけに何も言えません。

「何か、適当な考え方ですね」

「適当でいいのよ。もちろん私たちからすると、お墓の掃除くらいは来てほしいけど、それ以外はまあ、そこまでつてくらい。それに故人の幸せを祈るにしても、毎月だと疲れるでしょ？ 亡くなった人も、あなたも」

「……かもしれないですね」

……きつと私の後悔はなくならないと思います。あのときに泣くことができなかつたことは、いつまでも私の中で影を落とし続けていくのでしよう。

そのことを忘れようとは思いませんが、でも、奥さんが言った在り方でもいいのかもしれませんが。そのほうが、ちよつとだけ生きるのが楽になる気がするのです。

「ありがとうございます。凄くためになりました」

「あらそう？ なら今度、主人の変わりに般若心経でも唱えてみようかしら」

口元をゆがめながら、冗談めかして奥さんは言う、「これでお終い」と言つて、私の手の甲をぽんと叩きました。まだ痛みはちよつと残っていますが、それでも大分楽になった気がします。

改めて奥さんにお礼を、住職さんにお詫びをしてお寺を後にします。慶大に敷かれた玉石を踏むと、小気味良い音を立てて足が沈んでいきました。

次にお参りするのはお盆のときにします。少しの間ご無沙汰になりますが、代わりにそのときにたくさん話しましょう。

初めての二人乗りは、意外と姿勢が不安定で心許なく感じました。

八幡さんが自転車を漕ぐたびにがたがたと荷台が揺れ、私は自転車から落ちないように体を強ばらせながら体勢を維持していました。

どこか掴むものがあればと思い探してみても、荷台が八幡さんの体しかありません。ただ荷台を掴んでしまうと背中がそれで足が伸びてしまうために、スカートの中が見える不安があるたに躊躇してしまいます。

しかし八幡さんの腰に手を回すのは流石に恥ずかしく、そちらも遠慮してしまいます

しばらく自転車で揺られながら考えて、頼りないですが八幡さんの洋服を掴むことにしました。恐る恐るシャツの裾を引っ張ると、八幡が気にした様子で振り返り、照れくさく感じてしまいます。

お墓参りの帰り道に偶然八幡さんと出会ったのですが、まさかこん

な体験をするとは思ってもありませんでした。私としては八幡さんが祖父の蔵書の何冊かを引き取ってくれるだけでも有り難かったのに、幸運とは重ねてもものなのかもしれません。

六月の青空の下、二人乗りをしながら祖父の家に向かう私たちは、それこそ恋人同士のようだと思いきまぎしてしまいます。

少しだけ顔を乗り出してみると、正面からの湿った風とぶつかります。目を細めながら辺りを伺ってみると、まだ午前中だからなのか、道行く人たちはどこかのんびりとした様子でそれぞれの目的地へと向かっていました。

少し早いスピードで進む自転車からの景色は穏やかで、街路樹が輝かせる新緑がいつそう際だって見えました。

自転車の流れに身を委ねていると、一つ思い出して口を開きます。

「八幡さん。そういえば、一つ言い忘れたことがあるんです」

「なんだ？」

八幡さんが少しだけ視線を寄越しながら返事をしました。

「案外私、和服が似合うんですよ」

「お、おう……」

それは初めて吐いた小さな嘘と、ちよつとした宣言です。今はまだ着られている状態ですけど、いつかあの打掛を着こなせるくらいに女性になって、その姿をこの人に見せられればなと思います。

八幡さんが呆気にとられたように頷きました。その中途半端な返事の仕方が面白く、そして愛おしく感じてしまい、自然と私は頭を八幡さんの背中へと預けていました。胸の鼓動が一段と早くなります。

太陽に雲がかかり、薄い影が一面に広がっていきます。まだ春の陽気を残した風が流れ込んできて、私の髪をさらっていきます。鼓動の緊張はいよいよ顔にまで上ってきて、こんなに過ごしやすそうな天気なのに、暑さが猛烈に襲ってきました。

……もしかしたら、夏はもう目の前にまで来ているのかもしれない。

エピローグ　く封のされていない手紙

医者から残りの時間を聞かされてから、よく自分の人生を振り返るようになりました。

死ぬことは、正直に言えば怖いです。死後の世界をいたずらに信じているわけではありませんが、死後に訪れる深い闇の中を想像してしまうと、夜も眠れないくらいに震えてしまいます。

決して正しい人生ではありません。愛していない人と一緒になり、そしてその人のお金で生活していた人間の人生が正しいとは思いません。

……それでも、なぜか私の周りにはいつも笑顔の人たちがいました。

あなたがいて、息子と娘がいます。私の兄や姉たちは、あなたと一緒に時折顔を出すせい、この歳になっても不思議と縁が切れていま

せん。隣家の方たちとも、町内会の行事で度々お付き合いがあります。

それは私が心の底から望んだものではないですけど、それでも人間らしく生きていくことができました。

木漏れ日の中にずっといるような、そんな穏やかな日々を過ごしてきました。こんなにも多くの人に囲まれて生活できることは、なかなか味わうことのできないものだと思います。

だからきつと、私の人生は幸せだったのでしょう。あなたには迷惑をかけてしまいましたが、それでも幸せだったと、振り返るたびに思ってしまうのです。

……そして、その幸せを運んでくれたのは、あなたでした。

最後まで愛や恋については、全然分からず、とても自分勝手に生きてきましたが、それでも何とか生き抜くことができました。だから最後にお礼を言わせてください。

こんな私と結婚してくれて、ありがとうございました。あなたがいなければ、このような穏やかな日々は送れなかったと思います。

ほんとうに、奇跡みたいな人生でした。

せめてものお返しとして、あなたの残りの人生に限りあらん幸で溢れることを願います。

番外編

番外編その1　　正しい彼女の紹介のしかた

十四歳。それは大人と子供の狭間に位置する年齢であり、それ故に思春期と呼ばれる複雑な感情を有している。エヴァンゲリオンに乗れるのもこの年代だけだし。

小学校を卒業し、ちよつとだけ大人が見える年代。男子はだんだんと少年漫画を卒業し、厨二病の世界へと足を踏み入れる。逆に女子はだんだんと女らしさを獲得し始めロリコンを絶望させる。

彼ら、彼女らに共通するのは自分が子供ではないという自意識であり、それゆえに男女ともやたら背伸びをする奴らが多い。

大人を演じるために大人の真似事をするが、それはやっぱりただの真似事だ。煙草をくわえても蒸かすだけだし、恋愛なんて徐々にお互いの関係を深めていくしかない。

大人たちがどう思おうともやっぱり子供であり、世間も常識もないこの年代は、不安定ながら行動力があるために、色々な問題を起こしたりもする。盗んだバイクで走り出したり、夜の校舎の窓ガラスを割って回ったりと例を挙げたらキリがない。大人たちも彼らをそういう目で見ると、まあ世間の十四歳に対する認識というのは子供、の一言に限られる。

何が言いたいかといえば、どんなに容姿が大人っぽくても、十四歳は十四歳であるということ。そしてそんな女の子と付き合っている高校生は、世間から少し冷たい目で見られるということだ。

たかが二歳、されど二歳。もう少し歳を取ればそんな年齢差なんて大したことじゃなくなるのに、俺たちにとっては大きな差である。そういうや平塚先生に二十八歳を三十路といったらすげえ傷ついた表情をされたな。……とにかく中学生女子からすれば、高校生と付き合っているのはある種のステータスかもしれないが、高校生男子からすると、中学生女子と付き合っているということは、やっぱり後ろめたさ

を感じてしまうものなのだ。

つまり、たとえそんな浮かれてしまうような事態に陥っても、やたらめったら広めずに、親しい友人たちにだけ知らせておくのが、冴えたやり方なのである。そんな奴らほとんどいねえけど。

「あの映画、やっぱりあんまり面白くなかったですね」

こちらを覗き込んで微笑むと、その言葉の内容とは裏腹に弾んだ調子で切花は言った。その拍子に真っ黒な長い髪が風と一緒に揺れている。

だんだんと本格的な夏が始まり、青空から差し込んでくる光がより一層眩しくなってきた七月の中頃。学生最大のイベントである夏休み……前のテスト明けの最初の休みである今日、俺は切花と一緒に街へ出掛けていた。お互い一学期の期末テストを乗り越えた、ほんのご褒美というやつである。

ちなみに、これまでの定期テストと違い、雪ノ下という強力なブレインを得た俺と由比ヶ浜は、雪ノ下のスパルタ教育に必死に耐え、自己採点の結果どうにか赤点を回避した。それと一緒に雪ノ下が家庭教師に向いていないということもよく分かった。あれに比べれば自力で何とかしたほうが楽なのかもしれない。

「というか、事前につまらないと知ってたなら、別のやつを見ればよかっただろ」

「でも、ある意味面白かったんです」

「そりゃ、面白いの意味が違うだけだ」

テスト明けに遊びに行くことは事前決めていたので、テスト勉強の合間にどこに行くのかを考えていたりもした。なかなかいい案が浮かばないので、井杖先輩に相談をした。

純愛思考系ビッチという珍しいジャンルの先輩ならば、正統派デパートを何人と繰り返し返しているだろうから、初心者に最適なデパートスポーツをお勧めしてくれるだろうという期待を込めてである。まあ、裏切られたけど。

井杖先輩はにやにやとからかうような笑顔を浮かべては俺の肩を叩き、「青春してるね」と言つて、装飾された学校指定のバッグからA4ファイルを取り出して、俺へと差し出して来る。ファイルの中に入っている紙を取り出してみると、最近公開されている映画のチラシだった。

いつもの様に指をぐるぐると回しながら先輩は、「このチラシの映画は全部だめなやつだから、絶対おすすぬ」と矛盾していることを言い放つてきた。

……そういやこの人、クソ映画愛好家だったな。

何となくこんな趣味があるから彼氏と頻繁に別れるじゃないかと思いつつ、その笑顔に負けてチラシを受け取ってしまったので、切花に行くかどうかを聞いてみると、意外にも二つ返事でオーケーが出た。何やら悪い趣味にはまりそうで本気で心配である。

というわけで本今朝一番に家を出発し、映画館まで遠征をしたわけだが……まあ、映画の出来は期待通りというか、案の定であった。

せっかくの休日ということもあり、映画館には夫婦や友達同士など多くの人が溢れていたのにも関わらず、俺たちが入ったスクリーンは驚くほど観客がおらず、俺たち以外には二、三組しかいなかった。そのわずかばかりの客たちも劇場を出ると一様に苦い顔をしていた。たぶん

映画館を出たあとは、行く当てもなくふらふらとしながら街中をさまよう。何日か前に梅雨が明けたこともあり、午前中から太陽が燦々と輝いて、建物のガラスを乱反射させていた。それでも夏の朝特有の透き通った空気がどこか心地よかった。

「それで、このあとはどうする？ 飯にするにはまだ早いだろ」「そうですね……八幡さんは普段はどんな所に行くんですか？」

片手で顔を扇ぎながら、切花は素朴に尋ねてくる。そんな様子にも関わらず切花は汗をかいているようには見えない。俺は暑さにやられて、すでに何滴か汗がこぼれているというのに、女の子は不思議である。

「つってもなあ。俺だって本屋か図書館ぐらいにしか行かねえし。……あとは、ゲーセンぐらいだな」

「ゲームセンター、ですか？　そういうええあそこ入ったことないです」「そうなのか。友達とプリクラとか撮りに行かねえの？」

女子中学生とか、遊びに行く度にプリクラとか撮るイメージがあるが。中学のときもプリクラ交換なんて女子の間で流行っていたし、

小町なんかも時々切花以外と撮ったプリクラを俺に見せてきて、「この子可愛いでしょ」とか聞いてくるが、どう答えたらいいか未だに分からん。実際に可愛けりや返事のしようもあるが、プリクラで微妙な場合、実物はほぼ残念だからな。「ま、まあ可愛いんじゃない」「くらいしか言いようがない。ツンデレではなくて。」

「今時はゲームセンターじゃなくても、プリクラは置いてありますから。私たちがとそっちの方が行きやすいんです」

まあゲーセンって不良の溜まり場みたいなイメージがあるから、避けてしまうのも仕方ない。アウトローはどうしても見逃しやすいからな。逆に桑田とか好きそうだし。

そういうえば駅マチのレイブス服売場の近くに、プリクラっぽい機械が置かれていたような気がする。何年か前にプリクラエリアは男子禁制になったらしいが、あんな場所に置いておけば、男なんてそもそも来ねえだろと思う。

「折角話題に出たので、ゲームセンターにでも行きますか？」

切花が足を止めて方向転換したので、その背中に話しかける。

「行きづらいんじゃないかねえのか？」

「男の人と一緒になら平気ですよ。プリクラでも撮りましょうか」

振り返って俺に笑いかけると、そのまま足を止めることなく切花は進んでいく。

なぜゲーセンと聞いて一人の男の顔が勝手に思い浮かんできたが、その顔がやたら腹立たしかったので、踏みつぶして切花の後ろについていった。

駅から少し歩いたところ、周囲の華やかさに紛れながらその雑居ビルはあった。近くには飲み屋なり、カラオケなり、ラーメン屋がひしめいている中、絶えず電子音が鳴り響いている場所こそ、この街のゲームセンターである。

飲み屋街なせいかな、まだ午前中なためか人影はまばらで、高校生や中学生、あとは通り道にしている家族連れがちらほらいるだけだった。夕方以降のアルコールと煙草の匂いとはまた別の、若さと暖かさ、そして陰気さが混じった奇妙な雰囲気醸し出していた。

「こんな所にあっただすね」

切花がゲーセンへと繋がる自動ドアを眺めながら、感慨深そうに粒や浮いた。

「何だ、来たことはなかったのか」

「さつきも言ったじゃないですか。女子が用事も無しに入る場所じゃないんです」

拗ねたように返すと、切花は少し汚れた自動ドアをくぐった。

俺も切花を追うように店内に入ると、洪水のような音が一齐に襲ってきた。メダルが擦れ合う音、高低音が絡み合った電子音に人の騒ぎ声、それらが合わさった不協和音が一体に耳に届けられる。しかし、その雑然さが不思議と嫌いになれない、そんな場所だ。

切花は普段通りの調子で口を開いたが、言葉は雑音の波に飲まれてすぐに消えてしまった。驚いた様子で目を少しだけ見開くと、一步俺の近くに寄った。肩と肩が、触れあう。

「何だか、別々のお店をそのままくっつけたみたい」

今度は、はつきりと聞き取ることが出来た。

「まあな、案外綺麗に沸かれてるだろ」

ここのゲーセンは男が好みそうな格ゲーやら音ゲーやらWCCFなどと、女子が好みそうなクレイゲームやプリクラのエリアをはつきりと分けている。近頃はカップルや女子グループも積極的に誘致したいせいか、入り口にクレイゲームを配置して、残りを両極端に振ってある。

まだ早い時間にも関わらずカップルが一組だけいて、彼氏がぬいぐるみをとるために、真剣な表情でアームの行方を追っているのが目に入った。

視線をもう少し奥へと進めてみると、常連客らしき雰囲気はやつらがすでに居座っていて、各々黙々とアーケードゲームをプレイしていた。

清潔感溢れる白色の光に目を細めながら、プリクラの筐体が集まる男子禁制のエリアへと足を踏み入れる。ネオンライトのような光が絶えず瞬いているここは、気を抜くと光に溺れてしまうほどだ。その眩しさを切花は全く気にしない風に、奥へ奥へと歩いていった。

何年か前に盗撮だの何だの言われから、このエリアはカップル以外の男子の立ち入りを禁止されている。以前はテンションの上がつた中高生や酒を飲んだ大学生が、男グループだけでプリクラを撮りに行くなることがあったらしいが、そんな光景はもう二度とみることはないだろう。

やたらギャルっぽい女の子が描かれている暖簾に圧倒されながら、右往左往していると、「こっちですよ」といって切花が手を引いてくる。

あんまりギャルっぽい奴らと付き合いはないと言っていたが、やっぱり女子だけあってこういうものには慣れている。というか、ギャル⇨プリクラって発想が古いな。

切花が適当に選んだ場所に入ると、照明写真機を少し広くして、やたら豪華にしたような光景が目に入る。タッチパネルには由比ヶ浜が好きそうなポップな字体が浮かんでいた。目が痛い。

金を入れて切花が操作をすると、様々なフレームを選ぶ場面が出てきたので、切花が俺に尋ねてくる。

「八幡さん、どれがいいですか?」

「よく分からんから、適当に頼む」

「そう言われるのが、一番困るんですけど……」

眉を寄せながら返しながらも、切花はあーでもない、こーでもない、と楽しそうに悩みながら、画面のフレームを切り替えていく。

「でも、八幡さんって目がのせいでカメラ写りが悪いので、ちょっと損ですよね」

「おいこら」

「冗談ですよ。……じゃあこーやって目を隠してみると、案外格好良く撮れるかもしれないですよ。ほら、私もやりますし」

腕を持ち上げると、瞳の前に置いて置いて目線を隠す。それでも切花の口の端が緩んでいるのを見ると、本当に冗談のつもりなのだろう。だが、あれだ。どうやってもあの格好にしか見えなかった。

「俺はいいが、お前は絶対に止めろ」

思わず、力強い言葉が口から飛び出す。

男がそうやって隠す分には大して問題はないが、女の子が目線を隠してしまうと、アレにしか見えなくなるから大問題である。

切花は俺の声を丸くして、大きく首を傾げた。今自分のやっていることがどういうことかは気付いていないらしい。そりやそうだ。

そのまま頭に疑問符を浮かべながらも、画面にタッチしながら設定を進めていくと、「これで大丈夫ですよ」と言って、俺のすぐ横までずれた。

硬い笑顔を作りつつ、筐体から流れる電子音声に従いながら何枚か撮ったあとに外に出ると、撮った写真が編集できるとかで切花が慣れた手つきで操作していく。切花は目の腐り具合を何とか緩和できないかにご執心で、さまざまな効果を試している。ちようどキラキラを目の横に配置したら、切花が顔をしかめた。

時間がかかりそうなので切花に声を掛けて、プリクラエリアから出る。さすがにゲーセンでプリクラ撮って帰るのも味気ない。適当に遊ぶ必要があるだろう。あいつが何か気に入るものがないか、クレイニングゲームをぼうつと眺めていく。

「むっ、あれは。……八幡ではないか!」

やたら暑苦しい声に呼ばれたので嫌々振り向くと、そこには声の通り暑苦しい風貌の男が立っていた。

そいつ、材木座義輝は眼鏡をくいつと上げると、その巨体を揺らしながら俺の所までやってくる。

「なんだ材木座かよ……何、なんか用でもあんの？」

「特になし！　ただ八幡の顔を見つけたから、つい声を掛けてしまっただけだ」

「どうしてお前は、そんなとこだけ女子っぽいんだよ……気持ち悪いな。お前も遊びに来てんのか？」

その声音と風貌にも関わらず、ジャケットを羽織っただけで、クーラーがかかっているのにこいつの近くにいるだけで大分暑い。

「うむ、やはり創作にはインプットが大事だからな。白紙と向かい合っている意味がない。こうして様々なものに触れ、創造力を養うことこそが、創作の本質と言えるのだ」

「つまり全く筆が進まねえから、現実逃避で遊んでるってことか」

「そ、そうとも言えない……ふむ。お主も我と同じで一人か？」

「ああ、いや……あれだ」

思わず言葉を濁してしまう。こいつには元々切花の存在を教えないわけだし、それに付き合っていることを伝えたら、何を言われるのか分かったものじゃない。

じつと材木座を見る。話し方からして切花と相性がいいわけでもないし、会わせたとこで意味はないだろう。というか、こいつと相性が良い人間なんているのか？

とりあえず適当にこの場を去り、切花を拾って、どこか別の場所へと避難するとするか。

「お待たせしてすみません、八幡さん」

そう思って口を開こうとしたところ、切花の涼しげな声が、そして材木座へと届いた。……タイミング悪いな。

切花は俺が誰かと話していることに気づいたのか、目を瞬かせたあと、そうつと俺の奥を覗き込む。そしてちようど口をぱくぱくさせていた材木座を無感動な目でしげしげ見ていた。

「……お友達と話しているようですし、私は失礼しますね」

「おいこら、逃げんな」

そのまま体を翻して避難しようとする切花の腕を掴んで、無理矢理止める。ほっそりとした白い腕は、ひんやりとしていた。

切花は口を尖らせて不満げな表情を作ると、目線を明後日の方向へと持って行きながら、身じろぎを一つした。

「ほら、お友達も待っているようですし、せつかくなんでゆっくり話して下さい」

「俺だって、こいつの相手するのは疲れるんだよ。お前のこと材木座にバレた時点で一蓮托生だ」

「でも私、こういう人は苦手で、何を話していいか分からないです」

「……とりあえず声の大きさを下げろ。こいつ、意外と傷つきやすいんだろ」

ほら、材木座が少し涙目になってんじやねえか。

切花が諦めたようにため息を吐いて俺の隣に並んだので、名残惜しさを感じながらも腕を放す。

材木座は未だ口をあめぐりと開いたまま、腕をふるふると振るわせて切花を差すと、

「は、八幡……、このご婦人は？」

微妙に切花の機嫌が悪くなったのが分かった。

「ご婦人って、こいつそんな歳じゃねえぞ。ああ、あれだ……切花って

名前で、妹の友達で……、俺の幼馴染みたいなもの」

最近追加された新たな肩書きについては、何も言わなかった。一応切花に目配せをすると、特に抵抗なく首を縦に振った。

その様子が材木座の心を苛立たせたのか、「けつ、リア充が」と憎々しく吐き捨てる、眼鏡をくいつと持ち上げた。

「八幡、見損なっただぞ。我と共に童貞に優しい世界を作り上げると約束したのではないか」

「してねえし、思ってもねえよ。あとお前は信じるな」

切花が本気で引いているのが分かったので、頭を小突いておく。

材木座は、まるで木星から帰ってきたように傲岸不遜な態度で胸を反らすと、やたら大げさに両手を広げた。腹の脂肪がたぷんと揺れる。

「童貞の足を引つ張ることしかできないリア充どもに何ができる？

常に世の中を作ってきたのは一握りの童貞だ」

「違う。というか童貞なら世の中作っても、後の残せねえだろ」

「そもそも、この小娘のどこに年下幼馴染要素があるというのだ？」

切花が年下だと分かったからか、やたらと強気になって聞いてくる。清々しいほどのゲスさであるが、不思議と嫌いになれない。絶対好きにはならないが。

「はい？ 私ですか？」

まさか自分に振られるとは思っていたのだろう。近くのガラスの中にはいつていたぬいぐるみを見ていた切花が、意外そうに振り返る。

今日の切花は、膝丈まで伸びた黒のスカートに、半袖のブラウスを

合わせた格好なので、まあ大人っぽい姿ではあるが。

目を瞬かせた切花が、俺と材木座の顔を眺める。材木座は切花と目が合うと、すぐに顔を逸らして、俺へと向き直った。

「ところで八幡、この子とは家が隣なのか？」

「違えよ。歩いて十分くらいだ」

「ぶっ、その距離で幼馴染とか。あだち先生が聞いたら爆笑ものだぞ」
「それほぼタッチのイメージじゃねえか。H2だと少し家離れていた
だろ」

そもそもお隣さんに同世代の女子が住んでいる方が珍しいだろ。
幽遊白書だつて幼馴染設定だけど、家は離れていたしな。

切花はぴんと来ないのか「酒屋の息子だろ？」などとよく分からない
ことを呟いていた。うん、どうして英雄だけを知っているのか聞いて
みたい。

「しかも年下なのに、ロリ顔ではないし無駄に背が高いし……何より
八幡のことをお兄ちゃんと呼んでいないではないか」

さらに切花の機嫌が悪くなった気がする。

「いや、妹の友達にお兄ちゃんと呼ばせたら、犯罪だろ」

それでもまあ、材木座の言いたいことは少しだけ分かる気がする。
こいつは年齢の割に背が高いし、それに伴って顔立ちや言動がやたら
大人びている。制服を着ていないと、たまに本気で中学生ということ
を忘れそうになる。

隣に立つ切花の顔を覗くと、瞳の色と同じ色の髪が目に入る。肩ま
で伸びたそれは、初めて会ったときよりも多少短くなっているもの
の、束ねていたりしていない。ずっとストレートのままだ。

……だからだろうか、自然と切花は大人びて見えてしまう。

そう考えてみると、こいつって年下要素ほとんどねえな。

「いいか、八幡。年下の幼馴染というの、ショートカットで背が低くて、ついでに胸も無いけれど、お兄ちゃんと呼んでくれる、そんな子がいいのだ。お兄ちゃんのことはずっと好きだけれどもなかなかいい出せないもどかしさ、それが至高なのだ。そんな隣のお姉さんみたいな年下幼馴染など、所詮は二流よ」

「……はいはい、じゃあ今度そういうラノベでも書いて見せてくれ」

ほぼ材木座の願望じゃねえか、それ。

そんな気持ち悪い妄想を聞かされた切花は、終始顔をしかめていたが、何かを思いついたように、ぱつと表情を明るくすると、

「……それなら、その、座木材さんが言う幼馴染要素に、一つだけ当てはまっているのが私にありますよ」

「ふつ、ふむ、何だ」

「名前、微妙に間違ってるからな」

そんな俺の小言を気にせず切花は、小町のような笑みを浮かべると、するつと俺と腕を絡めながら、

「私、小さいころから八幡さんのことが好きでしたから」

そう言つて、子供のようにちろりと舌を出した。

「……」

「……」

そのあとに響いた材木座のよく分からない悲鳴を聞きながら、最近気づいた切花の意外な一面を思い出す。

……こいつは結構、悪戯っぽい。

番外編その2 くお雛様との出会い

比企谷小町が小学校に入学してから、一ヶ月ほど経ったころ。初めて通う小学校の緊張と興奮もだんだんと落ち着いて、少しずつ忙しい毎日に慣れてきたことだ。

小学校は、兄の八幡が言うような孤独な場所とは全然違っていった。当たり前前に友達ができ、休み時間には友達と楽しくお喋りをし、給食を食べて家に帰る。そんな穏やかな毎日を過ごしていたある日、お喋りなクラスメイトがある噂話を口にした。

「二組にすっごく綺麗な子がいるんだって」

そう興味深そうに話していた彼女であったが、件の人物を見たことはないらしい。そのままの張りのある口調で「ねえ、どんな子なのか？」と小町たちに問いかけると、その子の話題で持ちきりになった。たとえばお姫様のようなとか。リカちゃん人形みたいだとか。そんな風に想像を膨らませて話していると、自然と小町もどんな子なのだろうと興味が湧いてくる。

小町の頭の中では少し前に映画で見た、シンデレラの姿が思い浮かぶ。厳しい母親と姉妹に虐げられながらも、華やかな衣装に身にまとった女の子。ふわふわで金色の髪と西洋人形のように整った顔立ちの女の子が頭の中に現れて笑っていた。そんなことを想像しながら、そんな子だったらとつくづく目に付いていることに気が付く。小さく笑ったあとに想像を打ち消した。

その子を実際に見る機会はずぐに訪れた。

体育からの帰り道。「静かに教室に戻りなさい」という先生の言葉を守りながら廊下を歩いているときのことだ。何人かで囁き合っている内緒話をしていると、あの噂話をした子が通り過ぎる教室の中を指さした。

「ほら綺麗な子って、きつとあの子だよ」

視線の先の教室は静かで、国語の先生の淡々とした声が響いていた。五月が過ぎて、温かな日差しが入り込む教室はそこだけ時間の流れが遅いように穏やかで、うつらうつらと船を漕いでいたり、飽きて教科書に落書きしている子がいる。みんなどこか退屈そうにしていて、この時間が過ぎるのを待っているなか、彼女はそこにいた。

……お人形さんみたいだと、どうしてか思った。

ぷつくりと膨らんだ形の良い口唇と透き通るような白い肌。すつきりとした顔立ちがびつくりするくらい綺麗で、それこそ作り物のように整っていた。

背中まで伸ばした髪も、小町のような癖つ毛ではないさらさらのストレートで、ほつそりとした手足は触れば壊れてしまうと思うほど頼りなさげだった。

そんな彼女は机に座っている。けれども恐ろしいほどつめたい表情をしていた。誰を見ている退屈そうに聞いているわけでもなく、ただ授業を聞いているだけだった。一人きりで完結してしまつたようになつめたくて、悲しい顔だった。

先生が板書をする、彼女つられるように腕を動かしてノートをとる。けれどもその動作は、やっぱり人形のようにしか思えなかった。

近くにいる女の子が「ほんとか」と言つて笑みを浮かべている。一過性の話題にちょうどいいのだろう、「綺麗だね」と囁き合っていた。ただ小町はクラスメイトの言葉に上手に頷くことができなかった。彼女を眺めていると胸の中から黒い霧のようなものが広がつていて、小さな身震いが起きる。

小町たちが廊下にたむろっていたのに気づいた先生が、「こら、早く教室に戻りなさい」と大きな声で叱責した。声に引かれるように、教室の子たちが廊下へと顔を向けた。彼女も、廊下にいる小町たちへと視線を向けているのが分かった。

小町はいきなりのもので彼女を見たままだつたけれど、きつと目は合っていないかっただろう。

彼女はただ廊下を方を向いただけで、誰か一人を見たわけではな

かったから。

ふんわりとしたアーモンド型の目に浮かぶ瞳は、吸い込まれそうなほど黒々と光っていた。目の形と瞳に浮かぶ色が全くの反対で、不思議と見覚えがある。どこだろうと思いつ返そうとすると、なぜだか怖さがせり上がってくる。

「ひゃっ」

いきなり手を捕まれて思わず変な声を上げてしまう。いきなり現実に引き戻されて辺りを見渡すと、心配そうに顔を覗くクラスメイトがいた。

「小町ちゃん、行く？」

すでに辺りには小町たち以外には誰もいない。遠くでは蜘蛛の子を散らすように友人たちが逃げている姿が目に入った。

先生に謝るように一度礼をして、廊下を歩いていく。

教室に戻って着替えていると、イヤでも彼女のあの黒い瞳が焼き付いたように離れない。絶対どこかで見たことがあるはずなのに、思い出せなくてもやもやとしてしまう。

授業中も頭を働かせても、どうしても思い出せない。あと一歩で手が届きそうなのに、どうしてもきっかけをつかむことができない。算数の授業を通り越して国語の授業へと差し掛かったとき、ようやく小町はあの瞳について思い出すことができた。

……ああ、あの子はお雛様だ。

今年の三月、居間の一角に飾られた雛人形。何年か前に父が買ってきて、それから三月になると毎年飾られている。三段ばかりの小さなものだけれど華やかな色使いとぼんぼりの灯りのおかげで、みすばらしくなく、小町のお気に入りなもの。その一番上、お内裏様の隣に鎮座するあのお雛様に彼女はそっくりだった。

陽の光に当たっているときは笑顔が綺麗で可愛らしいのに、暗闇に

包まれている姿は、ぞつとするほど怖い。ある夜に光り一つないところで微笑んでいるあの人形と、彼女は同じ瞳をしている。

どうしてあんな表情を浮かべることができるのだろうか。

心の中で雨が降り始める。

小町にとつて学校の授業は、新鮮だけれど時々退屈で、早く休み時間が来ないかとし思ってしまう。授業が終われば友達とお喋りができて楽しく過ごせるから。だから退屈な授業のときには、次の休みにないをしようかとか、この後どんな話をしようかを考えて時間を潰す。そうやって満ち足りた想像に身を浸せば、退屈な時間はすぐに通り過ぎてチャイムの音が聞こえてくる。

でも、彼女は違っていた。

ただ教室に座って、一人きりで授業を聞いているだけだった。到底周りの生徒を視界に入れていたとは思えない。その顔には退屈も興味も逃避も浮かんでいなかった。何を考えているのか全然分からなくて、どうしてあんなつめたい表情でいられるのか理解ができなかった。

一度降り出した雨はどんどん雨足が強くなり、小町の心を泥だらけにしている。普段感じない僅かな怒りと、お化けを見てしまったような決まりの悪さを知って、そんな自分に少し落ち込んだ。

そこまで考えて、小町は彼女について思考を巡らせるのを止めた。理由は分からないけれど、怖いものに変わりはしない。そういう時にはだんだんと頭の中から遠ざけて忘れてしまうのが一番だ。しばらくは焼き付いて離れないかもしれないが、それでもいつかは忘れることができるだろう。

そう思って授業に集中して余計な思考が散りきる間際、あの女の子の作り物のような顔がもう一度だけ浮かび上がってきた。

二回目に見かけたときは、普通の女の子だった。

給食を食べ、気を抜くと眠ってしまうような暖かさがゆらゆらと揺

れているお昼休み。賑やかな声が校舎を満たして、男子も女子も関係なく運動場で遊んだり、教室で固まってお喋りに興じているなか、たまたま廊下で彼女とすれ違った。

活気に溢れている廊下で、何人かの女の子たちと一緒に顔を寄せて話していた彼女は、以前に見たときのようなつめたい顔立ちではなく、普通の女の子のような、優しい笑顔を浮かべていた。

最初すれ違ったときは、あんまりにも表情が違っているので気付かずにそのまま通り過ぎてしまった。後になってあの整った顔立ちに覚えがあり思え返すと、あの彼女だということに気付いて、周囲の目もはばかりずびっくりして声を上げてしまった。友人たちの訝しげな視線に気づき恥ずかしい思いをしてしまったけれど、それ以上に安堵をしたのを小町はよく覚えている。

あの子がふんわりと、優しい笑いかたができることが、赤の他人のはずなのになぜか嬉しかった。

それからは、たまに廊下で同じように彼女とすれ違うことがあった。彼女はつめたい表情だったり、柔らかい表情だったりして小町を大いに困惑させたけれども、そういうものは次第に慣れていってしまいうもので、どちらの彼女を見かけても軽く流せるようになってきたある日。朝のホームルームで、学校で飼っている二羽のウサギが死んでしまったと、担任から聞かされた。

二羽のウサギは学校で飼われていて、主に一年生と六年生が世話をしていた。小町も当番で二度ほど餌やりをしたことがあったし、愛らしいフォルムのウサギたちは女子たちの間で人気があり、当番でなくても昼休みなどに様子を覗に行つて、ちよこちよこ動いている様子を可愛がっていた。

担任が言う「死ぬ」という意味を上手に飲み込むことはできなかつた。けれどそれは、単純な離別よりもずっと悲しいということは理解できた。もうあのウサギたちと会えないと思うと、遊んだ思い出と一

緒に自然と涙がこぼれ落ちる。

やたら細い、木の枝のような体つきの女性の先生が、放課後にお葬式を執り行うとうので、参加は任意であつたけれど小町は友人たちと一緒に行くことにした。

ちいさなちいさなお葬式は運動場の片隅、木々が生い茂り一日中影が落ちている、そんな場所で催された。本当はウサギ小屋でやりたいそうだったが、何か事情があつてできないと噂好きな友人から聞かされた。

夕空によつて朱色に染められた土は、一カ所だけ盛り返されたように赤黒い色をしていて、そこに死体が埋められているのが嫌でも想像できた。登校中にたまに見かける猫の醜い死体を思い出して、気持ち悪さが襲ってくる。

お葬式には小町と同じ年くらいの女の子が何人も集まつていて、顔に陰を帯びていたり涙ぐんでいた。どこかからすすり泣きが聞こえてくる。女の先生が手を合わせてお祈りをしましょうと言うので、それに従つて小町も手を合わせ、目を瞑ろうとする。

瞼が閉じきる間際、あのお人形さんのような顔立ちが目に入る。そのまま流してお祈りを済ませて、目を見開く。

……やっぱり彼女はあのままだった。

整つた顔立ちをこれっぽちも歪めずに、ただ佇んで盛り返されている部分を見ているだけだった。その彼女が目を閉じて、ゆっくりとお辞儀をする。背筋が伸びた綺麗な礼だった。それでも彼女の顔には色一つ混じっていないなくて、到底ウサギたちの死を悲しんでいるとは思えなかった。

ウサギたちを死への哀悼で満たされたこの空間で、彼女は浮いていた。どうして、あんな表情でいられるのだろう。

そんなことを見ながら前髪が揺れる彼女の横顔を見ると、ふつふつと怒りがこみ上げてくる。一旦自覚した怒りは一滴の墨のように徐々に白さを浸食してくる。

どうして彼女がこのお葬式に参加しているかは分からない。それでもこの場はウサギたちを悼むために、みんな集まっている。だつた

ら悲しむべきだし、そうでないなら参加しないべきだ。ウサギたちに失礼だ。

一度吹き出した言葉は止まらなくて、実際に何か言ってやろうと思っただ。けれどこの場で言うのは失礼な気がして、次の日へと持ち帰った。

翌日の昼休み。意を決して教室を尋ねてみても、彼女の姿は見えなかった。依然彼女が座っていた席はぼつんと空いていて、机の上には何も置かれていなかった。

教室にいる子を捕まえて聞いてみようと思ったけれど、今更になって名前を知らないことに気がつく。失礼だけど仕方ないので「お人形さん」みたいな女の子と聞くと、女の子は一瞬首を傾げたがすぐに納得して、

「ああ、朱音ちゃん？ 用事があるって言って、どこかに行っちゃった」

と口にした。

別に彼女に悪いところはないけれど、なんだか自分が無視されている気がして更にむかむかしてきた小町は、彼女——朱音と呼ばれた少女を捜しに行くことにした。

昼休みで空気が弛緩した職員室に、上級生しかいない上の階。給食室に図書室。そのどこにも彼女はいなくて、ため息を運動場に出る。

昼休みの運動場はどこもかしこも生徒だらけだった。しかも絶えず動き回っている。肌の色と土の色が似ているせい、遠くから見ると赤や青の色だけが走っているように見えた。

わざわざ彼女たちに近づいてその顔の一つ一つを確認し、たまに明後日の方向から飛んでくるボールを避けながらグラウンドをさまよ、そしてやっぱり見つからずに諦めかけたころ、ようやく小町は朱音を見つけることができた。

彼女は、運動場の隅っこにいた。木々のざわめきと遠くから騒ぎ声が聞こえるその場所はまるで忘れてしまったように朱音以外は寄り

ついでない。

……そこは、あのウサギたちのお墓だった。昨日のことだというのに小町の記憶の片隅にしまったせいで、何となく思い出し辛い場所。その場所で、彼女は昨日と同じように無感動な、けれども真剣な表情を張り付けていた。そして祈るように手を合わせて目を瞑っている。

木漏れ日が僅かに顔に掛かり、整った顔立ちがより鮮明になる。頬に涙がつたうことはなかったけれど、その姿はどうか泣いているように見えた。

なんだか声が掛けづらくて、また怒るのを翌日にしてしまう。何だか先延ばしばかりだと思いつつ、また翌日の昼休みに会いに行くと、彼女は決まってウサギたちのお墓の前について、小町には見えない透明な涙を流し続けていた。きつとあの子も気付いていない。それでもそんな色のない涙を朱音はあの日からずっと流していた。

いつしか小町の中にささくれ立っていたものが削れていくのを感じている。もうあの子に言いたいことなんてないのに、それでも小町は朱音が毎日お墓参りをする姿を観に行つた。そしてある日その小さな背中に尋ねた。

「どうして、そんなに毎日ここに来るの？」

背中が揺れ、幾ばく沈黙のあと、

「この子たちが死んでしまつて、悲しむことができなかつたんです。だからせめて天国で幸せに暮らせるように祈りたいんです」

そこにいたのは、お人形さんでも何でもない、ただのか弱い女の子だった。

なんて不器用な子だろう。そうやって死後の幸せを祈っている時点でとつくに悲しんでいるのに、そのことに気付いていない。そこまでしなくて誰か文句を言わないし、そこまでしている人間なんて

ほとんどいない。

小町は世の中のことなんてまだ全然分からないけれど、世の中には心の奥底にしまつて、引き出さないほうが良いことがあるのは知っている。きつとみんなそうだろう。だって小町の周りでもう亡くなつてしまったウサギの話をしている子はいない。嫌なことをだんだんと忘れて、何事もなかつたように過ごしている。

何が朱音をそこまで動かすのかは分からなかつた。それでも、彼女が小さな罪悪感を引きずってしまうほど、か弱い女の子だということとは分かつた。とても優しい子だということも。

悲しむべきことを知っているのに、その方法を知らない彼女は、罪悪感に押しつぶされそうになりながら、やっぱり泣いているように見えた。

この子の友達になりたいと、小町はこのときに思った。不器用で、弱くて、そして何より優しい子と友達になれたらと。

それからしばらくして、小町はようやくあのお人形さん——切花朱音と友達になつた。どうしてか兄の八幡と朱音が先に出会つていて、紹介される形になつたけれど。

その朱音と仲良くなり、毎日のように顔を合わせ、良いところも嫌なところもだんだんと知るようになった。そしていつの間にか小学校を卒業して、中学校に上がつて更に三年生になつたところ。朱音はようやく、あのバレバレな片想いを成就させて穏やかな時間を過ごしていた。

「もしお兄ちゃんと結婚したら、小町は朱音ちゃんの妹になるのかな？」

思いついたことをそのまま言葉にすると、朱音は片肘をついたままため息を一つすると、「たぶん、そうなるんじゃない？」と明後日の方向を見ながら適当な返事をした。

もう片方の手でコップの氷を回しているせいで、からからとした音が鳴っている。

そうやって物憂げにしている姿はすぐ様になっていくけれど、小町が期待したような可愛らしい反応ではないので少しむくれる。兄と朱音が付き合い初めてからも二ヶ月も経ったころ。付き合い始めたのころに良くからかったせいも、朱音ほうも大分慣れてきて、対応がおざなりになってきた。

八月中旬の三時過ぎ。受験生である小町と朱音は一般的な例に漏れず、大手予備校のへと通っていた。朝から続けた授業がようやく終わり、そのまま流れで自習室へと向かいライバルたちを見送り、小町たちは喫茶店で小休止をしていた。

小町はいつものようにオレンジジュースを頼み、朱音はカフェオレを頼んで二人でちびちびと飲んでいると、やっぱり話は兄と朱音の話に向かってしまう。

「ああでも、さすがに私は、今更お姉ちゃんにはなりたくないなあ」

小町としては話はそこで終わったと思っていたけど、朱音はそうは思っていないらしい。少しの後悔を含みながら朱音はしみじみと呟いた。それでも表情はどこかさっぱりとした。そのまま何か思いついたように視線を小町へ向けて、首を傾げる。朱音の肩に絹のような黒髪がさらさらと流れていた。

「どうか、小町ちゃんの方が誕生日早いから、私が妹になるんじゃない?。」

「いや義理の姉妹ってたぶんそういう基準じゃない……ああでも、朱音ちゃんが妹っていうのは何か新鮮かも!。」

小学生までは小町と朱音の身長はほとんど変わらなかったけれど、中学校に上がり朱音の身長がぐんぐんと伸びたせいで、二人で歩いていると朱音が年上扱いされることが大分多くなってきた。

それに關しては背の高さや容姿の問題があるのでそこまで気にしてはいないし、それだけ仲が良いと思われているのだからある種嬉しくもある。

ただ小町はずっと妹として育ってきたわけで、それ故に「お姉ちゃん」の響きに憧れないと言ったら嘘になる。けれども朱音が自分の妹と彼女の口から聞かされると、ふわふわしてどうも落ち着かなくなる。

目の前でカフェオレを飲んでいる朱音を見る。初めて見たときより背が伸びて、体つきも女らしくなった彼女は、本当に綺麗になった。

昔もお人形さんのように綺麗だったけれど、現在は普通に可愛らしい女の子になっている。本人が密かに気にしている身長の高さも、彼女の顔立ちにはとても似合っているので気にすることではないけれど、背が低い小町からすると羨ましい悩みなのでその場では慰めなかった。どうせ何年かしたらそのことに気付くと思うし。

そんな彼女の身長は最近ようやく止まったらしく、朱音は身体測定の結果を見ながら安堵の息と珍しく愚痴を吐いていた。そのことについて尋ねると、「背の高さはお祖母ちゃんの代から受け継がれる最悪の遺産だから」とやたら仰々しく、真剣な表情で答えているのを良く覚えていて。

朱音の祖母は、朱音が生まれる前に亡くなってしまっているから会ったことはないけれど、それでも一度だけ生前の写真を朱音の祖父から見せてもらったことがある。

あの初めて会った怖い朱音をそのまま大人にしたような姿の祖母は、確かに女性にしては背が高かった気がする。それに朱音の叔母も手足がすらりと伸びた長身の女性だったから、背の高さに関しては本当に遺伝なのかもしれない。

ただそんな小さなことを負の遺産とまで言ってもういない祖母に毒づいている朱音は普段よりもずっと子供っぽくて思い出しただけで思わず笑みがこぼれてしまう。それこそ妹のように可愛らしかった。

そんな小町の様子を朱音は不思議そうに見ていたけれど、彼女なり

に納得したのか、カフェオレとコーヒー牛乳の境はどこにあるのかとよく分からない疑問を小町に投げかけてきた。もしかしたら、先ほどの話は冗談と思っているのかもしれない。

朱音は冗談と思っているかもしれないが、小町は何割か願望が混じっている。いつかこの先、朱音が好きな人と結婚して幸せになつて欲しい。それはいつからか小町が持つようになった願望の一つだから。

もし小町の願望が叶えられて、朱音が純白のドレスを着てバージンロードを歩いている姿を見たらきつと自分は人目もはばからず泣いてしまうだろう。

でもそれでもいいのかもしれない。

あの子は泣くのが下手だから、代わりに嬉し涙をたくさん流そうと思う。

番外編その3 く闇夜に咲く花く

ぎゅうぎゅう詰め満員電車の扉が開くと、こらえきれないように人の波が大きく吐き出された。

それは電車の端っこで押し潰されるように乗っていた俺たちも例外ではなく、押し合いへし合いをしながら弾き出された拍子に、隣に居たはずの切花を見失ってしまった。無秩序に流れる駅のホームは見知らぬ他人ばかりで、普段見慣れた顔を見つけたことができない。

……だから人混みは嫌なんだよ。

心の中で毒づきながらも、電車が出発し人が捌けるのを待ちながら切花を顔を探していると、

「八幡さん、すみません」

と背中から声を掛けられた。

振り返ると混雑のせいで乱れた裾や髪を直しながら、切花が小走りで向かってきていた。浴衣を着ているせいか、歩幅が小さくぱたぱたとした走り方だった。

「おう。つーか何でこんなに人が多いんだよ……もう帰りたくなってきたぞ」

「そんなこと言わないで下さい。人が多いのもお祭りの醍醐味ですよ。雅じゃないですか」

「なら今年の夏に材木座が行ってきたお祭りも、さぞ風流だったろうな」

充滿する汗のにおいに、焼き付けるような日差し。体をぶつけ合い、汗で湿った肌のぬめぬめとした感触が伝わってくる。……想像しただけで気持ち悪くなってきた。

冗談の意味が分からなかったのか、口元に笑みを湛えていた切花は

首を傾げると、そのまま俺と隣に並んだ。どうやら身繕いは終わったらしい。

「……ほれ」

手を差し出すと、切花はこれまた嬉しそうに頷くと、手をおずおずと握る。真夏にも関わらず切花の手はひんやりとしていて、柔らかかった。

……別に普段出掛ける度に手を繋いでいるわけじゃないが、さつきみたいにはぐれると面倒だからな。

近場の花火大会兼夏祭りに行ってくればと小町から提案されたのは、俺が強制的に千葉村連れていかれてから数日経ったときだった。

真夏の真っ昼間。じりじりとした暑さが部屋の中にまで侵入してきて何もする気が起きず、ただぼうっとソファーに寝転がっていたとき。図書館から帰ってきた小町が、目の前に下手くそな花火のイラストが書かれたチラシを掲げてきた。

暑さのせいかな扇風機の風も生温かく、テーブルに置いたままのコツプの氷はとつくに溶けきって水に戻っていた。

「なんだ、それ。お前が書いた絵が、どつかの小学生向けのコンクールに入選でもしたのか？」

「適当に、冗談めかした調子で尋ねると、小町は冷たい目をして至極残念そうにため息を吐いて、

「お兄ちゃん、こんなに察しが悪くなるなんて……小町はホントに悲しいよ」

「お前な、人間たまには気づかない振りをするのが大事なんだよ。上司が人手を欲しそうなきでも、知らない顔をしてタイムカードを押すのが仕事を円滑にするコツだ」

何せ一度手伝ってくる奴という烙印を押すと、何でもかんでも仕事を振ってくる奴というのはそこら中にいる。俺とかそうだし。どうしても引き受けるときは、自分の仕事が忙しくて次は難しい的なニュアンスを醸し出さないと単なる便利屋に落ち着いてしまう。

「というか夏祭りに行きたいなら、切花でも誘えばいいだろ」

「……もしかして、それ本気で言ってる?」

「お、おう」

「……はあ〜」

小町は両手を大きく広げて「やれやれ」と海外ドラマのように芝居がかかった様子で呟くと、俺に起き上がれといったようなジェスチャーをした。

ここで反論すると、大抵倍以上の言葉が返って来るのは経験上知っていたので、大人しく従うと、小町はソファアの空いたスペースにちよこんと座って、指を立てた。

「あのね。お兄ちゃん。夏と言えば花火。花火といえばお祭り。そしてお祭りと言えば、カップルのデートスポットでしょ」

「いや、祭りって元は祭礼だから、起源を辿ればカップル関係ねえだろ」

「またそうやって屁理屈言う。つまり、せつかくなんだから、朱音ちゃんが行ってくればってこと!」

「……でも、あれだろ。花火大会も併設されるってことは、めっちゃくちゃこむだろ、あそこ」

花火大会なんて、五輪を除けば夏で二番目に混雑する場所だ。しかも往路も復路も、電車だろうと車だろうと必ず混むので、行くだけでも酔いそうになる。しかも大抵同級生が来ているので、気になっているあの子が軟派な野郎と遊んでいる姿を目撃する羽目になる。

しかも花火だけなら、当日に家の近くからでも見ることが出来るわ

けだから、わざわざ現地まで足を伸ばす必要なんてない。

そうやって云々と考えながら唸って、「今回は残念ならお見送りで……」と返事をしたところ、小町は俺の耳に顔を近づけて、魔法の言葉を口にした。

「朱音ちゃんの浴衣姿、見たくない？」

……そういうわけで今日日本この夜、洪水のような人混みを泳ぎながら、夜空の下で花火大会までの道のりを二人で歩いているわけである。

切花もこの雰囲気在即して淡い花びらが浴衣を来ていた。珍しくアップにした髪を簪で留め、黒下駄をからんころんと鳴らしている。顔は薄く化粧をしていて、普段よりも白い頬がほんのりと赤く染まっていた。

普段ストレートにしているせいで隠されたうなじが、これでもかと晒されてぐつと艶っぽい。なるほど世の中にいるうなじ好きの気持ち、高校二年になって初めて理解できた。

草の匂いはらんだ夏の風が吹き、囁き合うような会話の隙間に虫の鳴き声が聞こえてくる。遠くには篝火のように出店の灯りが並んでいて、その淡い光が不思議とどこか遠くへ来たように感じさせる。

それはここにいる誰もが同じように抱く幻想だ。一夜限りの幻に自然と高揚感が沸き上がってきて、これだけの人混みにも関わらず、誰もが酔ったように浮き足立っている。

「そういえば、小町ちゃんもここに来ているんですよ」

「あ？ そうなのか。あいつそんなこと全く行ってなかったぞ」

「はい、雪乃さんと結衣さんと一緒に。私もお母さんが着付けができなかったので、雪乃さんにやってもらいました」

そうやって切花は、両手を広げて浴衣を見せてくる。改めて切花の浴衣姿を見ると、かなりしっかりと着付けられている。帯も形が

良く締められていて、髪も隙がなく纏められている。

流石お嬢様かつ、性格以外完璧女子の雪ノ下である。あいつのことだから、由比ヶ浜にせがまれ、口では仕方がないといいつつも、のりので全員分の着付けをしたのだろう。

やがて会場に到着すると、ずらりと並んだ出店が俺たちを迎えた。最初から花火を特等席で見える気はなく、出店を回りつつ適当に花火を眺めると決めていたので、そのまま出店へと足を運ぶ。

祭り囃がどこから響き、焼きそばやらフランクフルトやチョコレートの匂いが入り交じった中を歩いていく。まだ花火が打ち上がるまでに時間があるからか、そこら中に浴衣姿が溢れていた。

下駄を履いているせいで、普段よりも歩みが遅い切花の手を引きながらいつくかの店に顔を出していく。ほとんど冷やかし程度で俺は何も買わず、切花はリンゴ飴を一つ買ったきりだった。

「……なかなか減らん、それ」

「ちよつと大きいですね……でも美味しいですよ」

リンゴ飴に染められたのか、真っ赤になった口唇を動かしながら、切花は言った。

いくつかの出店を回りながら、切花はちよちよこと飴をかじっていたが、未だその半分も減っていない。よくよく考えれば小さくても丸々一個のリンゴを使っているの、減らないのも当然かもしれない。

「とういかあれだろ。リンゴ飴なんて、もとの果実の質の悪さを誤魔化すためにめちやくちや」

「甘くしてあるから、胃もたれしそうだよな」

「またそんなことを言つて。でも甘さが控えめで本当に美味しいんですよ……食べてみて下さいよ」

少し拗ねたように頬を膨らませながら、リンゴ飴を差し出してく

る。少しづつかじっているから、でこぼこした表面が唾液で塗られて妙に光っているように見えた。つい、切花の口元に吸い寄せられるように視線を向けてしまう。

「……いや、いらん」

流石にこれに口をつけられるほど、俺はまだ大人じゃない。

切花は目をぱちくりとして不思議そうにしていたが、自分が口にした意味に気が付くと、口元をゆっくりと歪ませて、

「……照れてます?」

「違う。こんな人工甘味料溢れたものを食ったら、長生きできなくなるだろうが」

「普段からあんなに甘いコーヒー飲んでいる人に、言われたくないですよ」

またリンゴ飴を一口かじると、切花はべーと舌を出した。飴に彩られた舌はやけに赤くて、艶めかしかった。

それからも適当に出店を回っていく。照明の光がちらちらと毎、訪れた人々は各々に食べ物を手にしたり、金魚が入ったビニール袋を提げていたりしていた。祭り特有の、即物的ながらも一夜限りの儂さが入り交じった、独特の空気だった。

切花もそんな雰囲気酔ったのか、はしゃいだように軽い冗談を交えて、楽しそうに頬を緩めていた。

「八幡さん、ちよつとだけ休んでもいいですか?」

「別にいいが、どうかしたのか?」

「いえ、ちよつと疲れちゃって。下駄で歩くのって、結構大変なんです
ね」

下駄を履いたことはないから分からないが、足下が不安定だし、靴

底のように遊びがないから、スニーカーよりも負担が掛かるのだろう。

男はこんな不安定な履き物は下駄ぐらいだろうが、女子はそれに加えてヒールという頻度多め、見た目抜群、機能性最悪の靴があるから更に大変だろう。

メインの出店の通りを抜けて、人気の少ない方へと歩いていく。この近辺は神社もあるため、やたら鬱蒼とした木々が並んでいて、静かだった。月明かりが届きにくいせいも、目の前に深い暗闇がずっと広がっている。

何かベンチでもないかと思い、辺りを見渡しながら歩くと、この先に休憩所が有るといっているので、看板に従って歩いていく。そうして道なりに曲がると、少し先を行っていた切花が驚いたように目を見開いた。そのまま気まずそうにちらちらと、ちらちらと俺と先の空間を見比べると、「戻りましょう」と囁いてきた。

「あ、何でだ？ この先に休憩所があるだろう」

「い、いいですから、とにかく戻りましょう」

強い口調と、控え目に押してくる手をかわしながら体を乗り出し、切花の視線の先を覗くと、一組の男女が暗闇の中で身を寄せ合っていた。

「……………んっ」

彼らは目を閉じて互いの体に腕を回すと、唇を押しつけ合っていた。下顎が貪るように、いやらしく動いている。俗に言う、ディープキスである。

「ほら、戻りましょう！」

「お、おう」

元来た道を辿りながら、黒い土を踏みしめる。切花と繋いだ手がびっくりするくらい熱かった。不意に強く握ってしまうと、切花が身を堅くするのが分かった。

暗がりを抜けて、月明かりが上がる道に出る。月の光に照らされた切花の横顔は、夜でも簡単に分かるくらいに真っ赤で、恥ずかしそうにずっとそっぽを向いていた。

空気を揺らすような大きな破裂音が聞こえてくるので、空を見上げてみると、夜空に巨大な花が咲いていた。

「花火、始まつちやいましたね……」

「そうだな。立ったまま見るのも辛いし、会場まで行くか」

「ここでいいですよ。静かですし、それにちゃんと花火は見えますから」

夜空に咲いた色とりどりの花火は、あちらこちらに咲き乱れながら、すうに散っていく。絶えず生まれては消えていく光景は美しく、そしてやはり儂げだった。

「八幡さん、今日は連れてきてくれてありがとうございます」

「礼なら小町に言え。元はあいつが提案したことだからな」

「もう、そういうのは言わないほうがいいんですよ」

そう諭すように言いながらも、切花の表情は穏やかで、夜空に浮かぶ花火をじつと見つめている。

「花火ってやっぱり生で見るのが一番ですね。写真で切り取ってしまうと綺麗なんですけど、あんまりにも存在感がありすぎて、違ったものに見えてしまいます」

何故か初めて出会ったときの切花を思い出した。

あの頃のあいつは、平然と一人で歩いていて、どこか存在感がなく

て夢げだった。一人で揺らめいている切花は確かにそこにいるのに、触ってしまったら簡単に消えてしまうような、そんな力強さと、夢さを持っていた。

月下美人という言葉が浮かぶ。一晩の間にしか咲かない、美しさを象徴。夢げなものに美しさを見いだすのは、古来からの風習なのかもしれない。

「どうかしたんですか」

「いや、何でもない」

「………そうですか」

繋いでいる手は柔らかく、ちよつとだけ強く握ると切花も控えめに握り返す。切花は少し迷ったように口唇に手を当てると、夜空に一際大きな花火が描き出されるのと一緒に、そつと顔を寄せた。